
ギリ爆2 - 血液型マニュアル男のヤンキー伝記 -

餓龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギリ爆2 - 血液型マニュアル男のヤンキー伝記 -

【Nコード】

N7575R

【作者名】

餓龍

【あらすじ】

玄関を出て間も無く、

「お早うジオン。アンタと一緒にの時間になるの久しぶりね」

いつになく爽やかな笑顔のユイが、ツインテールでオレの左隣に登場した。

第173話 チャンドラの光（前書き）

ギリギリ爆発 - 血液型マニュアル男のヤンキー伝記 - の続きです。

第173話 チャンドラの光

学園祭前日。

今日は朝からすこぶる調子がいい。

まず、目覚めが良かった。

清々（すがすが）しい朝の光で^{まぶた}瞼を開けると、まず最初に思い浮かんだのが、愛^{いと}しの佐倉との楽しいひと時。

そう、単純に佐倉と2人きりで会話をしていた夢なのだが、それがあまりにもリアルで、ついさっきまでオレの目の前に佐倉の顔があったもんだから、そりゃ〜もう興奮は絶頂だ。

しかも、場所はオレの部屋ときたもんだ。

気持ちの良い目覚めと同時に、心地良い気候、そして最高な夢。

明日の武蔵祭への期待は膨らむばかりだ。

玄関を出て間も無く、

「お早うジオン。アンタと一緒にの時間になるの久しぶりね」

いつになく爽やかな笑顔のユイが、ツインテールでオレの左隣に登場した。

ちなみにツインテールというのは怪獣の事ではなくヘアスタイルの一種で、髪の毛を編むことなく、長い頭髪を左右の中央あるいはそれより高い位置でまとめ、根元で結んでそのまま垂らしている、ツンデレ系では王道的なモテ髪だ。

もの心ついた頃からユイを見てるが、その髪型を見るのは初めてだ。

夏服にもマッチして、妙に似合って可愛く見える……………。

オイ、ユイ…………、それ以上オレに接近するなよ。

距離をそれ以上縮められたら、恥ずかしいじゃねえか。

照れてる？ 違っつて！！ 朝から女と歩いてデレデレしてるみてえ〜でカッコ悪イ〜からだよ。

それに、野牛との全面戦争以来、ユイは白黒ボーダーオーバーニーをはいているのだが、オレの本音としてはやめてもらいたい。

あまりに似合っつて、可愛く見え過ぎるから、ユイの人氣に拍車が掛かる。

……………って、それって嫉妬？ オレ、もしかして嫉妬してる？
ユイの人氣が上昇しては困る？ 身近なユイが遠い存在になりそ
〜で困る？

・・・いやアレだよ、アレ、・・・らしくない。

そう、ユイらしくねえくんだよ。

ユイはやっぱ、地味に黒とかでクールにキメてほしいよナ。

アイドルよりロックテイストってカンジ？

だってさ、ホラ、あんまり可愛いカツコウしてると、ウザったい夏の虫がブンブンと近づいてくるだろ？

・・・と、その時！

「ヒヤハハハハ」

この、聞き覚えのある笑い声は・・・？！

後ろを見ると、案の定そこには長山たち。

「ホラ、安藤！ 今がチャンスだって」

小声で喋ってるつもりらしいが、長山の声は甲高いので、距離があってもオレの耳までよく入る。

「全然チャンスじゃないっしょー！」

「早くしねえーと隣の亀にとられっかもしんねえーぞ？」

「長山さあくん、いくら何でもそれはないっしょー？」

「・・・そーか？ それもそーだよな？ ヒヤハハハハ」

黙って聞いてりゃ・・・。

「ジオン、先行ってて・・・」

ユイが神妙な顔つきでオレに語る。

「何でだよ」

「いいから、先、行ってて。理由は後で話すから」

「・・・」

そこまで言われたら行くしかねえよナ。

オレはユイに言われるがまま、ユイを残して歩を進めた。

後ろでは、長山を含め計7人の男とユイが対峙して何やら話をして
いる。

・・・何かオレ、情けなくね？ 女一人守れねえよみてえよで、情
けなくね？・・・かと言って、今更あの中にしゃしゃり出るのも、
どーかと思うし。

しばらくすると、駆け足でユイが合流。

長山たちは遠くで立ち止まったままだ。

安藤は俯うつむいている。

「実はね、昨日の放課後、安藤に手紙貰ったの」

「手紙？ ラブレターか？」

「う、ウン。貰った時、直感でね、告白？って思ったから、手紙は開けずに返したかったんだけど、走って行っちゃったから」

「何て書いてあったんだ？」

「……ずっと前から好きでした。付き合ってください……って」

ずっと前から好きでした？ あのヤロー、佐倉にフラれた後は、ユイか？ 懲りねえーヤツだ。

「ユイ、どうしてそんな大事な事すぐに言わねえ〜んだよ」

「な、何よ！ アンタはアタシの保護者なワケ？ どうしてアンタにいちいちそんな事報告しなきゃいけないのよ！」

「……いや、ホラ、安藤は長山一派だし、佐倉の時の事もあるし、アイツはA型つての知ってるから、B型のオマエと相性悪いなあ〜とかアドバイスとかあるだろ〜よ」

「はあ？ 頭、大丈夫？ 熱でもあるんじゃない、アンタ」

「う、うるせ〜。で、何て言ったんだよ、今。返事、したのか？」

「断つたに決まってんじゃん」

ユイは薄紅に染まった頬を軽く膨らませた。

フラレた？ またフラレたのか、あの失恋安藤？ 当然っちゃ〜、当然だが。

そっか〜、フラレたか〜。

そいつは滑稽こっけい・・・、いや、失敬しっけい、さぞ無念むねんだっただろうな。

なにせ、みんなの前でフラレたワケだもん。

・・・ま、一安心だ。

保護者ってワケじゃないが、どうせユイが誰かと付き合っなら、オレよりいい男と付き合って欲しい・・・と、オレは幼少の頃から勝手に思っている。

ユイには、誰よりも幸せになって欲しいから・・・。

それはオレの本心だ。

だってオレには意中の人がある。

今朝だって夢にまで見た佐倉愛。

夢に出たってだけで、それまで何でもなかった異性にすら意識しちゃうモンなのに、自分の部屋で2人きりの夢を見ちゃった日にゃ、彼女の輝きは、オレにとっては灼熱の炎に変わるってモンよ。

彼女はオレの太陽だ。

常にオレを照らしてくれて、全てのものを浄化してくれて、全てのものを育ててくれる。

それに比べたら、ユイはオレにとっては月のようなモンなのかな？

太陽がない時、オレが真っ暗闇にならないように照らしてくれる。

有難い存在だ。

だからこそ、オレはユイに干渉しちゃうのかもしれない。

オレにとって、恋人とか単なる幼馴染みとか、そ〜いうんじゃない、素直に純粹に、・・・大事な人だから。

・・・そんな事、口が裂けても言えないけどね。

第174話 竜崎のクラスと宮さんのクラス

『武蔵祭』と大きく書かれた花のアーチを潜ると、校舎までの道には沢山の出店が並んでいて、そこには、宮さんのクラスの焼きそば屋もある。

そして、我がクラスの金魚掬いの出店も目立つ場所に構えてある。

これらの出店は、クラスの代表らが骨組みやら何やら一から作り上げた、オール手作りなのだ。

一週間オレたちは、一丸となって学園祭の準備に精を出した。

準備期間中、オレとユイ、オッキーと佐倉の4人で、竜崎や宮さんのクラスの出し物を手伝ったりもした。

オレたちは、野牛との全面戦争を完全勝利で飾った余韻もあり、かなりのハイテンションだ。

余りにもオレとユイと竜崎と宮さんの4人の息がピッタリ過ぎて、若干周りがついてこれなくなったりしたが、さすがA型のオッキーと佐倉のコンビはしっかりフォローしてくれた。

そんな中竜崎が、「ジオンさん、柴には気を付けて下さいよ。アイツ、どうも信用できないっス」などとほざく。

愚痴か？ はは〜ん、さては、オレと柴が最近仲良いから嫉妬してるな、竜崎め・・・。

そう、柴のヤツ、最近は特にオレに慕ってくるのだ。

褒められたり色々気を遣ってもらったりすると、やっぱり悪い気はしない。

つくづくA B型の人の良さを窺い知った。

「なあ竜崎、オマエが考え過ぎなんだよ。単なる被害妄想ってヤツだ。柴はマジで良いヤツだと思っぞオレは・・・」

ま、オレからしたら、長山と宮さんが親しくなっちゃまったみたいなものだよ。

竜崎の気持ちは良く分かるぜ。

でも、過去は過去。

罪を憎んで人を憎まず・・・だ。

今日一日、全校生徒、授業免除で学園祭の準備に割り当てられた。

オレたちはまず、竜崎のクラスに向かった。

竜崎が中心となり、生物部魚類班と準備を進めている。

オレたちは暗幕を付けたりする作業を手伝った。

「なあ竜崎、色々いるけど全部で何匹くらいいるの？」

「400匹以上いるっスよ」

「スゲーーな・・・」

ユイもオツキーも佐倉もあっけにとられている。

「じゃ〜、消すっスよお〜」

竜崎の合図で教室の照明が消える。

「ウオオオオオオオオオオオー！！」

クラス中、重低音のどよめきに包まれた。

ウチの金魚掬いとは、まずスケールが違う・・・っていつか、
次元が違う。

教室の中は照明が消され真っ暗。

そこに浮かび上がる色とりどりの魚たち。

幻想に満ちた神秘的空間とでも言おうか、そこはまるで、おとぎの国のようなファンタジックゾーンが広がっていた。

紫、青、赤、黄・・・etc、どれもが光り輝いている。

「スゲーよ、竜崎!!」

「竜ちゃん、何か、感動した・・・」

宮さんが涙を浮かべている。

「綺麗」

佐倉は瞳を輝かせた。

感動している皆には悪いが、この空間にいる佐倉の方が、数百倍綺麗な気がした。

しばらく素敵なひと時に時間を忘れ、幻想的な水族館に酔いしれていたが、教室の電気がついて我に返った。

デイズニールランドで無邪気な笑顔を見せる子供のような顔をしていた宮さんも、流石に我に返ったようだ。

さっきまで感動して泣いていた自分が恥ずかしくなったのか、気難しい顔で、「そろそろ自分トコ行くわ」と言って出て行った。

宮さんに合わせるように、皆で今度は屋外に出た。

竜崎と、おまけに柴までついて来る。

宮さんのクラス、焼きそば屋の屋台には、すでにプロパンガスが配備されていた。

わざわざレンタル業者に頼んだらしい。

さらに、沢山売れるのを考慮して、業務用の鉄板も用意されている。

道具はコンロ、鉄板、ヘラ、そして材料。

シンプルだが、宮さんのこだわりが随所に見られる。

本格的な職人並だ。

「さっそく作ってみるわ。ゴメン、みんな、味見して行って」

ゴメン？ いやいや、申し訳ないのはこっちですって！

オレたちが立ち並ぶ前で、宮さんの、お料理ショーが始まった。

目にも留まらぬ早業で鉄板に油を引き、満遍なく行き渡らせると、
何処からともなく取り出した麺が宙を舞う。

ジュ〜ツツという音が静かに聞こえる中、もやしを袋から取り出した宮さんは、それを器にのせると今度は電光石火の勢いできめ細かに豚肉を切った。

鉄板の空いてる所で豚肉ともやしほじょが程好く焼けたのを見計らい、麵と混ぜ合わせ、豪快に焼き始めた。

鮮やかに塩コショウが宙を舞ったと思いきや、いつの間にやら片手にしていたソースをかけ、炒め合わせている。

旨そうな焼きそばが焼き上がると、プラスチックのパックに盛り付けられ、完成。

・・・と、思いきや、青のりがトッピングされ、紅ショウガも付いてきた。

至れり尽くせり、宮さん特製焼きそばが大完成だ。

早速いただきま〜〜す。

「ウン、んまい!」

こいつはお世辞抜きで旨い。

「あっさりしてる〜」

佐倉が可愛らしい声で絶賛。

おまけに目をキラキラと輝かしている。

青のりが口に付くのを気にしながら食べる仕草と表情が堪らなくイイのだが、あんまり見るとアレなんで、オレは極力佐倉を見るのを控えるよう、我慢or努力した。

「どうしてこんなにカラツとしてるんだ？」

オツキーが目を丸くして疑問たつぷりの顔を見せた。

「確かに・・・」

柴も自分の焼きそばと睨めっこしている。

「そりゃ〜オメ〜、アレだろ。火力じゃね？」

オレが適当な事を言っていると、「何か途中で鉄板ナナメにしたよね？」と、人差し指を顎あごに当てたユイが、鋭い眼差しで宮さんの方を見た。

宮さんは、クイズを出題した番組の司会者のように含みのある笑顔で片付けをしている。

「キッチン袋を右手にはめ、一瞬でしたが鉄板を持ち上げたっスよ。塩コショウする前っスね」

「でしよ〜、さすが竜崎、見てるわね〜」

「いや〜、ユイさんの慧眼けいがんには、まだまだ敵わないっス」

アレ〜？ 何かその2人だけ優等生っぽくなってね〜か？

「何だよオマエら、ネタ、ばらすなよなあ〜?!」

これがホントにウチの学校の番長なのか？と疑いたくなるほど無邪気な笑顔を見せる宮さん。

「宮さん、これ、ホント旨い！」

ユイの一言で、さらに宮さんの目が綻ぶ。

「何つくか、キャンプで食う焼きそばとかと一緒に、家で作る焼きそばとは何か違うね？」

オレの疑問に、宮さんがちょっとだけヒントをくれた。

「屋外のバーベキューで食べると旨いのは、アウトドアの解放感とかシーンのムードだけでじゃなくて、鉄板で作った麺の弾力の違いにあるんだよ。鉄板に水をかけると、水は広がって水蒸気になるよね。だから鉄板では、麺を蒸し焼きにすることになるんだ。方やフライパンでは、水は広がらずに底にたまって煮え湯になる。麺が柔らかくなるのは、水気が多いと、フライパンの底で麺が茹だる状態になるためなんだ。火力のズレや野菜から出る水分の差が、鉄板とフライパンとの違いでもあり、フライパンだと、麺が張り付く原因でもあるんだよ」

「な~~~~るほど~~~~」

オレたち一同は、限りなく納得。

宮さんをこれ以上なく褒め称え、腹を満たして満足したオレたちは、今度は宮さんの屋台の近くに構える我がホームグラウンドへ向かった。

第175話 やる気満々のユイ

オレたちのクラスの出し物は金魚^{すく}掬い。

金魚掬いってのは、背が低く、面積の広い水槽に入れられた金魚をいかに上手くポイで掬い上げられるかを楽しむ、縁日などでよく見受けられる子供向けの遊びだ。

2・5の出店ゾーンでは、委員長の小倉が一人で準備をしていた。

見かねたユイがすぐさま声を掛ける。

「ゴメンね夕香。今、アタシたちも手伝うから」

「いゝよいゝよ、今日までさんざんユイたちがやってくれたんだし。それに、もうすぐ終わるから」

竜崎のクラスの迫力を見せられた後、同じ魚を扱う出し物でもあるが故、皆が比較してしまうのは致し方仕ない。

竜崎の顔が勝ち誇ったような愉悦の表情に見えるのも、これは仕方のない事だし、あれだけの偉業は素直に認めるべきだ。

が、佐倉はいいとして、オッキーと柴の鼻の先でせせら笑うかのよ
うな微笑がムカつく。

去年のイベントと比べりゃ、そりゃ〜劣るかもしれないが、たかが金魚掬い、されど金魚掬い・・・だ。

ホントは　　がやりたかったんだけど・・・的に考え始めるとキリがなくネガティブになるので、ここは開き直って、今あるものをトコトン愉しむのがオレ流のやり方。

ちなみにオレは、休日なんかに出掛けた時、最終的にハズレは、ない。

例えばクソつまらなそうな観光地の施設に入場料を払って入ってしまったとしても、その場でとことん楽しむのだ。

アレ、超シヨボ！　　うわっ、スゲ〜ちゃちい！　　みたいにけなして楽しんでんだり、あるいは何にもない所でも、地面のミクロの世界と向き合ったり、空を眺めて自分のちっぽけさを再確認したり、いくらでも楽しめる。

レストランなんかでも、マズイもんが出てきても、決してガツカリはしない。

もう2度と食えないかも・・・とか、今はオレの人生の中で、きつとレアな時間に違いない・・・とさえ思う。

何でもそうだが、楽しまなきゃ損だ。

どうせ年とっていつかは死ぬんなら、つまらん状況でもそいつを受け入れて、全部ひっくるめてオレの貴重で楽しい経験にしていきた

い。

・・・ってなワケで、この金魚掬いもバカにしちゃならん。

やり方によっては金の卵にだってなりかねないわけだし。

金魚掬いを嘲笑うコイツらを、ギャフンと言わせてやる！

「オツキー、コイツら全員に名前付ける。そして、客来た時ナレーターやるんだ」

「はあ？ 何言ってるんだヨ、ジオン。金魚に名前付けるだと？ こんなに沢山いるのに一匹一匹顔を覚えるってのか？ しかもナレーターって何だよナレーターって。それに何で的屋てきやがオレなんだよ」

「だってオレ、明日忙しいモン」

「どうせ他のクラスの出し物を見に行くだけだろ」

「しよ〜がねえ〜なあ〜、オレが見本見せてやつから、よくく見て覚えるんだぞオツキー。ユイ、悪いけど客になってくれねえ〜か？ でもあんまり調子に乗って捕りまくんなよ、金魚弱るから」

的屋のオヤジ役に扮したオレは、屋台の中の椅子いすに厳げんかに腰掛けた。

向かい側の漬垂はなれ二才のお客役に扮したユイは、ポイとボールを持ち、唇を舐めてやる気満々だ。

ちなみにユイが持つてるポイというのが、金魚を掬う道具で、コイ

ツが1枚10円。

100〜300枚単位で売られていて、オレたちのクラスは100枚購入。

ボールというのが、捕れた金魚を入れとくお椀の事。

金魚に酸素を与えるために必要なポンプは約1000円。

水槽に入ってるエアストーンとエアホースは200円程度。

オレが持つてる網は100円。

お持ち帰り用のビニール袋は1つ5円程度。

金魚はおよそ400匹用意したが、竜崎の伝手^{つて}で5000円程度で激安入手ができたので、ウチのクラスの今年の予算は2万円も掛からず、経済的にもチープな出し物になった。

なにもかもチンケな出し物だからこそ、逆転の発想で、超ポジティブなオレの大胆で奇抜な発想が必要なのだ。

「えいつ」

ユイがさっそくポイを水の中に入れ、金魚を狙い出した。

「何っ？ お客さんお目が高いネ。そいつは見ての通り、一匹しかない貴重なミドリガメね！」

明らかにユイはミドリガメを見ていなかったが、オレはあえてそう言った。

「その手に乗るか！ ……つつつか、なんで語尾がなんちゃって中国人になってんのよー!!」

そう、B型のユイがそう言い返すのも想定内。

ミドリガメを捕るのが難しいのは、縁日好きのユイは百も承知の助。

しかもB型、こっちがあゝ言えばこゝ言っし、こっちがこゝ言えばあゝ言っ。

それを逆手にとって……って、血液型分析はオツキーに指導してる暇はねえよな。

「オツキー、今みたいにまずはミドリガメに客を注目させる。そうすればここまで頑固な客じゃなければ大概、気を引かせることができる。人は目立つもの、希少価値があるものに値打ちを見出すってモンだ」

「誰が頑固ですって〜？」

ホラ、来た。

「じゃ〜、アタシがコレ捕ったら何かくれんの？」

「サービスで金魚一匹つけちゃおっかな〜」

「言ったな〜」

ユイがまんまとオレの術中にはまった。

ミドリガメ一匹250円、金魚一匹10円、計260円。

金魚掬い1回300円、まだウチが黒字。

まずポイ1つで金魚30匹は無理。

だからウチが赤字になるのは、このミドリガメを狙われた時だ。

だが、ミドリガメは水槽の中に2匹しかない。

実は屋台の裏には10匹ほどのストックがあるのだが、客にはコイツは2匹しかないと思わせ狙わせる。

しかしミドリガメの重さに耐え切れず、300円のポイは虚しく壊れる。

運良く捕れてもポイのダメージは計り知れず、金魚一匹サービスで貰った時点で客の満足度はMAX。

人は物事が安定した瞬間、気が緩んで足もとをすくわれるのが常。

緊張が解けて無駄な力が働き、客のポイが破れるのは時間の問題だ。

「ここでさらに屋台のオヤジがこう言う。

「凄いねお譲ちゃん。もし、このラスト一匹のミドリガメ、このト
ンちゃんをGETできたら特賞として金魚10匹あげちゃうー!」

「言ったわねー!」

ユイの眼光が光る。

・・・が、まずミドリガメ2匹は物理的に無理だ。

万が一それをやってのけたとしよう。

そしたら勝負師として、潔く負けを認め・・・・・・・・って、オイ、
マジかヨ~~~~~?!

第176話 男らしく潔く

なんと、目の前のユイは、ミドリガメ2匹をあっさりボールに入れやがった。

「ハイ、金魚11匹GETねっ！」

はうあっ?! ミドリガメ2匹＝500円、金魚11匹＝110円、計610円、310円のマイナス???!

「オイオイ大丈夫なのかよジョン！ いっきなり初っ端から赤字じやねえ〜かよ〜!!！」

オツキーに即ツッコまれるオレ。

さらにユイは、1つのポイで金魚を30匹以上掬い上げまくる。

「はっはっはっは。しっかし、容赦ないっスね〜。なるほど〜、水の流れを上手く利用するのか〜。あと、深さも関係すんだな、コレ・・・」

竜崎がユイの金魚掬いの上手さに感心している。

「ねえジョン君、やっぱり限度を設けた方が良くない？ 一人10匹以上はダメ・・・とか」

佐倉が呟く。

「そうよね」

委員長の小倉も頷く。

「でも、ここまでやる人って、そんないなくな？」

柴が責められてるオレをフォローしてくれた。

「ジオン、ミドリガメ捕ったら金魚サービスは却下だ」

なに、オツキーのくせに生意気な！！

「終わり終わり！！」

オレはユイのポイを取り上げた。

「何よ、そんなんで客が満足するとも？」

「オマエ金払ってねーから客じゃない！！」

「何ムキになってんのよ。ちゃんと返すわよ」

ユイはカメや金魚を水槽に戻した。

みんなオレを蔑んだ目で見るが、大人気ないのはどっちだよ。

・・・たく。

「金魚つて、色んな種類いるよね〜。コレ、デメキンって言つんだよね?」

さすが佐倉だ。

痛んだ雰囲気はすぐさま補修してくれる。

そんな彼女の、場の空気をすぐに察知してフォローに回る優しさがオレは大好きだ。

「その黒いデメキンはマクロって言つんだよ。で、その赤いのがポニョだ」

オレは佐倉が指差す金魚の名前を語った。

「へえ〜・・・って、それ覚えるってか?! ジオン!」

オッキーがビシッとツツコンでくる。

「ねえ〜、どうして金魚つて、普通の魚と違うんだろ〜? まるで観賞用の為に存在してるみたいに綺麗だよね」

いやいやいやいや、佐倉さん、アナタの方が何百、何千倍も綺麗だから!

「確かにそうだよな。ま、こころ辺のはフナに近いけど」

オッキーがフナっぱい金魚を指差す。

そういえばオッキーの家の金魚って15年以上生きてて、フナくらい大きくなってるって前に言ってたっけ。

それって、金魚じゃなくて、フナでいいよな？ もう、フナって扱いで良くね〜か？

「そういえばジオン、オマエ、近所の河からメダカ捕ってくるって言ってたろ。経費浮くからって。オマエ忘れてたろ？」

オッキーが偉そうにオレを指差す。

「メダカは金魚に食われるから意味ねえ〜んだってよ。な、竜崎！」

「そうっすね」

「ねえ竜崎君、金魚の事、何か教えてよ」

あつ、佐倉、竜崎に魚のうんちく語らせる気？ 止まんねえ〜ぞ。

「金魚はかつて、中国の貴族らに飼育、愛玩されたんす。日本には室町時代に伝来されました」

へ〜、そんな事まで知ってるの？ スゲ〜な竜崎。

常人には無駄な知識だが……。

「だからさつきジオン君は、なんちゃって中国人に扮してたんだね」

佐倉が感心してるが、オレはそんな知識ハナからなかったぞ……。でも、ここで否定するのもアレだし、何よりその、なんちゃって中国人の話題をここで出される事態、何か恥ずかしい。

もう、その話題は金輪際しないでくれ、オマエら頼む！

「金魚は人間が人工的に作り出した動物で、天然には存在しない奇形魚なんス。人間の手が加えられていればいるほど自然適応能力が低くてすぐ死ぬんスけど、フナに近い品種は長生きするんスよ」

なるほど。

金魚の謎が解けてきたぞ。

「こいつを河川に放流して大問題になったんス。何万年もかけて築かれた固有種の絶滅が懸念されてるっス。遺伝子汚染。これは、悪質な業者が選別して、いらぬ金魚を河に捨てるから生じるんスよ」

「ジオン、そ〜いえば学園祭が終わっていらなくなった金魚、近所の河に捨ててくるって言ってたよな？」

オッキー、余計な事を……！！

「マジっスか?! 許しませんよ、そんな事！」

竜崎が怒っている。

「そういえば後始末まで考えてなかったね」

ユイが困り顔で腕を組む。

「ジオン君がオレに任せろって言うから・・・」

小倉まで余計な事を・・・！！

「やっぱり河に捨てる気だったんスか？ ジオンさん！」

「本当なの？ ジオン君?!」

「やっべ〜〜、竜崎だけじゃなく、佐倉までオレを見る目が悪質な業者を見る目になってる！！」

「いや、それは無いって、ははは」

「じゃ〜、どうしようと思ったのよ？ アンタ、夕香にオレに任せろって言ったんでしょ？ そんなで、オツキーには近所の河に捨ててくるって。これをどう言い訳する気？」

ユイはオレをフォローするどころか、オレをここでやっつけようとしている。

「コイツはオレの味方じゃねえ〜のか？ 仲間だろ！ ここは助けるだろ、フツー！！」

・・・っていうか、ユイと口喧嘩して勝てる自信ないし。

第177話 武蔵祭はじまる

・学園祭当日・

明日は終業式、その後は夏休みに入るとして、学校中のテンションは自ずと上がる。

オレとオツキーに至っては、明日の夜にテルが来るってんで、そりゃもうテンションは上昇する一方だ。

オレたちのクラスの出し物は金魚掬い。

4人一組になり、19時までの10時間、交代で金魚掬いの的屋になる。

そうすることによって、クラス全員がクラスの出し物に参加でき、尚且つ9時間もの自由時間も得る。

オレとユイとオツキーと佐倉の4人は、朝イチの時間帯をGETした。

昨日は、「朝9時に開幕?」「早過ぎねえ?」「そんな時間にうちの学校に来る物好きいるか?」「なんて声が聞こえたが、どっかのクラスが今流行の『ポケっとハンター』とかいうゲームのイベン

トをやるとかで、おびただし数の子供たちを引き寄せた。

朝6時から、入り口の前には行列が出来ていたという。

「スゲエ騒ぎだな。開幕と同時に走ってんぞ、アイツら」

子供たちはウチらの屋台を見向きもせず、あっという間にポケハンコーナーへ走って行ってしまった。

「何目当て？」

「ポケハンのカードだよ。1年のクラスでポケハングッズの中古屋やるらしいけど、そこにレアカードが並ぶって噂」

ユイの疑問にオッキーが答える。

しばらくすると、ナナメ向かいの宮さんのクラスに行列が出来ていた。

「宮さん凄いやね。10時間作り続けるらしいね」

佐倉が遠い目で焼きそば屋を見る。

宮さん、自分がトイレの時は客を待たせるって言ってたな。

それ以外は全部自分が焼く・・・と。

宮さんの性格上、人に自分の味を任せられないんだろくな。

でも、同じクラスのヤツらからしたら、ワンマン体制に批判もあるだろうし、ラクできるって思うヤツもいるだろうし。

どっちにしろ、誰も逆らえないんだろくな。

オレらにはあんなに優しい宮さんだけど、3年とか他校からはメッチャ恐れられてる人だし。

そんな宮さん、実は、自分のクラスだけじゃなく、学校を守る為に、あえて悪を演じてるんだ……。

竜崎曰く、必要悪。

ホントはみんなを守る正義の味方なのに、恐がられたり嫌われたりしてる。

ま、上に立つモンが嫌われるのは、世の常だけだね。

周りの屋台にはチラホラ客が寄り出したが、ウチのクラスには誰も寄り付かない。

長水槽の金魚をチラ見するだけで、みんな素通りだ。

「ジオン、ここいらの金魚かたまってんじゃん、ココに。やっぱ満まん遍べんなく散らさね」と

「じゃ、オメエが散らせよオツキー！」

「ねえジオン君、水槽の中の金魚のフンが原因なんじゃないかな？」

ほら、何か水が濁って見えるから・・・」

金魚の・・・フン？ 佐倉の口から出しちゃイケナイ言葉ですなあ、フンだなんて。

誰だ？ 誰のせいだ？！ オレか？ オレだ、オレが悪いくんだ。

オレがちゃんとフンの始末しねえから！

「ジオン、アンタ網持ってたから、ちゃんと掃除しなさいよ」

「分かってるって！！！！」

ユイに言われるまでもねえーんだよ。

「オツ、やってるな、オマエら」

フン、誰かと思ったら、ウチの担任のリッキーかよ。

「はっはっは、亀鶴、オマエ何やってんだ？ 金魚掬いならぬ、金魚のフン掬ってかあ~~~~？！」

な・ん・だ・と・・・コラア。

オレが睨む間も無く、リッキーは行ってしまった。

どうでもいいが、このままではオレは、何だかシャバいいメージのままだ。

ここは佐倉の手前、何としても名誉挽回せねば。

「あのヤロー、明日テルと襲撃してやっかなー!!」

「落ち着けジオン。……っつゝかその前に、テルは乗らねえくだろ、その話」

「テルはあのヤローに金魚のフン呼ばわりされてんだぞ!」

「それはオマエだ、ジオン」

「あははは、ははは」

佐倉に笑われた。

アレ? オレ、何て言った? テルがリッキーに金魚のフン?!
ぐあゝゝゝ、何、墓穴掘ってんだオレはゝゝゝ! 金魚がテルでフンがオレだったゝゝゝ! ……っていうか、「金魚のフン」の話題、まるごと全部この世から抹消するつもりだったのにゝゝゝ!!
またコイツらの頭の中に、「金魚のフン」を甦らせちまったあゝゝゝゝ!!!!

そう、始業式の日リッキーに、「オマエ、確かテルの側近だな。金魚のフンのように、いつもテルにくっついて歩いてた……」とおちよくられ、さらにはクラスの笑い者にされた経緯がある。

オレが頭を掻き毟むしっていると……。

「きゃ〜、ホントに来てくれたんだ〜、アリガト〜！」

誰？ ユイの友達？！

・・・ん、アイツは何処かで・・・。

第178話 ベツキーのギター

若くて背と鼻の高い、あのやけに陽気でフレンドリーなアメリカ人は・・・、ジエシーだ！ ジエシーが来た！！

しかも、隣に胸が大きいナイスバディの美しい女性を携たずえて。

瞳の色がグレーで金髪、服はパンクスタイルで、背中に楽器を背負しっている。

年はオレらと同年代くらいか？ カナダ出身のシンガーソングライター「アブルリ・ラブウーン」に似てる、クールな外国人だ。

「ユイ」

「ベツキー」

ユイにベツキーと呼ばれた女性は、ハグで挨拶をしている。

女同士、ラブラブだな。

「ユイ」

「ジエシー」

はうあつ？ こ、今度はユイとジェシーが抱き合っている。

挨拶のつもりらしいが、佐倉は引いてるぞ。

日本には、抱き合う風習って無いモンなあ。

将来結婚して子供が出来たら、オレン家は気兼ねなく抱き合えたりキスが出来る環境にしたいな。

佐倉・・・いや、結婚して姓が変わるから、亀鶴愛かな？ 愛と一緒に、そんな素敵なおファミリーを築こう・・・と。

・・・ムフフ。

「紹介するね。現在、人気急上昇中のアマチュアバンドのベーシスト、レベツカよ。BARカシオンにアタシがいた頃、ジェシーと一緒によく飲みに来てくれたのよ」

ユイに紹介されたベツキーが、オレに向けて左手を差し伸べる。

「あつ、ジ、ジオンです」

オレはすぐにベツキーの好意に応えた。

何より、瞬時にオレが右手を怪我してるのを察知して、左手を出してくれた事が嬉しい。

温かくて、柔らかい手だ。

背の低いベッキーは、見上げるようにオレの目を見つめ、唇を閉じたまま優しく微笑む。

オレにはハグじゃないのね？ 流石にそこは一線あるんだ？ でも、佐倉の前で抱きつかれるのも困るけどな。

ホラ、嫉妬とかされるのも、色々大変じゃん……。

ベッキーは背負っていた楽器を下ろすと、それをユイに手渡した。

そしてユイの頬にKISS。

ふと、オレの隣のオツキーの方を見ると、オツキーは手を差し出したまま立ち尽くしている。

あつ、オマエ、オレの後にベッキーと握手できると思って待ってたのね？ 憐れなヤツめ。

「LOVE」

「ベッキーは、ユイのボーイフレンドに対するLOVEに惚れたって言うてマッス」

ジェシーがベッキーの言葉を通訳している。

「ボーイフレンドに対するラブ？ ……って、ユイに彼氏がいるって事？」

佐倉がオレ以上に反応した。

眉間に皺しわを寄せている。

「佐倉、ユイに男がいるわけないよ」

佐倉の表情が気になったオレは、すぐフォローに入った。

しかし、尚も佐倉の表情は硬い。

「はあく、さては嫉妬だな？ 自分には彼氏がないし、あつ、それに、佐倉ってあんまり友達いなそうだし、唯一の友達が自分に内緒で彼氏を作ってた・・・なんて知ったら、そりゃ怒るよな。」

ユイは手持ちのバックから、封筒を取り出した。

「きっちり80万、入ってるから」

そう言ってユイは、ぶ厚い封筒をベッキーに手渡した。

ベッキーは封筒からお金を取り出し、数える。

「一体全体、何が起きてるんだ？」

数え終わったベッキーは、律儀に領収書にサインをし、それをユイに手渡した。

その後オレは、ベッキー手持ちのデジカメで、ユイとベッキーのツ

ーショットを撮らされたり、さらにはジェシーも加わっての3ショットを撮らされたりした。

ユイと軽く会話を交わした後、ジェシーとベッキーは仲良く手を繋いで校内へ消えた。

「マジかよ……。F・R・Sかよ……………」

ベッキーとジェシーが去った後、エレキギター用ギグバッグの中身を見たオツキーが驚愕した。

フォールリードスミス、略してF・R・S。

正式名称は『フォール・リード・スミス カスタム（F・R・S） 25th Anniversary Hunger Dragon』

「ネックにドラゴンの絵……。世界限定250本のレアモデルだ。ブラジリアン・ローズウッド。希少価値の高い木材。芸術的仕上がり……。素晴らしいサウンド……………」

オツキーが何かにとり憑かれたかのように、ブツブツと独り言を呟く。

オレはギターのボディに、筆記体で「Rebecca」(レベッカ)と書いてあるのを見付けた。

サインか？ 白いペンで書かれた文字を見る限り、あの娘が使ったヤツに違いない。

だが、そんなことはどうでもいい。

問題はそこじゃない。

「どうしたの？ それ」

佐倉がユイに尋ねる。

「ベッキーから買ったの」

「それは分かってんだよ。そ〜じゃなくって、どうして中古で80万もするギターをかうんだよ。しかも一括で?!」

我慢できずにオレは2人の間に割って入った。

「80万って言っても、メーカー希望小売価格は200万よ。もうこのモデルは作られてないから、中古でも200万は越すのよ」

そんなの知ってら〜。

オッキーが前から欲しがってたのも知ってら〜。

「そ〜じゃなくってよ〜、どっから出てくんだよ80万。そんな大金ど〜してオマエが持ってんだよ」

「今までコツコツ、バイトで貯めたんじゃない。アタシが貯めたお金よ。アタシがどう使おうとアタシの勝手じゃない!」

「今までそいつを買う為にバイトしてたってか？ 本当かヨ……。衝動買いなんじゃねえの？」

「……そ、そんなんじゃないわよ！」

明らかに動揺している。

「あれ？ 前にバイトしてる理由、私が聞いたら、お金が目的じゃないよ、みたいな事言ってたよね？」

佐倉も攻撃に出ている。

珍しいな。

ユイに恨みでもあった？

「ユイ、オレたち仲間なんだから、嘘偽り無しでいこうぜ。ホラ、こんなオレだって、昨日素直に謝ったりしたじゃん」

オレは昨日の『金魚捨て騒動』の時の自分を兼ね合いに出してみた。

「分かったわよ。……っていうか、何かアタシ、隠れて悪い事してたみたいじゃない？ アタシ誰にも迷惑掛けてないし！！」

「分かってるって。そくじゃなくて、どくしてそいつを買ったのか、オレたちに話してくれって言うてるだけだろ。ホラ、オツキーだって羨ましがるくらいのギターだろ。ユイにも楽器を見る目があるんだろってオレらは感心してんだよ、マジで。別にどうしても理由

は伏せたいって言うんなら、無理には聞かねえけどさ」

ここまで言われたらB型の性格上、教えてくれるだろ?!

「わ、分かったわよ。でも、絶対誰にも言わないでよね。ここだけの話だかね!」

ここだけの話? ユイにしては珍しいナ。

よっぽどの理由があんのかな?

第179話 E(わたし) W(イコール) U(あなた)

「ジオンには前、言ったよね。アタシ、好きな人がいるって」

全然覚えてるぞ。

「その彼は、ビジュアル系バンドとして、最近インディーズデビューしたばかりなの。実は彼らのライブを見た事ってまだないんだけど、今日、ウチの学園祭ライブにスペシャルゲストで出演するっていうんだ」

「・・・それって、Do the by(ドウザバイ)?」

佐倉が蚊ほどの声で呟く。

「そう」

「もしかして・・・、ヴォーカルの、Ikaru(イカル)?」

「うん」

ユイが恥ずかしそうに頬を赤く染め、大きく頷いた。

ユイがヴィジュアル系バンドのヴォーカルに恋? ふはっ!!

「佐倉、その何とかってバンド、知ってるの？」

オツキーが佐倉に訊いた。

「ウン。ほら、1年の時、学園祭ライブでユイが歌ったでしょ。その時のバンドが、Do the by(ドウザバイ)なの。去年はヴォーカルのIkaru(イカル)が急遽^{急に}出れなくなつた時、ピンチヒッターでユイが出たのよ」

何かそんな事聞いた覚えあつたな。

当時はどうでもいい情報なんで、聞き流してたけど。

「アタシは元々部活やってなかったから、バイトは暇つぶしみたいな感覚でやってただけど、1年以上やってるとき、それなりに貯金もできるワケ。特に欲しいのあつたワケじゃないから、そんなにお金使わないし。バンドのメンバーがよくバイト先のBARに遊びに来てくれて。その頃ジェシーとも知り合つたの。そしたら、偶然にもジェシーが初めて日本に来た時のホームステイ先が、Ikaruの家だつたつて言うのよ。そんな偶然つて、なかなかないわよね？ ジェシーの彼女のベッキーも、ちよくちよくBARに来るようになつて。ある時、ベッキーたちがアタシの好きなタイプを聞いてきたの。たまたま、Ikaruが目に入ったんで、アイツみたいに夢を追い掛けるヤツかな？……つて答えたら、いつの間にかジェシーとベッキーの2人がアタシとIkaruをくっつけたがつて……。その頃、IkaruがF・R・Sを欲しがってるのを知つて、たまたまジェシーたちにそのエレキギターの事を聞いてみたら、ベッキーが持つてるつて言い出して。アタシ

がいない〜って言ったら、ベッキーが65%OFFで譲ってくれる
って言うから、ついノリで……」

何かユイのヤツ、かなり言い訳がましく語っているが、結局、I
kar Uが好きなんだろ?! そんなで、やっぱり衝動買いじゃね
え〜かよ。

そりゃ〜言いたくないわな。

でも、一連の話を聞くに、そりゃ〜運命を感じるね。

良いタイミングで金もあったし、ギターも入手できたし。

しかもそいつを今日渡せて、貰った男はそれを弾いて母校でデビュ
ー後、初ライブ。

オレも文句ねえ〜よ。

「応援してやるよ、ユイ。後で、そのイカリ? イカルス? とか
言うヤツ、紹介してくれよ」

「イヤだ!!!」

か、完全拒否かヨ!

その後、オレとユイ、オツキーと佐倉の4人は、次の番のヤツらと
交代し、念願の自由行動に突入。

朝露さんのクラス、喫茶店で美味しいソフトクリームを食べ、竜崎のクラスで幻想的な雰囲気味わい、邪魔者が2人もいるものの、佐倉とちよっとしたデート気分を味わった。

そして昼休み、宮さんの焼きそば屋の行列に並んだ。

屋台の中は相変わらず戦場で、結局宮さんとは目すら合わす事ができず仕舞い。

オレたち一同は特製焼きそばを片手に中庭で昼食をとる事にした。

今年の夏は異常気象で、例年より遥かに暑い為、炎天下の元、そういう日向ひなたにはいれない。

日陰に移動をもちかけようとした矢先、用事があるからと言って、ユイが抜け出した。

「渡しに行くのかな？ ギター」

顔を合わせるや佐倉が言う。

「こっそり覗き見してくるか？」

「ウン、行こ行こ」

オレは冗談のつもりで言ったのだが、予想以上に佐倉が乗ってきた。

オッキーに至っては、「マズくね？ 見付かったらサンドイッチビ

ンタとかされね?」などとビビりまくっていたが、佐倉に押されてオレたちは、いつの間にやらユイの後をつけて歩いていた。

「な、佐倉、やっぱりぶつちやけ引いてたんだろ、さっき」

オレは佐倉の本音が聞きたく、小さな声で尋ねてみた。

「あつ、うん・・・」

「そりゃそ〜だよな。80万もするギター、プレゼントなんてな・・・」

「ちょっとビックリしちゃって。テへへ」

やっぱり優しいよな、佐倉は。

ちょっとだなんで、ホントは物凄くビックリしてたくせに。

「オレもさ、幼馴染みでさ、アイツの事小さい頃から見てきてるから、何つゝのかな、保護者的感覚なのか分かんねえ〜けど、何かユイの彼氏が気になるつゝか、うまくいってほしいつゝか」

「付き合っではないんだよね? でも、告白とかするのかな? そうじゃなきゃ、フツー80万もするプレゼントなんてしないよね?」

マジ、どうする気だ? ユイ。

ホントに告白とかするのかな?

そうこうしているうちに体育館に着いた。

学園祭ライブは19時から、ここで行われる。

例のバンド、Do the byは、20時30分から大トリで登場するそうだ。

体育館周辺に、特設ショップがある。

Do the byのCD即売会？ 自主制作モノが多数。

デビューCDも一応並んでいる。

何か、金儲けのニオイがプンプンするグッズ売り場だ。

「へへ、自主制作・・・、インディーズデビューシングル・・・、
へ~~~~」

オッキーがアンビバレスといった表情で、腕を組んでグッズを眺めている。

バカでかいポスターが目に入った。

コイツがヴォーカルのEkaruか・・・。

メッチャカツコつけやがって。

でも、ほっぺにマークが付いてるぜ。

目の下に涙マークもついてるヨ。

髪も金髪の怒髪天。

まるで、どこかの星の超何スパーとか人みたいなヘアースタイルだ。

・・・と、その時！

第180話 果実は果実の種から育つ

「来たつ、隠れるっ!!」

オレたち3人は、とつさに植え込みの裏に隠れた。

体育館の裏庭、人気の無いシーン、これはまさに告るにはうってつけのシチュエーション。

男はオレのイメージとは大違いで、背が高く、体格の良い好青年だった。

まだ、あのメイク前らしく、も涙も付いてないし、怒髪天でもない。

「あれが例の、D o t h e b y (ドウ ザ バイ)のヴォーカルの、I k a r U (イカル)？」

オッキーが嫉妬深い目でI k a r Uを睨む。

佐倉の話では、I k a r Uは相当なボンボンらしい。

どっかの御曹司で、執事なんかがいる豪邸に住み、赤いポルシェを乗り回し、スポーツ万能で甘いマスク、海外で日焼けした肌、しかも喧嘩も強いときたもんだ。

一見、欠点の見当たらない、白馬の王子様タイプの御坊ちゃま。

玉の輿こしねらいの女が惚れないワケがない。

・・・でも、ユイのヤツ、あんなヤロ〜のどこが気に入ったんだ？
ユイが一番嫌うタイプのよな気がするんだが。

B型の気まぐれってヤツか？！

「・・・・・・・・・・で、オレだけに話って何だよ、ユイ」

「あ、あのね、渡したいものがあったね・・・・・・・・・・」

うわっ、まさに青春ってカンジ。

「何だよ、渡したいものって・・・・・・・・・・」

白々（しらじら）しくな、あのヤロオ〜。

ユイが背負ってるモン見た瞬間気付いただろ〜に。

「コレ・・・・・・・・・・」

ユイはI k a r UにF・R・Sを手渡した。

バターーン

その瞬間、オツキーが倒れた。

一瞬ユイたちがこっちを見たが、オレたちはとっさに息を潜め、運良く見付からずに済んだ。

「オイ、オツキー、しっかりしろ」

「・・・ス、スマン、ジオン。だ、大丈夫だ。ちょっと気を失っただけだ」

しかし、コイツよく気絶するよな、大丈夫なのか？マジで。

・・・つつつか、オツキーの気絶のせいで、驚きが半分に減少したぞ。

コイツの気絶さえなかったら、超衝撃的瞬間にオレも驚けたのに・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・じゃっ」

ユイは走り去ってしまった。

え？告白はないの？ホラ、「私、ずっと貴方のことが好きでした」とか、ないの？！

この前、誠さんに、「アタシ、好きな人がいて、その人に近々告白しようと思ってるんですけど、上手くいく？」とか訊いてなかった？　ここまでせつかく辿り着けたのに、本番で怖気おしげづくかな、普通・・・ったく、だらしねえくヤツだぜ、まったく。

ユイが走り去った後、呆然と立ち尽くすIkaru。

そりゃく、そくだよな。

理由も聞かされず、いきなりそんなモン渡されたら、誰だって立ち尽くすさ。

「Ikaru、どくした？」

バンドのメンバーがやってきた。

「あっ、いや、今さ、ユイのヤツがコレ持ってきてさ」

「スゲェく、コレ、オマエ欲しがってたギターじゃん」

「ああ・・・」

Ikaru　私たちは、体育館の中へフェードアウト。

オレたちも、その場を後にした。

I k a r U以外のメンバーは、ナヨナヨしたシヨボーイ男たちだ
つた・・・。

第181話 かすかな懸念

中庭に戻ったオレと佐倉とオツキーの3人は、しばし日陰の芝生で各々の頭の中を整理する事に没頭した。

オツキーは、ずっと前から欲しかったF・R・Sを、自分より金持ちなIkaru（イカル）がタダで、しかも簡単に、さらにはユイから入手した事に対して、鈍い怒りを沈殿している。

そんなオツキーを見てオレは冷静になれた。

オレが不服な所は1つ。

せつかくの告白チャンスをユイが逃した事だ。

「佐倉は何に対して一番怒ってるんだ？」

佐倉が怒りの感情を面に出したのを見たのは初めてだったので、オレはその理由を一番知りたかった。

「へ？ 私、怒ってないよ?!」

「嘘だ〜」

「私はユイに頑張つて欲しいなつて思つてるよ？ I k a r U
（イカ ル）が好きなんでしょ、ユイは。だったら、自分の気持ちに素直になつて、正直に行動するべきだと思うよ」

「やっぱり佐倉もオレと同じか……。ユイがせつかくの告白のチャンスを逃した事を怒つてんのか……」

「だから私は怒つてないからね？ 怒つてるのはジオン君でしょ？」

えええ〜〜？ オレ〜〜〜？！

そ、そうか、オレ、怒つてたのか……。

誰に？ ユイに？ いや……。I k a r Uに？ 違う。

オレに、自分にだ。

オレより遥かに良い男であるI k a r Uに嫉妬し、さらにはI
k a r Uが好きなユイを認めたくないつて思つてる自分に対しての怒りだ……。

「私が残念だったのは、どうして私に相談してくれなかったのかなつて……」

佐倉の哀しそうな声が、オレの鼓膜を刺す。

そつだよな、早めに相談してくれりゃ〜、アドバイスだつて出来るし、もつと良いシチュエーションも作れたかもしれなよな。

何より80万も使わせたり、絶好の告白のタイミングを逸機いじきさせる事もなかった。

でも、いかんせん、アイツ、根っからのシャイだから……。

「過ぎた事はしょくがねえよ。ギターを高い金出して買ったたり、それを人にあげたり、そんなのアイツの勝手だしさ。それより、あの色男とアイツがさ、うまくいくように応援してやるうぜ。でも、ユイの性格上、援護射撃とか人から後押しされたりするの嫌うからさ、陰ながら温かく見守ってやるうぜ」

「何だよジオン、良い事言うじゃねえか。相変わらずオマエはポジだよな。見習いたいぜ」

オツキーが生意気にも、オレの肩を叩いた。

……と、その時!!

「お待たせっ！ 行こっ」

いきなりユイが合流。

「ユイ、どこ行ってたの？ ギターは?!」

佐倉が遠慮なく言った。

「あつ、ウン……、えつと……、渡してきたっ！ I
k a r Uに」

ユイのヤツ、はぐらかさずに正直に答えたよ。

「ねえねえユイ、I k a r Uのどんなトコが好きになったのよ」

佐倉がユイにくっついて、歩きながら内緒話を始めた。

くっそ、オレも話にまざりてえ！

ユイの思わぬ行動により、一時はうちの仲に不協和音が生じるかと思われたが、何とかこじねずに済んだようだ。

夕方、屋台ゾーンに戻ると、宮さんの焼きそば屋にヤンキーの人だかりが出来ていた。

吉岡の番長、大橋。

野牛の番長、長須。

野牛のナンバー2、仲村。

凄いメンバーが顔を揃えている。

皆、私服だが、迫力のあるオーラですぐ分かる。

流石に彼らの顔や名前を知る学生たちは、屋台ゾーンから姿を消している。

まったくもってけしからん！ 営業妨害だ！！・・・と、心の中で叫びつつ、オレは進行方向を変えた。

「オ〜〜ウ、ユイちゃんさ〜ん！ ジオン君〜！」

上手く逃げようと思った矢先、大橋に見付かった・・・。

長須、仲村、大橋と軽く挨拶を交わした程度で、オレは彼らから離れた。

こんな物騒なヤツらと親交を深めたら、そのうちとんでもないモンに巻き込まれる。

体が幾つあっても足りん！

ブ〜〜〜ン

さっきから一匹の蚊がウルサイ。

「何踊ってんだよジオン」

オッキーが言った。

「踊ってねえーよー！」

纏わり付く蚊を追い払ってんだよ！ くそつ、ギブスで洗ってない所が臭うのか？ ざけんなよ、蚊！！

ピッポッ　ピッポッ

救急車のサイレンが遠くで鳴っている。

「来る途中、大通りの交差点で事故があったんだよ。バイクとトラックの正面衝突。酷かったな、アレ」

「長須、オマエもバイク乗ってんだろ？　気を付けるよな」

「無免許で車乗り回す宮には言われたくねえよ！　ゼハハハハ」

「ガッハッハッハ」

長須が宮さんと話している。

「オイ、ジオン。アレ、野牛のナンバー2のバイソンソルジャーだよな？　竜崎と意気投合してるぞ?!」

仲村と竜崎が、楽しそうに談笑している。

「ホントだ、アイツいつの間になぁ」

「オレらも記憶頂こうぜ、ジオン」

「勝手にしろ」

・・・まったく、ミーハーヤローめ。

やがて、時間も19時を過ぎ、屋台ゾーンもお開きの時間になった。

あとは武蔵祭閉幕まで、体育館での学園祭ライブのみ。

ライブは一般客も生徒たちも出入り自由。

ただ、出し物の後片付けがある為、ほとんどの生徒は後始末に追われる。

オレたちは、D o t h e b y の演奏が見たいので、皆で協力して後片付けをする事にした。

もちろん暗黙の了解で、オレと佐倉とオツキーの3人は、ユイとI k a r u の件は皆には伏せた。

ユイもそれを望んでるだろうし・・・。

長須たちの帰宅を見送ると、オレたちはまず、宮さんの焼きそば屋の掃除に取り掛かった。

どんなもんかと思いきや、あっと言う間に片付いた。

「サンキュー皆、後はゴミだけだから。帰りに持ってくから、そのゴミはそのままでもいいよ」「

「宮さん、このガスコンロとかプロパンガスとかは？」

竜崎が火の元を懸念した。

「明日の午前中、業者が取りに来るから、そのまま大丈夫だよ」

そう言いつつ宮さんは、念の為ガスの元栓を再チェックしている。

屋台の解体作業は、明日の早朝、宮さんのクラスのヤツらがやってくれるそうだ。

「なあ〜竜崎、ウチのクラスの金魚なだけどさ〜、ホントにいいの？」

「大丈夫っスよ。そのままそこに放置しといて下さい」

ウチのクラスで余った金魚は約50匹。

何と、竜崎と親交の厚い生物部魚類班が、親切にも引き取ってくれるらしい。

マジで、ありがたい。

オレたちは、最後に竜崎のクラスに向かった。

「さっさと片付けて、早くライブ見に行こうぜ〜」

Do the by、ヴォーカルのIkaru、一体どんな唄を歌うのか?! ワクワクするぜ!!

オレは豪快に竜崎のクラスの戸を開けた。

ガラララララ

そこには、生涯忘れられないであろう、とんでもない光景がオレを待っていた。

第182話 ユイの決断

「キヤーツ」「うわ~~~~」「きゃ~~~~」「変態〜!」「キヤーツ」

・・・へ？ 何？ コレ、何?! ドツキリ？ ええ〜?! マジ？

1年の女子たちが、メイド服から私服に着替える途中のView^{ビュー}だ。胸を両手で隠す生徒もいれば、パンティー丸見えの娘^コもいる。

「ジオンさん、そこ、朝露のクラス……………」

竜崎が生唾を呑みながら言った。

「ですよね？ し、失礼しました〜」

ススススス

オレはそつと朝露さんのクラスの戸を閉めた。

オツキーと宮さんは笑っているが、ユイと佐倉はかなり引いている。

しばらく呆然と竜崎のクラスの掃除をしていると、聞き覚えのある声が耳に届いた。

「ちょっと、ジオン先輩、私はどうフォローすればいいんですか？ まったくも～～～！！ ちゃんと着替え中って張り紙したのに」

「あつ、朝露さん？ 大丈夫、オレ、君の裸は見えないから。ウン、朝露さんがいたの分からなかったし、ウン」

「はい？ 何言ってるんですか？ 私は柴君のクラスに行つてて、その場にはいませんでしたから！」

「良かった」

「良くないです。ジオン先輩のファンのコトかもいるんですよ、ウチのクラスには。泣いちゃったコトかもいるんですからね」

「マジ？」

「あゝあ、ジオン、切腹モンだぞ」

「ウルセー、オッキー、てめえは引つ込んでろ！」

「あ、朝露さん、オレはどうすれば・・・」

マジでど～すりゃい～んだオレは？ 刑務所とか行けば許してもらえんのか？！

「そんなの知りません」

「謝ってくるよ」

「火に油っス」

竜崎がオレの歩を止める。

「じゃ〜ど〜すりゃいいんだ」

困ったオレを助けるでもなく、ユイが止めのセリフを吐いた。

「ど〜しよ〜もないわよ、諦めな。所詮アンタにファンがいたって事自体、有り得ない奇跡だったのよ。アンタはただ、何もなかった頃に戻っただけ。雫の友達は、目を覚ましただけ」

「.....」

あまりに痛いセリフに、オレは返す言葉もない。

「そんな事よりさ、竜崎〜、この水槽とか魚はど〜すんの〜？」

ユイが竜崎に聞いた。

そんな事ってなくね〜？ ユイにはそんな事かもしれねえ〜けどさ〜、オレにとっては生涯忘れられない大失態なんだぞ！！

「あ〜、水槽ならそのままでもいいっスよ。生物部魚類班が熱帯魚を引き取りに来るっス。水槽の移動とかもそいつらに任せるんで」

「……………」

時間を戻せる道具とかって、無いのかな？ あるなら、1000、000、0000円で買う！ 闇金融に借金してでも買う！！

「……亀ちゃん、ガツハツハツハ。長い人生、色々あるさ」

宮さんはオレの肩をバンバン叩いて大笑いしている。

何それ宮さん、何それ？ 何か超、喜んでない？ 人の不幸、そんなに楽しい？！

20時15分、オレたちは体育館に着いた。

外のDo the byショップは閑古鳥かんこどりが鳴いているが、中はそれなりに客が入っている。

特等席を確保してくれていた朝露さんの弟と妹もとの下へ合流し、オレたちはステージを見つめた。

見慣れた体育館の壇上には、青く透き通った小さなスポットライトがいくつも当てられ、そこはまるで別空間のようにさえ見えた。

「ジオン、夏休み、みっちり特訓して、必ず秋の軽音楽部が主催するミニライブに出場しような」

オッキーが唇を一字にし、いつになく真っ直ぐな目をしている。

オレは黙って頷いた。

へたくソなコミックバンドの演奏が終わると同時に、体育館に敷き詰められた椅子があれやこれやと言う間に満席になった。

あ、有り得ねえ〜！ そんなに皆、Do the byが好きなのか？ ……って言うか、Do the by知ってるヤツ、こんなにいるの？ 確かインディーデビューしたばかりのバンドだろ？ 去年のライブの波紋か？！

『大変お待たせしました。我が武蔵高等学校出身、去年の学園祭ライブを大いに盛り上げ、先月インディーズデビューを果たしたヴィジュアル系バンド、Do the byの登場です！！』

体育館内は、ザワつきから盛大な拍手に変わった。

竜崎と宮さんは腕を組み、お手並み拝見といった所だ。

ユイはふてくされたような顔でソツポを向いている。

それが何を意味するのかは分からない。

I kar ^{イカル} U目当ての観客に対する嫉妬なのか？ いや、ユイにそんな乙女チックな感情は無い！ 昼間の不甲斐ない自分に腹を立てているのかもしれない。

いや、もしかすると、自分のとつた行動に後悔？ 80万もするギ

ターを衝動買いし、さらにはそれを無料で譲ったアホな行為を反省・
・・・？

館内のライトが消え、ステージに大きなスポットライトが当たる。

拍手の中、D o t h e b o yの3人が現れた。

I k a r Uがステージ上に姿を現すと、ユイの目つきが変わった。

・・・そうだよな、ユイが自分の昼間のアクションに対して、怒りや後悔や反省があるわけないよな。

オレは何を望んでいるんだ？ ユイに幸せになって欲しくないのか？ オレは・・・、バカだ！！

ステージ上を見上げるユイの瞳は美しく輝いていて・・・、右隣の席でこんなに近いのに・・・、心の距離は遠いのを、オレは初めて知った。

今まで幼馴染みで、仲間だから、ユイが誰を好きになるうが関係ないと思っていたが、こんなにも淋しさを感じるなんて・・・。

ふと、オレは左隣の席を見た。

竜崎が座っている。

その隣には宮さん。

その向こうに朝露さん、妹、弟。

右隣にユイ、その向こうにオツキー、そして佐倉。

……オレは、何てミスを犯してしまったんだ。

隣にユイを持ってきたのも失敗だが、佐倉とこんなに離れてしまったのは大失敗だ!!

くっく、このライブ、早く盛り上がんねえかな？ 皆総立ちとかになって、もみくしゃになったらドサクサに紛れて佐倉の隣に移動だ！

そうと決まれば、こんなヤツら興味ないけど、オーバーアクションで応援してやるか……。

……と、その前に、オレには非常に気になる事があった。

スプレー何本使ったの？ と思わせるほど、I k a r Uの金髪はたててあり、ポスターで見た、あのメイクを施ほたくしている。

「ヘアースタイルは別にいいとして、どうして頬にマークなんだ？ あの涙マークは何を意味する？ ピエロか?!」

「・・・ああ」

オレの素朴な疑問に、ユイは無反応。

『みなさ～～～ん、元気ですか～～～！ 去年は～～、練習のし過ぎで声帯壊して、本番直前急遽入院なんていう失態がありましたI k a
「Uで～～～す!」』

シーン

体育館内の客は静まり返っている。

流石に一人だけ「ワ～～～」とか言えない。

もう少し様子を見よう。

ガンバレ、イカル!!

「嘘ばっか。ホントは前日飲み過ぎて、喉痛めただけのくせに・・・」

ユイが事実を暴露した。

「え？ そうなの?!」

どこまでカツコつけマンなんだ、イカル。

『さっそく皆さんお待ちかね、オレたちのデビュー曲、「情報化社会への警告」、聴いて下さい!』』

情報化社会への警告? 凄い題名だ……。

さて、どんなモンかな?!

ジャジャジャジャーーン ジャジャジャジャーーン ジャジ
ヤジャジャーーン

I k a r Uのギターと共に、ついにD o t h e b yの演奏
が始まった。

率直な感想としては、……まだ言及は避けよう。

『ジョホカのナミを蹴り敗れ、オマエの愛が欲しいから、オ
レは世界を敵にスル、命をカケテー』

ジャジャジャジャーーン ジャジャジャジャーーン

演奏はベースもドラムもイカルのギターもまあまあなんだが、
どうしたものか、何と言ったら良いのやら、一言で言つなればアイ
ツ……、類まれなる音痴だ。

「さっ、帰るっスか」

「そ、だね」

竜崎と宮さんが席を立とうとしている。

「行こうか」

ユイもだ。

どうして？ いくの？ 大好きな彼のライブ、見なくていいの？
またとないチャンスかもよ？ もう2度と見れないかもよ？ 本当
に見なくていいの？！

「最悪だな・・・」

オツキーはユイに遠慮するでもなく、ハッキリと感想を述べた。

そう思ったのはオレたちだけじゃなかったようで、満席だった体育館内は、次第に空席が目立つようになってきた・・・っていうか、皆、帰り出している。

何かカワイソ〜だな、アイツら。

「へたくそ〜！ 止めて帰れ〜〜！！」 「オマエなんか見に来たん
じゃねえ〜んだぞ！」 「帰れ帰れ〜〜！！」

心無い罵声も飛ぶ。

気の毒に・・・。

I k a r U も、ユイも。

そんな時、突然館内が「ユイコール」に包まれた。

「ユイを出せ〜!」「去年のヴォーカルを見に来たんだぞ〜!」「ユイ〜」「あの美声を聴かせてくれ〜!〜!」

「ユーーーーーイ」「ユ~~~~~イ」「ユーーーーーイ」

デビュー曲とやらを歌い終えたI k a r U が、マイクを握んだ。

『ユイ? いるんだろ? ここの何処かにいるんだろ? 上がって来いよ』

I k a r U がとんでもない事を口にした。

館内は割れんばかりの「ユイコール」に包まれ、1度は出て行った観客も慌てて席に戻った。

隣のユイは、上目遣いでステージ上を黙って見ている。

『ユイ〜、聞こえるだろ〜、この声。皆、オマエの声を聴きたがつてんだよ。早く上がって来いよ』

どうする、ユイ?!

まさか・・・と思った。

あのユイがステージに上がるなんて・・・。

学校中に、ユイがステージに上がった事が一気に広がったらしく、お蔭かげで体育館に生徒が次々と押し寄せてきた。

激安デパートのバーゲンセールでブランドバッグのタイムセールじやねえ〜んだから、皆そんなに焦る事ねえ〜のに・・・。

突然後ろから押され、まるで津波に呑み込まれるように、竜崎と宮さんが姿を消した。

このままだとオレも圧迫死だ！

皆、ここぞとばかり前列に来たがり、場内は一時騒然となった。

野牛との全面戦争時の余波もあり、1年勢のユイの支持率は半端ない。

ユイはIkaruたちとステージ上で、これから何を歌うか打ち合わせをしているようだ。

「明らかに釣りだったな」

人波をかき分けて、オツキーがオレの隣に来た。

「何が？」

「ギターだよ。ホラ、最初の演奏の時はフライングタイプだったろ、ボディがV字型のギター。F・R・Sに持ち替えた時、ユイがステージに歩を進めたんだ。まんまとアイツの作戦に引っ掛かったんだよ、ユイは……」

オツキーが豪語。

「I k a r Uがどうしてユイに貰ったギターを使ってたかったかって、それは慣れないギターは歌いながらだと弾くのが難しいからだろ。ヴォーカルをユイに任せられるって思ったから持ち替えたんじゃないのか？」

「どこまでポジなんだよ、ジオン」

オメエ〜がネガなんだよ！

それより佐倉は無事か？ くそつ、なんつ〜熱気。

このクソ暑い真夏の夜に、なぜに満員電車のスシ詰め状態のイヤ〜な気分を体感せにやならんだ！！

ステージ上では、打ち合わせが終了したらしい。

どうやら去年演奏した曲をやるようだ。

・・・と、その時、誰かががステージ上に上り詰めた。

ファンか？ それとも・・・！！

突然のステージへの乱入者の出現で、場内は一瞬、不穏な空気に包まれたが、すぐに騒ぎは収まった。

それもそのはず、ステージ上に現れたのは泣く子も黙る、あの男・
。。

もみくしやにされ、制服はヨレヨレ、靴は片方なくなっている。

「あれ、ウチの総番長じゃね？」 「嘘？ マジ、ヤバくね？」 「ココの番長だって」「キヤー、恐い」「マジマジマジ？」 「アイツ超有名な宮大地じゃん」

警戒するスタッフに、「大丈夫よ。アタシが責任持つから」と言っ
てユイは、宮さんにヴィンテージルックスのガイコツマイクを手渡
した。

マイクを掴むと、宮さんは鬼のような形相で声を張り上げた。

『オマエらしい加減にしゃがれコラア！！ 子供だっているんだぞ
！ 本気でライブが観たかったら、最低限のルールは守れ！！』

宮さんの迫力に圧倒され、場内は張り詰めた空気にさらされた。

『周りに迷惑掛けん！ 自分の事だけ考えてねえーで、他人のこと思いやれ！！ それが出来ねえー奴は、今すぐ退場しやがれってんだ！』

ステージの真ん中に仁王立ちした宮さんが、力強く言い放った。

「凄え〜、やっぱ、カッコイイな〜、宮さん」

オツキーは憧憬の眼差しで宮さんを仰ぎ見る。

そりゃそ〜だろ、伊達に必要悪を演じてねえ〜ぞ、宮さんは……。

武蔵が他校にナメられねえ〜ように、武蔵を命懸けで守ってんのが宮大地だ。

気心が知れた仲間内ではオチャメでユーモア溢れる優しいB型男児だが、知らないヤツや、攻撃してくるヤツらには徹底して悪。

国を守る為には嫌われ者も辞さない覚悟、まるで戦国武将を見てるようだ。

でも、ほとんどのヤツは、そんな宮さんを、ただの恐い人って、表面だけでしか見ないんだらうな。

ま、宮さん本人も担がれたりすんの、望んでないだらうけど……。

会場は一気に大人しくなり、むしろ、せっかく皆興奮して盛り上がったのに、急にションボリ反省モードで意気消沈。

だが、そんなテンションダウンも束の間、宮さんがステージを下りると同時に、ドラマーがドラムスティックを叩いた。

演奏が始まった瞬間、ユイの表情が一変。

あ、あ……、あ……、あれが……、ユイ?!

会場の空気がそうさせたのではなく、明らかにユイが会場の空気をそうさせた。

アイツ、マジ、凄え……。

マジ、半端ねえし、マジ、やべえし、アイツ、物凄えし。

曲は、去年のライブでユイが歌った、『オッチーズ O c c h y z』というバンドの『Sing Love for Me!』という曲の「カバー」。

しかも、O c c h y zファンには感涙モンの全英語詞バージョン。

ユイの迫力ある美声とオーラが学校中に響き渡り、真夏の夜の思い出を、余す事なく彩いろどった。

かけえ……。

でも、この会場で、皆そう思ってたんだろう？ 竜崎も宮さんも、オッ

キーも朝露さんも、佐倉も、みんなみんな、全身鳥肌モンなんだろ？

悪い、みんな……、佐倉、今だけ、この瞬間だけ……、あのステージ上のユイを、オレだけのユイにしていいか？

別に勘違いすんなよ、変な意味はねえくんだよ。

健全な、真っ直ぐな気持ちでオレは言ってるんだよ。

ユイが好きとか浮気とか、愛とか恋とか想いとか、そんなんじゃねえくんだよ。

そう、今だけ、このライブ中だけでいいんだ……、頼む、この瞬間を永遠にさせてくれっ！！！！

ユイがいて、みんながいて、体育館があって、学校があって、武蔵町があって、日本があって、地球があって、宇宙がある。

今、宇宙のたった一粒でしかないオレは、宇宙より大きなユイの中において、宇宙より大きなユイは、宇宙のたった一粒でしかないオレの中にいる。

まさに、全てが……、一つになる。

『Nothing was requested, and it

wanted such a gentility alone
not strong in reality though
it said so .

(何も求めないよ そう言ったけど本当は そんなに強くはない
優しさだけ欲しかった)

Do the small voice not carried
and the day when it reaches
ome? Let's shorten the distance
e first of all quietly by one
step .

(届かない小さな声 届く日は来るのかな? まずはそつと一歩ず
つ 距離を縮めていこう)

Hear because it is gentle to m
e who began to walk in bare fe
et , and may be not exaggerated ,
and the song of love

(裸足で歩き出した私に優しく 大袈裟じゃなくていいですから
聴かせてよ 愛の歌を)

Sing " Love " for me

(私のために) (愛を 歌ってください)

It hears indefinitely , and it
is quietly gentle .

(いつまでも聴かせてよ そつと優しく)

Sing " Love " for me

(私のために 愛を 歌ってください)

Love song without decoration
i
t of you of real intention .

(飾らないで 本音の ラブソング)

" Always laughingly want " In re
ality though it was said along

(「いつも笑っていたいよ そつ言ったけど 本当は)

It was on a sad not strong so
much , day .

(そんなに強くはない 哀しい日だってあつたんだ)

To me who began to walk by the
real face for a long time

(素顔で歩き出した私に ずっと)

Spell an obedient word , hear ,

and the chanson d'amour

(素直な言葉を綴って 聴かせてよ 愛の歌を)

Sing "Love" for me

(私のために 愛を 歌ってください)

It is likely to become a sad song sometimes .

(時として 哀しい歌になることもあるよね)

Sing "Love" for me

(私のために 愛を 歌ってください)

However, the love song of you who is after all highest .

(だけどやっぱり 最高のラブソング)

Sing "Love" for me

(私のために 愛を 歌ってください)

It is likely to become a sad song sometimes .

(時として 悲しい歌になることもあるよね)

Sing " Love " for me

(私のために 愛を 歌ってください)

However, it is after all his
st. your love-song !!

(だけどやっぱり 最高な 貴方の) . . . (ラブソング) 『

第184話 暑い真夏の夜の夢

オレとした事が、ハメを外してちょっぴりトリップしちゃってたみてえさ。

佐倉という、将来の嫁さん（勝手な妄想）がいるってのに、ユイの歌声にまんまと乗せられた。

アイツの歌は、麻薬だ！

カラオケならまだしも、ライブのユイは、魔物だ！！

しかし、ヴォーカルが変わるだけで、こんなにも違うのか？

会場で、みんな口を開いたまま言葉もない。

「ジオン、秋のライブ、ヴォーカル決定な、ユイに……」
オツキーが呟く。

ヤベェな、コレ、ユイと組んだら絶対メジャーに行けるぞ。

コイツ、格が違う。

レベルが・・・、次元が……………。

歌手のコンサートは何度か観に行ったが、こんなにも胸に響くのは初めてだ。

いつの間にやら隣に戻っていた竜崎も、その隣の宮さんも、2人もオレと同じように興奮を隠しきれないでいる。

あっと言う間に5曲が終わった。

「ワアアアアアアアア」 「ユーーーーーーイ」 「キヤーーーーー
ーーーーッ」

物凄い大歓声である。

5曲とも、『オッチーズOccyzy』というバンドのコピーらしいが、オレは大して知らないバンドだったし、どれもが初めて聴いた曲だった。

でも、これからきくと、オレはOccyzyのファンになりそうだ。

ユイには、そんな魔力がある。

その後もアンコールが鳴り止まなかったが、夜9時と同時にユイはステージを下りた。

人だかりが群がってきたが、暗黙の了解でオレとオッキーと竜崎と宮さんが、ユイの通り道を確保。

まるで有名人を警護するボディガードだ。

「キヤー」「ユイ先輩サイン下さ〜い」「ユイ〜」

観客が一斉に押し寄せた。

「ゴメン。このまま外に連れてって・・・」

ユイが言う。

オレたちは、群がる観衆に睨みをきかせたり押しやったりして、ユイを体育館外まで連れ出した。

「ふう〜、アリガト」

ユイは大きく息を吐くと、その場に座り込む。

「やっぱり歌上手いなユイは・・・」

オツキーが感心しながらユイを褒めた。

「は？ あ、ゴメン、アタシ、頭真っ白で、自分が何やってたか覚えてない。あ〜っ、メツチャ緊張した〜！！・・・っていうか、怖かった〜！！」

情けない声を出したユイが、顔を赤らめながら恥ずかしそうに言った。

ええっ、マジ〜?!

オレたちは顔を見合わせた。

「全然そんな風には見えなかったっス」

竜崎が目をパチクリさせている。

「堂々としてたし、ステージ下りた後も気迫凄かったよ。まるで海外の大物スターをボディガードしてる気分だったよ」

宮さんも、ユイの本音が信じられないでいる。

「こんな事になるなら最初から出てれば良かったんじゃないの？ I k a r U、傷ついたんじゃないの？」

言うつもりはなかったが、オレはつい思った事を口に出してしまっ
た。。。

オレはなぜにI k a r Uなんぞをフォローしてんだ？

「うん。後で謝らなきゃ」

あれ？ オレの予想に反してユイが素直だ。。。

「別に謝る必要はないんじゃない？ だって、I k a r Uがユイをステージに呼んだんだし」

今度はユイをフォロー。

「でもね、今回だけは今後の活動が掛かっているから外したくないって言ってるんだ、Ikaruたち」

見事に外したな・・・っていうか、元々外すも何も、外すモン持つてねえくだろ、アイツら！！

体育館からは、ゾロゾロと人が出て来た。

結局あれでDo the byの演奏は終了し、今年の学園祭ライブも去年同様、ユイで締め括られたようだ。

時計も21時を回り、武蔵祭も閉幕の時間だ。

混雑のあまり今まで姿が見えなかった、朝露さんと弟と妹、そして佐倉も合流。

ユイの突然のサプライズのせいで、佐倉の存在をすっかり忘れちゃってたぜ。

今日一日、ほとんどユイに持って行かれた気がする・・・。

朝露さんの弟と妹の見送りも兼ね、皆で出入り口に向かっていると、屋台ゾーンが妙に騒がしいのに気が付いた。

「何か人だかりが出来てね？ 何だ？ 煙か？！」

モクモクと煙が出ている所がある。

火事か??!!!

一物の不安が過ぎるのは、オレたちの屋台付近からの煙だからか？

オレたちは野次馬の人ごみの中へ躊躇なく突入した。

人だかりをかき分け、目の前の光景を見て絶句した。

宮さんの焼きそば屋が……、燃えている……!!!

第185 エムペドクレス

「何じゃ、こりゃー！ーっ！！」

宮さんは人だかりや野次馬たちをかき分け、火の現場に辿り着く。

燃えているのは、ゴミだ。

宮さんが「そのままでもいいよ」って言ったゴミが燃えている。

宮さんのクラスの生徒と思われる人たちが何とか消そうとしているが、火の手がすでに屋台骨まで達していて、炎が強くて近づけないようだが、宮さんは躊躇ためらわずに炎の中に入って行くこととしている。

「プロパンガスがあるから危ないっす！ 爆発するっすよ！！」

竜崎に羽交い絞めにされる宮さん。

足とかで消すには炎が強すぎるし、竜崎が言うようにプロパンガスが爆発する恐れだってある。

炎の中に入るのは危険だぞ、宮さん！

「119番したのか？！」

宮さんが叫ぶ。

「先公が今、消火器持ってきてる」

3年の生徒が慌てて答えた。

「消防車は呼んだのかってオレは聞いてんだよ!!」

宮さんの青筋がキレそうだ。

その時、生徒指導の連中が現れ出した。

リッキーと大和、竹中と内藤だ。

「宮、またオマエの仕業か！ 問題ばかり起こしやがって!! さつきは体育館でライブに乱入したって話じゃないか」

竹刀を持ったリッキーが、偉そうにほざく。

早くもそんな情報まで耳に入れるとは、さすが生徒指導のボスだけあるぜ……。

……って、そんな犯人探しより、消火が先だろクソ先公！ どうせ来るなら消火器くらい持って来いってんだ!!

「アア〜？ 何だとコラ〜!!」

まるでリッキーに襲い掛かる勢いの宮さんを、竜崎が必死に羽交い

絞めでブレーキを掛ける。

「宮さんは何もしてねえよ。屋台の中だって、宮さんは後片付け終わった後、何度も火の元は確認したんだ。勝手な判断で宮さんに濡れ衣着せんじゃねえよ」

ここぞとばかり、オレはリックキーに言ってやった。

「何だキサマー！！」

リックキー以上に隣の大和がいきり立つ。

・・・と、同時に、炎が急に強く上がる。

ブオッ

「キヤー！」「うわア！」「おわあああ」

周りの野次馬たちは、堪らず後ずさりした。

オマケに生徒指導の先公共もたじろいだ。

「消防車はまだか?!」

焦りを見せる宮さん。

「消防車だと？ そんなモン呼ぶはずないだろ」

リックキーが耳を疑うような言葉を吐いた。

「何でだ、コノヤロ〜！」

宮さんがリッキーに掴み掛かろうとするが、竜崎が必死に制止する。

「世間体せけんていってモンがあるだろ。これしきで騒ぎを起こしてられるか？！ 消防車なんて呼んだら大問題だ！ 明日の朝刊に武蔵祭で火事・・・なんて記事が載ってみろ。常識でモノを考えろ・・・、世間のクズめ」

「・・・言わせておけば」

宮さんの目が血走る。

・・・と、その時！！

・・・水？！

オレの頭を突然かすめる、水のピクチャー。

そうだ、ウチの金魚掬いの・・・、水！！

あの水で、少しでも消火の手助けをするんだ。

「オツキー手伝え」

オレはオツキーの腕を掴むと、ナナメ向かいの2・5の出店ゾーン

へ走った。

・・・っ!!

そこにはオレを震撼させる風景が！

何と、金魚掬いの長水槽がゴロンと引っくり返っている。

生憎ウチのクラスの生徒は不在。

さらに、屋台の奥の、ストック用の金魚が入ってる水槽も倒れている。

金魚は土の上でピチピチ跳ね、苦しそうだ。

このうだる様な暑さの中では、このままだと死んでしまう！

「オツキー、そっち持って」

「どうすんだよ、ジオン」

「決まってるだろ、水を入れてくんだよ！ 校舎の玄関前に水道あるだろが!!」

「あつ、そうか！ コイツに水汲んで、宮さんトコの火を消すんだな？」

「宮さんトコは先公が消火器取りに行ってるって言うてたし、これ

しきの水じゃ何の役にも立たねえし、生徒指導のボンクラ共も野次馬も、あんなに居るだろ。そうじゃねえ、金魚を水に戻すんだよ！」

「はあ？ 金魚お〜〜?? 諦めろってジオン、もうムリだ。それより、宮さんトコの火を消すのが先だろ」

「ヘタに炎に近づいて、万一プロパンガスが爆発したらオレたち死ぬぞ！ 消火器が来るって言うんだから、そっちに頼るしかねえだろ」

「でも、オレたちのクラスの災難より、断然、宮さんの方がデカイだろ？ ここは宮さんのクラスの方を心配すべきじゃ・・・」

「そっちは物だろ！ こっちは命だ！！」

オレたちは長水槽に水を汲み、急いで戻ると土の上に無残に横たわる、沢山の金魚を急ピッチで水槽に入れた。

いつの間にかユイや、朝露さんの弟と妹たちも加わり、皆で金魚を水槽に戻す作業に心血を注いだ。

「宮さんトコは？」

金魚を拾いながらユイに聞いた。

「さつき保健室のミノブさんたちが消火器を持ってきて、今、リッキーたちが消してる。ボヤで済みそう」

「そうか・・・、良かった」

何とか金魚たちを全部戻せたが、どれも虫の息で、横になって浮いてくるのがほとんどだ。

クルクル回る金魚、裏返しになる金魚、エラがどんどん赤くなる金魚・・・、見ていられない！

・・・と、その時！！

「竜崎、大変だ～～～！ 早く教室に戻ってくれ～～～！！」

生物部魚類班と書かれた腕章を付けた生徒が血相を変えて走ってきた。

慌てて教室へ向かう竜崎。

一体、何だっただけ？！

第186話 兇変の武蔵祭

「オイ、生物部魚類班！ 長水槽が引っくり返ってて、金魚が土の上で跳ねてたんだ。今、水汲んできたばっかなんだけど、コイツら蘇生させる方法ねえのか？！」

「蘇生？・・・ですか？！ ム、ムリでしょ！」

竜崎を呼びに来た魚類班を掴まえて、オレは金魚の蘇生法を求めたが、男子生徒は首を大きく横に振る。

「ムリだと？ やってみなきゃ分かんねえさだろ！！」

「やめるよジョン、何ムキになってんだよ」

「てめえは引っ込んでろ、オツキー！」

「何だとさ！！」

生意気にもオツキーは、オレの前に立ち塞がった。

A型は早とちりだ。

オレは別に怒ってるんじゃないさねえ、急いでるんだよ！ 今は一刻を争うんだ。

「オレにはコイツらを最後まで面倒みる責任があるんだよ。それが河に放流しようと、金魚を捨てようとした昨日までのアホなオレの、せめてもの罪滅ぼしなんだ!」

「どんだけキズついてんだよ、ジオン」

「ウルセー」

オレにも分かんねえ〜んだ。

どうしてなのか分かんねえ〜けど、このままにはしてられねえ〜んだ。

確かに宮さんのトコとか竜崎のトコとか気になるけど、オレは目の前の命を、どうにか救いてえ〜んだ。

だってよく、今ここでオレがやらなきゃ、死ぬぞコイツら。

宮さんの所のボヤが一段落したようで、今度はウチらが揉めると見て、野次馬たちはこっちに集まり出した。

「見せモンじゃねえ〜んだよ!・・・ったく」

「ジオン先輩! 私、竜崎君のトコが心配なんで、行ってきます! 宗滴、涙、お姉ちゃん用事あるから、ちゃんと寄り道しないで帰るのよ!」

弟の宗滴と妹の涙は大きく頷くと、朝露さんはスカートひらり翻し、

校舎に向かって走って行った。

「オイ、生物部魚類班！ 何か方法ねえのかよ！！」

「カルキ抜きはしましたか？」

「どくやるんだよ！」

「カルキ抜き剤、持ってきます！！」

魚類班の男子生徒は、逃げるタイミングを見計らっていたかのように、猛ダッシュでその場から走り去った。

どうすりゃいい？ 何か必ず方法はあるはずだ……。

落ち着け、落ち着け、考えろ、必ず何かあるはずだ……、必ず。

……フナは池？ 河？ 魚はそもそも海の生き物？ 源は……、
水と……、塩？！

そうだ！ 塩だっ！！

オレは宮さんの下へ走った。

現場は消火器の白い粉が散乱しているものの、ゴミと少しの屋台骨が燃えただけで、運良く惨事には至らなかったようだ。

うちらが辿り着いた時、ちょうど炎が高く上がった所だったようで、一時はどうなるのか先行きが不安だったが、ボヤで済んで良かったマジで。

生徒指導の教師たちは去り、現場では瓦礫を片付ける生徒たちが数名と、暗く沈んだ宮さんが一人しゃがんで思いつめている。

「宮さん、塩、ありますか？」

燃え跡を難しい顔で見つめていた宮さんは、我に返ったように澄ました顔で、業務用の塩袋をくれた。

ユイたちには猛反対されたが、オレはその塩を、まるごと全部水槽にぶち込んだ。

しばらくすると・・・、ユラユラと浮いていた金魚たちが息を吹き返してきた。

「マジかよ……………」

オッキーも絶句している。

「スツゴ~~~~い」

今まで心配そうに離れた所で様子を見ていた佐倉が、オレを尊敬するような眼差しで感心している。

・・・へへへ、どんなモンだい。

「よしっ、その意気だ！ マクロ、ポニヨ、頑張れ！！ ミドリガメのトンちゃんもガンバレ〜」

「黒いデメキンはみんなマクロで赤いのはポニヨで、カメはトンちゃんなワケ？」

ユイが眉をハの字にして苦笑いしている。

「ガンバレ、ガンバレ、マ〜ク〜ロ！」

宗滴が声援をくれた。

「ガンバレ、ポニヨ〜！」

涙もポニヨの蘇生を手を合わせて願う。

森羅万象の神よ、無邪気な子供たちの願いを叶えてやってくれ・・・、金魚たちを、生き返らせてくれ・・・。

そんな願いが通じたのか、間もなく水槽の金魚たちは、全匹蘇生に成功した。

「こ、こんなことって・・・、あるんですね〜」

カルキ抜き剤を持って帰ってきた魚類班が、涙を浮かべながら笑みを溢した。

パチ パチ パチ パチ

ライブ帰りの一般客や、噂を聞きつけて集まった武蔵の生徒らが、一斉に拍手をくれた。

いや、それほどでも。

「ねえ、生物部魚類班、これからどうすればいいの？」

ついに彼は、ユイにまで生物部魚類班と呼ばれ出した。

否定しないところを見ると、彼もそのネーミングを気に入ってるのだろうか？

「このままにしておいて下さい。間もなく仲間が来るので、生物部まで運ばせますから」

「運ばせる？ 随分偉そうだな」

「すみません、これでも一応、生物部の部長やっていますから」

「マジでかつ?!」

そうか、部長か・・・ま、いいや。

「ウチで責任持って、ちゃんと面倒見るんで安心して下さい。せっかくジオンさんやユイさんが助けた命、絶対無駄にはしませんから」

魚類班の部長は胸を張った。

ユイだけならまだしも、オレの名まで、こんな見ず知らずのヤツが知ってるなんて……。

「頼んだわよ」

「は、はい」

ユイに念を押されちゃく、部長も責任重大だな。

「オツキー、宗滴と涙を見送つといってくれ。オレは竜崎の所に行つてくる」

「ラジャー」

オレは竜崎のクラスに走った。

後ろからユイと佐倉も着いて来る。

竜崎のクラスの前の廊下には、沢山の人だけが出て来た。

人波をかき分けて教室を覗くと、予想以上の光景が広がっていた。

……一体、誰がこんな事を……！！

第187話 推理

教室中、水びだし。

水槽が2つ、床に落下していて、割れたガラスの破片が散乱していた。

それを沢山の生徒が手分けして片付けをしている。

「竜崎……」

「ジオンさん、やられたっす。これは、明らかに故意っすよね」

「どのくらいやられたんだ？」

「熱帯魚、約50匹っす」

何てこった……。

宮さんとオレのクラスに続き、竜崎まで……。

うちら3人のクラスの災難は、単なる偶然？ それとも、オレたちに恨みのあるヤツの犯行？

・・・考えるまでもなく、後者だなコリヤ。

「ねえ魚類班、状況を説明してよ」

ウロついていた生物部魚類班の男子生徒を掴まえて、ユイが訊いた。

「魚類班2人で協力して、水槽を抱えて生物部の教室に運んでたんです。何往復かしましたけど、その間、教室には誰も居ませんでした」

フム、フム・・・、ま、皆・・・、1年は特にそうだが、こぞつてユイを見に学園祭ライブに足を運んでたに違いない。

「オレらが水槽を抱えて教室を出て、生物部の教室にその水槽を置いて戻ってきたら、このありさまでしたから」

「それが残りの水槽が、あと2個って時だったわけね」

ユイが魚類班に確認する。

「そうです」

「ここから、その生物部の教室までの時間ってどのくらいかかるの？」

おっ、大事なトコだよな、そこ。

「5分ってトコですかね？」

「片道？」

「はい」

・・・つつし事は、往復10分。

つまり、この教室が空室になった時間は約10分・・・か。

「この水槽が倒された時間は何時くらいだと思っ？」

「21時くらいでしょうね・・・」

「アタシが歌い終わった頃ね・・・」

魚類班が手を滑らせて水槽を落としたって事も考えられるが、だったら即、熱帯魚の保護に当たるよな。

やはり犯人は、オレのクラスの金魚掬いの長水槽を引っくり返したヤツと同一犯人と見ていいのだろうか？ 犯人は、魚の命などお構いなしの、傍若無人で残虐非道の人でなしだ。

竜崎のクラスの後片付けも終わり、オレたちは皆で、宮さんの焼きそば屋の跡地へ向かった。

時計の針は23時を回り、校舎にはオレたち以外、誰もいない・・・と、思われる。

焼け焦げた二オイが残る瓦礫の山に腰掛けた宮さんは、校内だとい
うのに堂々とタバコを銜くわえている。

月明かりに照らされた屋台ゾーンの一角に、オレとユイ、竜崎と宮
さん、オツキーと佐倉、そして朝露さんの7人が集った。

「宮さん、聞きました？ 竜崎のクラスの水槽が2つも割られて
ました」

「……どうでも、いゝよ、もう」

宮さんが落ち込んでる？ ……っていうか、怒ってる？

「亀ちゃんトコの金魚、全部生き返ったって？ さすがだね……」

力なく劣ひげいなの言葉をくれる宮さんが痛々しい。

「悪いのは宮さんじゃないよ。それは、ここにいる皆が保証する」

元氣のない宮さんを見かねたユイが、そう言い切った。

オレも同意見だ。

宮さんはライブに行く前、しっかり火の元を確認していたし、発火
元はゴミらしいが、自然発火するような物がゴミに含まれていたと
は考えにくい。

自然発火する物って言ったら・・・、アレしかないよな？

「宮さん、天カスとかって使ってたっけ？」

「いや、使ってない。最初から、ゴミにも注意してたんだ。実は、あんまり言いたくないんだけど、オレのじいさん昔、火事やってんだ。だからオレ、火種は絶対消すし、火を扱う時は十分注意するんだ、いつも・・・」

「言いたくないのに、なぜ言うんスか？」

竜崎が宮さんにツッコんだ。

「言う事によって自分への戒めいましにもなるし、聞いた皆もこれから火事には注意しようって思うだろ？」

竜崎は黙って頷く。

宮さんは、事細かくおじいさんの火事の話を見せてくれた。

話を聞いた皆は、感慨深い表情で俯うつむいた。

「ゴメンな、暗い話しちまって・・・」

いや、恐い話は本当はイヤだけど、これからオレたちは前車の轍てっを踏まないように注意しようって思えるわけだし。

「宮さんを疑ってたわけじゃないっすけど、これでハッキリしたっすね。放火っすよ、これは・・・」

竜崎が腕を組みながら言った。

「あの〜」

朝露さんが、バツが悪そうな声を出す。

「どうした、雫」

「ゴメンね、竜崎君、誤解しないで聞いてね？ あのね、竜崎君のクラスの事件んだけど、犯人は竜崎君なんじゃないかって言うてる人いたから、それはないってフォローしたけど、誤解してるコもいるかも・・・」

「は〜あ？ どうしてオレなの？」

「魚類班と、よく揉めてたでしょ？」

「それは単なる話し合い。別に喧嘩してたワケじゃない」

「竜崎君が腹癒せて水槽蹴ったって・・・」

「誰が言ってた？」

「・・・柴君」

その瞬間竜崎は、「聞いたっすか？ ジオンさん！」とでも言いたげな表情でオレを見た。

「犯人は柴じゃないんすか？ アイツ、オレに恨みがあるっばいし」

その時、オツキーがとんでもない事を語り出した。

第188話 B型は四字熟語が好きってホント？

「オレも聞いたぞ。竜崎の自作自演じゃないかって」

竜崎の狂言だと？ マジかよオツキー。

「理由は？」

竜崎は困り果てた表情でオツキーを見た。

「クラスをあれだけ盛り上げて、英雄ヒーローを演じた上で、今度は悲劇を演じる。それによって女の子のハートを掴むんだ……って、ね」

「はい？ 何なんスかそれ。誰が言ってたんスか」

「多分、かつて入学当初、竜崎と揉めたヤツとかだ。そいつらはきつと、喧嘩じゃ勝てないから、何かこういうタイミングって言うの？ チャンスをずつとつかうかと思ってたんだと思うんだ。あつ、もちろんオレもさ、竜崎が自作自演ほごを施したなんて思っていないからな」

ふん、オツキーらしい、鋭い分析だなあ。

「沖田君の話を聞く分だと、もしかしたら犯人は、竜崎君を恨んでた人って事になるよね……？」

佐倉も口を開いた。

「オレだけじゃなく、宮さんやジオンさんの事もね……。オレは、柴が犯人だと思うっすけど、ジオンさん、どう思うっすか？」

ホラ、来た、オレに聞く。

絶対オレに聞くと聞いたよ、竜崎は。

……しよ〜がねえ〜なあ〜。

「まだ証拠が無いから断定できない」

「また柴の味方っすか？ ジオンさん、いい加減アイツの肩持つのやめた方がいいっすよ。ジオンさんはアイツの良い所しか見てないから分からないんす。アイツがどんなヤツなのかを知らないからそんな事が言えるんす」

いつになく熱くなってるナ〜。

ま、ムリもないが、いつものクールはどうした竜崎。

「感情が入ると冷静な分析は出来ないぜ」

「……オレは冷静に話してるつもりっす」

「分かってるって。ちなみにオレは、常にオマエの味方だ竜崎。でも、残念ながらオマエの分析は間違っている。なぜなら柴は、例の事犯が行われたと推定される時間にライブを観ていたからだ」

「……………」

「ユイと一緒に体育館から出た後、ユイがしゃがんだろ？　そんな時、柴たちが体育館から出て来たのを見たんだ」

柴の隣にタカノブがいたから、オレはすぐに目を逸らしたし、気にも留めなかったけど……………」

「ゴメンね竜崎君、私も竜崎君を疑ってるワケじゃないんだからね。ただ、そういう風に言ってる人もいるって事」

朝露さんが弁明する。

「じゃ〜、ど〜してわざわざ言うの」

「後から知るより……………」

何か竜崎もイライラしてきてるし、朝露さんも困ってるし……………、しゃ〜ねえ〜なあ〜、オレの出番か……………」

「朝露さんもオツキーも、ど〜してそんな事を言うかっていうと、さつき宮さんの火事の話聞いた後、皆が宮さんが火種を残すワケないって確信できた時と同じ理屈でさ、みんな竜崎が絶対犯人じゃないって最初から信じてるワケ。だからそれを強調する為に、そ〜いう話を出してるんだし、犯人を推測から引き出すには、朝露さんもオツキーも、知ってる事実を隠しとくワケにはいかなかったんだ」

「……………もう、いいっすよ。スミマセンでした」

竜崎、謝っちゃったりしてるけど、内心ムカついてるゾ。

いつそ柴が犯人であってほしかった所だろ〜けど。

やりきれない思い、行き場の無い怒り、O型は感情を押し殺すのが上手いから、かなりのストレスになるだろ〜な・・・。

「今ここにいるオレ、ユイ、竜崎、宮さん、オツキー、佐倉、朝露さん、この7人は全員シロ。これだけは揺るがない事実だ。全員犯行が行われたと推定する時刻に体育館にいたというアリバイがある」

オレの言葉に全員頷く。

さて、ここからが推理だ・・・。

「犯行は突発的犯行と、計画的犯行の2つに分かれるんだけど、オレが推測するに、突発的なんじゃないかと・・・」

「ど〜してそ〜思うのよ？」

ユイが問う。

「緻密ちみつさがねえ〜だろ、犯行に。計画的だったらさ、もっと犯行がバレないような手口とかしねえ〜？ ピアノ線とかで水槽が決まった時刻に倒れるようにしたり・・・」

「名探偵モノじゃあるまいし、どんな設定よ」

「でも、緻密さはないかもしれないっすけど、満更でもないっすよ。だって、オレのクラスと宮さんのクラスとジオンさんのクラスの出し物、同時刻に3箇所いっぺんに破壊してるワケっすから」

竜崎がオレの推測をバツサリ切った。

「……って事は、犯人は単独じゃなくて、複数犯……??」

血の気がひいた顔で、オツキーが声を震わせた。

今まで犯人は、単独だとばかり思っていたが、複数も十分ありうる……。

「オレはとっくに複数だと思ってたよ」

宮さんが沈黙を破った。

「もしや宮さん、犯人を特定できたんですか？」

「あんまり言いたくないが、オレは野牛との全面戦争時、あるいは全面戦争後、武蔵に恨みがあるヤツらの犯行だと思う。オレらへの復讐……、報復……」

「でも今日、野牛の長須さんとか仲村さんとか来てたでしょ？ あれは武蔵と友好関係が復活した証拠だと思いますよ。もし、復讐目当てなら、そんなチンケな事しますかねえ？ あの人たち……」

「もちろん、あの2人はやらない。オレの所の火事は、放火。オレ

がまとめたゴミに、誰かが火をつけたんだ」

オレはガスボンベに目をやった。

宮さんが放火と断言する意味が分かった。

オレも宮さんが何度も元栓をチェックしていたのは知っていた。

「もしや……？」

「開いてた……」

「……ここ、言葉もない！！」

犯人は、知っててやってるのか？ だとしたら、鬼畜だ！

ガスが万一漏れて爆発したら、破壊力のある爆風が、鉄筋コンクリートの建築物でさえ粉々にするんだぞ！！

「……宮さんは、誰がやったと思うの？」

愕然がくぜんとしているオレの代わりに、ユイが聞いた。

「野牛退学組」

「BARカシオンに来てたヤツら？ それはないんじゃない？」

ユイ同様、オレもそれは考えにくい。

一応その路線もなくはないが、いくら全面戦争時に失態をかましたとはいえ、あれだけの死闘を繰り広げたりチャードが、それほどの恨みを晴らしにくるとは考えにくいな。

それに、リチャードと一緒にいた退学組の2人もさく、学園祭の最中にこっそり忍び込んでさく、コソコソと恨み晴らすか？ 水槽倒したり、放火したり、何か違うんだよ、何か……。

「ジオンはどう思う？」

ユイが、今度はオレにふってきた。

皆、時計を気にしてるし、そろそろ帰る時間だな。

オレに締め括れっか？

「オレも色々考えてんだよ。竜崎が柴、宮さんが野牛退学組とかを疑う気持ちは分かるさ。オレも真っ先に芒の顔が思い浮かんだし。でも、名前や顔が売れてるヤンキーたちほど、行動は制限されると思う。人目のつく学園祭に、オレのトコだけならまだしも、竜崎のクラスや、天下の総番長、宮大地の屋台に火をつけるだなんて、相当な肝っ玉の持ち主だぞ?!」

「……確かに」

ユイは大きく頷いた。

「長山とか、安藤って路線も考えたんだけど……」

オレは安藤の名前を出したのち、ユイの表情が気になったが、それほど反応はなかったのでホツとした。

安藤がユイにフラれた腹癒せって路線もなくてはなし……。

「それはなしだろ」

オツキーが自信たっぷりにつづ。

「ま、アイツらはオレのクラスはともかく、宮さんのクラスに手を出すほどの勇氣はない」

オレは、そう断言した。

長山や安藤、その他、タカノブや貴船、芒って路線も考えにくい。

「ねえジオン君、全然違う人たちが犯人って事はないかな？ 例えは、金魚掬いを倒したのは、隣のクラスの人たちで、宮さんの焼きそば屋に火をつけたのは他校の不良たちで、竜崎君の水族館を壊したのは、1年の不良たち……とか」

佐倉が一生懸命考えたであろう、佐倉なりの推察を教えてください……が、それはなしだろ、それは……。

「それはなしじゃねえか？」

オレが佐倉への返答に困っているのを察知して、オツキーが代わりに答えてくれた。

さすがA型、ナイスフロロ！

佐倉はたまに、A型らしからぬ、天然ボケ？に走る時がある。

そこがまた魅力的でもあり……つつつか、どくくしてそんなに可愛いのは、佐倉くくく！！

佐倉はオツキーにツッコまれ、恥ずかしそうに顔を赤らめて下を向いている。

……あつ、あくび？ 何だ、照れ隠しじゃなく、あくびがしたかったから下を向いたのね……。

そろそろ皆、寝る時間だね。

「オレのトコの金魚は運良く助かったけど、竜崎んトコの熱帯魚の事を思うと……」

「慮外千万りよがいせんぼんっス」

竜崎が声を絞り出すように言った。

「……え？」

「思いがけず、酷い目に遭ったって意味よ」

ユイが慮外千万の意味を教えてくれた。

竜崎のヤツ、O型のクセにB型並みに四字熟語が好きだからなあ。

「でも、あれで済んで良かった・・・って思うしかないんじゃないかな。死んじまったモンは帰って来ない。生きてるモンに目を向けるしかねえよ。だったらこれからどうするかって事だよ。助かった金魚や熱帯魚が、死んでったヤツらより長生きできるようにさ、オレたちも祈ろうよ」

オレは素直な気持ちを率直に語った。

「亀ちゃんの起死回生きしかいせいはホント素晴らしいと思うよ。でも、オレは自分のトコの事を思うと、当分、喜色満面きしよくまんめんにはなれない。でも、こうして皆で談義できるだけ、オレは幸せだと思うよ。和衷共済わちゅうきょうじ、こんな素晴らしい事はない」

宮さん竜崎に対抗してんのか？　ここぞとばかり四字熟語を出してきた！

「皆で心を合わせて助け合っつて意味よ」

聞いてもいねえのに！　B型のユイ、コイツも四字熟語にウルサイのか？　やけに詳しい。

オレが疎いうとのか？！

そんなこんなで、最後はオレが締め括るのかと思いきや、宮さんが締め括った。

「面と向かって正面から来ない敵、見えねえ敵ってのは生まれて初めてで、この足りねえ頭ではどうしていいのか分かんねえも

んで、正直、今でも頭の中はパニックってる。悔しくてしょ〜がねえ〜けど、犯人が出てこない以上、オレはどうしようもねえ〜。今までのオレだったら、どんな手を使ってでも犯人を捕まえようって思ったし、もしかしたら皆殺ししてたかもしれない。でも、皆がいるから、オレは冷静でいられるんだよ。オレは大將だから、大將は大將らしく、デンと構えてようってね。そのうち、奴さんやつこも尻尾しっぽ出さだろつから、そんな時八つ裂きにしてやるよ」

「宮さんに先越されない様に、犯人捕まえたらずぐに警察に突き出すわよ。そうしないと、この人犯人をホントに八つ裂きにするから」

「ガツハツハツハ、冗談だよユイちゃん」

「誰も信じてないっス」

「はっはっはっはっは」「あはははは」「わははははははは」「はははははははは」

一番落ち込んだ宮さんだったが、最後は皆に元気をくれた。

和衷共済。

確かに、こんな時こそ、皆で心を合わせて助け合っっていけたら素晴らしいと思う。

野牛との全面戦争時にも増してオレたちは、強い絆で結ばれた気がした。

オレはふと、時間を見ようとケータイを取り出した。

……はあ?!

な、何だ……、この着信の数は……。

20回以上の着信履歴が残っている。

自宅からと、妹の詩乃舞^{しのぶ}からだ。

この回数、キナ臭いな……。

そういえば、ライブに集中しようと思ってドライブモードにしていたんだ。

マナーモードと違って、バイブにもならねえもんだから、全然気が付かなかった……ぜ。

「あつ、もしもし、ゴメン。何? メッチャ着信入ってたけど……」

オレはすぐに詩乃舞のケータイに電話をした。

『あつ、お兄ちゃん? あ、あのね……、ビックリしないで聞いてね?』

ホラ、来た。

どうせ、よからぬ事だと思ったよ。

「何だよ。オレはよっぽどじゃねえ〜とビックリしねえ〜ぞ。何だ？ 宝クジの1等でも当たったか?!」

『お兄ちゃんの友達の子供が……、テル君が……、交通事故を起こして……、今、危篤状態だつて……』

第189話 金魚救い

テルが交通事故を起こして危篤だと？！

電話を切った後も、にわかに信じられないでいた。

「どうしたジオン、何かあったのか？」

オツキーがいち早く察してくる。

「顔色が悪いよジオン君」

佐倉が気遣う。

「あつ、ウン、別に・・・、大した事じゃねえよ・・・」

もう0時近いし、ここは皆解散した方がいいよな？ どうせテルはタフだから大丈夫だ、死にはしねえよ。だから、お見舞いは明日でいいよな？

明日の終業式が終わったら、オレ一人でお見舞いに行つて、状況を確認してからオツキーに言おう。

ユイも佐倉も、テルとはそんなに仲良かったわけじゃねえよ、皆でお見舞いなんか行つたらテルも気遣うだろうしな。

「明日は終業式だし、あさってから夏休みだし、今日はもう遅いから、この辺で……」

オレはいたって冷静に皆にそう言ったつもりだが、皆は何を勘違いしているのか分からないが、いつころにその場から動こうとしない。

……そういえば今日の夕方頃、長須が来る途中、大通りの交差点で事故があったのを見たって言ってたよな？ バイクとトラックの正面衝突とか何とか……、もしかして、それが……？

宮さんだけに、こっそり聞いてみようかな……。

「宮さん、今日、長須さんがここに来る前に、そっちの方で事故を見たって言ってたの覚えてます？ もしかすると、オレのダチかもしれないんですよ」

オレは誰にも聞かれないように、こっそり宮さんに耳打ちした。

「……じゃあ、今確認してみっから」

確認？ 今から長須に電話すんの？ こんな時間に？ 宮さん、オレは別にそこまで求めてないんですけど……？！

「ジオン、ダチって誰の事だよ」

人の会話を盗み聞きしたオツキーが詰め寄る。

A型は神経質で心配性だし、事を大きくするからな・・・。

「みんなには内緒だぞ。こんな時間だし、心配させたくねえから」
デリケートな問題だけに、オレは小声でオツキーに注意を呼び掛けた。

「・・・はあ？ テルが危篤うううう？！」

近所の犬が吠えるほどの大声でオツキーが叫ぶ。

「言うなって言つたらう！！・・・つたく」

「テル君が危篤？ 何で？ え？！ 病院どこよ、この辺？ 早く行かなきゃ！！」

ユイが血相を変えた。

「いや~~~~~~~~っ！！」

佐倉が泣き崩れ、パニック状態だ。

ホラ、だから言っただろ！ 状況もロクに確認してねえのに、情報だけ先に流出させるところなるんだよ！！

「亀ちゃん、長須が見たバイクの男は、同じくらいか年上のようなカンジで、特徴はマジメそうなヤツだって」

「チャラチャラしてないですか？」

「・・・チャラチャラはしてないって」

「あ、ありがとうございます。あっ、くれぐれも長須さんに感謝を・
・・・こんな時間に申し訳ないと・・・」

長須が見たのはテルじゃないみたいだな・・・。

「ジオン、とりあえず病院に行こうよ」

「あ、ああ」

ユイに一応返事はしたものの、オレはそんなに乗り気がしない。

なぜだか分からないが、妙に脱力感がある。

「オレらも行っついていいっすか？」

竜崎だ。

「私も」

朝露さんまで。

「亀ちゃん、ダメって言われても、オレらは行くぞ」

宮さん。

「……じゃ、行きますか」

……とは言ったものの、何かめんどくさくね〜？ どうしてこんな時間にぞろぞろと皆で病院行かないきゃなんねえ〜んだよ。

竜崎、宮さん、朝露さんにいたっては、テルと面識ねえ〜んだぞ？
みんな迷惑じゃねえ〜のかよ！ それに、お見舞いつて手ぶらじや行けねえ〜だろ？ 金もかかるし、こんな眠いによ〜、あと数時間でまた登校時間だぜ？ ……ったく、めんどくせ〜。

オレは執拗しつようにテルに怒りを感じた。

皆に心配掛けさせやがって！！

テルが運ばれた病院は、大学医学部付属病院。

よりによって、またここかよ！ どうしてオマエが学校のすぐ近くに救急車で運ばれないきゃなんねえ〜んだよ！！

何か細かいトコまでムカついてくる。

それじゃなくても今日は朝から色々あって、頭の整理も出来たモンじゃねえ〜つつ〜のに、今度はテルが危篤だ〜？ 笑わせんじゃねえ〜よ！！

コンビニで軽くお見舞い用の買い物をして、オレたちは病院に向かった。

夜中の病院に着くと、だだっ広い待合室の長椅子に一人、中年男性がポツンと座っていた。

それがテルの親父さんだという事に気が付くまで、それほど時間を要しなかった。

1年の時、テルの家で飲んで酔っ払った時とかに結構お世話になったので、オレはこの人には頭が上がらない。

「ジオン君、ゴメンね、わざわざ」

世間全体を敵に回したかのような鋭い目つきだったテルとは正反対で、恵比寿様のような優しい笑顔が特徴の、七三分けのマジメな営業マン。

テルは、そんな自分の親父を、「安月給のクセに自分を安売りしてペコペコマシーン」と言っただけではバカにしていたが、心の中ではそんな親父をイジめる世間や社会を敵に感じ、一般的に恵まれなかった環境が、テルの自立を早めたのかもしれない……。

「皆さん、こんな時間に、本当に申し訳ないね」

テルの親父さんは、オレたちに缶ジュースを配り、何度も「ゴメンね」を連発した。

オレたちは、そんな腰の低いテルの親父さんに案内され、テルの下に向かった。

暗く長い廊下の突き当たりの病室、そこは、手術後の集中治療室で、中に入るのを許されたのは、オレとオツキーの代表2人だけだった。オレたちはスモックを着せられ、ヘアキャップを渡された。

「オツキー、まるでパーマ屋で毛染めして、染まるの待ってる時のオバサンみてえくだぞ」

「オマエだって食品工場でパートやってるオバサンになってるぞ、ジオン」

何がそうさせるのか分からないが、オレとオツキーは緊迫した状況だというのに子供のように笑い合う。

エアシャワーを浴びると、オレたちは無菌室に入った。

こじんまりとした部屋には医療機器が所狭しと置かれ、妙に息苦しさを感じる。

部屋に一つだけあるベッドには、医療器具で雁字搦がんじがらめに固められたテルがいた。

・・・てっ、てめえ！ な、なぜ・・・、ど、どうして・・・、
どうしてチャラチャラしてねえ〜んだよ！

東京行って、何シャバくなつてんだよ！ 何で1年の時みてえくに
チャラチャラしてねえくくくんだよ！！

もつと尖つてたる？ 誰が見てもヤンキーだったじゃねえくかよ、
テル！

そ、それがどうして今は、そんなマジメそんな髪型で、しかも黒髪
だし、何シャバくなつてんだよく！！

長須が言つてたあの時の交通事故つて、やつぱてめえくかよ！ あ
の時オレに纏わり付いてた虫は、てめえくの差し金の虫の知らせつ
てか？ ……ざけんなよ！！

「ジオン君、来てくれたのね」

テルの母親だ。

「すみません、電話に出れなくて、遅くなりました」

「学園祭だったんでしょ？ 忙しいのに、ゴメンね、本当に」

…ゴメンねって何だよゴメンねって！ テルの親父さんといい、
お母さんといい、どうしてオレに謝るんだよ！ 来るのがこんなに
遅くなつたんだから、怒ればいいのに。

「意識がね、戻らないの。病院の先生はね、もう…、今晩
が山だろく…、って」

テルの母親は、大粒の涙を溢した。

端の方で、看護婦さんが2人、バツが悪そうにコソコソとファイルの整理をしている。

「テルー！ ジオンだ。オマエ、何やってんだよ！ こんな
トコで何やってんだよ！！」

オレはテルに向かって叫んだ。

何か他人事のように、本当はそんな気分ではなかったが、一応叫んでみた。

テレビドラマや映画とかで、こういうシーンがあると、登場人物は決まってそう叫ぶ。

「テル・・・」

オッキーは言葉を失ってるようだ。

テルは大きな呼吸器を口につけ、目を閉じ、眠っているようだったが、目から小さな涙が線となって流れるのが見えた。

事故の衝撃を物語るように、顔の肌に着着していた血が混じる。

赤い涙が痛々しい。

コイツ、意識が無いっていうけど、ホントは動けないだけなんじゃねえ〜のか？ オレたちが来たって、気付いてんじゃねえ〜のか？！重症のフリしやがって、何、甘えてんだよ……。

「テルー！！ どうしてオマエがここにいるんだよ！ オマエが来るのは明日の予定だったじゃねえ〜かよ！ オマエ、もしかして、学園祭ライブに出たかったのか？！ だったら残念だったな、どうせオマエが来ても歌えなかったぞ、きつと。大物ヴィジュアル系バンドが先約してたからな」

「ふふっ」

オツキーが鼻で笑った。

「テルー！！ 秋のライブに出るんだろ？ 練習すんだろ？ 待ってるからな！！ 早く治せよ、体。明日も来つから、早く良くなれよ！！」

オレのテルへのエールを聞いて、テルの母親はその場に泣き崩れた。

その姿を見て、オレはテルに腹が立った。

こんな夜中に……、母親に、こんなに心配掛けさせやがって……、親不孝モンめ！！

オレとオツキーは病室を出た。

「どうだった？」

ユイをはじめ、皆、心配そうな顔で集まってきた。

「大丈夫だよアイツは……。今は意識が無いけど、必ず目を覚ますよ」

オレは以前リッキーに、「金魚のフン」と言われた事がある……。

オレはテルとは対等のつもりだったが、周りからは、いつもテルに付いて歩いてる側近としか見られなかったようだ。

テルが金魚でオレがフン……。

オレはそんな自分にムカついたし、それ以上にテルに対してムカついた。

いつもいつもオレより前に出やがって、オレより上にのぼりやがって、オレより先に進みやがって……！！

……。だが、今日だけは、百歩譲って一歩引いてやる。

そして、オマエの為に祈ってやるぜ。

偶然か奇跡か、テルが手術を受けてた時間、「金魚掬い」でオレは……、金魚を救った。

。 50匹もの金魚を蘇生させたオレが言うんだ、間違いねえよ……

……テル、オマエは人一倍タフだから大丈夫だ。

「頑張れよ、テル」

第190話 忘れ形見

丑三つ時も過ぎ、皆が帰った後もオレは家には帰らなかった。

平たく言えば、帰りたくなかった。

布団にもぐつても眠れないだろうし、あと数時間で夜明けだし、どうせ終業式が終われば夏休みだ。

これから1ヶ月、気の済むまでたっぷり眠れる。

オレと同じ心境のヤツが、もう一人いる。

「なあジオン、腹減んねえ〜?」

「そうだな、コンビニでも行くか」

結局テルに対して何も出来ないオレたちは、テルの両親に会釈をして病院を出た。

明け方、オレたちはテルが事故を起こした現場に向かった。

現場には、事故の衝撃を物語るタイヤ痕と血痕、大破したバイクの破片が残っている。

「うわぁ〜、マジかよ。……………うぷっ」

蒼白顔のオッキーは、吐き気を堪えながら苦い顔をしている。

テルの親父さんが、現場検証を行った警察から聞いた情報によると、テルは突然横から飛び出してきた子猫を避けようとして反対車線にはみ出した際、トラックと正面衝突をしたという。

事故を目撃した歩行者談らしい。

何ともテルらしい転びっぷりだ。

オレたちは、そのままガードレールに腰掛け、朝までそこにいた。

缶コーヒーの空き缶が、いつの間にかタバコの吸殻でいっぱいになっていた。

早朝、オッキーが「早いけど学校に行くか?」と言い出したので、「勝手にしろ」と言いつつオレも学校に歩を進めた。

朝7時前だというのに、昨日の武蔵祭の後片付けの為、学校は沢山の生徒で溢れている。

今からそんなにマジメに生きて、これから長い人生ムダにすんなよオマエら……………と心の中で思いつつ、マジメに生きてりゃ報われるのか?……………誰に?!……………などと、常々考える、見えないものに

対する疑問モードに突入したりしながら、いつもの登校時間を迎えた。

やがて朝の清々しさも消え失せ茹^ったる様な暑さの中、超盛り上がりを見せた昨日の学園祭ライブがまるで遠い昔の事のようにさえ感じる体育館で、校長の話がやけに長く感じた終業式が、やっと終わった。

これで晴れて夏休みだ。

昨夜はゴタゴタあったもんで、ついつい元気を無くしちゃったが、心機一転、ここからはエンジン全開でハツラツ行くぞっ！

・・・そう、明るく思えたのも束の間だった。

「結局意識はまだ戻らないけど、山も越えたし。それに、アイツはそんなに軟^{やわ}じゃねえし」

オレは嘘偽り無く、そう思う。

第3公園で、ユイとオツキー、竜崎と宮さんの5人でテルの話をしている時・・・！！

）

トゥルルルル　トゥルルルル　トゥルルルル　トゥルルルル

トゥルルルル　ルルルル　ルルルルルル・・・

スルベシター・シタローンの『ボツキー』のテーマが、オレの胸に

刃物を突きつける。

「はい……」

『ジオン君のケータイでいいのよね？』

「はい、あ……、テルのお母さんですか？」

『……輝^{てる}が……』

死んだ。

亡くなった。

テルが、逝った。

オレの祈りが天に届かなかったのか？ それとも、天に願いを聞いてもらえなかったのか？

金魚のフンと呼ばれたオレは、金魚は救えても、テルは救えなかった……。

『着いたらケータイに電話するぜ』

……なんて言ってたクセに。

『バイクで来るんだろ？ 気を付けるよな』

そんなオレの気遣いの言葉を無視しやがって。

あのヤロオ、強引に天に、召されやがった……………。

誰よりも先に、逝きやがった！！

ユイや竜崎、宮さんまでが、オレを気遣い、優しく言葉を掛けてくれたが、思った以上にオレはサバサバしていた。

言うなれば、自分さえも他人に見えるほど冷静で、第三者的立場から物事を考え、状況を遠目で見ることが出来た。

警察医による死体検案が済み、テルの遺体は葬儀屋によって自宅に運ばれた。

その晩、テルの家で、通夜がしめやかに行われた。

続々とテルの中学時代の友人や、武蔵の生徒、ウチのクラスのヤツらが顔を出す。

「ジオン……、告別式は……、明後日らしいぜ」

半ば放心状態のオツキーが、萎しなびた声を出した。

「オツキー、少し眠れよ」

「・・・オマエに言われたく・・・、ねえし」

「ジオン君、本当に、今までありがとう・・・ね」

赤く目を腫らしたテルの母親が、忙しい中声を掛けてくれた。

テルの両親は、一人息子の死を悲しんでいる暇がないほど、親戚やら知人やらのもてなしに追われているようだ。

「あつ、こちらこそ」

気の毒過ぎて何て言っているのか分からないし、オレらなんかに時間を費やさず、少しでも体を休めてほしい。

「これ・・・ね、あの子が最後に残した遺品なの。あの子がジオン君にあげたかった物だと思うの。もらってくれる？」

何を言い出すかと思えば・・・、テルの形見つてか？

「え？ ギター??」

オツキーが高い声を出した。

それは、テルがあの時電話でオレにあげると言っていた、ギブソンのギターだった。

それと、CD・Rと・・・、ピック。

「この小さい三角のはね、あの子が亡くなる直前、手から滑り落ちたのよ。お医者さんも、それまでどこに隠し持ってたのか分からなかったって・・・」

能ある鷹は爪隠す・・・、それがアイツの口癖だったからな。

オレはピックを受け取ると、そいつを胸ポケットにしまった。

「ジオン、これって・・・」

オツキーがCD・Rを手を取った。

「おそらくアイツが作った曲だ。オツキー、オマエが持つとけ」

「あ・・・、ああ」

布団に横たわるテルは、すでに青く固まっていて、まるで人形のようにだ。

「まだヒゲが伸びてるみたいなんだ。さっきより生えてるし」

テルの親戚の方が言う。

ただ眠っているようなテルを見ながら、ろうそくの火に線香を近づ

けた。

いたって冷静な自分の思考とは裏腹に、オレの手が大きく震える。
さつきからそうだ。

線香の臭いを嗅ぐたび、空虚な心に突然やってくる激しい不安感。
息苦しくて、心臓が止まりそうなほど、胸が苦しくなる。

理屈では有り得ないのだが、オレもテルのように息の根が途絶えそ
うな錯覚を覚える。

オレは込み上げて来る命の不安感と、極度の疲れを必死に抑えた。

テルが住んでいた親戚のおばさんの話により、どうしてテルが予定
と違う行動をとったのかが明らかになった。

バイトが急遽、休みになったのだ。

『オマエらの学園祭の次の日か？ 夏休みの初日になるのかな？
おそらく夜までには着くとは思うんだ』

・・・などと言ってたくせに、アイツはバイトが休みになった途端、
すぐにこっちに向かった。

テルは買ったばかりの中古のバイクに乗って、高速を使わずにゆっ
くり来るって言ってたくせに……………。

なぜ急ぐ必要があった？

学園祭ライブに、出たかったのだろうか……？

出来立ての曲を、早く聴かせたかったのだろうか……？

オレたちに、すぐにでも会いに来たかったのだろうか……？

テルは、自分のベースと、オレにあげるギターを背負い、東京からバイクでこっちに来る途中、交通事故に遭った。

高速を下りた矢先、子猫を避ける為に反対車線に飛び出し、トラックと正面衝突。

きっと、高速感覚が残ったまま、スピードを落とさず一般道路を走ってたんだ……。

そしてテルは、大手術の甲斐も虚しく、意識を戻すことなく帰らぬ人となった。

楽器屋でバイトをしているテルが、オレらの夏休みに合わせて仕事を休み、1週間こっちに帰郷する予定だった。

滞在する1週間のうち、オレの家に2、3泊し、残りはオッキーの家に泊まる計画で……。

実家に顔くらい出せって言ってやったが、成功するまで親に顔向け出来ねえ〜だのとカッコつけていたテルは、無様な姿で上京して初めて帰郷をした。

変わり果てた姿で……。

どうして、どう〜してギターだけ生きてんだよ！

バイクも、オマエのベースもバラバラに、木っ端微塵に大破したつてのに、どうしてオレにあげようとしたギターだけ綺麗なんだよ！

オマエの体はボロボロなのに、どうしてギターには傷一つねえ〜んだよ！

どう〜して……。

第191話 親不孝者の挽歌

照りつける陽射しの中、テルの火葬が静寂さのうちに進められた。

テルの棺に釘を打たれる度、オレの胸にも鋭利なモノが突き刺さるような気がした。

やがて棺は固い扉の奥へと移され、しばらく待たされ、再び姿を現した時には、もう、生前の人としてのカタチはなく、火葬されたテルは白い骨と化していた。

そんな変わり果てたテルを見て、オレはトイレで2度、3度と吐いた。

すすり泣くいくつもの声、セミの声、はしゃぎ回る無邪気な子供たちの声。

オレとオツキーは無口のまま火葬場を後にし、テルの自宅の告別式に参列した。

お寺のお坊さんがお経を読む中、ユイ、佐倉、竜崎、宮さん、朝露さんの5人が黒い喪服で香典を供える姿が目に入った。

ユイと佐倉ならまだしも、竜崎や宮さん、朝露さんまで……。

アイツら、何で来んだよ、……まったく、金もつたいなくね？
会った事もねえ、ヤツの為に……。

……と、思ったりもするが、オツキーに「香典、いくら入れる？
奮発すると、まるで死を喜んでみたいで遺族に失礼だから、香
典は気張るなって言われてるだろ？ 相場は2千円くらいって聞い
てるけど……。」と聞かれた時オレは、「そうだな。2千円でいい
んじゃない？」と答えたが、実際は5万円包んだ。

本当は、その金は将来、テルの結婚式とか出産祝いとかに使いたか
つたのに……。

やがてお坊さんのお経が終わり、参列者がお酒を飲み始めた。

オレとオツキーも、ドサクサに紛れて当たり前のようにビールを飲
んだ。

タバコに火をつけた時、オツキーが素っ頓狂な声を出した。

「ジョーーン、アレーー、リッキーー!!!」

「何っ?!」

オレはすぐにタバコの火を消した。

リッキーは、こっちの存在に気付いていると思われるが、オレたち
の方を見ずにテルの両親と話をしている。

「完全にバレてるな、オレらがビール飲んでるの……」

「何ビビッてんだよオツキー」

「オ、オレは別に、ビビッてねえよ」

ハイハイ、見え見えの嘘つくなよ、心配性のA型のくせに。

リツキーもA型だ。

A型は妙に正義感が強く、目に見える悪を許さない。

アイツ、口うるせくから、来るよな……、こつちに。

ヘタすりゃオレら停学か？ 今更逃げるのも癪だし、来るなら来い
つてんだ！

オレはリツキーに挑発の意味も込め、消したタバコにもう一度火を
つけた。

隣のオツキーが青い顔をしていたが、オレたちの想像とは反対に、
リツキーはそのままこつちを見ずに立ち去っていった。

「何だよ、拍子抜けだな」

「ヒヤヒヤさせんなよジオン」

リツキーが去って間もなく、テルの親父さんがオレたちの所へビール瓶を持ってやってきた。

「ジオン君、沖田君、本当に、ありがとう」

「いやいや、こちらこそ、大変お世話になりました・・・」
相変わらず、かける言葉が見付からない。

「今、岡村先生と話をしてたんだけどね、あの先生も一人息子がいたんだね」

「え？ リッキーに息子?!」

オレとオツキーは顔を見合わせた。

「アイツ、独身じゃねえのかよ？ 隠し子か何かか?！」

「お父さんは、テルを東京に送り出す時、どんな想いだっただんですか?」

オツキーがテルの親父さんに、軽く質問した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

親父さんは、言葉を失っている。

「・・・・あつ、すみません、つ、つい」

オツキーが恥じ入る。

「・・・断腸の思いだったよ」

テルの親父さんは、大粒の涙を溢しながら答えた。

・・・断腸の思い？ オレはてつきり、勘当をこころむったのかと思
っていた。

「どこの世界に、自分より先に逝ってほしい親がいる？・・・あ
のバカ息子め・・・」

奥歯を噛み締める親父さんの横顔に悲愁を感じたオレは、その時は
じめて涙を溢した。

意識の中では湧いてくる悲しみはないのだが、水のような涙が勝手に
溢れてはこぼれた。

数時間後、テルの形見のギターを持ち、オレは席を立った。

「ジオン君、これで何か旨いものでも食べて」

そう言っつてテルの親父さんは、帰り際に封筒をくれた。

中には壹万円札が6枚も入っている。

「オツキー、いくら香典に入れた？」

「2千円だけど・・・」

「そうか」

オツキーが2千円。

オレが5万円。

・・・6万入ってたから、8千円プラス。

「で？ いくら入ってるんだ?!」

オツキーが封筒を覗き込む。

「6万円」

「返しに行こうぜ。入れ間違っただよ親父さん」

「オレ、5万包んだ」

「5万？ 何考えてんだよジョン」

オツキーに怒られた。

どうでもいゝ事なのだが、超ムカつく!

テルの親父さんに怒られるならまだしも、どうしてコイツに怒られなきゃなんねえの?!

「悪い〜〜か?! いくら包もつが、オレの勝手だろ!!」

「怒鳴るなよ……。誰もジオンがテルの死を喜んでるなんて思っ
てねえよ……。テルの親父さんからしたらオレらまだ子供なん
だよ。香典に5万も入ってりや返すよ、やっぱり。でも、普通に返
すのはアレだから、旨いもん食つてとかって言っただら？ だか
ら別にメシを6万分食えつて事じゃないと思うからさ、オマエ5万、
オレ2千円とりあえず貰つといて、残りは……。山分けとかさ・
・・。」

はあ？ 何だそれ?! オレを怒るんなら怒る、フォローすんなら
するでハッキリしろってんだ!

「……。つるせ〜! オレはテルが死んでせ〜せ〜してんだよ!!
あのクソヤロ〜がいなくなって、嬉しかったんだよ! だからお
祝いの意味も含めて高額包んだのよ〜、何で返ってくんだよ・
・、ちつきしよ〜」

全然嘘だが、口が勝手に動いてしまう。

もういいよ、オレを怒れ、オツキー。

オレを蔑め。なげめ

「分かったから、ジオン、泣くなって。オレも……。泣きたくな
るだろ?」

はあ? 泣いてねえって!!

「……泣いてねえよ！ オレはもともと汗っかきなんだよ！」

「目が赤いって……」

「寝不足なんだよ！」

「……テル〜〜、聞こえるか〜〜？ ジオンが泣いてるぞ〜〜」

何を言ってるんだコイツ！ オレはマジで泣いてねえよって……！

「黙れオツキー！ オレは泣いてねえよぞ、オレは」

「……フン、オレも、泣いてねえよ。これは、汗だ、汗」

オツキーが涙を堪えている。

「……バカヤロ〜、悲しくて泣きたかったのは自分かよ！」

「……ったく、世話の焼けるヤツだぜ。」

「オツキー、ムリすんなよ。何だその顔、にらめっこか？ オレを笑わせようたってムダだぞ。子供じゃあるまいし」

「……だつてよ〜、オレが悲しい顔したら、オマエも哀しくなるだろ？」

「……バカ、悲しい時は泣けよ。ムリすんなよ。仲間の前で・

・・・カッコつけんなよ」

「オレは、オレは、オレはテルみてえくに強くねえぞ?! こん
なオレを、オマエは仲間って・・・」

オツキーが子供のように泣きじゃくる。

当たり前だろ・・・、オツキーはオレの仲間だ!

「ほら、前見てみるって。オツキー、テルがいなくなっちまって淋
しいかもしんねえけど、それを埋めちまうくらいデカイ仲間たち
がいるだろ、オレらには・・・」

テルの家の玄関の外で、ユイ、竜崎、宮さんの3人が笑顔で迎えて
くれた。

佐倉と朝露さんは香典だけ供え、すぐに帰ったようだが、ユイと竜
崎と宮さんの3人は、帰らずに待ってたみたいだ。

「せっかく来たんなら、一緒に飲めば良かったんじゃない?」
「

「だって、私たち、そんなにテル君と親交があったわけじゃないし。
・・・っていうか、竜崎たちは会った事もないわけだしさ」

ユイが言う。

「・・・だったらどうして香典あげるの? ワケ分かんねえ?!」

それがオレの正直なトコロだ。

「だってアタシたち、仲間じゃん」

ユイに合わせて竜崎と宮さんが頷いた。

バカヤロウ！ 嬉しいこと言ってくれるじゃねえか！！

込み上げる涙をオレは必死に堪えた。

第192話 意志を継ぐもの

茜色の空、どこからともなく、カラスたちの夕焼けの歌が聞こえた。

テルの事故現場のガードレールに腰掛け、喪服のオレはギターを抱えた。

テル、オマエの夢はミュージシャンだったよな……。

意志を継ぐものがある限り、その夢は続く!!

オレは、生前テルが好きだった伝説のロックバンド『ボウズBOOWZ』の『かなしみジュリエット』をギターで弾いた。

切ないメロディーが流れる中、竜崎はタバコを、宮さんはビールを、ユイは花をガードレールに添えた。

「秋のライブに出る予定だったんだ、ホントは……」

オツキーが誰にともなく言った。

「へへ、テル君、そんな大胆な事、企画してたんだあ。見たかったなあ」

ユイは流れる雲を見上げ、笑顔を見せた。

「オレ、昔ベースやってたぞ。バンド資金を当時の仲間にかくられて、その話はおじゃんになったけど」

宮さんが昔、ベースをやってたって？ 初耳だ。

どっちかって言うと、ベースとかじゃなく、ドラムってイメージだけどな……。

「マジっスか？ 似合わないっスね。どっちかって言うと、シャシたベースなんかより、イメージのごついドラムって感じっスけど」

竜崎がオレの気持ちを代弁している。

「昔、樵せうのバイトやって買ったんだよ。今でも実家にあるぞ」

きこり？ 斧とかで、木を切る仕事？ ハイハイホ。って?!
し、渋いなあ。宮さん。

「や、やらないですか？ 一緒に、ね、やりましょつよ」

オツキーがここぞとばかり宮さんを勧誘している。

「いいよ」

即OKかよっ！

「竜ちゃんもやるつよ」

宮さんが竜崎にラブコールだ。

この流れ、もしかして……、もしかするぞ?!

「竜崎、ギターやんねえ? オレがリードするから、主に伴奏してもらえねえ?かな?！」

こうなりやオレも追随だ。

「別に拒む理由はないっすけど、オレは楽器なんて出来ないっすよ? やった事ないのに、秋のライブでしたっけ? 間に合います?！」

「大丈夫、オマエなら1ヶ月も練習すればプロ並に演奏できる! やるつぜ、一緒に」

「プロ並? ご冗談を……。ユイさん、全く経験ゼロの初心者が、1ヶ月やそこらでプロ並に出来るようになるもんスか?」

竜崎はユイに訊いた。

「うっっん、正直言って、厳しいんじゃない?」

「ホラ、ね。ジオンさん、オレを買ってくれる気持ちは有難いっすけど、所詮ムリな話っす」

「……じゃあ、プロ並とはいかなくても、所詮オレらはトウシロ

なんだし」

「オレはそれなりに出来るようにならなきゃ、絶対ステージには上がりにくいっス。この間の変なバンドみたいに、恥かきたくないっスから」

変なバンド？ Do the byの事？ それは、Do the byの事か……？！

志操^{しそつ}堅固^{けんこ}な竜崎の毒舌など耳に入らんとばかり、ユイは知らん顔で車の流れを見ている。

「竜崎、大丈夫だ、必ずやれる。人間の潜在能力^{あなじ}を侮^{あなじ}るな。秋まで数ヶ月あるんだし、物凄い特訓すれば……」

「特訓？」

「オレたちならプロにも勝るって！」

「どうやって特訓するんスか？」

「オツキーの家には楽器や機材が揃ってるんだよ。そこで、夏休みに血の滲むような特訓を……」

「みんな血を出してやってるっス。そんなに世の中甘くないっスよ」

「絶対出来るって言う強い意志が不可能を可能にするんだよ！」

「……」

とうとう竜崎はシラケ顔になってきた。

でも、ヴォーカル、ユイ……、ギター、オレと竜崎……、ベース、宮さん……、ドラム、オツキー……、このバンド、凄くね？
メツチャ、オーラ凄くね？

「じゃあ、できるヤツに教わりながらの特訓だったらどうだ？」

テルも、『夏休み、オツキーの家でみっちり教えてやつから、それから秋までたっぷり練習すれば、本番の前日に音合わせして、何とかイケると思うんだ』って言ってたし、教師がいるなら話は別だろ。

「それだったら、1ヶ月はアレだけど、秋までにならそれなりにイケるかもね。素質と本人にやる気があれば……、だけど」

ユイがそれらしい事を言う。

「それなら可能っしょ」

竜崎が答えた。

「じゃ、オレが竜ちゃんにベース教える」

え？ 宮さんが竜崎にベースを教えるって？

「オレがベースなら、宮さんは何やるんすか？」

「オツキー君にドラム教わる。オツキー君はバンドに直接参加できなくなるが、講師として、裏方として動いてもらって・・・、いいか？」

「は、はい、もちろん！喜んで！！」

ぶっちゃけ全面に出るのを好まないA型。

誰にも気付かれない縁の下の力持ちを好むのがA型だ。

「決まりじゃん。オツキーがオレらのバンドの総合マネージャー、監督として、作詞作曲、機材運びに営業、その他もろもろ。ヴォーカルがユイ、ギターがオレ、ベースが竜崎、ドラムが宮さん。コレ、マジで凄いぜ！もしかしたら、プロになれるかもしれねえぞぞぞ！！」

「あ、ああ。機材運びって言うのはジャマだけど、総合マネージャーは悪くない響きだ」

オツキーは子供のような喜びの笑顔だ。

「プロデューサーでもいいぞ」

「マジかよ、ナハハハ」

ついにオツキーは鼻の下を伸ばした。

「夢を語ってるトコロ悪いんだけど、アタシはやらないからね」

え？ 今、何とおっしゃいました？ 白鳥ユイさん！！

「なぜに？」

「興味ないから」

出たよ、B型、意地悪すんのな、こゝいう時。

「分かったよ。じゃゝさ、少しだけさ、オレらの特訓見てくれよ。ホラ、今年は猛暑だろ。オツキーの家はクーラーガンガンきいてて天国だぜ。オツキーの部屋でさ、クリームソーダーでも飲みながらさ、明日とか、軽く参加してくれよ」

「・・・分かったわよ。でも、見るだけだからね。それと、毎日2時からバイトだから」

バイト？ あゝ、神社のね。

でも、ユイをクリームソーダーで引き込む事に成功したぞ。

後はユイの事だから、いつの間にかフェードインしてるに違いない。

秋のライブまでに必ず、「ヴォーカル？ もゝ、しよゝがないわねゝ」って言わせてやるぞ。

その頃、竜崎は宮さんとオツキーの誘いに渋々？OKしていた。

「分かりましたよ、やりやゝいいんしよ、やりやゝ。その代わり、やるからには半端は許さないっスよ」

竜崎が鋭い眼光を光らせた。

頼もしいぞ、竜崎。

テルの後釜だ、そのくらいの気迫が欲しいぜ。

「あれ？ 何か楽しそうじゃない？」的にユイが羨ましうらやそうな表情を見せる。

ここでユイをおちよくったりしたら、完全に逃げられる。

ここは放っておくのがベスト。

夏休み、テル亡き後、オレはアイツの意志を継ぐべく、幸先の良いスタートをきった。

ひよんな事から竜崎と宮さんが正式なメンバーとして加わり、ユイも巻き込めそうな勢いだ。

北極星のような輝く光、目標を定めれば、人は必ずそこに向かうべく運命に導かれる。

目標さえ見失わなければ、必ず、いつか辿り着く。

・・・そうだよな？ テル！！！！

第193話 何より健康が大事でしょう？

・
・
・

みんなでテルの曲を聴き終えた。

率直な感想としては……、まだ論及は避けよう。

「ど、どうだった？」

オレはまず、皆に意見を求めた。

ユイは竜崎、宮さんの方を見ている。

竜崎はオツキーを見ている。

オツキーは……、手を口に当て、涙ぐみながら、「ジオン、テルが……、テルがやつちまったよ！ スゲーの作っちゃまったよ！
！ 何て言えばいいのかな？ 一言で言うなら、愛？ 愛だ。愛ってモンを感じる……！」と、声を震わせている。

「オウ！」

オレは大きく頷いた。

そうか、オマエも分かるか、オマエも感じたか、オツキー。

そう、アイツ、この曲に究極の愛を求め、そして愛を注ぎ込んだんだ！

愛つてのが何なのかハッキリとは分かんねえけど、何となく感じるんだよな・・・、愛ってヤツを。

オレとユイと竜崎と宮さんの4人はオツキーの家に集い、バンド結成、立ち上げ、今後の活動についての会合も兼ね、告別式の次の日から練習を始めた。

テルが命懸けで守ったCD-Rには、テルが完成させた曲が1曲だけ入っていた。

歌こそ入ってないが、曲を聴いただけで溢れるくらいの『愛』を感じた。

「ユイたちはどう思う？」というオレの問いに、「そうね、いいんじゃない？」と、ユイは好反応。

「PCで作ったのか？ 凄い才能持ってたんだなあ、テル君は」
宮さんが旨そうなニオイのする淹れたてのコーヒーを飲みながら言った。

「そうなんですよ。アイツ、自分で作詞作曲してギター片手に歌唄って、本気でプロ目指してましたから」

「コレ、やるんスか？」

腕を組んだ竜崎が難しい顔で、曲を流したコンポを睨む。

「本当はテルと、この部屋で、この曲を編集して一緒に曲を作る予定だったんだ。そして練習して……。なあ、オツキー、今の時代さ、この音源から簡単にタブ譜（具体的な演奏内容を詳細に示した譜面）とか作れるんだろ？」

「いや、音楽CDを流すとタブ譜を作成するPCソフトはないけど、コード譜（曲のコード進行を示す譜面）作成ソフトなら、ある」

「作っといてくれ」

「もちろんだ。でも、わざわざ譜面見て正確に弾かなくてもさ、アレンジでもOKだと思うぞ。耳コピでいけねえか？」

オツキーが訊いてきた。

「……一応、見てみたいんだ」

完璧にやりたいんだ、コレだけは。

竜崎のセリフじゃねえが、半端はしたくねえ！

「じゃっ、アタシ、そろそろ行くね。うわっ、外、暑そ」

もう2時？ ユイのバイトの時間だ。

「また明日も来るんだろ？ 練習見に」

「え〜？ でもアタシ、カンケ〜ないって言うか、いらんくない？」

「いらんないワケねえ〜だろ！ オマエはこのむさ苦しい男たちに安らぎを与える一輪の花なんだぞ。オマエがいるだけでオレたちは・・・輝く！！ なっ、みんな」

「オ、オウよ」

オッキーがカクカクと上下に首を振る。

竜崎はさっそく宮さんにベースの弾き方を習っていて、こっちの会話は聞いちゃいねえ〜。

「・・・つたく、どの口が言うのよ。アタシだって、そんなヒマ人じゃないんだからね」

嘘つけ、バイトしかねえ〜くせに。

「これからこの曲に歌詞付けたり、歌入れたり、大事なトコロでユイの力が必要なんだ。頼む、協力してくれねえ〜か？」

オッキーもフォローしてくれた。

「分かったわよ。でも、2時までだからね。じゃっ、頑張ってね、練習」

「日射病とか熱中症に気を付けろよ」

「神社は涼しい方だと思うし、アタシは大丈夫よ。それよりアンタたち、クーラー病にならないようにね」

ユイが出て行った。

プチッ プーン

オツキーが断りもなしにクーラーを消しやがった。

「ぐわゝゝ、暑ちゝゝゝ!!」

1分もしないうちに部屋がみるみる暑くなる。

「どゝして消した!」

「だってよゝゝ、クーラー病とか恐くねゝ?」

コイツはすぐに反応すんのな。

単なるユイの冗談交じりの脅しだろ? ……たく、これから1ヶ月、この臆病で繊細なA型ヤロゝと一緒にやよ。

「28度に設定しとけ! エコだエコ!!」

体が順応できる範囲の屋内と戸外の温度差は5 以内。

それを考えると、地球だけじゃなく、人間の体にも優しい最適な温度は28度だ。

やがて日も沈み、オレたちはいつの間にか夜まで楽器と睨み合っていた。

「ベースって重いんすね。もう指もクタクタっス」

竜崎の左指は、もうすでに血が滲んでいる。

宮さんも指に絆創膏が貼つてある。

「シンバルで指切っちゃったよ」

宮さんが意気軒昂に言った。

みんな慣れるまで大変そうだ。

宮さんは、ドラムの叩き方にこだわりを見せた。

一般的な手首や指の動きを利用する奏法ではなく、超一流なプロが使う、流麗でダイナミックな音楽表現を作り出す、背骨と肩甲骨を利用して叩くドラム奏法で練習を始めた。

非常に難しいらしいが、いわゆる反動を利用して叩く為、体への負担はかなり軽減されるらしい。

一度身に付けてしまえば、練習の鬼、宮さんの金棒になるに違いない。

そんな2人を見て、『本気』を感じた。

テルが作った曲は、テルのギターソロだけ本物で、残りは機械の音源。

だからこそオレは、ギターソロの部分だけは完璧にマスターしたいと思った。

何度も何度も繰り返し聴いて、何度も弾いてみた。

・・・が、一向に弾けない。

こいつはチャレンジし甲斐のある強敵だ。

よしっ、こうなったらトコトンやってやる！ 絶対完全コピーしてやるからな！！

オレはその日、自分の家に帰った後も、夜更けまで練習した。

テルから貰ったギターを眺めながら・・・。

練習はストラトで、秋のライブ本番にギブソンで弾くつもりだ。

・・・テルと一緒に！

第194話 夏のさくら

今日は朝から極めて調子がいい。

まず、目覚めが良かった。

爽やかな朝の光で^{まぶた}瞼を開けると、まず最初に思い浮かんだのが、恋しい佐倉との楽しいひと時。

そう、単純に佐倉と2人きりで会話をしていた夢なのだが、それがあまりにも写実的で、ついさっきまでオレの目の前に佐倉の顔があったもんだから、そりゃ〜もう興奮は最高潮だ。

しかも、場所はオレの部屋ときたもんだ。

気持ちの良い目覚めと同時に、晴れやかな気候、そして^{わお}麗しい夢。

前にもこんな日があったような気がする。

そう、あれは学園祭の前日だった。

あれからまだ10日も経ってないのに、もう随分昔のような気がする。

アインシュタイン曰く時間は人間の勝手な概念に過ぎず・・・、そ

う、辛く悲しい時間は長く感じるんだ……。

色々あった。

あり過ぎた。

あのユイが、長山の側近、安藤に告白されたのは、学園祭の前日だったよな。

その前にラブレターを貰ってたって言ってたな。

結局、安藤の恋は無残にも破れた。

佐倉に続き今度はユイにもフラれ、またしても安藤、哀れなり。

そして学園祭当日、ユイのもとへ現れたジェシーとベッキー。

何とユイは、今までコツコツとバイトで貯めた80万もの貯金をはたいて、ベッキーからギター、F・R・Sフォール・リード・スミスを買った。

ユイは、Do the by(ドウザバイ)のIkaru(イカル)に、F・R・Sをプレゼントしたのだ。

絶好の機会だったが、ユイは告白のチャンスを逃している。

とことんアホなヤツだ。

そういえば、生涯忘れられないであろう珍事件もあったっけ。

あの光景は、オレの^{まぶた}瞼に焼き付いて離れず、今でも鮮明に覚えている。

竜崎のクラスと間違えて、朝露さんのクラスの戸を開けたんだ。

朝露さんのクラスの女の子たちは、メイド服から私服へ着替える途中だったワケで……。

その中にオレのファンもいたってんだから、オレは罪なヤツだね、ホント。

……トホホだよ。

そして学園祭ライブのトリ、D o t h e b y のステージ。

宮さんが上がってマイクで怒鳴ったり、ユイが5曲も歌ったり……。

その後、あの^い忌まわしき事件が起きたんだ。

宮さんの焼きそば屋のボヤ。

竜崎の水族館の水槽が床に2つも落ち、熱帯魚が50匹ほど死滅。

オレのクラスも、金魚掬いの長水槽とストック用の長水槽の2つが倒されていたが、50匹ほどの金魚は運良く全匹助かった。

そんな金魚の蘇生に夢中だった頃、テルは生死をさまよっていた。

オレは、金魚は救えたが、テルを救ってやる事が出来なかった。。。

オレの祈りは、通じなかったんだ。。。。。

テルのバイクと背負っていたベースは大破したが、なぜかオレにあげる予定だったギターは無事だった。

オレたちと秋のライブで演奏する為の、出来たての曲が入ったCD
- Rも無事だった。。。。。

オレとオツキーは、テルの意志を継いでバンドを結成した。

何とメンバーは、ギター、オレ・・・、ベース、竜崎・・・、ドラム、宮さん・・・、総合マネージャー、オツキー・・・、そしてヴォーカル、ユイ（予定）だ。

最強メンバーが揃った。

オレたちは、テルの告別式の次の日から練習を開始した。。。。。

8月に入ってから、オレたちの活動は続いた。

時折、休息の意味も含め、皆で様々なイベントへも出掛けた。

筋トレなんかの際も、筋肉を酷使し過ぎると体を痛めてしまう。

休むのも立派な特訓の一つだ。

夏休みといえば・・・？

ラジオ体操、夏休みの友、工作、昆虫採集、親戚のおばあちゃん家・
・・・？ それは、子供だらっ！！

高校生の夏休みといえば・・・？

海水浴、キャンプファイヤー、肝試し、花火大会、夏祭り・・・・
！ せめて、この5つくらいは確実にクリアーせんと、な。

・・・と、いうわけで、夏休みを充実するべく、様々なイベントは
オレが主にスケジュールを立てた。

もちろん男たちだけでは、この青春真っ只中の時間がもったいない。

イベントには時間の許す限り、ユイと朝露さん、そしてもちろん佐
倉にも参加してもらった。

皆の手前、佐倉との距離はなかなか縮まらないが、1年の頃と比べ

たら信じられないくらいの進歩ではある。

オッキーが企画した民宿イベントでは、海で女性陣の水着姿こそ拝めなかったものの、定番イベントはキツチリクリアーした。

昼のスイカ割りにバーベキュー、かき氷、キンキンに冷えたビール。
青空の入道雲。

夜の浜辺では、キャンプファイヤー、花火、ビール。

そして運良く佐倉と歩けた肝試し。

佐倉は終始オレの後ろを歩いていて、手をつなぐ・・・、なんてシチュエーションはなかったが、怖々オレの背中に手をおいて歩く佐倉が、とてもとても愛おしかった。

民宿での枕投げ、皆で食いに行った夜中の屋台のラーメン、夜の浜辺、ビール。

海にうつる月。

佐倉が横に来る度、そっと肩に手を乗せ、佐倉を引き寄せられたらどんなに幸せだろう・・・。

そんな想いは常に頭のどこかにあった。

テル……、あの日の約束……、オレ……、まだ忘れてねえぞ。

でも、叶うかな？ 夢。

『なあ、ジオン、オマエには、自分の夢はねえのかよ』

「あ、あるよ……」

『言ってみろよ。人にさんざん言わせておいて、自分は言わないってのはナシだぜ』

「スキな、女がいる」

『クラスにか？』

「そつだ」

『オレが知ってるヤツか？』

「……ああ」

『そつか。言いにくかったら、言わなくていいよ。オマエの夢だ。誰にも否定されたくないって気持ちはよく分かる。その口に、告白するのか？』

「・・・・・・・・」

『諦めんなよ。オレも諦めねえから、オマエも諦めんなよ!!』

「ああ。当然だ」

『自信はあるのか?』

「余裕!!」

『ふつ……。頑張れよ、ジオン。そうだ、オマエのそのコに対する今の気持ちを紙に書いて、オレの所に送れ。曲作って売り込むから。オレとオマエの合作だ。売れたら作詞料、ガッポリ入るぞぉ!!』

「ははは。金なんかいらねえけど、オマエと合作するのはアリだな。気が向いたら送ってみるわ」

『待ってるゾ!! じゃな、元気だな、ジオン』

「オマエもな、テル・・・」

頑張ってみるぜ、夢に近づけるように・・・。

第195話 今を生きる

その日、オレは信じられないモノを見た。

浴衣姿の佐倉だ。

ユイと朝露さんが私服だけに、佐倉の浴衣が妙に目立つ。

そう、今日は夏の風物詩、花火大会だ。

残念ながら、武蔵町では毎年恒例だった河川かせんの花火大会が、今日が実はラストの日。

不景気続きでスポンサーが集まらず、資金不足で断念せざるをえないらしい。

くじ引き、イカ焼き、フランクフルト、焼きとうもろこし、かき氷、お好み焼き、タコ焼き、チョコバナナ、わたあめ、焼きそば、金魚掬い、クレープ、りんご飴、水風船・・・、あと何だ？

・・・ま、色々、見たり食べたり楽しんだ。

打ち上がる度、美しく光る佐倉の横顔。

そして朝露さん。

同級生の女子たちに囲まれ、常に両手に花を抱えるモテモテの竜崎。

ヤクザ顔負けの甚平に身を包み、今日は一段といなせな風貌を見せる総番長の宮さんは、強面こわまてのヤンキーたちに、すれ違う度頭を下げられている。

武蔵ではトップクラスの人気を誇り、今やファンクラブまで存在するというユイには、ケータイで写真をねだる女子が後を絶たない。

明らかにオレたちは、夏祭りの賑わいにぎわいの中でも一際浮いた存在だった。

2年のはじめ、テルが上京してから、長山たちやタカノブ、貴船、野牛の長須や仲村、芒たち、そして中学の時のイヤな奴等やつらなどに会いたくないが為、駅前はおるか、家の前を通る時もビビッてたオレが、今ではこうして肩で風を切って歩いている。

もちろん竜崎や宮さんの後ろ盾がないって言ったら嘘になるが、オレには強い芯がある。

こいつは絶対折れはしない。

テル、見ててくれよな……。

オレはもう、オマエがいなくなたって、ちゃんと歩けてるぞ。

前を向いてさ……。

夜空に美しく咲いた花火が、煙と共に儂く消える。

咲いて散る宿命、花の命……。

人の命もはかないよ、ちっぽけだよ、あつと言つ間だよ……。

……クソつたれ！

「オイ、オツキー、花火持ってきたか？」

「え？ 聞いてないぞ」

「前に沢山買ったのあったろ。オレ、あの時5千円も出したんだぞ」

「あれは民宿の時、使つたろ」

「線香花火もねえのかよ？」

「全部やつちまつたよ」

……まったく、花火くらい用意しとけヨ！ 河川の花火大会が終わつちまつて淋しいだろ！ この淋しさを埋めるには、オレらの打ち

上げ花火しかねえ〜だろ〜が！！

そう、この間の民宿では、オレと竜崎と宮さんの3人が、打ち上げ花火で競い合って盛り上がったんだ。

誰のが一番高くまで打ち上がったあの、誰がギリギリまで花火の近くに居れたあの、誰のが一番音が大きかったの・・・と。

「コンビニで買ってこようぜ」

・・・シ〜〜〜ン

アレ？ オレの誘いにみんな乗ってこない。

そんなノリじゃ締まらねえ〜だろ〜？！

「もう疲れたよ・・・。少し休もうぜ、ジオン」

はあ？ それでもオマエは男かオツキー！

「ジオン、アタシも疲れた」

ホラ見る、オツキーのせいでユイにまで伝染したぞ。

あらら、竜崎までシケた面^{つら}しやがって・・・。

「今までみんな座って花火見てたろ？ 疲れたって何だよ疲れたって。それでもオマエら高校生か〜？」

「そくじゃなくってさ、連日スケジュール組み過ぎじゃない？ アタシたちだつてさ、プライベートの時間くらい欲しいわよ」

確かにこの一ヶ月、飽きる事なくみんな一緒にいたけど……。

「もったいねえくだろ、時間が！！」

それがオレの率直な意見だ。

時間がもつたいない。

「何か、生き急いでるみたい」

ユイが人を哀れみの目で見ながら言う。

それにはオレも黙ってるワケにはいかない。

生き急いで……、な、何が悪いっ！

「2度と来ない青春時代を、2度とない今日の日を、夏休みに全ての思い出を詰め込んで何が悪い！！」

「ジオン、落ち着けよ。オレらはいつだって会う気になれば会えるんだしさ、それに、年とつたつて気持ちが若ければいつまでも青春時代は終わらねえくって」

オツキーが言い訳がましい事をほざいた。

「本心か？ 卒業して就職して時間を縛られ、会いたくても皆会えなくて疎遠になって、昔を思い出すんだよ皆、あの頃は……って。

みんな終わっちゃうんだよ！ 線香花火も花火大会も夏休みも！
時間だつて物だつて人間だつて何だつて、みんないつかは消えちま
うんだよ！！」

興奮したオレを見て、皆はうつむいた。

オツキーも、ユイも竜崎も宮さんも、朝露さんも……、佐倉
まで……………！！

「も、もういいよっ！！」

がああああああああっ！！ ムカつくっ！ もう、どうでも
いいって、もう、マジいいよ！ もう、終わりでもいいよ何もかも！！

オレはブチキレて帰った。

……まあ、実際はブチキレとまではいかないが、誰の目から
もオレがキレてたのは明らかだろう。

どうせ今日で夏休みのイベントもラストだったのに……、あ
とは2学期の始業式まで、どうせ皆と会えなかったのに……、
何やってんだよ、オレは！

……竜崎とか、宮さんとか、オレが怒ったの見て、どう思ったか
な？ みんな逆ギレしてねえかな？ 佐倉とかに、嫌われたかな
？ 怖がられたかな？ ユイは呆れたかな？ オツキーはまたオレ
を見下してんのかな……？

佐倉が淋しそうだった・・・な。

せっかく、浴衣とか着てたのに・・・。

第196話 A型は、苦しんでる人を見ると、世話焼きモードに入る

『何か、生き急いでるみたい』

家に帰ってきた後も、ユイの言葉が何度も駆け巡る。

そんなユイの声を頭からかき消そうと、ムキになってギターを弾いたのがいけなかった。

ピッキーーーーーン

鈍い音と共に、ギターの弦が切れてしまったのだ。

よりもよって、ギブソンの……。

つい、無意識で弾いていたんだ。

オレにも何で、その時テルの形見のギターを弾いていたのか見当もつかない。

今の今までギブソンには触れた事もなかったのに……。

テルは、コイツに傷一つ付けずに……、コイツを命を懸けて守っ

たのに……、オレは……。

花火大会の翌日。

その日は夏休みの最後の日だった。

予定にはなかったが、音合わせをすると言つので、急遽オツキーの家に集まることになった。

昨夜はオレらしくもなく、随分落ち込んだもんだ。

何たって、夜食も食わずに一晩明かしたからな。

こんなシヨボイ気持ちのまんま明日の始業式を迎えなきゃならんとは……。

あんなにポジティブを詠^{うた}つてたオレがだぞ？ 人生、一寸先は闇とは、よく言ったものだ。

もうすぐ9月だというのに茹^うだるような暑さは変わらない。

噂ではこのまま秋が来ずに冬が来るんじゃないかと囁^{ささや}かれてたりもする。

異常気象ってヤツだ。

もつとしっかりしろヨ地球っ！・・・つつくか、それも全てオレら人間の文明のせいなのか？ だとしたらオレら人間って、地球からしたらやっぱりガンなのかナ？

人の細胞は一日5千億個生まれ変わってるらしいが、そのうちガン細胞は5千個生まれるらしい。

コンピュータでいえば不良クラスタってトコか？ デフラグとかスキャンディスクで誤魔化し続けても、原因を根本的に見つけて処理しない限りハードディスクは傷ついていく一方・・・。

やがて壊れる。

ま、健康な人間なら、5千個のガン細胞なんぞ、わけなく修正できるが、病に犯された人は一日5千個の破損した細胞を修正しきれない。

これが続くとやがてガンって病院で診断される。

・・・地球も病気なのかもしれないな。

もし地球が健康だったら、自然の空気や食物で人間の心も安らぎ、争いの無い平和な世界が築けるのだろうか？ 地球の恵み、恩恵にあやかる為には、まずは自分ら一人一人が意識して、正しく生きていかなきゃならないのかもな。

自分を見つめるなら、まずは人間の3大欲望に着目だ。

「食」は人を良くすると書く。

・・・わ、若いうちは、その辺気にしなくても大丈夫かな？ は、
ははは。

「性欲」は・・・、オレは男の中の男だから、淫みだらな行為は憤つひみま
すよ、そりゃ〜、当然ですよ当然。

あと1コは「睡眠」。

これだ、オレ、寝不足だわ。

地球が異常気象なの、オレのせいだわ、きつと。

・・・って、冗談にしても、オレってば、気付けば随分ネガテ
イブだね〜。

イカンイカン、イカンぞ、オレってば、マジでダメになりそうだっ
た。

よしっ、明日から2学期なワケだし、心機一転、元気に明るくポジ
ティブ全開で行きますかっ！！

昼過ぎ、いつものオツキーの家のスタジオに着くと、竜崎と宮さん
がすでにスタンバイしていた。

花火大会の日の事もあるし、顔を合わせ辛いよな・・・。

「亀ちゃん、待ってたよ〜」

宮さんが、オレが予想してたより遙かに素敵な笑顔で迎えてくれた。

「忙しいトコ、ゴメンなさいっす。夏休み最後の日に、強引に誘っちゃって」

隣の竜崎は、律儀に頭を下げた。

「いやいや、むしろ自然なカタチで仲直りが出来て、こっちとしては好都合だよ。」

「そんじゃ、いくぞ！ 1、2・・・、1、2、3、4！！」

宮さんの豪快なスティックの合図で演奏がスタートした。

・・・

「ブラボー！ 初めてにしては上出来だよ」

オツキーは一丁前のプロデューサー気取りなのか何なのか、終始難しい顔で演奏を聴いていたが、曲が終わると同時に大振りな拍手をくれた。

ベースを弾き終えた竜崎も、ドラムを叩き終えた宮さんも、それなりにご満悦そうだ。

・・・が、オレ的には全然ダメだ。

演奏自体もトロくて話にならないし、それより何より、オレのギターソロがダメダメだ。

「ジオン、どうした？　ギターソロは完璧だと思うぞオレは。あんなに練習したんだし、かなりの成果が出てると思うぞ」

オツキーのくせに、人の心を覗き見たかのような鋭いセリフ？
褒め言葉？　いや、気休めの言葉にもなりやしねえ。

オレを怒らせるだけだ。

「うるせ〜、ほっとけ」

それがオレの本音だ。

・・・

その後何度か音合わせをし、それなりに演奏は出来るようになった。

・・・が、相変わらずオレ的にはさっぱり納得がいかない。

「ジオン、不満そうだな？　ギターソロのトコか？」

オツキーだ。

母親のようなA型の細かい気遣い、優しさが、こ〜という時妙にお世話
つかいに感じる。

「・・・うるせ〜」

あんまりしつこいと、キレルぞ・・・。

「あと2ヶ月もあるし、何とかなるっしょ。ジオンさんなら大丈夫っす。必ず出来るっすよ」

さすが竜崎、O型、前向きなエール、アリガトよ。

「亀ちゃん、1番引つ掛かっているトコって何なの？ やっぱり、テル君が残した曲を、完璧に同じく弾けないトコ？ それとも他に何かあるの？」

いつもはメンタルな部分には過度に干渉してこない宮さんが、珍しくオレのメンタルな部分を引き出そうとしている。

それもいつものB型特有の義理人情ってヤツか？ オツキーに引き続き、宮さんまでもがそうくるか。

これ以上みんなに心配掛けるようでは、さすがに男が^{すた}廃るよな・・・。

確かに今まで完璧に弾きこなせない所で引つ掛かってはいたが、みんなに迷惑を掛けるほどではなかったと思う。

でも、今日はもう、ダメダメだ。

完全に顔にも出てると思う。

正直に話そう。

「テルが死んでから、ギブソンには手をつけなかったのに、なぜか昨日、無意識で弾いてて……。気付いたら、弦が切れてて……」

「弦ならまた新しいの付けられただけだろ」

オツキーが尤もまことな事を言うが、そこは譲れない。

「アイツが張った弦だって、ギターの一部だったんだ！ この世に一つしかない、アイツが命懸けで守ったギターだぞ?!」

「ジオン、気持ちは分かるけど、それは違うって！ テルはギターを守る為に死んだんじゃないって。たまたまギターが無傷だっただけなんだよ」

「言い切れるのか？ オマエは偶然だって言い切れるのか？ アア?!」

「……キレんなよ」

「……キ、キレてねえよ」

くそ、今日からポジティブに戻そうと思ってんのに、どうしてこうなる？ 夏休み中、思えばずっとオツキーと揉めっぱなしだったな。

夏休みラストにコイツと殴り合いでもすれば、オレの気も晴れるのか？

「ジオンさん」

竜崎が見かねて仲裁に入る。

これも夏休み中、何度もあつた光景だ。

「悪い〜な竜崎。今回ばかりは譲れねえ〜んだ」

そう、テルはギターを守つて死んだのか、そうじゃねえ〜のか、ここが大事なんだ。

シロかクロか。

「オツキーさんが言う通り、例えば市販の曲聴いて、レコーディング時の音源をそのままそっくり再現しようとしたって、所詮ムリがあるっス。楽器、環境、湿度でも変わるって言うじゃないっスか。ジオンさんの気持ちは分かりますが、諦めた方がいっス」

はあ？　そこかよ竜崎！

「オレは別にそんなんで落ち込んでんじゃねえ〜よ！　・・・っていつか落ち込んでねえ〜し！！」

現にオレはここに来る前、地球、いや、宇宙規模で自分を見つめ直していたんだぞ！　そんな、みみっちいスケールで物事を考えてねえ〜よ！！

「ジオンさ〜、結局夏休み中、どんだけチューニングしても弾き方

変えても、テルのソロギターの部分弾けなかったんだろ？ もう諦めるよ。一つの事にこだわらないで、前に進めよ！」

ここぞとばかりオツキーのヤロも攻撃してきやがった。

「こだわるだと？ オレは何一つこだわってねえよ。オレはいつも自由にやってるよ。常にグローバルだ。前に進めだと？ オレはいつも全力で前進してる！ 夢に向かってひた走ってるよ！！」

別に興奮してるわけじゃねえが、オレは通常より大き目の声で言った。

それがオツキーを刺激しちまつたらしい。

「嘘付け！！ 粘りに粘って結局同じトコしか練習してねえよ。じゃねえよか！ 途中でユイも飽きてきたからウチに来なくなった。民宿とか花火とか、イベントで会ったから気付かなかったのか？ バンド名決めたり、曲をみんなで合わせたり、歌詞作ったり、色々やらなきゃならない事あったのによよ！」

はあ？ 何今頃言ってるのこイツ。

これだからA型は……。

何でもネガに考えんな。

「竜崎はベース初めてだったし、宮さんもドラム初めてだった。オレは2人が上手くなるまで待ってたんだよ」

そんな事を言っちゃまったオレがバカだったのか？ この後オレはト

ドメをさされた。

この、頭脳明晰で口喧嘩には自信のあるこのオレが……、二二の句
が出ないほどに打ちのめされた。

第197話 無償の愛

「言ってる。あのな、竜崎はハッキリ言って、ヤバイくらい上達してるぞ。もしかすると、ベースの腕はテル以上かもしれない。竜崎は天才だよ。宮さんもな、もうテルの曲は完璧にマスターしてんだよ。バンドはドラムの良し悪しで決まるからって言って、人一倍練習してたんだよ」

知らなかった。

返す言葉も無いオレに対し、オツキーが畳み掛ける。

「さっき音合わせしてて、2人の演奏聴いてたのか？ オレが言うのも何だけど、バンドは心をつにするもんだと思うぞ。竜崎も宮さんも、しっかり合わせようとしてるのに、オマエがあらぬ方向を向いてっからいつまでもしっくりこないんだよ」

・・・オレは確かに、2人の演奏を聴いちゃいなかった。

竜崎も宮さんも、心をつにしようと一生懸命音を合わせようとしてくれてるのに、オレだけ別方向を向いてた？ その通りじゃねえか。

・・・オレは、バカだ。

そしてこの後オレは、トドメをさされた。

「ジオン、オマエ、竜崎と宮さんの気持ち考えた事あるか？ 2人はなく、元々バンドなんかやるつもりなかっただろ？ テルが死んだ事で、オレとジオンが落ち込んでるの分かってるから、オレらの傷を癒そうと、2人はやりたくもない楽器を手を取ったんだ。2人だって、それぞれの夏休みがあつたはずだ。そんな貴重な夏休みを、2人はオレらの為に費やしたんだぞ！！」

オレにトドメをさしたのは、そんなオツキーの罵声にも似た痛烈な言葉なんかじゃない。

この後続いた、竜崎と宮さんの言葉だった……。

「オツキー君、それは違うぞ」

今まで沈黙を続けていた宮さんが口を開いた。

「……えっ？」

宮さんの低い声にビビッたオツキーの声が引っくり返る。

そんなオツキーなど見向きもせず、宮さんはオレの瞳を見据えて、淡々と語り出した。

「亀ちゃん、誤解がないように前もって言っとくけど、オレも竜ちゃんも自分の意志でやってんだ。元々オレらは、誰に指図するワケでもなく、誰の指図を受けるワケでもなく、自由に生きてる。常にそれなりの覚悟を持って、生きてる。だから、自分の過去には責任持つてるし、誰のせいにもしない。だからこそ、自分の未来も自分

で作る。オレらは誰の為でもなく、自分の為に生きている。」

自分の意志でやってる？ オレらの為じゃなく？ オレらが可哀想だからとか、仲間が辛い時だからとかではなく？ 自分の意志でやってるだと？！

覚悟を持って生きてる？ 自分の命に、人生に、生き方全てに、覚悟……。

過去に責任を持つてる？ 誰のせいにもしない？ 今までの生き方、今置かれている自分の境遇全て、自分のせい？ だから誰のせいでもない……。

「オレも宮さんも、ジオンさんもそうでしょ？ 自分が好きはずっス。だから、オレらは自分がやりたいからやってるんすよ。オレらが見返りなんて求めてないのは、ジオンさんも百も承知っしょ？」

自分が好き？ 自愛ってヤツか？！

竜崎の言葉が痛烈にオレの胸をさした。

自分の為にやってる事が、結果的に他人の為になってる……。

自愛＝他愛？

見返りを求めた時点で、無償ではないから、見返りを求めないものこそ無償。

そ、それが、無償の愛？！

・・・つつくか、こ、これが・・・、愛??!!

漠然とだが、何か大事なピースを見つけたような気がした。

まさにトドメをさされた瞬間だった。

今までのネガティブな気持ちにトドメをさされ、オレは否が応にもポジティブにならざるを得ない。

心の奥底から湧き出てくる熱い気持ちに逆らえない。

オレは込み上げてくる涙を堪えながら、引っ掛かっていた所を、誰と決めずに聞いた。

「テルが何であるの時間に・・・とか、何である日に・・・とか、何でギターを守って・・・とか、本人がこの世にいない以上、誰にも真相が分からない事を、今更知ろうとする事は、無意味な事かな?」

そんなオレの呟きに答えてくれたのは、宮さんだった。

「それは自分で答えを出すもんだと思うよ」

「宮さん、本当に、夏休みをコレで潰しちまって、悔しくないんですか? 宮さんにとって、最後の高校生活の貴重な夏休み。そんな貴重な時間を、こんなグダグダなバンドの練習なんかには費やして、勿体無くなかったんですか? い、今更ですけど」

オレはカッコつけるでもなく、素直な気持ちを宮さんにぶつけた。

オレを殴るなら殴ればいい、オレを八つ裂きにするならすればいい。

オレが悪いんだ。

「どうせ、家に居たって天井眺めてるだけだったと思うよ」

「マジっすか？」

「この灼熱地獄の中、このクーラーガンガン効いた部屋の中にいれるだけでオラは幸せだあゝ。オらん家エアコンねえゝから」

何で語尾が田舎のおっちゃんになってんだよ？・・・つつゝか、エアコンねえゝのかよ！ そりゃゝ、部屋にいたくねえゝわな。

「オレはきつとコレやってなかったら、夏休み中釣りっこで終わってたっス。それ考えると、こうして釣り以外の何かに夢中なれる趣味が出来て、オレは良かったって思ってるっスよ」

常に前向きな竜崎だが、こうして聞くと、改めてその前向きさがどれだけ人にとって大事なモンなのか実感する。

ネガティブな考えはネガティブしか生まない。

やっぱり、辛い時こそ、ポジティブだ。

・・・でも、自分をポジティブにもっていく為には、自分一人で考え込まず、こうして誰かに気持ちをぶつけてみる事が重要な気がする。

喧嘩も辞さない覚悟で・・・。

改めて仲間の大切さを身にしみて感じる。

オレは幸せモンだ。

愛を感じれる、仲間がいる！！

翌日、とうとう2学期が始まった。

教室に入るやいなや、オレを爆笑させてくれる光景が目に入る。

オッキーが銀髪で登場した。

「マジかよオマエ、何だよその頭、シャレになんねえぞ?!」

コイツ、昨日髪を染めるなんて言ってなかったぞ？ オレも含めてみんなへのサプライズってか？・・・ったく、A型、つつくか、オッキーらしいぜ。

そんなオツキーは、そこまで意気込んでヤンキーを演出してるクセに、何をビビッてるのか体を小刻みに震わせている。

・・・が、注目するクラスの連中や、噂を聞きつけて廊下から覗き見る他のクラスの生徒たちを見て、満足そうな笑みも溢れる。

「どうしてそんなアタマにしたの？」

佐倉が目を丸くしてオツキーに訊いた。

そりゃ〜そうだろう、誰が見たって第一声はそれだよな。

「ま、オレも一端のヤンキーとしてな、今日からはビシバシいくぜ」

何がビシバシだよ、誰に対してビシバシ行くんだよ？ あ〜、自分にか？ シャバかった自分にな・・・。

「あ〜あ〜、やっちゃった・・・」

ユイが呆然とオツキーの銀髪を見つめる。

そつなんだよな〜、誰が見たって第二声はそれだよな。

テルが死んで、何か決するモンがあつたんだろ〜、コイツにも。

ま〜、夏休み中、ずっとオレら一緒にいたし、気がデカくなったってのもあるかしんねえ〜な。

仲間はいるし、何よりあの、泣く子も黙る総番長を弟子にしてんだモンな。

そりゃ、鷹揚おうえうにもなるわな。

ガララララ

勢い良く戸を開けて、竹刀を持った赤ジャージが意気揚々と現れた。

「出席をとる。あお〜〜い」

「ふあい」

リックキーがいきない出席をとり始めた。

まだオツキーの銀髪には気付いてないみたいだ。

さ、これからどんなバトルが展開すんのかワクワクするぜ。

第198話 銀髪のオツキーVS赤ジャージのリツキー

2階から不良を突き落としたりとか、ビンタで生徒の鼓膜を破ったとか、PTAも鋭い眼光一つで黙らせるとか、どんな不良もこの学校ではコイツには勝てない等々、数々の伝説を持つ岡村力也こと、通称リツキー。

暴れん坊の体育教師にして、生徒指導のリーダー的存在。

そしてウチのクラスの担任。

比較的声音が大きい方だと思われるこの男、人間って生き物はここまですげな声が出せるのか？と思わせるほどの大声を出した。

「沖田あ~~~~~っ！！！」とオツキーの苗字を叫んだ後、その怒髪天は凄まじい形相とオーラで近づいてきた。

オツキーの隣の席の佐倉は背筋をピシッと伸ばして極度の緊張状態に入った。

佐倉の机にぶつかりながら、ついにリツキーはオツキーの目前まで来た。

オレはというと、他人事なんで面白いぜとワクワクする反面、いざとなったらオツキーを庇^{かば}うべきか、はたまた巻き込まれるんじゃないかとドキドキしていた。

「オマエら不良はホントにクズだ！ 根絶やしにせんと世が腐る！」

はあ？ 今、何と？！ オマエら・・・って言った？ ね、オマエら、らって言ったよね？ オマエらって。

それってさ、明らかにオツキーの真後ろの、オレも含まれてるよね？ それに付随してさ、竜崎も宮さんも、もしかして死んだテルなんかも含まれてんの？！ ね？ 場合によってはオレもキレっぞ！などと考えている自分が吹き飛ぶほどの展開が訪れた。

オレの前の席のオツキーが、威勢良く立ち上がったのだ。

こんな展開は予想できなかった。

ちよつとは期待したが、どうせリッキーに見付かり次第、生徒指導室に連行されて終わりだと思っていたからだ。

沖田良雄、A型男児、ついにモノホンの男になる時が来たのか？！

「沖田、どうせオマエらがやったんだろ？！ 1年のクラスの水槽割ったりとか、ボヤ騒ぎとか、このクラスの金魚掬いぶつ倒したりとか、学園祭の時の不祥事は、どうせオマエらがろくでもないモンの腹癒せにやったんだろ？！」

リッキーがとんでもない事を言いやがった。

クソつたれ！ オツキー、言ってやれ！ すぐにオレも追随する！！

A型のリックキー、どうしてコノヤロウは執拗しつじつにオレたち不良を敵に回す？ この物騒なご時世、そこまでよくもまゝ、度胸があるモンだ。

ヘタすりゃ夜道、後ろから刺されるぞ。

「ボクたちは、やってませーん」

シャキンと体を真っ直ぐに硬直させたオツキーが、甲高い声でリックキーに言った。

「……今までのオレのワクワク感は何だったんだ？！ オツキーに期待してたオレがバカだった。」

自分の事をボクと呼んだうえに、ボクたち、たちって言ったよね？
それって明らかに、オレも巻き添えにしてるよね？ その臆病な自分を克服する為に銀髪にしたんじゃないの？！

「そのアタマは何だ？！ それが動かぬ証拠だろ！ 人間の悪行は、全て外見に表れる！！」

リックキーがまたしてもドデカイ声を張り上げた。

人間の悪行は全て、外見に表れるってか？ だったら派手な服装してるヤツとか皆ワルか？ オレの隣で飄々（ひょうひょう）とした表情で、我関せずと言わんばかりのユイだって、普段着はワルそうなかッコウだったりするぞ。

じゃあ、優等生の佐倉が胸元までボタンを外して登校したら、その時点でもう悪人だったか？ 笑わせるぜ。

オツキー、言つてやれ！ 今度は不特定多数じゃなく、オマエ自身の事を言われたんだぞ。

いくらでも大義名文たいぎはある！

「ボ、ボクたちは、学園祭ライブに行つてたので、は、犯人じゃありません」

何、情けない声出してんだよ、オツキー。

「嘘を付くな、正直に白状しろ、オマエらが1年のクラスの水槽を倒したんだろ？ このクラスの金魚掬いの長水槽を蹴つたんだろ？

3年のクラスの屋台に火をつけたのはオマエらなんだろ？！ 今なら罪も軽くしてやるぞ。正直に白状したら、そのアタマも許してやる。明日までに黒く染めてくるのが条件だがな……」

どうしてリツキーは、そんなにオレらを犯人にしたがるんだ？ もしかして、コイツが犯人なんじゃねえの？ それを、オレらに押し付けてんじゃねえの？！ オツキー、こんなアクドイ刑事まがいのアウトローに負けんなよ！ 「疲れたからボクが犯人でいいです」なんて言つたら未来永劫許さねえからな。

死んでも悪に屈するんじゃねえぞ！！

「ど、どーしてセンサーは、自分のセートを信じないんデスカ？
あ、あれは、他校のセートの仕業かもしれないし、そ、それに・・・
ひとりでに偶然起こった出来事かもしれないじゃないデスカ?!」
よし、上出来だぞオツキー。

「フン、そんな事はどくでもいい。それより貴様はなぜ、そのアタマで登校した？ それは明らかに教師への挑発行為だよな？」

リックキーめ、返す言葉が見付からないときたらず、学園祭での事件の数々を、そんな事はどくでもいいで片付けやがった。

「チヨーハツじゃアリマセン！ ボクは短髪です!!」

どこまでテンパってんだよ、オツキー。

「貴様はそのアタマで登校したらどうなるのか、その足りない頭で少しも考えなかったのか?! だったらオレが教えてやるぞ」

出たよ、リックキーのお得意の挑発だ。

「どーしてセンサーは、そうやってセートにパワハラをするんデスカ？ 教えるって、何をデスカ？ た、体罰デスカ?!」

おお、いいぞ、オツキー、もっと言ってやれ。

今まで静まり返っていた教室だったが、少数の生徒がざわめき出した。

「黙れ！ 世の中の学校は、オマエらのような腐れヤンキーを野放しにしているから、いつまでたっても日本社会が良くならないんだ！ 体罰、体罰、体罰、体罰？ 体罰のどこが悪い。オマエら社会のクズ共は、暴力で物事を解決するのが茶飯事だろ〜が。だったら目には目を、歯には歯をだろ！」

リッキーの怒鳴り声が教室中に響き渡り、ざわついていた生徒も一気に口を閉ざした。

目には目を・・・ってさ、暴力には暴力で返すって意味じゃなく、それ相応の罰で相手を許せて意味だろ？ リッキー、絶対意味を履き違えてっから。

「ボ、ボーリヨク反対！」

オツキーが、まるで断末魔のような金切り声を上げた。

「かつて日本の学校は、しっかりと体罰という風習が根付いていた。戦時中培った日本男児の、土くさい大事な心だ。だが、PTAだの保護者だのが生温い考えで体罰を排除した結果が今の腐った社会を作ったんだ！ 不良かそうじゃないか分からないような連中が、とんでもない犯罪を犯したり、教師が生徒にナメられて、仕舞いにや鬱だ。いいか、良く聞け？ 教師が威厳をなくせば学校は破滅だ！ 警察が破滅したらどうなる？ 社会はどうなる？ オレたち生徒指導の教師が命懸けでオマエらを排除しなければ、誰がこの学校を守るんだ！！」

リッキーがいきり立つ。

善を貫いてるつもりらしいが、暴力に対し暴力で対抗している時点で、オマエも悪だぞリッキー。

オレはちゃんとヤンキーつつ〜レッテルを貼ってっから、オレに攻撃してくるヤツには暴力も辞さない。

元々オレは世間からしたら悪なんだから、暴力に対し暴力で対抗するのは正当防衛なんだし、オレにとっちゃ、列記とした正義だろ？

リッキーよ、てめえ〜も善を貫くんなら、覚悟決めてその正義の味方を気取るのはよせ、偽善者め。

「オレは暴力教師で結構だ！ P T Aでも保護者でも出して来い！いくらでも勝負してやる！！ オレたち生徒指導は警察じゃ〜なく、ヤクザで結構！ 学校のヤクザで結構だ！ ヤクザ同士の潰し合いなら誰も文句あるまい」

ぐわっ！ リッキーが自分を暴力教師だと認めやがった！ コイツは質たちが悪いぜ。

この開き直り、一体、何なんだコイツ、いつでも教師を辞める覚悟してんのかよ？

どんな不良もコイツには勝てないって言う意味が、分かった気がする……。

「個性だ自由だ？ そんな生温い思想がいずれ銃社会を生むぞ。オレが茶髪や金髪を見て見ぬフリをしてるのは知ってるな？ 規制をしたいのは山々なんだが、校長の許可が下りんだ」

な、何？ リッキーのヤツ、感情の赴くままに行動を起こしてたんじゃねえのかよ？ 体罰も学校の許可を得ているってのか？！

リッキーはA型、全て計算の内つてか？ とことん質の悪いヤツだ・・・。

「銀髪は特例だ。即、逮捕状が出せる」

リッキーが不気味な笑みを浮かべた。

「ス、スミマセンでしたー。か、必ず、髪染めて来るんで・・・、ハイ」

とうとうオツキーが観念してしまった。

ま、健闘した方かな。

まさかこれほどまでとは・・・な。

恐るべし、リッキー。

オツキーはリッキーに襟首えりくびを掴まれ、「ひいつ」という情けない声を出しながら、生徒指導室へ連行された。

しばらくして、副担任の代田がやってきて、黒板に「自習」という文字を書いた。

始業式のホームルームは、オツキーのお陰で退屈しなくて済んだぜ。

「あれはしょくがないよね」

ほっと肩を撫で下ろした佐倉が笑みを溢す。

「さすがに銀だもんね」

ユイも苦笑いだ。

オレも昔、中学の入学式に銀髪で行ったら、即行刈られたっけな。

オツキーはどんな処分を受けるんだろう？ まさか停学？ それは
ないよな。

あれしきで体罰受けるってのは考えにくいし……。

でもユイは、野牛との全面戦争時にオレが銀髪にした事とか、中学
の入学式でのオレの失態を知ってるくせに、それをわざと黙ってい
るのか？

ま、佐倉の前だし、昔の事には、触れないでほしいけどね……。

第199話 朝は4本足、昼は2本足、夜は3本足

その日の放課後、オレと竜崎と宮さんの3人は、楽器のメンテナンスグッズを買いに、駅前に向かった。

まだお昼ちょい過ぎだというのに駅前は、じじいばの散歩や営業のサラリーマンらで意外と混んでいる。

「・・・っつゝワケで、丸坊主なワケですよ」

オレたちについて来たオツキーが、VSリックキーとのやりとりの一部始終を得意気に自慢した。

「オマエさ、オレに憧れてたんだろ？ 芒戦の時のオレの真似して銀髪なんぞに染めやがって」

「違っつて!」

オツキーがムキになってる。

あんまりからかうのも可哀想だな。

「へ、金は良くて、銀はダメなんだ」

宮さんがニヤニヤしながら言った。

「オレのアタマ見て言わない！」

竜崎がすぐさまツツコむ。

「校則違反だつてよく。今すぐ家に帰って染め直すか、ここでバリカンで刈られるか、どっちがいいって聞かれてよく、もち、バリカン選んだわ。気合入ってるトコ、リッキーたちに見せたくてな。大和に刈られたんだよ、アタマはさ」

その話、何度も聞いたよ。

・・・つたく、ミーハーヤローめ。

フツ、そんな2舎選択されたら家に帰る方選ばね？・・・つつか、全く反抗する気ねえの？ 最初から刈られるの前提で染めたのか？！

その後オツキーは、「箔はくが付いたぜ」みたいな事を言っていたが、誰も聞いていかなかった。

「そーいえば亀ちゃんたちって、修学旅行どこだったけ？」

「京都、奈良ですけど」

来週から1週間ね。

「じゃ、楽器の練習はしばらく休みだな」

そうそう、宮さんは練習し過ぎだから、しばらく休んだ方がいいよ。

「オレはベースなんで、家でいくらでも練習できるっス」

練習が出来なくて残念そうな宮さんを意地悪く見る竜崎。

「あつ、何なら貸しますよ、ドラムセット」

冗談は顔だけにしとけ、オッキー。

「あんなデケの部屋に置けねえ！それに、周りの住人に迷惑だろが！！何よりどうやって運ぶ？！」

宮さんの、冗談なんだか本気なんだか分からない強烈なツッコミに、オッキーが怯む。

「は、ははは、冗談ですよ、冗談。アレ？そっいえばジオン、いつの間にか手の怪我治ってますよね？いや、オレも一端のヤンキーとしてですね、あの時の野牛との戦争時は覚悟しましたからね、色々……」

何シドロモドロになってんだよオッキー。

宮さんと野牛問題について問答か？

「ところで竜ちゃん、ベース買わないの？」

懸命に取り繕うオッキーを宮さんは完全無視？ いや、ただ単に眼

中にないだけ。

所詮オツキーがどんだけ宮さんの格に近づこうとしても、一夜二夜の付け焼刃じゃ……。

オレから言わせりゃ百年早いぞ。

……と、その時、前からイヤなオーラを感じた。

あっ、あれは……、タ、タカノブ!!!

タカノブの隣には柴もいる。

駅前でタカノブに会うとはツイてね〜!

前から歩いてくるタカノブは、宮さんと目を合わせると、すぐに頭を下げた。

かなり微動だが……。

野牛との全面戦争時、タカノブは野牛側に付いた。

それを皆はどう思っているんだろう？ そんなヤツと一緒にいるんでいる柴は、竜崎のセコンドだったんだぞ？ この状況、どう判断すりゃいいんだオレは……?!

そのまま素通りしてほしかったが、すれ違い際、柴が話し掛けてきた。

相変わらずコイツ、馴れ馴れしい。

一時はコイツにチヤホヤされて、コイツ良いヤツかも？なんて思ったりもしたが、やっぱり竜崎の言う通り信用ならねえ〜ヤツだ。

「ジオンさん、テルさんが亡くなられたとかで、大変でしたね」

テルさん？ 柴はテルと面識ねえ〜だろ！ テルの名を気安く呼ぶんじゃないよ！〜！

その時宮さんは？

宮さんは眉間にシワを寄せ、こっちを見向きもしない。

そりゃ〜、そ〜だよな。

柴は学園祭のあの忌まわしき事件の犯人なんじゃないかって、竜崎に疑われたりしてたしな。

でも、あの事件に関しては、残念ながらタカノブと柴にはアリバイがあるんだ……。

いつそコイツらが犯人なら、ラクなのに。

敵が見えないってのは辛いよな……。

その時竜崎は？

オレに柴が話し掛けてるもんだから、嫉妬とかしてっかな？

ふと竜崎を見ると、何と、タカノブと親しく話をしている！！

は、はあ~~~~？

はあ？ は~~~~あ？ なぜ、どうして?? 一体何で?! な、
な、な、何でだ~~~~?!!

ど~~~~して竜崎と、タ・カ・ノ・ブがあ~~~~?!

オレは呆然とその場に立ち尽くした。

柴が隣で何やら話していたが、今のオレの耳には何も入らない。

宮さんは相変わらず竜崎とタカノブの方に背を向けながら、離れた
場所でオツキーと話をしている。

やがてタカノブと柴は人ごみに消えた。

その後竜崎は、タカノブの事を自分からは何も言い出さなかった。

竜崎にタカノブの事を根掘り葉掘り聞いて、もしタカノブの耳に直
通だったらアウトだ。

でもまさか、竜崎とタカノブが実は仲間ってのではないだろうか？
でも、やけに親しげだった……。

オレは、さんざん迷ったが、意を決して訊いてみた。

「竜崎、アイツと、どくいう関係なんだよ？」

「へ？ あく、タカノブさんの事?! 別にフツ〜っス」

タカノブさん？ フツ〜?!

「初対面じゃなかったのか？ 仲良さそうだったが……」

「あく、別に何でもないっスよ」

何でもない？ 何か、隠してねえ〜か?! ま、まさかな……。

「いつから話をする仲だった?」、その一言だけでも、聞いとくか？
今ならまだ、自然な流れだぞ？

さんざん迷った挙句、オレは突きつめるのをやめた。

オ、オレと竜崎は、仲間だ。

親友に等しい、仲間じゃねえか。

仲間なら、信じねえと・・・な。

第200話 修学旅行

奈良に2泊、京都に3泊、5泊6日の修学旅行が始まった。

行き先とか、別にこれといった希望があったわけではないのだが、あえて言うなら、オレの隣の席に座っているのが女子であってくれたら・・・、それが佐倉だったりしたら、そりゃ〜申し分ない幸先の良いスタートだったに違いない。

新幹線の車中、隣で寝息をたてるオツキーを見て思った。

出発前、「クラスの男子全員、修学旅行期間中は一睡もしちゃいけない」などと、アホなルールを勝手に決めた張本人。

コイツの中では移動中の今は期間中じゃないのか？ オレの中では今朝、家を出た時点で修学旅行は始まっているんだが・・・。

観光地巡りの際、自由行動なんかもあるのだが、男子と女子はしっかり離されている。

この調子では、テルとの約束でもある「佐倉への告白」が、高校生活の中でありうるのかどうか、まったくもって不安だ。

世のカップルとか夫婦とか、マジ信じられん。

どくやったら異性とあんなに仲良くなれて、結婚とかできんの？

何十年もお互い違った環境で育ち、価値観も全く違ってたのに、異なる世界のぶつかり合いで、沢山の歪みがあるだろうに、それを超克しながら長く付き合える人たち。

オレはマジで尊敬するよ。

ウチの両親も含め、スゴイよ皆。

オレも生涯浮気なんぞせずに、佐倉を一生守ってやりたいぜ・・・、なんて思っていると、早くも目的地の奈良駅へ到着した。

その辺のレストランで昼食後、バスで移動。

世界遺産の法隆寺を見学させられた後、レトロな街並みを行列でねり歩き、要所要所で集合写真。

旅館に到着したのは夕方4時。

何だかんだで夜6時。

夕飯後、温泉につかり、リラックスタイムが訪れたのは夜9時だ。

担任のリッキーなんかは口うるさく、9時には就寝だなんてほざいているが、一体誰がそんな指図を守るんだ？

オレの部屋は、あいうえお順で並んでいる列の、「あおい」から「

かめつる」までの男5人で形成されている。

超適当な部屋割りに文句をつけたい所だが、女子と一緒に出来ない以上、同じ部屋にオツキーがいるだけマシだと思っしかない。

しかし、どいつもこいつも修学旅行初日という事で、かなり元気が有り余っているようだ。

オツキーと旅館内をブラついていると、ロビーでちょっとした騒ぎを目にした。

どっかのクラスのヤンキー2人が喧嘩をしている。

バチバチの本格的な殴り合いだ。

野次馬共が徐々に増え出し、傍観者の数に比例するように、喧嘩の激しさが増す。

「ああ、あ、リックーたちが来るのは時間の問題だぞ。このままだと帰宅だぜ、あの2人」

オツキーが半笑いで呟いた。

そう、ウチの学校には、修学旅行中、喧嘩をしたら即帰宅っていう不良泣かせのルールがある。

オレも他人事じゃない。

くわばらくわばら・・・だ。

初日で強制帰宅なんてさせられたら、親父に勘当される。

ロビーを後にして、オレとオツキーの2人は屋上に向かった。

星の綺麗な夜空を眺め、ベンチでタバコを吸ってる生徒、ビールを飲んでる生徒、抱き合ってる男女がいる。

ある意味、無法地帯。

カップルの巣窟？ 自称ヤンキー達のたまり場？

タバコを吸ってるヤツの前を通る度ガンをつけられたが、オレもオツキーも無視。

オレの目からは、どいつもこいつも女の手前、覚えたてのタバコを見栄で吸ってるように見えた。

暗黙の了解で屋上を後にしたオレたちは、自分らの部屋に戻る途中、男子便所で異様な光景を目にした。

3組と4組の生徒が、壮絶な殴り合いをしている。

それを数人のヤンキーがグルリと円を描いて腕を組んで観戦しているのだ。

見た瞬間、させられている喧嘩だと思った。

そして、ロビーの喧嘩とは違い、この喧嘩が教師らにバレることもないというのも直感で感じる。

オレとオツキーは、小便をする事なく、すぐに便所を出た。

「クラス代表が集って、誰が一番強いのか決めてんのかな？」

オツキーが情けない笑みを浮かべる。

「今更だろ。どうしてそんな必要あんの？」

・・・とは言ってみたものの、脳裏にテルの顔が浮かぶと同時に、野牛との全面戦争時の、芒の言葉を思い出す……………。

オレが、「1年の時はテルが大将だ！ 2年になってからは……………、まだ決まってるねえ〜だろ〜！」と叫ぶと、芒が不敵な笑みを浮かべながら、「バカかオメエーは。1年の最初っからタカノブが大将だろ〜が。……………テルだあ〜？ ……んなザコ、大将にした覚えはねえつ〜の。なあ、タカノブ〜、テルって知ってる？」

芒の問いに、「テル？ 何だ、それ」と、首を傾げたタカノブ。

『あつ、思い出したぞ。アレじゃね？ 何か、カンパをスゲー拒否ってたから、じゃ〜オメエーのクラス皆殺しにするぞってオレが言ったら、妙に素直になったヤツ。あまりにカワイソ〜だから、タカノブがトップの称号譲ってやるって言った事あつたる』

タカノブは、「あ〜、そんな事もあつたかもな」と言って鼻で笑った。

タカノブ、あるいは2年のまだ見ぬ強豪、最近力をつけてきた新鋭・
・・・そんなヤツらがまさかオレを潰そうってんじゃねえ〜だろ〜
な？ 竜崎や宮さんがいない修学旅行時を狙って・・・。

いや、それは、ない！

いくら何でもオレとやるって事は、1年の最精鋭の竜崎と総番長の
宮さんを敵に回すって事だぞ？！

アイツらもそんな事百も承知だろ。

・・・つつ〜か、いつの間にかオレ、竜崎と宮さんの庇護ひごに頼りき
ってる？ いやいやいや、後ろ盾がどうか関係なく、オレたちは
仲間だから。

そりゃ〜周りは七光りと思ってるかもしれないが、オレから言わせ
りゃ本末転倒だよ。

翌日、もちろん一睡もしなかったオレは、奈良公園で鹿に追い掛け
られるオツキーを見て、修学旅行1発目の眠気を吹き飛ばした。

血相を変え、本気で逃げまくるオツキー！。

今年一番くらいの爆笑の最中さなか、腹を抱えて笑う佐倉が視界に入る。

修学旅行中、佐倉に近づける機会はないもんか？と思っていた矢先、

絶好の好機が到来した。

その夜、奈良の夜景を部屋のベランダで一服しながら眺めていると・
・・・。

「なあジオン、女子のクラスに行こうぜ」

第201話 旅先で本領発揮するA型

意表をついたオツキーの言葉に、オレはコーヒーを吹き出した。

いやいやいや、そりゃ〜嬉しいけど、ムリだろ。

リックーたちを何とかスルーできたとしても、女子たちが・・・。

「先公共はさ、宴会場で盛り上がってるって話だ。行くなら今がチャンスなんだよ」

「・・・それが例え千載一遇せんざいのチャンスだとしても、アイツらが拒むだろ」

オレの頭に真っ先に浮かんだのはもちろんユイだ。

「実は今日、東大寺で奈良の大仏を見てる時さ、佐倉に聞いたら、今日の晩来てもいいって・・・」

大仏のような優しい笑顔でオツキーが言った。

マジかよ。

何なんだよコイツの行動力は・・・。

そうか、A型は旅先で羽を広げるモンな。

普段はガチガチの壁に覆われたA型のハートのガードも、今は意外と緩いのかもな。

……つつし事は、もしかして佐倉のハートのガードも？

「トコロでオツキー、目的は何だ？ まさかオメエ、お目当ての
コがいるんじゃない？ だるお？」

「……」

何顔赤くしてんだよ、キモイなコイツ。

冗談で言ったのに、まさか凶星ってか？！

女子の部屋も5人部屋。

佐倉の部屋には、浅野、小倉、川嶋、佐倉、そしてユイ。

誰が目当てだ？！

「昼間さ、バスの中で、男子全員にアンケートとってさ、クラスの女子の人気投票したのさ」

いるんだよね、こゝいうヤツ。

しっかしオツキー、ノリノリだね〜。

「へ〜、知らなかったな。・・・で、結果は？」

「3位が小倉」

へ〜、委員長の小倉が3位？　メガネっ娘の優等生、頼まれたらイヤと言えないAB型。

誰にでも優しいトコロが勝因か？

「2位は誰だと思う？」

そこでクイズかよ！

「うるせ〜、もったいぶらずに言え！」

「ユイ」

マジかよ?!　・・・つつつか、学園祭ライブのアレもあるし、妥当な結果なんだろうけど。

一見可愛く見えるし。

なにせ皆ユイの表面しか見てねえ〜からな。

中身を知ったらそんな軽口たたけねえ〜ぞ。

もし恋人なんかにしちゃったら、破天荒な我がままに一生振り回さ

れるぞ。

「実はさ、今ここでジオンがユイに一票入れたら、1位と2位が並ぶんだ」

へへ、人気投票1位の誰かとユイは接戦だったのか

「……で、ジオン、ユイに一票入れる気は？」

「さばさらねえよ」

「……だよな。ところでジオン、オマエは誰に一票入れる？」

さりげなく聞いてんじゃねえよ!!

テルには百歩譲って教えたが、オツキーには言いたくねえ。

コイツに言ったら絶対バラすに決まってる!

「いねえよ」

「はあ? いない?!」

オツキーが目を丸くした。

「ああ、別に好きな女とかいねえし……」

メツチャ嘘つきな、今のオレ。

「ジオン、それ、マジで言ってるの？ そんな超スケベそうなのッラして抱きたい女も、彼女にしてみたい女もないってか？」

ぶつとばされてえゝのかコノヤロオー！！

「ウチのクラスに票を入れてえゝ女がいねえゝんだよ！」

何ムキになってんだろ、オレ。

あんまり意地張ってつと、グダグダになりそゝ。

「分かったよ、そうムキになるなよ」

ふうゝ、オツキーがひいてくれた・・・。

「オツキー、てめえゝは誰に一票入れた？ もったいぶらずに言えつて」

「だ、誰にも言っつなよ」

「くどい！ オレが口が堅えゝのは知ってるんだろ？ 言え！」

「さ・・・、佐倉だよ」

「・・・あつそ」

聞かなくても何となく分かってたよ。

ふうん、オツキーが佐倉をね……。

……ん？ ライバルか？ いや、オツキーは敵じゃねえな、はじめから。

「で、人気投票の結果、1位は誰なんだよ？」

「……その佐倉だよ」

……な、なにイ……！！ クラス中がライバルだとお……？
！ な、な、なにを……！！

容姿も性格も申し分なく、大学を目指す優等生。

周りが放つとくはずもないか。

……やばい、うかうかしていると佐倉が誰かにとられる？！

何か、周りが全員敵に見えてきた……。

「じゃ、行くか、佐倉の部屋に」

「そここなくつちな、ジオン」

オツキーが佐倉を好きってのを口実に近づけば自然だ。

あとは隙をみて、オレが……!!

第202話 敗に因りて

いざ女子の部屋に来ると、ヤバイくらいマジで緊張した。

もう夜中の12時近いし、各部屋からは話し声が聞こえるものの、廊下は静まり返っている。

コン コン

オツキーがドアを叩いた。

「誰？」

怖い顔をしたユイがジャージ姿で現れた。

ユイの後ろに、同じく寝る前のカツコウをした佐倉たちがいる。

「どうして男子がこんな時間に訪ねてくるのよ」

布団の上でトランプをしていた委員長の小倉が迷惑そうな顔をしている。

「何の用よ」

人気投票2位のユイが、溜め息まじりに言った。

「あつ、昼間さ、佐倉が呼んでくれたから……」

オツキーがどきまぎ返答。

「えっ？ 佐倉、ホントにあの人たち呼んだの？！」

人気投票3位の小倉が佐倉に訊いた。

「い、いや……私、よ、呼んでないよ……」

人気投票1位の佐倉は、分かり易い嘘をついている。

オツキーは、「ウソ?!」とでも言いたげな顔で驚いた。

大方佐倉のヤツ、ユイや小倉の反応を見て、とっさに嘘をついぢま
つたに違いない。

ここはオツキーと佐倉を庇^{かば}ってやるか……。

「オレが勝手に来たんだよ。オツキーを無理矢理誘つてな。女の部
屋ってどんなかな」と思つてさ。案の定、男の部屋より広いし、何
より布団が綺麗だ」

「はあ？ アンタ、バカ……?！」

思いつきり眉をしかめるユイ。

・・・と、その時、遠くの方からリッキーの怒鳴り声が聞こえた。
教師の宴会終わりかよ?!

「就寝の時間だろっ！ さっさと寝れっ!！」

どっかの部屋の女子生徒たちが注意されている。

「ヤバイ、見回りだー!！」

オッキーがあたふたしている。

オレたちは玄関前の廊下にいるものの、運良く開いたドアの陰に隠れるカタチで立っているため、廊下の奥から歩いてくるリッキーにはまだ見付かかっていない。

オレたちは即行部屋に入ってドアを閉めた。

「ちょ、ちょっとアンタら、何勝手に人の部屋に入ってるのよ!！」

ユイが唇を尖^{とが}らせる。

「し、静かにしろ！ 皆そろって帰宅してえ〜のか?!！」

オレの一声で部屋にいた全員が一瞬で黙り込んだ。

「電気消してみんな布団にもぐれ。オッキーはオレと一緒にこっち来い!！」

オレとオツキーは急いでベランダに出た。

そこは7階。

とても下には逃げられない。

最悪逃げるとしたら、隣の部屋のベランダに回り込むしかない。

そうこうしているうちにユイはカーテンを閉め、電気を消した。

矢先、「ガン ガン」と、ドアを叩く音が響いた。

そして、部屋の中にリッキーが入ってきた気配がする。

・・・どこまで徹底した見回りしてんだよ！ あっぶねえくなあく、ここに逃げ込まなかつたらアウトだったぜ！ ・・・つつくかベランダ覗かれたら終わりだけだな。

オレの向かいで縮こまるオツキーは、鼻と口をつまんで息すら止めている。

噂では昨日ロビーで喧嘩してた2人の他、酒で2人、タバコで3人、計7人ほどがすでに帰宅させられてるって言うし、オレたちも見つかったら、その仲間入り確実なんだろうな。

オツキーもこの間の銀髪の件で目をつけられてるし、女の部屋で発見されたとなりゃ、言い訳は何一つ聞いちゃもらえねえくだろうな。

ある程度の覚悟をした頃、部屋の電気がついてカーテンが開いた。

「帰ったよ、リックイー」

ユイがベランダの戸を開けた。

その瞬間、一気に緊張が解け、ガツクリ力が抜けた。

オツキーは息を切らして布団に倒れ込み、女子たちに足蹴にされている。

「まったくアンタらのせいでこつちまで危険な目に遭ったんだかね！ でも、アタシたちが帰宅は絶対有り得ないけどね！」

「そりゃそ〜だよな。ユイの言う通り、オレらが一方的に悪いんだし。浅野、小倉、川嶋、佐倉、ユイ・・・、怖い思いさせちまってホント、スマン」

オレは心から素直に詫びた。

それが功を成したのか、部屋の空気が和み出した。

「すっごい恐かったけどさ、いい思い出じゃない？」

さすが佐倉だ！ その優しさ、そのフォロー、君はまさに女神！
オレの女神だ！！

やがて落ち着きを取り戻した頃、オツキーは女子たちに交じってU
NOウを始めた。

「ジオンも交ざれよ」

「いや、いゝよ。そんな気分じゃねえし・・・」

どうしてこんな貴重な時間、レアな場所で、カードを睨んでゲーム
せにゃなんのだ！・・・なんて言いたげな表情をしているオレ
だが、ホントはルールが分からないだけだったりする・・・。

一人離れたテーブルの椅子に腰掛けてると、向かい側にユイが座っ
た。

「れ？ ユイもルール知らねえの？」

「はい？ アンタU NO 出来ないの？」

「い、いや・・・」

あれ？ オレ、墓穴掘った？

「リックキーが来た時はヒヤヒヤしたわ。なんせ中にまで入ってくる
んだもん」

「あの変態ヤロオゝめ、なぜにそんな事するんだ？ 女の部屋に入
ってくるなんて・・・、なあ」

「アンタらみたいなのがいるからでしょよ！」

返す言葉ねえくな……。

「ここだけの話、オツキーがさ、佐倉が好きだって言うからよ」

アレ？ オレ、誰にも言わねえ〜とか、口は堅いとか言っというて、もうユイに言ってら〜。

「ふ〜ん。オツキーって佐倉が好きなんだ〜。言われてみればそうかもね〜……」

「誰にも言っくなよな！」

「それはどうかな？」

「ふざけんなよ」

「冗談よ。ところでアンタもさ〜、佐倉が好きなんですよ？」

へ？〜どうしてユイにバレてんの？〜！

・、あんなヤツ、好きになっちゃったんだろう……」

え？ てっきりズタボロになるまでノされると思ったら……。

「何かきっかけがあったから好きになったんだろ？ だからあんな高えギターをあげたりしたんだろ？」

「……」

ユイは口を閉ざしたまま俯うつむいた。

「噂では金持ちのボンボンって言うじゃねえか。そんなヤツにオマエのあげたギターの価値が分かるのか？」

「……」

「気持ちは伝えたのかよ?!」

「何よ、気持ちって」

「しらばっくれるなよ！ 好きなんだろ?! だったら気持ち、伝えろよ」

「……」

「バレンタインのチョコとはワケが違うだろ、80万だぞ80万！オマエ、高校生の80万って言ったら……」

「ジオン、アンタはアタシの……」

「保護者でも何でもねえよ！でも、オマエは保護者に言ったか？言ってねえくんだろ、親とかに」

「言えるワケないじゃない」

「だよな、だったら誰かが言わなきゃなんねえくだろ」

「何よ？説教？いいわよ言ってみなさいよ！アタシが誰に何をあげようが、そんなのアタシの勝手じゃない！アタシが誰に片想いしようが誰と両想いになるうが、アンタに関係ないじゃん！」

あゝあ、開き直っちゃったよ。

こうなりやテコでもダメだな・・・。

「分かったよ、好きにしろよ。その代わりに言うんだぞ。ちゃんと自分の気持ち、正直に I k a r U に言うんだぞ！」

「.....」

..... ったく、こんな調子じゃ一生告白なんてムリだな。

..... そくいうオレも、佐倉に告る勇氣ねえくけど。

「BARカシオンのバイトの帰り、2人だけで飲みに行った事があったの.....」

突然ユイが、聞いてもいないのに過去の話を語り出した。

『アタシが誰に片思いしようが誰と両思いになろうが、アンタに係ないじゃん!』なんて言ってしまう、少し言い過ぎたかな?なんて反省したのかな?

・・・で、何だっけ? B A Rカシオンの帰りに飲みだど? 高1の時か? 女は男より精神年齢が2つくらい上ってよく言うけど、彼女いない歴17年のオレからしたら、その年で異性と2人きりで夜中に飲みに行くだなんて、とても考えられん。

男同士や妄想でならいくらでもアリだが、それが現実の話で女性と2人きりでとか思うと、自分に当てはめると全く想像がつかない。

ユイのヤツ、オレより遙かに大人の世界を、肌で知っているのかもしれない。

「I k a r Uがまだ高3の時、夢を語ってた頃・・・」

やっぱりオレたちが1年の頃だ。

ユイのヤツ、全くそんなませた素振り見せなかったから、全然気付かなかつたぜ。

「その帰り、さりげなくキスされて・・・」

キ、キ、キ、キス~~~~?!

さりげなくK i s sだ~~~~?!

高校1年生の分際で、親の同意がなきゃ結婚も出来ない年齢のクセに、飲みに行った帰りにキスだとオ~~~~~??!!

「……………ただそれだけ。だから、アタシにも分かんない。自分の気持ちも曖昧だし、アイツだって、きっと同じだと思う。キスは……………、その時のノリって言うか……………、雰囲気って言うか……………。だから……………、好きとか嫌いとか、そんなんじゃない……………」

第204話 B型の恋は、意外に火が点くのが早い

衝撃だった。

ユイがオレよりも先にキスの経験があったなんて……。

皆そんな事を知らずにユイのファンクラブを作ったり、ライブで興奮したり……。

でも、たかがキス。

でも、されどキス。

もちろんユイにその気があったワケではない。

強引にI k a r Uがユイの唇を奪ったんだ。

ファーストキスを……、あのヤロオ〜が奪ったんだ。

でも、されたユイにもそれなりの隙があったワケで……。

あ~~~~、もう、ワケが分からん！！ とにかくキスをされた

ユイがその気になって好きになり・・・？ いや、今では好きかどうかも分からないんだっけ？・・・とにかく、Ikaruの晴れてデビューの日に、ギターをプレゼントしたのは確かだ。

なぜだ？ どうして好きかどうかも分かんないのに、80万もするギターを人にあげられるんだ？

恵まれない子供たちに寄付するならともかく、なぜ、金持ちのボンボンに・・・。

何でだ・・・？

・・・ここで、ユイに聞いた話やオレの考えも交え、少し冷静にまとめてみよう。

別にIkaruが金持ちの御曹司おんぞうしで赤いポルシェに乗ってるからって、ユイが玉の輿こし狙いでIkaruに接近したんじゃない。

たまたまなんだ、たまたま。

偶然なんだ、偶然。

BARカシオンの常連さん、ジェシーと仲が良かったバーテンダーのユイ。

そんなジェシーが初めて日本に来た時のホームステイ先が、Ik

a r Uの家。

偶然にもB A RカシオンでジェシーとI k a r Uはバッタリめぐり会う。

ジェシーの彼女のベッキーや、I k a r Uのバンド仲間も加わり、自然にユイの周りに輪が出来る。

ある時、ベッキーたちに好きな男性のタイプを聞かれるユイ。

たまたま視界に入ったI k a r Uを見て、アイツみたいに夢を追いつけてるヤツかな？・・・と答えたユイ。

その日を境に、ジェシーとベッキーの2人がユイとI k a r Uの仲を盛り上げ始める。

ある日、ジェシーとベッキーのあおりもあって、軽いノリで飲みに行った帰り道、ユイは突然I k a r Uにキスをされた。

意外に火が点くのが早いB型。

その時のキスが引き金となり、ユイの恋に火が点いて、徐々に恋愛感情が湧いてきたのは間違いない。

去年の学園祭ライブ。

前日飲み過ぎて声が出なくなったという、どろしよも無いI k a r Uの代わりに、ユイがヴォーカルを務めたりもした。

キスの後、約1年、何の発展もないまま時が流れたが、ユイの気持ちはずっと変わらなかった・・・と、思われる。

その証拠に、『アタシ、好きな人がいて、その人に近々告白しようと思ってるんですけど、上手くいく?』って誠さんに訊いていた。

そして先日、デビュー間近のIkaruがF・R・Sを欲しがってるのを知るユイ。

たまたまジェシーたちにそのエレキギターの事を聞いてみた所、ベツキーが持つてると言い出す。

ユイが欲しそうな様子を見ると、ベツキーが65%OFFで譲ってくれるという。

ついノリで、買っちゃう決意をする、B型ユイ。

確実にギターをあげる前は、Ikaruに恋してたはず。

・・・だが。

そんでギターを渡す際、絶好の告白チャンスだったにもかかわらず、告白できなかつたのは、自分の気持ちに正直になれなかつた恥じらい多き乙女だから・・・とか、そんな純情な理由じゃなく・・・。

80万もするギターをノリで買ったのはいいけど、よくよく冷静に考えてみると、ちょっと無謀かも?むしろ、アタシってバカ?・

・・・とか思ってたんだ、きつと。

もしI k a r Uがアタシの事何とも思ってたなかつたらアタシ、ホントにバカじゃん・・・なんて考えてるうちに、ユイに点いた恋の火も徐々に小さくなり、ギターは渡したものの、今ではホントにI k a r Uが好きなのかどうかも分からない・・・。

・・・つてのが、全貌ぜんぼうじゃね？

どっちにしろ、このままじゃイカンだろ。

I k a r Uの気持ちを聞くべきだし、その前にユイは、自分の気持ちをハッキリさせるべきだ。

でも、あれから1度も会ってなくて、お互い連絡もないという。

今では『アタシにも分かんない。自分の気持ちも曖昧だし、アイツだって、きつと同じだと思う。キスは・・・、その時のノリって言うか・・・、雰囲気って言うか・・・。だから・・・、好きとか嫌いとか、そんなんじゃない・・・』なんて言っているが・・・。

どっちにしろ、好きなのか嫌いなのか、どうでもいいのかハッキリさせ、その上で自分の気持ちをしっかり伝えるべきだ。

もし、お互い好き同士なら、オレだって何の文句もねえよ。

でも、I k a r Uに何の気持ちもなく、ただおふざけでユイの唇を奪ったってんなら、オレは黙ってねえぞ、と。

一発、いや、80万円分ほど殴らせてもらいてえ。

……つてのがオレの本音だが、ユイが「アタシが誰とキスしようがアタシの勝手でしょ」って言うんなら、それはただのおせっかいってヤツかもな。

「ユイ、必ず、ちゃんと自分の気持ち、正直にI k a r Uに言うんだぞ！」

「……」

「分かったのか？」

「……分かってるわよ」

1時を回り、3回目のUNOが終わった頃、ユイに頼んで廊下に誰もいないのを確認してもらった。

「チャンスよ。今のうち、とっとと消えな」

「サンキュ、ユイ」

「もう、2度と来るな！」

そんなユイの後ろで、佐倉がニツコリ微笑んだ。

思えば佐倉と会話すらしてねえぞ……。

何かユイのせいで、オレと佐倉の距離が縮まらないような気がする。

壁になつてるのか？ ユイが、オレたちの恋の障害に……？

……なんて言い訳だよナ。

ただ単に、オレの勇気が足りないだけ。

ユイと同じ。

告白するってのは、並大抵の勇気じゃ足りない……。

その帰りの廊下で、昨日便所で殴り合いをしていたヤツの一人が、
1組のヤンキー4人に頭を鷲掴みにされ、便所に消えた。

その1組のヤンキー4人って言うのは、タカノブや貴船の子分と思
われるヤツらだ。

便所に連れて行かれたのは、3組のヤンキー。

オレたちはそれを横目で見ながら、無言のまま部屋に戻った。

女子の部屋に行った事や、今しがた見た他のクラスの揉め事などで

興奮した心を落ち着かせるべく、ベランダでタバコに火をつけると、オッキーもベランダにやってきた。

「ジオン……」

「何だよ」

「竜崎も宮さんもいないんだし、誰かと揉めたりすんなよ……」

「誰かって、誰だよ？」

「タ、タカノブ……とか」

その名前、虫酸が走る。

「オレが竜崎や宮さんがいねえと、何もできねえとチキンヤロオ
ーとでも思ってたのか、コラ?!」

「お、思ってたねえよ！ 思ってたねえから言ってるんだろ！ 誰も
オマエを止めらんねえから言ってるんだよ！！ タカノブとジオン
が揉めたら、武蔵は破滅するぞ!!」

第205話 銀河と小宇宙

タカノブとオレが揉めたら武蔵が破滅するだど?!

オイオイ、買いかぶり過ぎじゃねえか? タカノブと対等に見られるのは嬉しいけど、噂ではタカノブってギャラクシーの一員だつて言っじゃねえか。

そんなヤツとオレが揉めたら武蔵は破滅つて、そりゃ〜オレは強いけどさあ〜。

長山たちとか、芒にも勝つてるしね〜。

「もし竜崎、ジオン、宮さんの3人と、暴走族、例えばギャラクシーが戦争とかになったら・・・」

・・・オイ、やっぱり竜崎と宮さんを含めてタカノブと並べてたら、オツキー!!!

オレを随分買ってるから、オカシイと思っただぜ。

「戦争? ギャラクシーと? 仮にオレがタカノブと揉めたとして、ど〜してそこまで発展すんの。オツキーは相変わらず大袈裟だなあ〜」

「考えてもみる、もしジオンとタカノブが揉めたら、竜崎はともかく宮さんは黙ってねえぞ！　所したらタカノブは絶対バツクのギヤラクシーを出すって。所したら宮さんを吉岡の大橋とか野牛の長須とかが庇うだろ。そうすると、ギヤラクシーはコスモを出すって！」

「コスモ?!　それはねえくだろ・・・」

ちなみにコスモってのは、オレもよやくく知る暴走族。

中学時代にちょっとした因縁がある。

今は思い出したくもない苦い過去だ。

なので、コスモという名を耳にするだけで不快さが増す。

「ギヤラクシーは独立系だけど、噂ではコスモの傘下らしいぜ」

マジかよ！　ギヤラクシーってのは、てっきりそこら辺のヤンキーが勝手に作った最近出来たチームだと思ってたけど・・・。

「元々コスモは暴力団の準構成員が作ったチームだろ？　ヤクザはやバイって。悪い事言わねえく、タカノブと揉めるのだけはやめとけ、ジオン」

「でも、分かんねえくけど、この間のKHJだっけ？　野牛との全面戦争を主催した会社。大橋の話だと、主催者がギヤラクシー絡みだった話だ。分析するに、長須のバツクにギヤラクシーがついてる

と思うんだ、オレは。野牛に乗り込んだ時、駅の駐輪場の片隅でタバコを吸って屯たむろしてた中坊が、「ここいらギヤラクシーの縄張りじや」って言うってたし。だから、もし喧嘩になっても大丈夫だ。長須と宮さんはマブダチなんだから。・・・ま、その前にオレはタカノブと揉める気はさらさらねえし、あんなヤツと喧嘩なんかするはずねえくだろ」

「そくしてくれよな」

・・・つたく、A型はマイナス指向の小心翼翼しよつしんみくみく、恐がりだから困る。

次の日、徹夜が3日目ともなると、さすがに疲れてくる。

男子生徒の中で、何人が脱落者が出たらしい。

中でも最悪なのが、寝不足がバス酔いを誘発し、車中で嘔吐おうとするヤツが現れた事だ。

おかげで女子から批難の声が多数上がった。

なので、今後は続けたいヤツだけ続ける事になった。

オツキーはここぞとばかり寝やがったが、オレは意地でも寝ない覚悟を決めた。

このオレ様をナメてるオツキーに、モノホンのド根性魂を見せてやる！

金閣寺と銀閣寺を拝観し、次の観光地へ移動中、前の席に座っていたユイが話し掛けてきた。

「ジオン、アンタもいい加減寝れば？　せつかくこれから今日のメインの清水寺なのに、そんなんじや楽しめないじゃん」

「移動と観光の繰り返しでど〜楽しめつての。京都なんか年とつたらのんびり来ればいいんだよ」

「アンタに京都の何が分かんよ！！」

カラオケ中のバスガイドも一瞬声を止めるほどデカイ声で、新鮮組好きのユイが怒鳴りやがった。

「うるさいぞ、うるしー！！」

リックイーに怒鳴られ、オレとユイは身を縮めた。

清水寺を観光中、とんでもない噂を耳にした。

「大変だ、ジオン」

オツキーが血相を変えて飛んてくる。

「何だよ」

「オレらが知らない所で、どうやら2年のトップを決めてるらしいぜ。2年の強いヤツらが集まって、トーナメント形式でやり合つて

るらしい」

マジ？・・・便所で喧嘩してたヤツらの事か？！

「長山は？」

「長山は棄権きけんしたらしいよ」

「どうしてオレらのクラスはそのトーナメントを免まぬれたんだ？」

進学クラスなんぞ眼中にねえ〜ってか？ それとも……………。

「免れて正解だよ。だって、そのトーナメントの勝者はタカノブと一騎打ちらしい」

「はあ？ タカノブと一騎打ちだと〜？ 何だ、それ。やらせてんのはタカノブかよ。アイツは何様だ。そんなにタカノブって強え〜のか？」

今までは陰の支配者ってカンジだったが、今度は本格的に天下統一を目論いけんんでるのか？ 戦いくさすんのがめんどくせえ〜から、トーナメントで勝ち上がったヤツとタイマンはって、勝てたら御慰おなぐさみてか？

「結局、2組の旗本はたもとってヤツが優勝したらしいよ」

「旗本？ あ〜、何となく分かる気がする。小太りのヤツだろ？」

「そうそう、一言で言えば、デブ」

オツキーと大差ないような気もするが……………。

「フン、どこでもいいぜ。誰が勝とうが誰がタカノブとやるうが、オレにはカンケ〜ねえ〜し」

「ジオンの言う通りだ。デキレースって噂もあるしな。誰もタカノブと喧嘩したがんねえ〜だろ？ ギャラクシー敵に回すくらいなら、毎月カンパに協力した方がいいって皆思ってるだろうしさ」

「じゃ〜、どうして今更トーナメントとかやってんだよ」

「やっぱり文句言うヤツいるんだよ。もちろん陰でだけどさ。そういうヤツらへの見せしめもあるんじゃないかねえ〜の？ あとは、文句があるならかかって来いってカンジ？」

フン、ますますどこでもいいぜ。

頼むから放っておいてくれ・・・ってカンジだ。

「ジオン、しつこいようだけど、オレたちは隔てを置く^{へだ}からな。せっかく宮さんらのお陰でカンパを免れてんだし・・・」

「くどい・・・」

・・・フン。

ウチのクラスがカンパを免れてんのはオレが拒んでるからだよ。

・・・ま、竜崎と宮さんがオレの傍にいつもいるから向こうも口出
しできないんだろうけど。

その夜、予想だにできなかった、とんでもない事件が起きた。

コン コン

夜中の2時過ぎ、突然部屋のドアが鳴った。

こんな夜更けに部屋を訪ねてくる無法者は、一体誰だ？！

青井が代表でドアを開け、廊下に出た。

そして……。

「ジオン君、旗本君が呼んでるよ……」

青井が言った。

旗本？ 清水寺でそいつの話題は出たけどさ、オレ、そいつと面識ねえし。

旗本って、例のデブだろ？ 例の2年のトップを決めるトーナメント優勝の。

何？ まさかオレに挑戦表明？ タカノブ戦を前にオレとタイマン？！

「何？ 何て言ってるの？ オレに何の用だって？！」

「し、知らないよ・・・」

青井は無責任にも、そそくさと布団に戻り、当たり前かのようにケータイのゲームをやり出した。

「旗本だつて？ ど、どうすんだ？ ジオン」

「ど、どこもどこもねえ、だろ・・・」

やれやれ・・・、どくなる事やら。

・・・こゝなりや出たところ勝負だ。

何の準備もなく廊下に出ると、そこには1組のヤンキーが4人、そして、顔を腫らした旗本がいた。

右目が開かず、左目は充血し、額には血のついた絆創膏、右頬は腫れ上がり、唇は血豆がついている。

それって、もしかしてトーナメントを勝ち抜いてきた代償？ それとも・・・。

「高城さんがお呼びだ」

旗本が言った。

旗本は、アゴでこっちに来いと合図し、オレを廊下の向こうに歩かせる。

1組のヤンキー4人は、後ろからついてきた。

急激にノドが乾き、急所がすくみ上がる。

・・・何の前触れもなく、修羅場ってヤツは、突然やってくるもんだなあ。

ホント、イヤになるぜ……………。

第206話 皆殺しのメロディー

中学の時のリンチを思い出す。

来る日も来る日もやられたっけ……。

あの時のトラウマなのか、こゝいうのって、やっぱり身がすくむ。

逃げ出せないし、抵抗する力も湧かないし……。

ただ、歩かされるがままオレは歩いた。

どのくらい歩いたのだろうか……。

自分の部屋から1組のタカノブの部屋までの距離が、ものすごく長く感じた。

やがてその部屋に着くと、廊下に1組のヤンキー4人が並び、待機した。

見張りか何かのつもりか？ オレを、どくするつもりだ？！

旗本がドアを叩くと、中から「何だ」と声がする。

「高城さん、連れてきました・・・」

「旗本君、サンキュー！ あと、オマエ行っていいよ。どうせ弱えくし、何の役にも立たなそうだし」

中から聞こえたタカノブの声に追いやられ、旗本は俯うつむきながら廊下を歩いていった。

トーナメントの勝者はタカノブと一騎打ち・・・だったよな？ この流れを見る限り、旗本はタカノブに負けた・・・と見るのが妥当だろうか。

さてさて、どうしたもんかな？ 修羅場って、直感で分かるよネ。

あゝ、今がそれなんだな〜って思う・・・。

何か、今まさに修羅場が始まる・・・ってカンジ。

「どひぞ〜」

中からタカノブの声が聞こえる。

紳士的にも聞こえる言葉遣いだが、オレを一方的にここに呼び出すという行為からして、すでに紳士的ではない。

・・・し、ノコノコ呼ばれてやってくるオレも、ど〜かしている。

そう、オレは決断に迫^{せま}られていた。

入る前に、究極の選択の答えを出す必要がある。

へびに睨まれたカエルの如き、情けないシヤバ憎として、成すがままされるがまま、焼くなり煮るなり好きにさせるのか。

それとも、大人として、紳士的な話し合いで解決を望むのか。

はたまた、暴力には暴力で、一步も退かない態度で臨むべきか。

その際は、ギャラクシーを敵に回す覚悟が必要だ。

・・・と、その時、オレの脳裏に貴船の顔が浮かんだ。

すっかり忘れていたが、タカノブのそばには常に貴船がいる。

貴船と揉める〃今後、中学の時のヤツらを芋づる式に呼び出してしまふ可能性大！ それだけは・・・、避けたい！！

「早く入れよ」

1組のヤンキーの1人が言った。

じ、時間がない。

オレは貴船が中にいないのを祈りながら、意を決して中に入った。

オレの部屋と、さほど変わりのない、旅館部屋の一室。

束ねた布団の上に座り、壁に背を持たせ掛けるタカノブ。

その前方に、ポケットに手を入れて立っている貴船がいた。

部屋にはタカノブと貴船の2人しかいないのだが、何十人ものヤンキーを目の前にしたような威圧感、重圧感がある。

一体コイツらは、何の用があつてオレをここに呼んだのだろうか？

竜崎や宮さんがいない、今がオレをやるチャンスだと思っているのだろうか？

助けがない、今が・・・？

・・・だとしたら、お門違かどいだぜ。

オレは自分のケツは自分で拭くさ。

それに、竜崎や宮さんも、人の喧嘩に首を突っ込むような事はしない。

目の前でオレがボコられてても、黙って腕を組んで見守ってるようなヤツらだからな・・・。

はじめに口を開いたのはタカノブだった。

「芒はさく、メンドくだからジオンには声掛けるなって言ったんだけど、コイツがうるさくってさ」

タカノブは貴船を指差す。

「嘘つくニヤイ、タカちん」

貴船が蹴り真似をすると、タカノブはそれを煙たそうに払い除けた。

「でもさく、みんなやってんのに、自分だけやらないのって、ズルくない？ ジオン君はそく思わない？」

タカノブがタバコを取り出しながら言った。

「ハイな〜」

貴船がタカノブのタバコに火をつけた。

上下関係はタカノブの方が上なのか？ さっきの貴船の蹴り真似と
か見る限り、対等ともとれるが……。

「ズルイ？ 何の事だよ……」

「金」

タカノブは指で円を作った。

カンパの件か……。

ま、避けては通れねえよな。

いつかはこゝろいう日が来るとは思ってたぜ。

もちろん精一杯避けてきたし、考えないように努めてきたけど……ね。

「他のクラスはみんなやってるのによにさあゝ、5組だけやってにやいんだよゝん。そゝろの放っておくのとてさあゝ、良くないじやゝん、みたいな？ だってさあゝ、みんなに示しつかニヤイじゃゝん」

貴船が楽しそうに言った。

な、何なんだコイツのキャラは……。

対面すんの初めてだから今まで知らなかったが、貴船ってこんなキヤラだったの？！

あの武闘派揃いの石田中のトップだったから、コイツもてつきり硬派なヤンキーなのかと思っていたが……。

「ほらさゝ、一人やるとみんなやっちゃうだろ？ みんな払ってん

のにさく、5組だけ払わないってのは正義に反しねえか？ もう6ヶ月分溜まつてるけど、どうすんの？ みんなやってたし、ズルはダメだろ」

みんな、みんなって、A B型独特だよな。

みんなが行列に並んでるから・・・とか、みんなが買うから・・・とか、絶対多数の意見に従い易いのがA B型の特徴だ。

それに、正義に反するだと？ 何が正義だ、コラア〜！！

「1年や3年も払ってんのかよ？ ……っていうか、誰に払うんだよ。何の為に払うんだよ」

「今はまだ、オレたちの力量不足でさ、2年にしか払ってもらってないのね。だからさ、徐々にみんなに協力してもらおうとは思ってるんだ」

竜崎や宮さんが払うワケねえ〜だろ、クソが……。

「だから、誰に払うんだよ。何の為に?!」

「ムキになるなよ」

鋭い目はそのまま、不敵に笑うタカノブ。

「ジオンちゃん、怒っちゃイヤ〜ン」

貴船……、てめえ〜はオネエキャラか?! ……そ〜いえば、

オネエキャラにはA型が多いって、前に何かで見たっけ。

貴船はA型か？！

「オレらのクラスは毎月2万もの金を出す気はねえよ。誰に、何の為に、んな大金払わなきゃなんねえんだ？ アア？！」

「誰に払うとか、何の為にとか、そんなの払う意志のないヤツに教える義理はない」

その辺さすがに抜け目ないな。

それが頭脳派、AB型の厄介な所だ。

「集めてる理由も分かんねえよカンパに協力できっかよ。おめえらの好きにはしねえよ、オレらは」

「じゃあオメエーのクラス、皆殺しにするぞオー！！」

貴船がニヤニヤしながらファイティングポーズをとった。

結局テルの時と同じってワケか？！

テルはそう言われて素直にカンパに協力したらしいが、オレはそんなに甘くねえぞ。

・・・つつか、コレって、テルの仇かたき？

・・・だとしたら、オレ、キレルよ?!

ギャラクシー? コスモ? 全員敵に回してやるよ。

中学の時のヤツら? 全員まとめてやってやるよ。

それがテルの敵討ちで、アイツへせめてもの餞はなむけになるんなら、オレ
はいつでも死ぬ覚悟できてっから!!

皆殺しにしてやるよ・・・。

第207話 AB型はしたたかだ

貴船の「じゃ〜オメエーのクラス、皆殺しにするぞー!!」という、ふざけた態度と言葉に対し、オレはブチキレ寸前。

あのテルは、芒の「じゃ〜オメエーのクラス皆殺しにするぞ」という言葉で素直に従った。

もし貴船がそれを覚えててそのセリフを使ったのなら、オレはコイツを許さねえ。

……って、オレはブチキレ寸前なのだが、心の中のもう一人のオレは、冷静にこう言う。

『待て、オレ。もう少し状況を見て判断を下せ。暴れるのはいつでも出来る。それは最終手段でいいだろ？ 今はまだ、待て。状況を見る』と、言う。

なぜ、あのテルが素直に従ったのか……。

テルは、『……予想では、ギャラクシーが絡んでるんじゃないかと思うんだ。ジオン、ヘタに逆らうんじゃないねえ〜ぞ』と言っていた。

やはり、暴走族を敵に回すのは、生命線を失う行為だろうか？

そしてもう一つ、さっきからオレの頭をフラッシュバックする面々。

コスモの中島、小西。

オレをさんざんイジメてくれた、東村、中田、典山。

そして、「腐ったみかん」こと、前田丈。

オレの中学時代の因縁のあるヤツらだ。

もし、貴船とぶつかった場合、もしかすると・・・、いや、高確率でヤツらも出てくる。

さらに、ギャラクシーとぶつかった場合、野牛との全面戦争時に見たKHJのホスト連中のような、厳いかつい面々も出てくる可能性、大だ。

ヘタすりゃ野牛、ギャラクシー、コスモ、ヤクザを一気に敵に回す。

・・・やっべ〜〜よ。

・・・やっべ〜〜よ、マジで。

・・・と、オレが懸命に頭を冷やしていると、タカノブが鋭い目を

光らせながら口を開いた。

「オレらも払ってんだよ」

マジかよ。

もしそれが本当なら、タカノブがギャラクシーって噂は嘘なのか？
それとも、ギャラクシーより上のヤツらが金を集めてるのか？

・・・だとしたら、ブチキレなかったのは正解か？！

「この間の、学園祭での事件あつたら？ 総番長のクラスの屋台が
燃えた事件。アレって、彼の自作自演って噂あるんだけど、信じる
か？」

タカノブが聞いてきた。

はあ？ 宮さんの自作自演？ ありえねえ〜だろ！！

「宮さんはあの時、体育館でライブを観てた」

ライブの前に、火の元を確認するふりをして凶行に及んだんだけって
言われりゃ、返答に困るが・・・。

宮さんの自作自演はありえねえ〜。

「ここでオレから提案があるんだ」

タカノブが身を乗り出した。

「提案？」

「どうか、ジオン君。オレらのチームに入らないか？」

勧誘？ コイツ、やっぱりギャラクシーだったのか？！

「わ〜〜お！ タカちゃんがギャラクシーに勧誘すんのは珍しいよ〜〜。オレっちだつて誘われた事にやいによい〜」

「貴船、少し黙ってる。オマエは誘ってもどうせ入らねえ〜だろ〜が」

「分つかる〜？ オレっちがゾツキー嫌いなワツケ〜。オレっち群れるの嫌いなねん。つるむのは3人が限度なのねん。みちるっちがいなくなつて、淋しい反面せ〜せ〜してるオレっちもいるのねん。ボクちゃん悪いコ？」

な、何なんだ、この貴船つてヤツは……。

ツツコミ所が見付からない……。

「ジオン君なら即、幹部だよ。そんでさ、ギャラクシーっていう正義の名の下にさ、オレらで新時代を築こつよ」

「正義？」

「そう、正義。ここでは何だから、一度さ、集会に来て、総長と話してみよう。ギャラクシーの理念っていうの？ ジオン君なら理解できると思うよ」

「.....」

「あの古い頭のさ、昭和のパソコンみてえな頭の総番長を排除してさ、今の番長だか何だか分かんねえけど、そんな旧式の制度じゃなく、新しいルールでさ.....」

「待てよ。宮さんを排除だ？ アア〜?!」

考えるまでもなく、オレの口が動いていた。

「そう、分かったよ。交渉決裂つてワケね？ オレたちは今日から敵だね、フッフ。てつきりジオン君は、あの総番長に無理矢理子分にさせられてるのかと思ってたけど、違ってたみたいだね。いいよいよ〜、フッフ」

何がおかしい？ まるで最初からこうなるのを望んでたみてえな笑みを溢しやがって。

「2年のトップは誰なんだ？」

オレは唐突に聞いた。

ささ、どう答える、タカノブ。

「さくね……」

そう来たか……。

タカノブ……、A B型……、こいつは頭脳戦になるな。

カV S力じゃなく、頭V S頭か……。

「話はそれだけか？ ……だったらもう用はねえよな？ じゃな」

オレは震える体を抑えながら向きを変えた。

帰り際、タカノブが捨て台詞をはいた。

「万が一、総番長とか上のモンがいなくなった時の保険としてさ、ギヤラクシー入りを勧めただけだね、残念だったよ。オレとジョン君が、大衆の面前で勝負する時が来るかもね……」

威嚇いかくや脅おどしではない、本心だ。

直感でそう思った。

今までタカノブは、慎重に言葉を選びながら、本音を出さずに話をしてきた。

それは未知の相手を前にして、警戒心もあつたらうが、一番はA B型の特徴でもある、心の内を相手に見せないしたたかさ。

だがしかし、最後の言葉には、真実なるキーワードが散りばめられているような気がした。

コイツの狙いは、単純に芒戦の弔い合戦だけではない。

何か、何か大きな狙いがあるんだ・・・。

オレはただならぬ恐怖を感じた。

第208話 佐倉からの誘い

部屋に戻ると、皆バツが悪そうに下を向いていた。

コイツら、オレが人生最大のピンチだって時に誰も助けにこねえんだモンな。

人命救助の前に我が身の安全が優先だって言う気持ちは分かるけどさ、せめてオレが帰ってきた時くらい、温かい^{あたたか}労いの言葉くらいかけてくれよ……。

などと心の中で思いながら、オレは何か言いたげだったオツキーを無視してベランダに出てタバコに火をつけた。

「ホントは助けに行きたかったんだけど、ジオンのジヤマはしたくなくってさ。オレが入って状況を悪化させちまう可能性もあるだろ？ ほら、ジオンは人の事になるとすぐにムキになるしさ……」

オツキーはオレの顔を見るや、間髪を入れず言い訳をはじめた。

どーでもいいーが最初に一言、「大丈夫だったか？」くらい言えねえのか、コイツは。

謝るのが苦手なA型の気持ちは分かるけどさ、そうやって自分を正

当化させるのはよせよ、こんな時。

見苦しいぞ。

「ジオンが入っていった部屋の前にさ、1組のヤツが4人も張ってたんだけど、オレ、恐くねえ〜からさ、全然恐くねえ〜から、そんなの。でもさ、オレがアイツらとやっちまったらさ、どうせバツクが出てきて……」

「タカノブにギャラクシーに入んねえ〜かって言われたよ」

「マジ？ マジ、マジ、マジ〜〜〜?! マジかヨ、ジオン!! チャンスじゃねえ〜か! なっかなか、ないぞ、そんなチャンス」

オツキーはまるでシンバルを叩くオモチヤのチンパンジーのように活発な動きをしながらニツカリ笑った。

「ハッキリ断ったけどな」

「こ、断ったあ〜〜?! はあ? 何考えてんだヨ、ジオン!!」

「自分の意志に従っただけだ」

貴船じゃないが、群れるのはゴメンだ。

鳥や魚なんかそうだけど、一匹だと弱いから、強く大きく見せる為に群れるんだ。

昔からそうだけど、オレは一匹狼が性に合ってるしな。

「長いものには巻かれろってことわざ知らないのか？ 勢力ある者には反抗しないで、我慢して従ってた方が得策だつて言う意味だよ。せつかくのチャンスを棒に振りやがって、勿体ねえ〜なあ〜」

「何とでも言え」

「……あとは？ 他には何もなかったのか？」

「それだけだ……」

そう、それだけ……だ。

修学旅行4日目、東寺を見学後、御大層な料亭で昼食を食べ、ナント力会館で舞妓さんの京舞、夕飯後は旅館で太夫道中を観た。

結局、修学旅行中一睡もしないっていう、たわけな愚挙は一掃削除し、最終日の夜は爆睡。

次の日は道中、新幹線の中。

高校生活の一大イベント、修学旅行はこうして幕を閉じた。

修学旅行って、もっと楽しいモンだと思ってたけど、とどのつまり、こんなモンなのか？ ロクな思い出ねえ〜ぞ！

……ああ、分かった、全っ然、女つ気なかつたからだ！ 佐倉の「さ」の字もなかつたモンな、今回。

つまんねえの……なんて思った矢先、晴天の霹靂が訪れた。

帰りの新幹線、窓際のオツキーは爆睡。

オレも襲い来る睡魔と争うのは止め、昨夜と同様、重い瞼を閉じようとした瞬間……。

「ジオン君」

「ひいっ」

思わず情けない声を上げてしまった。

佐倉が通路にしゃがみ込み、オレの肘掛け部分にチョココンと両手を置いて優しい笑顔を見せた。

「話があるの」

佐倉は、オレの情けない声を確実に聞いていたはずなのに、全くその事に触れる気配はない。

何て心優しい女性だ！

「……は、話って何？」

「……では、ちょっと……」

佐倉は周りを気にしながら小声で言った。

修学旅行の帰りの車内、起きているのはオレたち2人だけなんじゃないかと思うほど、みんな静まり返っていて、ス〜ス〜と寝息があちこちから聞こえる。

みんな寝てるのに、今は出来ない話だつて〜？

「じゃ〜、駅に着いたら、駅前の喫茶店で話を聞こうか？」

「ウン、そろしてもらえると有り難いかな」

へ？ とりあえずチケット〜に言ってみただけなのに？！ 半分・・・いや、99パーセント、シャレで言ってみただけなのに・・・マジ?!?!

「じゃ、じゃ〜、え、駅に着いたら・・・」

「ウン、じゃ〜、後でね」

「あ、ああ」

佐倉はゆるいウェーブの長い髪をハラリと靡^{なび}かせ、シャンプーの良い匂いを残して小走りであつた。

第209話 秀麗

ナーーーーーイス！ ナツ、イーーーーーッス！！ オレ、ナー
ーーーーイス！

よくもまあ無意識だったにもかかわらず、あんなセリフが出たもんだ。

喫茶店！ 佐倉と2人で喫茶店！ 今から、2人きりで！ あ・り・え・．．．ねえ~~~~い！！

きゃっほ~~~~い！！

何、この超ラッキーな出来事、何？ くっだらねえ〜思い出しかなかった修学旅行が一気に彩いろどられたよ。

眠気なんぞ一切吹き飛んだオレは、オツキーのメガネをズラして閉じてる瞼まぶたに目を書いたり、額に第三の目を書いたり、少々調子付いてみた。

何か、力が湧いてくるぜ！ 今ならタカノブに余裕で勝てそうな気がする。

2-1のクラスが乗ってる車両に殴り込んでやるうか？

いや、佐倉とのデート前に喧嘩はねえよナ。

デート？ あれ、デート？ 違うよ、デートじゃなくって、ただの「お話」だってば！ オ・ト・ナの、お・は・な・し！！

「ウフフ、ウフフ」

「ウルセいなジオン。何、不気味に笑ってんだよ」

「ウフフ。あつ、起こしちゃったか？ ウフフ？ 何ってコレはアレだよ、のらえもんの笑い方の練習だよ」

「一生やってる」

「ウフフ」

オレがのらえもんの笑い方を真似ているうちに、新幹線は石田駅に到着。

生徒たちは終礼が終わると疲れきった顔で散り散りになった。

ユイやクラスメイトたちと「じゃ〜ね〜」と手を振り別れた佐倉が、オレがオツキーと別れた頃合を見計らい、周りの様子を見ながら近づいてきた。

「じゃ、行こっか」

うつひよ〜〜〜っ！ 佐倉と2人きりで喫茶店だ〜〜〜！！！！

夜7時の石田駅前のアーケード、オレの左斜め後ろを1メートルほど距離を置いて歩く佐倉。

これが夢ではなく現実でありますようにと、何度も願いながら歩くオレ。

「ここなんて、どうだ？」

BARの看板なんぞを、照れ隠しを含めた冗談で指差すと・・・。

「私たち制服だし！」

すぐさま笑顔でツッコんでくれる佐倉。

第6感まで冴え渡っている今、このどこでもいっく会話も、一生忘れず記憶されそく、などと考えていると・・・。

「にっこにっしょ」

佐倉が意外にも店を選んだ。

「ダック？」

「いや？」

「いやいやいや、全然OK」

ダクドナルド、通称ダック。

たまに竜崎や宮さんと入る、ただのファーストフード店だ。

この前宮さんが、当たり前かのようにハンバーガーを10個食べてたっけ……。

何かこう、雰囲気のある店でワインとかで乾杯とかすんのかと期待してたけど、所詮初デートで入る店なんてこんなモンか……。

……つつくか、デートじゃないよナ、コレ。

てへへ……。

「私、コーヒー」

「じゃ、オレも珈琲」

ホントはてりやきバーガーセットにしたかったが、ついカッコつけてしまった。

「あっちの席空いてるね。行こっ」

佐倉って意外と積極的なんだな。

A型の女の子って、後ろから黙ってついて来るタイプばかりじゃないんだな……。

片隅の小さなテーブルで佐倉と2人きり。

まさに夢のようだ。

……と、思ったのも束の間だった。

佐倉の右斜め後ろの席に、タカノブとその舎弟と思われる1組のヤンキー4人が座ったからだ。

あの4人はオレがタカノブに呼び出された時、部屋の外で見張りをしていたヤツら。

貴船の姿はない。

なぜによりにもよってこのタイミングにアイツらがここに現れるんだ？！

マジ、ありえねえ〜！　せつかくの佐倉との幻想的で最高のシーンが台無しだ！

「どっしたの？」

「いや、何でもないよ」

佐倉が心配そうにオレを見る。

それもそのはず、今のオレは明らかに動揺している。

頭部から血の気が引いていくのが自分でも良く分かる。

両手の指の先まで冷たさを感じる。

この異常気象でうだるような暑さの今日、いくら店内のクーラーの下とはいえ、この体の冷えは異常だ。

タカノブなんかにビビってるつもりはないんだが、どうやらオレの体は過敏に反応するらしい……。

……とは表向きのおれの思考で、結局のところ、タカノブに畏怖いふしてるって事だ。

何なんだ、あのヤロオのクソオーラ！ 周りのヤンキーだって良く見ると、1人1人、それ相当のワルだし、それなりに修羅場を潜ってる感が漂っているのだが、あのタカノブのオーラだけは半端ねえ。

今更席を替えるのも変だし、アイツらオレに気付いてねえくみてえくだし、知らんぷり知らんぷり。

「やだ、あの人たちウチの学校の不良じゃない？」

佐倉がタカノブたちを見て怯えた表情を見せる。

「さあくな……」

オレは佐倉に心配させないようにという配慮も含め、完全に知らんぷりを決め込む。

こっからオレは、思考回路を目の前の佐倉だけに向け、周りの世界は一切シャットアウトしよう。

「あのね、話っているのはね……」

佐倉が身を乗り出すようにオレの近くに顔を寄せる。

その間、約30センチメートル。

こんなに近くで見る佐倉、初めてだ。

佐倉って意外とそばかす多いんだナ……。

第210話 一時しのぎ

ゴクリ

オレは生唾を呑んだ。

・・・まさか、オレの事を好き、だとか？ 付き合っ
て欲しい・・・
とか？ ウ、ウフフ。

「話っているのは・・・？」

「ユイの事なんだけど」

「ユイ？」

は、ははは、そ、そ、だよナ、告白じゃないヨナ、このタイミング
で。

オレの事好きだとしても、ダクドナルドで告白はねえよナ。

でも、よくよく考えると、嫌いなヤツやど、でもい、ヤツと、2人
きりでダックなんかに来ねえよナ。

あのオツキーすら間に入れないオレと佐倉の関係ってコレ、期待で
きんじゃない？ 今後につながるヨネ？ ウ、ウフフ。

「私、もう再三言ってるんだけど、あのコ、頑固でしょ。私の言う事聞いてくれないの」

「ユイのガンコさはピカイチだからな。アイツB型だし」

「そう、そこなの。ジオン君は血液型に詳しいんだよね。ジオン君ならさ、ユイを説得できるんじゃないかと思って」

「説得？ 何を？」

「沖田君から聞いたんだけど、ジオン君たちバンド組んで練習してるんでしょ？ 秋のライブ出るために」

「まあ、それが理想だけど現実には厳しいかな」

「ヴォーカルいねえし」。

「沖田君も言ってたけど、ユイがジオン君のバンドのヴォーカルやったらスゴイと思うの」

え？ 何、この展開。

佐倉、オレらのバンドの応援してくれんの？

「そりゃアイツがヴォーカルやったら凄ええと思うけど、一筋縄じゃいかねえしだろ」

「そこでジオン君の出番なのよ。あのユイを説得できるのはジオン

君しかないのよ」

「もしかして話って、それ？」

「ウン。だって私は前から散々頼んでたから、もうすでにクドイって思われてるだろうし、ユイの前でまたこの話してたら、あのゴドんどん引いちやうでしょ？ ね、お願い、ジオン君たちのバンドにさう、ユイを入れてあげてよ」

そこまで言われちゃ、しよゝがねえゝな……。

「分かったよ。ベストは尽くしてみるけど、期待すんなよ」

絶対遂行すいこうしてやるよ！ ジオンの名に懸けて、絶対オレたちのバンドに入れてみせるよ、ユイを……！！

「ありがとう」

デヘヘ。

佐倉に笑顔でお礼を言われちった。

ところで……、話ってそれだけなのかな？

……と、その時！

「あいつ、5組の亀じゃね？」

タカノブの向かい側に座っているヤンキーが後ろを振り返り、オレたちの方を見て大きな声をあげた。

その瞬間、当然のようにタカノブと目が合う。

一番恐れていた事が起きた。

「ジオン君……」

佐倉が今にも泣き出しそうな目でオレを見つめる。

佐倉はこういうシチュエーションに弱いのだろうか？ 思えばカラオケに長山が現れた時も佐倉、泣いてたっけ……。

「いい女連れてんじゃね？」

タカノブの隣のヤンキーが言った。

女の前だからって、ここでオレが威勢を張ったら只ただのヤンキー。

残念ながら今のオレは第6感まで冴え渡ってるし、かなり冷静だ。

だからと言って、バカにされて黙ってるほどお人好しでもねえ〜けどな。

「なあ〜佐倉。怯えた顔してっけど、昔何かあったの？ 何かトラウマとかあるのか？ ああ〜いうヤツら、怖い？」

タカノブたちを見ないようにしながら佐倉に聞いた。

これしきで泣かれてたら、オレの女つとまんねえぞ・・・、なんてね。

「何にもないけど、そ〜いうの嫌いなもの。ど〜して男の人は喧嘩とかするの？ ど〜して皆仲良く出来ないの？」

佐倉のそんな言葉を聞いて、ユイの言葉を思い出した。

『暴力はサイテー』『喧嘩するヤツは女にモテない』『プライドを傷つけられた時以外は何があっても手を出すな』

今の状況は、この3原則の『喧嘩するヤツは女にモテない』に該当すんのかな？

・・・でも大丈夫、オレは自分からは手を出さねえ〜から。

第211話 ジオン君と一緒だと・・・

『オレとジオン君が、大衆の面前で勝負する時が来るかもね・・・』
ふと、そんなタカノブの言葉を思い出した。

気が付くとオレは、タカノブに向けてかなりの威圧的オーラを放っていた。

タカノブの周りの4人は硬直状態。

ついにタカノブと一触即発の瞬間が訪れた。

距離はあるが、オレとタカノブは睨み合い、心の中で対峙した。

タカノブはオレを見る時は、たいてい三日月のような目で不敵な笑みを浮かべていたものだが、今はタカのような鋭い目でオレを睨み付けている。

オレもお返しをするように、眉間に大きく皺しわを寄せてタカノブを睨み付けた。

声には出さないが、タカノブの隣のヤンキーが鬼のような形相で、「何ガン飛ばしてんだよ!!!」と口パクをしたのが分かった。

タカノブの周りの4人は、今にも襲い掛かってきそうな勢いだ。

佐倉は席を立ち、「ジオン君、行こう、ねっ！」と言って、オレの手を引いた。

その時、手が震えてる事に気が付いたオレは、とっさに佐倉から手を離れた。

何で手が震えるんだよ？　まるでオレがタカノブにビビってるみてえくじゃねえくか？！

そんな手の震えを隠すようにポケットに手を入れたオレは、タカノブたちから目を逸らすと、そのまま出口だけを睨み付けながら店を出た。

・・・ふう、どうにか助かった・・・が、一時しのぎかもな。

もう、タカノブとの一戦は避けられねえくかも。

店のシャッターは所々下ろされ人影まばらなアーケード、オレの先を佐倉は、背中を丸めながら黙々歩いている。

街路灯が、道と佐倉を淋しく照らす。

真っ直ぐのびる佐倉の影と、オレの影。

ゴメンよ佐倉、巻き込みたくなかったけど、結果的に巻き込んだのかもしれない・・・な。

でも、何て言ったらいいのかな？ 男ってのは、不器用な生き物でさ、女を守る為にさ、時には命を張って戦わなきゃなんねえ〜んだよ・・・みたいなの？

オレみたいなさ、一端のヤンキーってのはさ、常に喧嘩？ 何つ〜のかな、修羅の中で生きてっからさ。

でもさ、カツコつけるワケじゃねえ〜けど、あんなヤツらワケねえ〜し、ぶっちゃけ余裕？ いざとなったら、あんなヤツらコテンパン、みたいなの？

ま、オレは自分からは手を出さないけどね。

ギャラクシーの一員だっという噂で名を売って、1年の時から学校内で恐れられてたタカノブ。

そんな大物と睨み合ったオレを見て、佐倉はどう思ったかな？

ヤンキー5人を前にして、一步も引かなかったオレを見て、ちょっとは見直したかな？

カツコ良かったかな？

・・・それより、心配してっかもな。

「佐倉、心配いらねえ〜かな。タカノブとはいずれ決着つけなきゃなんねえ〜けど、オレ、絶対負けねえ〜から」

言っちまったよ、オレ。

言ったからにはタカノブをやっつけねえ〜と、男が廃すたるかな？　・

・ 八八八。

「ジオン君と一緒にだと、いつもこうなるよね……」
ボソツと佐倉が呟いた。

血の気が引いていくのが分かる。

今までオレが思い描いていた佐倉の心の中と、オレの心の中とは、思い切りズレがあったようだ。

よく街角で、スポーツカーに乗ったキザ男が女性の前を通り過ぎる時、エンジンをふかしてカッコつけてたりするけど、あれは当の本人だけが車と自分に酔っていて、女性は別に車も男もカッコいいとは思ってないし、むしろ迷惑だと思っただけ。

そんな光景と今のオレが妙にダブって見える。

さらに、オツキーの言葉を思い出した。

『ジオンが入っていった部屋の前にさ、1組のヤツが4人も張ってたんだけど、オレ、恐くねえ〜からさ、全然恐くねえ〜から、そんなの。でもさ、オレがアイツらとやっちまったらさ、どうせバツクが出てきて……』

オツキー、かなり見苦しかったけど、佐倉にとってオレも……、同じじゃん。

情けなさと、恥ずかしさで、一気に虚しさを感じた。

穴があつたら入りたい……。

「じゃ、また学校でね」

手を振って走り去る佐倉。

笑顔だったが、それは明らかに引き攣った笑顔だった。

『ジオン君と一緒にだと、いつもこうなるよね……』

そんな、何気ない一言が痛烈にオレの胸に突き刺さる。

その後も、佐倉の言葉が何度も頭の中を駆け巡った。

街の灯りに暗い影を隠しながら、逃げるようにオレは走った。

ただ、ひたすら家に向かって走った。

今はもう、何も考えられない。

考えたくない。

布団だけが、オレの頼りだ！！

第212話 飛進しますっ!!

清々しい朝の光と鳥の囀り。さえず

時計の針は9時をさす。

昨夜は夜9時に寝たから、だいたい12時間寝た。

でも、まだ眠いや。

今日は休みだし、もう少し寝ていよう。。。

。。。。そして。

清々しい朝の光と鳥の囀り。さえず

時計の針は8時をさす。

え？

「お兄ちゃん、学校に遅れるよ」

詩乃舞しのぶの声。

何かがオカシイ。

あれ？

それからしばらくしてオレは、何と35時間爆睡ばくすいしていた事に気が付いた。

体力は回復できたが、せつかくの休みが無駄になった気がして、その日は学校を休んだ。

次の日、皆と一日遅れの修学旅行明け初日。

3年間の高校生活もここで折り返し地点に入る。

1年の時はテルとだけつるんでたけど、2年になってからは竜崎、宮さんと仲良くなって青春ロードを鷲進ほくしん中だ。

今後の目標は1つ、佐倉と付き合う事！！

その夢が叶えば、オレの人生、もう薔薇色ひば、立派な勝ち組だ。

学校に着くなり、下駄箱で竜崎と会った。

「久しぶりっス。京都は楽しかったっスか？」

うん、そう聞かれると困るな。

ぶつちやけ楽しくはなかったもんな。

寝るの我慢してたり、女子の部屋でリッキーの見回りにビビったり、タカノブ、貴船と対峙した思い出くらいしかねえもんな。

あつ、でも、佐倉と2人きりでダックに行ったつげ。

でも、アレは修学旅行後？ いや、家に着くまでが修学旅行だよな。

そこは譲れない。

「ボチボチかな」

「その答えが出るまで随分間があつたつスね、今」

「そうか？ あつ、そうだ、後でお土産渡すから、昼休み、いつものトコロに来いよ」

「写真部の部室つスね、了解つス。話は変わるんスけど、昨日タカノブさんから勧誘されたつス。ギヤラクシー入りを」

「な・ん・…にイ〜〜〜？ マジでかあ〜〜〜?!」

「凄いリアクションつスね。断つたつスよ、もちろん。オレは暴走族とかに入るつもりは更々（さらさら）ないつス。群れるのも嫌いだし」

タカノブのヤロオー、竜崎にまで手を伸ばしやがって、一体何を企んでやがるんだ。

駒を集めて勢力拡大ってか？ ふざけやがって！

「宮さんも誘われたりしてんのか？」

「それはないっしょ。宮さんが断るの目に見えてるだろうし、総番長には今の話内緒ねって言われたっすよ、タカノブさんに」

タカノブさんタカノブさん……って、どうしてあのヤロオーにさん付けなんだよ。

竜崎からしたらタカノブは年上だからか？ ……フン、それくらい、別にいいけどよオー。

「内緒なのに、オレには話していいのか？」

「だってジオンさん、宮さんに言わないっしょ？」

「まあ、怒るの目に見えてるしな」

「でしょ？ じゃ、そ〜いうワケで、宮さんには内緒っすよ、くれぐれも……」

「見縊るな。オレはメツチャ口堅いし、ここだけの話を洩らすような野暮はしねえよ。その代わり、内緒にできねえ話、その場で断り入れるけどな。内緒？ 約束はできねえってな。その点、今の件は、オレも内緒ってのに賛同するよ」

「嬉しいっす」

「なあ、竜崎……」

「何aska?」

「……いや、何でもない」

オレもタカノブにギャラクシー入りを勧められたって事を、喉仏のどぼとけの
辺りまで出掛かったのだが、オレは竜崎に言うのをやめた。

「あつ、それから、ジオンさんの事を言っていました」

「は? オレの事? タカノブが?! 何て」

「ケジメをつける意味でもジオンさんとタイマンで戦いたいと・・・
で、勝つても負けてもお互い、いがみ合いはなく、それでスッキリ
させたい・・・と。タカノブさんは野牛と全面戦争した時のよう
な大きい大会での勝負を望んでるみたいっス。オレも出場を呼びか
けられたんスけど、オレはもう、大会には絶対出ないって言ったっ
ス」

タカノブがオレと大会での勝負を望んでるだど?! 自分の本音を
話して竜崎の信頼を築き、まずはオレの周辺から、ジワジワとオレ
を追い込む腹積つつもりか? フン、はなはだ緻密ちみつな作戦だがな、オレ
にはお見通しだぞ、タカノブ!!

「竜崎、オマエはどう思う? このままだと向こうの思惑通りオレ
はアイツとリングで戦う羽目はめになる」

「あくまで決めるのはジオンさんっスから、参考程度に聞いて下さ
い。オレは戦いをオススメするっス。向こうはただのケンカではな

く、リングの上で、ルールのある勝負を勧めてきたっス。その点では、こう言ったら何ですけど、宮さんたちのような野蛮な考えではなく、紳士的にも思えるし、勝ち負けに関係なく戦う事で平和的解決を望んでるんス」

その時オレは、タカノブとの会話を思い出した。

『ジオン君なら即、幹部だよ。そんでさ、ギャラクシーっていう正義の名の下にさ、オレらで新時代を築こうよ。ここでは何だから、一度さ、集会に来て、総長と話してみてよ。ギャラクシーの理念っていうの？ ジオン君なら理解できると思うよ。あの古い頭のさ、昭和のパソコンみてえな頭の総番長を排除してさ、今の番長だか何だか分かんねえけど、そんな旧式の制度じゃなく、新しいルールでさ・・・』

竜崎は、タカノブのそんな意見に賛同したのか？・・・まさかな。

「紳士なら、どうして戦わないで解決できないんだろくな？」

「周りの目があるからでしょ？ タカノブさんは2年で誰が一番強いか決めるため、トーナメントを作り、それで勝ち上がった。トップに立ちたい人たち皆に平等に権利を与えたんス。そっからして筋を通してっスよ、あの人」

「はあ？ どうしてオマエが2年でトーナメントがあつた事知ってるんだ？」

「皆知ってるっスよ。それは宮さんも知ってるっス。修学旅行中、

誰が勝ちあがるのか宮さんも気にしてましたから」

オレが知らないトコロでそんな話しが広まってたのか？ 何が筋だ！ そのクソトーナメントにはタカノブはエントリーすらされてねえくんだぞ、ホントは。

優勝した旗本をラストに叩いて優勝杯を横取りしただけ。

竜崎たちの誤解・・・つつくか、タカノブのすり込みも、ここまでくると感心するぞ。

真実を弁明する気も起きねえくや。

「タカノブさんはトーナメントで優勝した実績を引っかけ、今まで2年のトップに君臨していたジオンさんに挑戦するんすよ。常に挑戦者に狙われるのはチャンピオンの宿命ですが、たとえジオンさんがタカノブさんの挑戦を拒んでも、オレは何も言つつもりはないっすよ。受けるのも拒否するのも、それはジオンさんの自由っすから」

オレがチャンピオン？ タカノブが挑戦者？ 何だその図式は？！

竜崎や宮さん、学校中の皆がそんな目でオレを見てるってのか？

それが本当だとしたら、そうさせたのはオレにも原因があるのかもしれない…………。

オレは、カンパの件とか竜崎たちに伏せてるし、少しでも竜崎や宮さんの前でカッコつけたい一心で、タカノブたちと常に対等、いや、

それ以上の存在でいようとしたから。

・・・ケジメをつけなきゃいけないのは、オレの方かもしれない。

第213話 禁秘

竜崎との会話の内容を、さっそくオツキーに話すと・・・。

「う〜ん、タカノブはジオンをそう見たのか。チャンピオンねえ〜。・・・なら、拒む理由はねえ〜だろ。ガンバレ、ジオン！」

「はあ？」

そうじゃねえ〜だろ、何がガンバレだ！ 他人事ひとことだと思って！！
これがタカノブのシナリオだって事に気付かねえ〜のか？！ アイツはオレの事をチャンピオンだなんて思ってたねえ〜し、自分が挑戦者だとも思ってたねえ〜。

それにオレは何のチャンピオンなの？ シャバ僧のチャンピオンなら認めるけどさ。

いつも竜崎や宮さんのそばにいるから、そんなオレを『お山の大将』って言うてバカにしてるだけなんだよ、アイツは。

そんな折、隣のユイがさらに追い討ちをかけてきた。

「実はアタシ、タカノブって人から直接オファーが来たの。大会に出ないか？って」

衝撃が脳天から心臓に達し、急所が^{すく}竦んだ。

あのヤロオー、竜崎だけじゃなく・・・、ユイにまで！ 一体、何を考えてるんだ！！

「・・・で？」

「アタシは断ったけど、アンタと戦いたいって言ってたわ。表面でしかないけど、正々堂々とした印象を受けたわ。澄んだ瞳^めをしている人よね。学校も含めて、世の中を良くしていきたいって言ってたわ。興味がなかったからすぐに追い払ったけど」

「・・・」

もう、言葉もない。

昼休み、ドキドキしながら写真部の部室に向かった。

竜崎、ユイに続き、まさか宮さんまでも勧誘されてないよな？

部室に着くと、宮さんが荒れていた。

ドゴオッ

宮さんに殴られた壁が大きく^{へこ}凹む。

「直接オレの所に来たってんだ！ どいつもこいつもネチネチとオ

レの周りから攻めやがって!!」

「ど〜したんですか？」

鼻からSL並みの煙出てるよ、宮さん。

「ギャラクシーが動き出した。オレを潰そうとしてるらしい。ちぎしよ〜、やるなら力で来いってんだ!!」

「ど〜いう事ですか？ 何があつたんです？」

宮さん、まあ〜まあ〜、落ち着いて。

「竜ちゃんがギャラクシーに勧誘された!!」

なにイ〜?! 宮さん、知ってるぞオ〜〜!

ヤバイ、宮さんの怒りがMAXだ。

このまま川の流れに身を任せてしまつては全員破滅する。

核のスイッチが押され、地球が丸ごと爆発するようなもんだ。

何とかせねば……。

B型の怒りはまず、親身になつて話を聞くこと。

B型は初めは中々本音を語らないが、こっちが相手を包み込むくら

いの器量と誠意を見せればイける。

間もなく宮さんを落ち着かせることに成功し、その後聞いた話によれば、竜崎が勧誘されたという情報は朝露さんから入手したようだ。

「ギヤラクシー」、「勧誘」というキーワードはあるものの、「タカノブ」という言葉は出ない。

「タカノブ」なんぞ、そんな名前は宮さんの耳には入ってないのか、それとも興味がないので聞き流してるのかは分からない。

尤も宮さん^{もつ}からしたら、タカノブなんて武蔵の兵隊のうちにも入らない、ただのザコのようなモンかもしれない。

話によると、ギヤラクシーが宮さんを潰そうとしているという噂は、色んな所から耳に入ってくるという。

不確かな情報ではあるものの、現実にはありえない話ではない為、警戒心も含めて精神的に宮さんを追い詰めたらしい。

オレにはタカノブという敵が見えているが、宮さんにはハッキリ見える敵^{ふんげき}がないのも、憤怒要因の一つのようだ。

さらに、竜崎の登場が、宮さんの心火^{しんか}に拍車を掛けた。

「あれ？ 2人とも深刻な顔してどくしたんスかあ？」

「おつ、竜崎、コレ、京都のお土産！ 宮さんもどうぞー！！」

ぎこちないタイミングだったが、場の空気を和ませる意味も含め、オレは修学旅行のお土産の「お茶」と「お菓子」と「蕎麦そば」を出した。

「竜ちゃん、ギョラクシーに勧誘されたって、本当？」

無視っすかあゝゝ？！ オレのお土産ムシっすかあゝゝ？？！
！ 1人につき3点もあるのにイゝ！ こんな太っ腹なのにイゝ？
！ しかも宮さん単刀直入に聞くからホラ、竜崎オレを疑ってるし
！ 竜崎、絶対オレを疑ってたから！ ジオンさんのヤツ、『オレはメツチャ口堅い』とか言ってたクセに、即行コレかヨ・・・って思ってたから、竜崎！！

「何のことっすか？」

竜崎がトボケた！ それはオレが宮さんに言うはずがないって信頼してのことなのか？ それともオレと宮さんの2人を見下して、軽視しての言動なのか？

その時、今朝の竜崎との会話を思い出した。

オレが、「見くびるな。オレはメツチャ口堅いし、ここだけの話を洩らすような野暮はしねえよ。その代わり、内緒にできねえ話
は、その場で断り入れるけどな。内緒？ 約束はできねえってな
その点、今の件は、オレも内緒つてのに賛同するよ」と言つと、竜崎は、「嬉しいっす」と言つて笑顔を見せた。

あの時の竜崎のオレを尊敬するような眼差しと返答を思い出す限り、竜崎はオレを信頼してここは口を閉ざしたってのが妥当だな。

・・・と、すると、オレと竜崎の関係は継続を保てるが、竜崎と宮さんの間にはズレが生じる。

案の定宮さんは納得がいかず、奥歯を噛み締めているようだ。

証拠がない上、本人の口からその事実はないと言われた以上、宮さんもこれ以上追及できない。

ここでオレがタカノブに勧誘されたことを切り出せば少しは場を取り持つ事が出来るかもしれないが、ぶっちゃけ今更言いにくい。

カンパの件を隠してるからかもしれないが、タカノブって名すら、この2人の前では出したくない。

でも、たとえオツキーを口止めしてギャラクシーの不審な動きを宮さんに隠したとしても、他から情報が入ってる以上たいして意味がない。

ここはオレ、竜崎、宮さんラインの足並みの乱れを揃そろえておくのが先か？

でも、宮さんの暴走だけは何としても避けたい・・・。

さんざん迷った挙句、タカノブのギャラクシー勧誘の件は宮さんには伏せた。

そんな些細な隠し事が、オレたちの友情に亀裂を入れる行為だとは思ってもせずに……。

第214話 王者VS挑戦者 対戦カード発表

あの時、少しでも宮さんに、タカノブの警戒心を持たせていれば、あんな最悪の事態は避けられたのかもしれない。

その日の午後、3年の宮さんのクラスに、柴を従えたタカノブが現れ、こう言ったらしい。

「修学旅行中、2年で誰が一番強いのか、トーナメントで公正に決めました。オレは初戦から正々堂々勝ち上がり、一応トーナメントで優勝しました。元々トップのジオン君と、ケジメをつける意味で、タイムンでの勝負を望んでいます。もちろん武蔵の総番長に見届け人になってもらいたいんですが、オレはさらに公明正大な裁決を希望します。そこで、遺恨を防ぐ意味で、大会での勝負を望んでるんです」

それに対し宮さんは、「てめえ〜がギャラクシーの一員だって事くらい、オレが知らねえ〜でも思ってたのか？ てめえ〜ら、何を企んでやがる？」とタカノブに突っかった。

するとタカノブは……。

「オレとジオン君の喧嘩は、ギャラクシーは一切絡んでませんよ。さらに大会後も、勝ち負けに関係なく、ジオン君には一切手を出さない事は約束します。それに、ギャラクシーとKHJサイドは、武

蔵、吉岡、野牛の番長さん方に対し、一目置いてますから。もうすぐ卒業する皆さんには、このまま波風立てず、平和に学校を去ってもらおう事を願ってますよ」

・・・と、いかにも紳士的な振る舞いで、首尾よく宮さんに語ったという事実を知ったのは、随分あとのことだ。

タカノブの巧妙な演技とでも言おうか、いや、むしろタカノブは元々演技などしていないのかもしれない。

腹の内を誰にも見せず、表面では紳士的な振る舞いを見せるタカノブに対し、宮さんが手も足も、口すらも出せなかったのは言うまでもない。

何とも言いがたい複雑な心境だったのは火を見るより明らかだが、宮さんはこの時、『ジオンVSタカノブ』に対し、警戒心を持たない、むしろ、持てない状況に誘^{いそ}われていたワケだ。

宮さんからすれば、タカノブ、ギヤラクシーの魔の手からオレを守ってやりたい反面、オレの個人的な戦いに首を突っ込むワケにもいかず、歯痒い思いをしていたに違いない。

事実上、『ジオンVSタカノブ』の一戦は、『宮さんVSギヤラクシー』、『武蔵VSギヤラクシー』の代理戦争ではなく、一つの個人戦として、オレに全てが託されたワケである。

吉岡の番長、大橋剛太から、大会の対戦カードが発表されたのは、それから間もなくの事だった。

10月1日、宮さんのケータイに大橋からメールが来た。

内容はこうだ。

『KHJから書面で正式に大会の詳細が届いた。放課後、武蔵の近くの公園に、宮、亀鶴、竜崎、白鳥の4人で来い』

まさに寝耳に水。

宮さんはいつの間にかすでに大会への参加を承諾していたらしい。

オフアーを持ち掛けたのはKHJ。

今回もまた、大橋が仲介人として宮さんとKHJの橋渡しになり、進行を取り仕切っていたのだった。

総番長の宮さんに挑戦するのは笹商の生徒で、その試合が大会のメインらしい。

竜崎は、大橋や野牛の仲村シンとの協議により、宮さんの敗北は9パーセント有り得ないという結論に達し、宮さんの武蔵代表としての出場を許可したという。

オレの知らない所でそんな事があつたなんて……。

どうしてオレに一言なかったんだ？

・・・そんな気持ちでいっぱいだった。

竜崎も宮さんも、オレに秘密にしていたり、わざと黙っていたりしたワケじゃなく、オレが直接タカノブと話を進めていて、とっくに大会の全容は把握していると思っただけらしい。

・・・と、いうのを知ったのも、随分と後のことだ。

その日の放課後、学校近くの第3公園に、オレとユイ、オツキー、竜崎、宮さんの5人が行き着いた時には、すでに大橋が「遅いぞ」と言わんばかりの顔で腕を組んで待っていた。

大橋の足元には、デカビタの瓶と、コーラとコーヒーの空き缶が置いてあり、どのくらい待ったのか気になったが、その事には誰も触れなかったので、オレも知らんぷりをした。

「前回の武蔵VS野牛の全面戦争時の宮VS長須の一戦もそうだし、全勝も駆り立てて、実質的に武蔵がこの辺りの学校のトップに立ったのは言うまでもない」

大橋のそんな言葉に、誰も反論はない。

「それを踏まえて今回のメインを飾るのはもちろん武蔵。そして、チャンピオンに挑戦するのが大会のテーマだ」

「ガッハッハッハ」

大会のテーマを聞いて、宮さんが大きく笑った。

ま、笑うしかねえよな。

「大会のコンセプトとしては、・・・従来通り、学校同士が戦いくさとかやって最終的に命を落したり、ヤクザの抗争にまで発展するような戦乱になるより、・・・初めからこうやってルールがあったり、・・・誰かが止めてくれたりする、・・・限度がある喧嘩が出来る環境があれば、犠牲者も最小限に納まるってのが念頭にあつて、・・・戦いを通して弱い者が強い者に挑む勇気とかを見る人に感じ取ってもらいたいって言うの？ 大会の運営を通して、企業や社会の繁栄に貢献し、選手一人一人の成長と支援が・・・」

大橋は自分の言葉で上手く表現できなくなるやいなや、すぐに手に持ってる文面を読み出した。

ま、相変わらずKHJ側の綺麗事だな。

「前回の大会名は『武蔵VS野牛 全面戦争』だったけど、今回の大会名は『王者VS挑戦者』だ」

大橋が真顔で言った。

「ガッハッハッハ」

大会名を聞いて、宮さんがさらに笑う。

笑うしかねえよ、まったく。

//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//

王者VS挑戦者

時 10月14日(日) 夜 8時30分〜

場所 野牛港 第3倉庫 特設ステージ

主催 株式会社 KHJ

協力 釜桐町ホストクラブ連盟
野牛シュートボクシング協会

//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//

前回同様、野牛港の第3倉庫の特設ステージ・・・あのリングか。

主催者は相変わらずKHJ、例のホスト軍団。

オレは、対戦カードを見て絶句した。

「本当にこのカードを組みやがった……。オレに何の許可も
なく……………」

// //

王者VS挑戦者 対戦カード

第1試合 上泉学園 内紛争

王者 霧島義行きりしまよしゆき（上泉3年） VS 挑戦者 坂本一樹さかもと かずき（上泉1年）

第2試合 宝蔵学院 内紛争

王者 東条アキラあついでい（宝蔵3年） VS 挑戦者 松田光太まつだ こうた（宝蔵2年）

第3試合 塚原学園 内紛争

王者 西田栄作にしだ えいさく（塚原2年） VS 挑戦者 柳タケシやなぎ（塚原2年）

第4試合 セミファイナルむなし 武蔵高等学校 内 紛争

王者 かめつる 亀鶴ジオン（武蔵2年） VS 挑戦者 たかぎのぶゆき 高城伸之（武蔵2年）

第5試合 メインイベント 武蔵高等学校 VS 笹城商業高等学校 みよし

王者 みやだいぢ 宮大地（武蔵3年） VS 挑戦者 つらみかずなり 浦上和也（笹城3年）

レフェリー 大橋剛太（吉岡3年）

//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//
//

オレが王者だと?!

第1試合 上泉学園 内 紛争

王者 霧島義行（上泉3年） VS 挑戦者 坂本一樹（上泉1年）

第2試合 宝蔵学院 内 紛争

王者 東条アキラ（宝蔵3年） VS 挑戦者 松田光太（宝蔵2年）

第3試合 塚原学園 内 紛争

王者 西田栄作（塚原2年） VS 挑戦者 柳タケシ（塚原2年）

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「上泉とか塚原ってヤンキーいたんスか？ 宝蔵に限っては、優等生揃いの進学校じゃ・・・？」

竜崎が宮さんに聞いた。

「……………」

宮さんは首を傾げる。

「今回、実は学校同士の抗争も特になくて、吉岡も野牛も出ないから、しょうがなくその3校に頼んで提供試合を出してもらったんだ

よ。埋め合わせってのがバレバレだよな」

大橋が大会の内情をちょっぴり暴露。

「あっはっはっは、あっはっはっはっは、あはははははは」

どこがツボなのか分からないが、オツキーが糸が切れた凧たこのように笑い転げている。

「何がそんなにオカシイの？」

さすがにユイがツッコんだ。

「だってさ、ロクなカードが出揃わないからってさ、何もあんなマジメな学校から人を出さなくってもさ、あっはっはっは」

どうせ大方、他人事ひとごとだからって気が緩んでるんだろ？ 一生笑ってる、オツキー。

しかし、よく考えると、最初の3試合が埋め合わせって事は、残りのオレと宮さんの試合の為だけに、今回の大会を催もよほしたって事か？！

宮さんならともかく、どうしてオレをそんなに買ってるんだ、KH
Jは……？ ……って思いたい所だが、オレは単なるタカノブの噛かませ犬だよな、やっぱり。

それはさて置き、どうして今回、竜崎とユイは出場しねえ〜んだ？
オレと宮さんの試合が組まれてなのに、不公平じゃねえ〜か！！

集客を見込むなら、断然オレなんかより竜崎とかユイの方がいい
て！

抗争がないからか？ 今からでも遅くない！ 誰かと抗争しろ、抗
争！！

「今回の大会は、武蔵、宝蔵、上泉、塚原、笹城の5校、さらには
吉岡、野牛の生徒も観客として集う。おそらく、前回の武蔵VS野
牛の全面戦争を越える、まさに前代未聞のビッグイベントになるこ
とだろう」

そう言うと大橋は、口を一字に結んだ。

マジかよ！ そんな大舞台で大恥じかきたくねえぞオレは！！
それに、タカノブの噛ませ犬もゴメンだ。

それでいて、もしタカノブに勝てたとしても、その後続々挑戦者が
現れて、狙われ続ける人生つてもゴメンこうむる！

「話しはそれだけ？ アタシ、バイトがあるから帰るね」

ユイが背中を向ける。

あ~~~~、ズルイ~~~~！ 自分は大会に出場しないからって！
オレも帰る~~~~！ そしてそのまま、お家うちに引きこもる~~~~！ 5、
6年、誰の顔も見たくな~~~~い~~~~！！

「ちょっと待ってよユイちゃんさん。こっからが本題なんだから」

本題だと？

「何よ！ アタシはどんだけ頼まれたって、そんなクダラナイ大会出ないからね」

クダラナイ？ 言ってくれるじゃねえの。

こっちは命懸けだつてのに、クダラナイだつて？ ……つてのは冗談で、オレもそれほど意気込みねえけどさ。

宮さんもユイの毒舌どくせつには慣れたもんで、いちいち受け止めず、ちゃんと聞き流す術も身に着けている。

竜崎に至つては、まるで「オレもユイさんの意見に同意見っス」とでも言いたげな表情で、「クダラナイ？」を小声で連呼して、一人でニヤついている。

オツキーはいつになく険しい表情でメガネのレンズを光らせ、「クダラナイつてのは選手たちに失礼じゃね？」と、ユイには絶対聞かえないような極小の声で呟いた。

ま、色んな意見あるさね。

「実は今回試合をしない代わりに、ユイちゃんさんはジオン君のセコンド、竜崎君は宮のセコンドに付けてくれないか？ と、KHJ側からの要望なんだ」

ユイがオレのセコンド？

「え〜〜つ、ふざけないでよ！ どうしてアタシがジオンのセコンドなんかに行く必要があるのよ。オツキーがいるじゃない！ オツキーは前回ジオンのセコンドやってるんだし」

「いや、今回はユイちゃんさんに、是非と・・・」

そりゃ〜、この間大活躍したユイや竜崎はKHJにとって金のなる木だよ。

ユイには男性ファンが、竜崎には女性ファンが多数存在するのは武蔵に通う生徒には周知の事実。

ユイと竜崎の2人がカードに名を連ねるだけで、集客アップは間違いないだろうし。

現にオレみたいなヤツが今回セミファイナルに立てるのは、前回の芒戦の余波も多少はあるだろうが、ユイや竜崎の活躍、そして宮さんの七光りがあるからに違いない。

おそらくKHJは、たとえセコンドでも、ユイと竜崎の存在だけは今大会も欠かせないと踏んだんだろうな・・・。

「じゃ〜、ど〜してオツキーはここにいるのよー！」

「・・・」

大橋は困った表情でオツキーを見る。

「オレ、やっぱりここにいちやダメだった？ ゴメン、オレ、呼ばれてないのに勝手に来ただけです・・・」

バツが悪そうに、オツキーは頭を掻いた。

「ユイ、KHJじゃなく、オレからの頼みだったらどうだ？ 当日、オレのセコンドに付いてくんねえかな？ それと、オツキーもまた頼むよ」

大橋やオツキーをフォローするわけじゃないけど、ユイがオレのセコンドに付くってのはオレ的にもありがたい。

なぜなら、ユイには『神野流古武術』があるからだ！ アレを習得できれば、オレの勝機も増すってモンだ。

それに、あの人にも、また会いたい！！

「.....」

ユイが黙り込む。

すぐに否定しないトコロを見ると、満更でもないに見える。

もう一息だ。

B型は気まぐれだから、この好機を逃すと後はない。

「毎日スイーツおごってやるよ。例えば、月曜にモンブラン、火曜

にチーズケーキ、水曜にバナナチョコクレープ、木曜に抹茶パフェ、金曜に苺ショートケーキ、土曜にチョコレートフォンデュ、日曜に生ドーナツってのはどうだ？ オツキーがおごってくれるってさ」

「オレがおごるのかよっ！」

オツキーにチョップをされた。

「抹茶パフェが入ってなかったら却下してたわ。・・・たく、悪運が強いんだから」

ユイが渋々承諾。

我ながら自分のレトリック（説得の効果を上げる、表現の巧みな言葉）を駆使した話術に惚れ惚れするね。

オレってやっぱ、天才？ 頑固なB型女性を丸め込むのって、よほどの事だぞ。

この調子なら、佐倉からのお願いでもある、オレたちのバンドのヴォーカルにユイを・・・って望みも、オレの説得で簡単にイけるかもな。

でも、セコンドなんかと違って、バンドのヴォーカルに関しては、佐倉の頼みでもある以上、絶対ポ力できない。

切り出すタイミングもそうだが、色々と細心の注意が必要だ。

ま、それは焦らず追々やるとして、まずは目先のタカノブ戦をクリアーしねえ〜事には先がねえ〜。

オレはこんな所でくたばるワケにはいかねえ〜んだ。

オレにはまだまだ、やんなきゃなんねえ〜事が沢山ある。

オレの人生、誰にもジャマさせねえ〜！！

第216話 A型とB型の気質を併せ持つのが本当にAB型なの？

ホントは

/ /

第4試合 セミアイナルむなし 武蔵高等学校 内 紛争

王者 かめつる 亀鶴ジオン (武蔵2年) VS 挑戦者 たかぎのぶゆき 高城伸之 (武蔵2年)

/ /

タカノブ・・・、一体アイツは何を企んでるんだ?! ヤツの胸積 むなじもりが全く読めない。

今回は竜崎や宮さんとの連携も上手くとれず、流されるままに事が進んでいる。

タカノブはAB型。

AB型は、明確な意識が働き、シャープな頭脳を持っている。

まさかアイツ、オレたちの仲を引き裂こうとしてるんじゃないだろ
うな? いや、むしろ、もうすでにオレたちは最近、足並みが揃わ

ない。

これも全て、タカノブの仕業しわざ？ シナリオのうちなのか？ ……
まさかな。

もし仮にそこまで悪知恵が働く知能犯で、そこまで器用かみだったら神業わざだぞ？！ オレを出し抜いていたとしたら、ホント大たいしたもんだ。
褒ほめてやるよ。

…ま、それは冗談として、タカノブに出し抜かれる前に、AB型対策を考えないとな。

AB型といえば……、詩乃舞しのぶ。

詩乃舞は女だし、妹だし、あまりに身近すぎて参考にならない。

でも、兄妹でも、距離を感じるのは確かだ。

心の距離は、意外と感じる。

何かこう、ラインを引かれて、それ以上中に踏み込ませないって言うの？ 合理的で情に流されないような、そんなドライな面が詩乃舞にはある。

あとは参考になるようなAB型はオレの周りにはいない。

他の血液型と比べると、AB型人口が極端に少ないのも一つの要因

だが、まずO型とAB型は馬が合わない傾向があるってのが根本にある。

馬が合わないから犬猿の仲になったり、知り合っても自然と離れる。

さらにO型はA型を好み、B型に好かれるっていう傾向が、O型の周りに自然とA型とB型を増やす要因であり、AB型はB型を好み、A型に好かれるっていう傾向が、AB型の周りに自然とA型とB型を増やす理由でもある。

結果、必然的にO型の周りからAB型は減り、AB型の周りからはO型が減る。

・・・で、あるが故、オレにとってAB型は、相容れない存在である。

AB型の特徴を経験で学ぶには、あまりにも機会が少ない。

それが、血液型マニュアル男と呼ばれるこのオレが、もっとも苦手とする血液型がAB型であるという理屈だ。

こうなったら大会までの期間、A型のオツキーとB型のユイの2人を1人の人間と想定して、タカノブとの一戦に向けて擬似AB型の仮想タカノブを作り、AB型の特徴を研究してみるってのはどうだろうか？

・・・我ながら馬鹿げた案だな。

・・・んな器用な真似出来るワケねえって。

オッキーとユイを合わせ、頭の中でタカノブを作り上げると
いう高等な技術があるなら、別に血液型による分析を駆使しなくて
もいいような気がする。

従来通り、オレが今まで培^{じゅか}ってきた血液型マニュアルに沿って、本
番で分析して戦うしかないな。

……つつくか、オレ、まだタカノブとやるって事、ちゃんと
承諾してねえから！ 誰にも承諾してねえし！！

// // // // // // // // // // // // // //
// // // //

第5試合 ^{メインイベント} 武蔵高等学校 VS 笹城商業高等学校

王者 宮^{みや}大^{だい}地^ち（武蔵3年） VS 挑戦者 浦^{うら}上^{かみ}和^{かず}也^{なり}（笹城3年）

// // // // // // // // // // // // // //
// // // //

「誰なんですか？ 浦上って……」

オレの素朴^{そぼく}な疑問。

「宮さんの中学時代の同級生っス」

ほう、竜崎が知ってるって事は、面識あんのかな？

大橋、仲村シンとの協議で、宮さんの敗北は99パーセント有り得ないという結論に達したから、宮さんの武蔵代表としての出場を許可したって言うてたけど、ちゃんとした裏付けがあるワケね。

「どんな人？」

聞くまでもないのかな？

「宮さん、言ってるいいんスカ？」

竜崎が宮さんに聞いた。

「別にいいんじゃない？」

宮さんが答える。

何だ？ 何か言いつらい事なの？

「織川おがわさんの事、昔イジメてた人っス」

織川って、笹商の織川だよな？ この前宮さんのセコンドに付いた織川だよな？ 今現在、織川は笹商のトップなワケでしょ？ 中学時代、織川をイジメてたヤツらとはとくに立場が逆転して、今は織川にたて突くヤツはいないって話だよな？ つまり、織川を昔イジメてた浦上は、今はハッキリ言ってる、織川より格下なのは確かだし、もしかしたら織川の舎弟とかかもしれないよね？ なのに、なぜに

浦上が宮さんに挑戦すんの？

「もしかして、織川さん、浦上って人に負けたの？」

「ガツハツハツハ、それはない、有り得ない」

「じゃー、どうして浦上って人が宮さんに？」

「織川はボクシングに専念したいんだよ、もうすぐ卒業だし。誰がトップだとか、そんなの興味ないんだ、織川は。だから浦上にトップの称号を譲ったんだよ。浦上は口だけのヤツだから、周りの信頼が薄れてきたんだろーな、多分。それで、信用を取り戻す為に、オレに挑戦して箔を付けようって魂胆なんだろーな」

なるほどー。

「笹商の浦上だか何だか分からんが、宮に勝てたら大金星だし、負けても宮と戦ったってだけで名は売れるからな。そいつにとっては失うモンは何もないから儲けモンだよ」

大橋が言う通り、浦上にメリットはあっても宮さんには得るモンはないはず。

じゃー、どうして宮さんは、1パーセントあるリスクを背負ってまで、大会に出ようと決めただろー？

「どうしてそんなヤツと戦うんですか？ 何か恨みとかあるんですか？」

またまたオレの素朴な疑問。

「恨み？ ないよ。浦上なんてザコだ。1発で終わらせる。オレと戦えるだけで箔が付くって思ってんなら願い下げだ。大勢の前で恥を掻かせてやる」

・・・おお、恐い。

浦上、生半可な気持ちで挑んだら、ぶっ殺されるぞ。

・・・って言うか、もう99パーセント浦上終わったね。

残りの1パーセントは、宮さんが試合開始直前にウンコ漏らしたりするのに懸けるしかねえな。

・・・いや、ウンコ漏らしたくらいじゃ宮さんのパワーは落ちねえかな？ 試合開始直前に、隕石とか人工衛星の欠片が宮さんの後頭部に直撃とかすれば、ちょっとは浦上にもチャンスがくるかもな。

「宮の大会出場は、オレや長須の願いでもあるんだ」

大橋が宮さんを誇らしげに見る。

「願い？」

「オレたちはもうすぐ卒業だし、オレはこの大会で全てを終わらせる。総番長も、この大会で卒業だ。武蔵が最強だって事を沢山のヤンキーやギャラクシーの前で証明して、あとはオマエら、2度と武

蔵には手を出すなよって言って、オレは去る」

宮さんが雄弁に語った。

「オレは吉岡の安泰、^{あんたい}長須は野牛の安泰をアピールするつもりだ。それで、武蔵、吉岡、野牛の3校は永遠に崩れない。この3校がしつかりしてれば、他の学校も自然と安泰なワケだ」

大橋が宮さんに続いた。

へへ、古株たちはそれなりに考えてたんだな。

武蔵、吉岡、野牛の3校が崩れなければ、秩序を保てるってか。

ホント、上がいい人たちで良かったぜ。

時代が違えば戦争でオレなんかとつくに死んでたかもな・・・。

「今回は武蔵VS笹城って事もあって、織川にはセコンドを頼めねえ。竜ちゃん、織川の代わりと言っちゃ失礼だけど、オレのセコンド務めてくんねえか？」

「KHJの頼みだったら却下っスけど、宮さんからの頼みだったら喜んでOKっス。その代わり、オレは織川さんのように甘くないっスよ」

「そいつは願ったりだ。ガッハッハッハ」

一時は竜崎がギャラクシー勧誘の件を隠したりして、2人の仲が危ぶまれたけど、これで竜崎、宮さんの最強コンビ、復活だな。

///
///
///

レフェリー 大橋剛太(吉岡3年)

///
///
///

今回も大橋がレフェリーか。

大橋がいてくれりゃ、間違いなく正々堂々とリングの上で戦える。

///
///
///

王者VS挑戦者 ルール詳細

・時間無制限1本勝負(引き分け判定なし)。

・各選手、セコンドを必ず1名以上付ける事(無理なギブアップ拒否などによる怪我、死亡などを防ぐ為)。

- ・目潰し、頭突き、金的、急所への攻撃は不可。

- ・勝敗は、パンチ・キック等の打撃によりレフェリーが試合を止めるTKO、テクニカルノックアウト関節技や絞め技、もしくは打撃によるギブアップ（タックラウト）、他にセコンドが試合続行不可能と判断した場合、タオ
ル投入によるTKO。

- ・いかなる武器の使用も不可。

- ・オープンフィンガーグローブ着用の事。

- ・マウスピース、ヘッドギアの装着有無は自由。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／
／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

よしっ、決めた！ オレも出る！ オレもこの大会に出るっ！！
タカノブとやっつてやる！

万が一、オレがタカノブに負けてもペナルティーはない。

勝てば2年のトップ。

そして宮さん引退・・・イコール、武蔵のトップは自動的にオレ・・・
イコール、ここら辺の学校のトップ？！

やっべーよ、それ、凄くね？ デヘヘ・・・。

「何ニヤついてんのよ、気持ち悪いわね。そろそろアタシ、行くから。……じゃっ」

「あっ、バイト？ 琵琶びわ神社行くんだろ？ なあユイ、オレにも神野流古武術かみのりゅうこぶじゆつ、教えてくれないかなあ？」

「いいわよ。一時間の指導で50万でどう？」

「はっあっ！ せめて50円にまけて……」

「ビター文まけない」

「そんなあ……」

「あっはっはっは」「ガッハッハッハ」「わっはっはっは」「あははははは」

オレとユイのやり取りを見て、みんな笑った。

「アンタのセコンドに付くのは承諾したけど、アンタの特訓に付き合っつとは言ってないわよ」

「そこを何とか頼むよ。オレ、こう見えても本気でオマエの事、尊敬してんだぞ。それと……、誠さんにも、また会いたいし……」

「・

「……ったく、しょうがないわね。一応誠さんには頼んでおくわ」

やった！！　そうと決まれば、とにかく特訓だ。

残り2週間を切ってるんだ。

1分でも1秒でも無駄にはできない。

「このことは今回も佐倉には伏せといてくれよ」

「あたぼ〜よ」

オツキーが親指を上げる。

「今度も頼むぞ名コーチ、オツキー！　そして、新コーチの、ユイ
！！」

「任せるジオン」

「アタシは厳しいわよ」

オレは、ユイとオツキーの手を掴んでガッチリ握手した。

「琵琶神社か〜、オレも誠さんにまた会いてえ〜なあ〜。なあ〜ユ
イちゃん、オレもまた、琵琶神社、行っていいかな？　今度・・・」

「オレも、また行っていいっすか？」

宮さんと竜崎がユイに訊いた。

「分かったわ。土曜日泊まれるように、誠さんに頼んでおくわ」

オイオイ、何か楽しそうじゃないか？

「も、もちろんオレもいいよな？」

竜崎と宮さんが泊まれてオレが泊まれなかったらシャレになんねえ
〜。

「オ、オレもいいの？」

オツキーがドサクサに紛れてまざってきた。

「じゃ〜、ついでにオレも行くのかな・・・」

大橋カンケ〜ねえ〜から。

「「「百年早い!!!」」」

オレとユイと竜崎と宮さんの息が久々にピッタリ一致。

・・・と、いうわけで、土曜日、琵琶神社に集合だ。

メンバーは、ユイ、オレ、竜崎、宮さん、そしてギリギリオツキー。

「言っとくけど、遊びじゃないんだからね」

ニヤニヤしているオツキーに湯かつを入れるユイ。

ユイのヤツ、自分だって結構楽しんでるくせに……。

タカノブ、オマエがどんな小癩こじやくな手を使おうが、オレたちの絆きずなは断ち切れんぞ！

オレたちの底力、思い知るがいい！！

そして、オレが2年のトップに立った暁あかつきには……、あの忌々きずな（いまいま）しい、えげつないカンパをやめさせてやる！！

第217話 心の拠り所

土曜日までに琵琶神社に顔を出して、ユイや誠さんに特訓を願う事はいくらでも出来た。

だが、何だか気が引けてならない。

断じて「一時間の指導で50万でどう？」って脅かされたからではない。

身内に不幸があった年は、鳥居を跨またいではならない……って、よく言っじゃない……。それがオレの胸に妙に引っ掛かっているんだ。

穢けがれた気持ちじゃ、神様に嫌われるのかもしれない……？

それからの一週間は、あつと言う間に過ぎ去った。

前回の芒戦同様、どこからともなくやってくる『不安』や『恐怖』を打ち払う意味でも、前回以上に筋トレに励んだ。

夜はオツキーの家のジムで汗を流し、昼間は授業中に寝た。

そんな中、タカノブ対策を練るオツキーが、タカノブの詮索を開始

しようとしてたので、それを止めさせた。

理由は2つ。

向こうがオレの何かを探ってる気配はないので、こっちも同様に詮索はしないってのが1つ。

もう1つは、変な先入観を入れたくないって事だ。

テルの死という、大きなショックを体験しているせいか、タカノブに対し、芒戦の時のような、溢れるくらいの『恐怖』はない。

むしろ、テルの仇討ちかたきについていう気持ちが強く、どこからか沸々と力が湧いてくるのだ。

ただ、オレはタカノブより、貴船が気掛かりだった。

どうしても中学時代のトラウマがフラッシュバックしてしまう。

もう2度とあの時のような境地おちいに陥る事はないと思いたいが、人生、何があるか分からない。

万が一、竜崎がタカノブとかに寝返ったり、宮さんがギヤラクシーに潰されたりしたら……、オレは一体どうなってしまふのか……？

そんな気持ちだが、タカノブを詮索しようとするオツキーを引き止めたのかもしれない。

少しでも貴船との接触を避ける為に。

もう、そんなもんを避けるのは不可能なのに……。

・・・イカンイカン、完全にネガってる。

ネガってるよ、オレ。

休み時間、ユイが話し掛けてきた。

「ジオン、予定通り、明日の晩泊まっていってさ、誠さん……」

「……そうか、分かった」

思えば、ユイと話すの久しぶりだ。

隣の席、尚且つオレのセコンドっていう重要なポジションにいるのに、オレが話し掛けないからなのか、寝てばかりいるからなのか分からないが、ユイの方からも話し掛けてこないで、丸一週間会話がなかった。

「何時頃来んの？」

「……夕方くらいでいいか？」

「ウン、分かった」

・・・何でだろう？ ユイと話すのも気が引ける。

ユイがタカノブ戦の対策を練ったり、詮索したりするのを避ける為だろうか・・・？ いや、それならそうと事情を話せば簡単に止めさせる事ができるのに。

・・・何でだろう？

・・・なんて、自分を誤魔化すのは止めよう。

タカノブ戦が決まってるから、ユイに対して冷たく距離を置いてしまったのには、実は理由がある。

・・・恐いんだ。

中学の時の、あの忌々しいオレの過去を知っているユイに、触れられるのが恐いんだ。

オレのトラウマを、あの頃の弱いオレの心を覗かれるのが恐いんだ。

ユイはそんな事はしないって分かってるけど、何か恐くて・・・。

「・・・ユイ、オレ、やっぱり行くの止めようかなって思ってるんだ」

「そう」

素っ気無いな。

・・・ま、そんなモンだよな。

オレは何を期待してんだ？ 自分からユイに冷たく距離を置いてた
くせに、やっぱり手を差し伸べて欲しいってか？ ユイはそんなに
甘やかしてはくれないよな。

・・・もう、何もかもダメだ。

オレはタカノブに負け、そのまま孤独の道突き進むんだ。

「ジオン、別に無理強いはしないけど、来れない理由聞かせてよ。
アタシは別にいいけど、誠さんがジオンに会うの楽しみにしてたみ
たいだったから」

「楽しみに？ 誠さんが？」

「ウン。何かね、ジオンの事、昔の自分を見てるみたいって言っ
たよ。弟って感覚より、やっぱり自分なんだって。そんな自分の分
身が思い悩んでるのを見てらんないんじゃない？」

「な、何か話したのか？ オレの事」

「ア、アタシは別にアンタなんかの事、何一つ話してないわよ、失

「礼ね！」

「わ、分かってるよ」

怒るなよ……。

「誠さんは分かるのよ、アンタの気持ちが……」

「そうだよな。半端はんぱない霊能者だもんな」

本人いわ曰く、霊能者じゃないって話だが、あれは只者ただものではない。

こっちの心を読み、過去現在未来を的確に当てる。

尤ももつと、未来は決まってないから、当たり前はあるが……。

「テル君が死んだ時、ジオンが親友だったって話したら、自分の事のように心配してたから」

「誠さんが……、オレの事を……？」

「ウン、だから、別にアンタが来ないって言うならアタシは咎とがめないけど……」

誠さんは奥さんを亡くしてるから、オレの心の痛みが分かるんだ。

あの人も、とてつもない悲しみ苦しみを越えて生きてるんだ……。

「でもさ、身内に不幸があった年は、鳥居を跨ぐなって・・・」

「はあ？ 誰が？」

「誰がって、神様が」

「勝手な偏見へんけん持つの止めな。あのね、身内に不幸があったら、それこそ心の拠より所が欲しくない？」

「でも、穢れた心で神様に会うのって、どうなんだ？」

「身内が死んだら穢れるの？ もし、両親を亡くして天涯孤独になった子がいたら、その子は穢れてるからって、その子が鳥居を跨いだら神様は拒こぼむわけ？ もし神様がそんな、いじましい考えを持つてるなら、アタシは神に仕える身として恥はずかしいし、惨みじめで哀あわれね」

偏見・・・。

その時、急に何かが込み上げてきた。

聞かなきゃ、誠さんに聞かなきゃ・・・！！ そんな焦あせりが込み上げた。

・・・そうだ、オレ、大事な事を忘れてた。

テルがなぜ死んだのか、聞かなきゃ！！

第218話 共同体の幻想的価値観

「誠さんに聞かなきゃ……。どうしてテルが死んだのか、聞かなきゃ……」

オレは急に、強迫観念のような焦燥感ウツクシクに苛なまれた。

「止めときな」

アタフタするオレに、ユイがボソツと一言、痛烈な言葉を吐いた。

止めるだと？ なぜだ？！

誠さんは霊能者だぞ？ 本人は否定してるが、オレから見たら間違
いなくあの人は霊能者だ！

誠さんなら、テルがなぜ死んだのか、視みえるかもしれないじゃないか！

「あの人なら、明確な答えを教えてください。オレは聞かなきゃならないんだ。くそ、どしてもっと早く思いつかなかったんだ？ いや、心の奥では気付いてたが、身内に不幸があった年は鳥居を跨ぐなつてのが引っ掛かってたから、誠さんに会うのを拒んでたんだ。」

でも、ユイのお陰で自分の偏見だった事に気付かされ、それが解消されたから、オレの気持ちが素直に反応して・・・」

「相変わらずメンドクサイ自己分析ね」

「うるせー、これがオレだ」

「どーでもいーけど、テル君の事をあれこれ聞くのは止めといたら？」

「何だよ！ そんなのオレの勝手だろ？ 真実を求めてなぜいけない?!」

ユイのヤツ、どうしてオレを止めるんだ？ 分かったぞ、嫉妬しつとか？ 自分だけの誠さんだったのに、オレが頼りにし出したから、嫉妬してるのか?!

「真実？ 真実なんて人の数だけあるじゃない。アンタが生きる意味、価値って何？ そこに壱万円札が束になってあつたとしても、それを日本という国が、通貨として認めなかつたら、ただの紙クズじゃない。どんな物も、人と人との繋がりや歴史が作り上げた価値でしかないわ。アンタが誰とも関係性が無くなつて、もし天涯孤独になった時に、アンタは生きてる意味を見出せるかしら？」

「金がただの物質でしかない？ 全てのものは人の価値観でしかない？ そんなの知つてら」

「だったら真実を求めても意味がない事に気付いてるはずでしょ？」

「ぐう……」

「質問するから回答があるの。この意味が分かる？」

「何だよ、子供扱いしやがって……」

「アンタを子供と思ってるなら、こんな会話するワケないじゃない？ 答えを求めるから答えがあるのよ。もう、どうしてテル君が死んだとか、考えるのやめなよ。答えを求めても、どうせアンタが欲しがらる答えは出てきやしない。それを求めて彷徨さまよったって出てきやしないわ」

「……」

「アンタの求めている答えはこうよ！ テル君が死んだのはオレのせい。だからオレは、罪滅ぼしの為にアイツの夢を背負わなきゃならない！！」

「……」

「凶星だよ、的確だよ、その通りだよ。」

「コイツ、誠さんの近くにいつもいるから、能力が伝染したのか？ それとも、開花したのか？ してもらったのか？！」

「……いや、誰にでもある力だって、前に誠さんが言ってたよな。」

「それに……、相手の心を読むのはオレの専売特許でもあるじゃね

えゝか。

そんな事より、オレが罪滅ぼしの為にアイツの夢を背負ってるって？
だから何だっつてんだ。

テルは、オレにあげるギターを守るように死んだんだ。

あの時、学園祭に来て言ったのはオレだ。

そもそも、アイツが楽器をやり出したのはオレとの出会いがきっかけだ。

オレに会わなきゃ、アイツは死ぬ事はなかった。

何もかもが、オレのせいだ。

それだけじゃない。

オレは、アイツの葬式に出るのが面倒だっつて、本気で思ったんだ・・・。

アイツに包む金が勿体無いつて、本気で思ったんだ・・・。

オレは・・・、罪なヤツなんだ・・・。

もし、全てを裁く神がいるなら、オレはそんな神に顔向けできない！！

でも、誠さんは神の存在について、こう語った。

『物質、かたちあるものは、必ず破壊されます。でも、人の考え方や思いは無くならない。この考えは、仏教では色即是空、空即是色ともいいます。すなわち、人間も物質であるから滅び行くワケです。しかし、頭で考えうるものは、人から人へ受け継がれますから、無くならないのです。ですから、かたちあるもの、支配者として君臨する神はいないと思いますが、人が頭の中で想像しうる、幻想の神はいくらでも存在しますし、受け継がれもします。でも、所詮その人の想像物ではないので、それを全人類の神なる存在に当てはめるのは間違っています。宇宙全体が神、つまり、我々も神の一部であると、ボクは定義しています』

・・・と。

オレもその意見に賛同する。

でも、この罪悪感は何なんだ？ 何に対して抱く感情なんだ？ どうしてオレは、見えないものに、存在しないものに対し、こんなに恐怖を感じるんだ？！

やっぱり、テルを殺したのはオレだからじゃないのか？

その罪の意識が、オレを怯えさせてるんじゃないのか？！

・・・だいぶ取り乱してるな、オレ。

この感情、テルが死んでから、ずっと封印してたモンな。

吐き出す時が来たのか？

いや、まてよ・・・、オレは今、どんな状況にいる？ 感情論では一生答えは出ないのは百も承知だろ？ 冷静に分析してみる、オレ！

オレは今、転んでるんだ。

走ってたらすっ転んじまって、そのままぶっ倒れてるんだ。

さて、どうする？ 誰かが助けしてくれるまで待ってるか？ 誰かに助けを求めるか？

・・・自分で起き上がれるよな？ 傷は深くて血も出てて痛いけど、自分で起き上がれるよな？

真実を求めることは、テストの回答を求めることと同じこと。

それではテストにならないじゃないか。

自分で気付かなきゃ！

そう、オレはテストされてるんだ。

誰にテストされてる？

自分だよ。

そう、オレが今陥^{おちい}ってる状況は、試練なんだよ。

誰に試練を与えられた？

自分だよ。

じゃあ、自分って何だ？

自分は、宇宙全体の中の一部でしかないが、宇宙全体に存在するのは確かなもの。

……漠然とだが、何か大事な鍵を手に入れたような気がした。

キーンコーンカーンコーン キーンコーンカーンコーン

放課後を告げるチャイムが鳴り響き、クラスの輩^{やから}は我先にと教室を始めた。

「ユイ」

佐倉と一緒に教室を出ようとするユイに、オレは声を掛けた。

「何よ」

ふてくされた顔で振り向くユイ。

「人生、七転び八起きだ。明日、予定通りって事で・・・、夕方、お邪魔するぜ。ヨロシク頼むな・・・」

「勝手にすれば。じゃ・・・」

オレの曇りのない瞳を見て、ユイは何かを感じ取ってくれたのだろうか？ 言葉は冷たいが、ユイからは温かな何かを感じた。

第219話 七転八起

校門付近で、竜崎と宮さんに会った。

「どつっスか、調子」

「ボチボチだ。そっちは？」

「全然ダメっス。宮さん余裕かまして遊んでばっかつス。昨日なんて、駅前の楽器屋でドラム叩いてたんスから」

相変わらず竜崎は厳しい。

「でもさ、ガチユルの法則なんじゃね〜の？ ユルでいいんだよ、ユルで。それと、宮さんはユイと一緒にB型だろ、白鳥はくちやうじの如く、オシラの知らない所で努力してんだよ、きつと」

「ガッハッハッハ、その通り〜」

「もう少し緊張感を持って下さい。窮鼠きゆうしつ、猫を噛むって言うじゃないっスか」

「死すれば再びは生きず、窮鼠猫を噛むってか?! ガッハッハッハ。死にもものぐるいになっている鼠ねずみは、死んだらもう生きかえることとはねえ〜からって、最後の力を振り絞って戦うワケだ。そりゃ〜油断ならねえ〜な。でもさ〜、昨日ドラム叩いたってのは事実だけ

どさく、その後みっちりジムで汗流したじゃん」

「竜崎く、もう少し宮さんを労いたわってやれよ。」

「宮さんを甘やかしちゃダメっス」

甘やかしちゃダメ・・・か。

「七なな転ころび八や起おきってどういう意味？」

ユイに、『人生、七転び八起きだ』とは言ったものの、その意味が漠然としか分からなかったので、竜崎と宮さんに聞いてみた。

こいつら、ことわざとか詳しそうだからな。

「そのままじゃないんすか？ 何度転んでも立ち上がって、挫くじけず突き進むって意味？」

「七しち転てん八はち起き、最後は立ってるって意味だよ」

宮さんが勇ましく言った。

なるほどく、そりゃく、カッコいいわ。

よしっ、オレの人生、七転八起！ 何があっても、挫くじけず突き進むぞお~~~~！！

その後オレたちは、明日の約束をして別れた。

次の日の午後2時、待ち合わせ時間よりだいぶ早かったが、居ても立っても居られず、オツキーと琵琶神社に出向いた。

いつもの授与所にユイの姿はない。

「何だよ、巫女さん姿のユイが見たかつたなあ〜」

そんなオツキーをさて置き、オレは拝殿に手を合わせた。

原生林のマイナスイオンのせいなのか、凜とした清らかな空気に包まれた境内で、身も心も癒されるようだ。

・・・と、その時、境内の奥で掃き掃除をする、水色の袴を穿いた貴顕紳士を発見。

「誠さ〜ん」

「やあ、ジオン君」

「あつ、コイツ、オツキーって言います」

「オ、沖田良雄デス。ヨ、ヨロシク」

「なつ、緊張するだろ？」

「ス、スゲー、何？ 何、この威圧感。オーラか？ 話には聞いてたけど、半端ねえ〜な」

オツキーは誠さんを前にして、かなりの緊張状態に入っている。

生半可な気持ちじゃ、誠さんと向かい合えないぜ。

竜崎や宮さんクラスでも、誠さんの事は一目置いてるモンな。

やっぱりレベル高え〜よ、この人。

それと比べると、オツキー、レベル低っ！

「沖田君……。クヨクヨと思い悩むクセがありますね。それを克服できれば、もっとラクに生きれますよ」

オオツ、いきなり出たよ、誠さんの^{れいし}霊視。

そうそう、オツキーはA型だから、すぐクヨクヨすんのな。

「そ、そ〜なんですよお〜、オレ、クヨクヨします。するんです。

この性格、何とかありませんか？」

「性格って言うより、クセですね」

「クセ？」

「そう。海のように広い心、宇宙のように広大な心を築ければ、^{おの}自ずと道は開けますよ。その繊細な心は、きつとお父さん^{ゆす}譲りですね」

「ハイ。父は気弱です」

ほう、オツキーのオヤジさんもA型かな？

「でも、沖田君のお父さんは、そんな繊細な心を上手く利用してますよね。仕事、主に接客で利用なさってる」

「ハイ、その通りだと思います」

確かに、沖田電気は繁盛してるぞ？！

「沖田君も、お父さんのように、その心を上手に使ってみてはいかがですか？ 自分の事で思い悩む暇があるなら、誰かの為に、自分は何が出来るのか考えてみてはどうでしょうか？」

「……………うわぁ、何か、嬉しくて……………涙出ますね」

オツキーはメガネをズラして涙を拭いた。

そこ、泣くところなのか？

「ジオン、この人、凄い。こんな凄い人に会わせてくれて、アリガトウ。ホント、アリガトウ」

何だ、コイツ、いきなり謝恩とかしやがって、気色悪いな。

「ささつ、立ち話も何ですから、是非、中へどうぞ……」

オレたちは誠さんに案内され、座敷へと足を運んだ。

秋の色彩を美しく放つ日本庭園は、喧騒の中に生きるオレたちの心を、さらに癒してくれた。

鹿威しの竹の音と、小鳥たちのさえずりを聞きながら、オレとオッキーは、誠さんが抹茶を作る所作に見入った。

「命長ければ……、くちびる多し?」

オッキーが掛け軸の一つを読んだ。

「命長ければ辱多し。長生きすれば、それだけ恥をさらすという意味です」

「は、ははは……」

オッキーは辱を唇と読んだ事を恥じて、顔を赤くしている。

オッキー、飛ばしてるね。

「命は義に……みどりて軽し?」

おっ、リベンジですか?

「命は義に縁りて軽し。これは、命は尊いものですが、それが道義を貫くためなら命を捨てても構わないという意味です」

今度は縁えんを縁みどりと読んだね。

なかなかやるなあ、オツキーのヤツ。

「どつぞ」

誠さんが、抹茶を振舞ってくれた。

相変わらず誠さんの抹茶は、苦くて旨い。

略して苦旨にがうまい。

「ジオン、この砂糖菓子を先に食うと、抹茶の苦味が引き立つんだぜ」

「どこの受け売り文句だ、オツキー？」

と言いつつやってみる。

ウン、ニガイ・・・けど、ウマイ。

「ジオン君、ユイ君から聞いたけど、親友が亡くなったって。さぞ、辛く悲しい別れだっただろうね・・・」

誠さんが、透き通った瞳でオレを見据える。

早速、おいでなすった……。

早かれ遅かれ、避けられない話題ではある。

テルの事。

聞きたい事が山ほどあるが、感情的になってしまい、きつと冷静に話しが出来なくなる……。

出来る事なら、避けたかった……。

ユイが言ってた通り、オレが求める答えが返ってくるとは限らない。

もしかすると、現実的な言葉や、容赦ない痛烈な言葉に耳を塞ぎたくなるかもしれない。

でも……。

逃がしてくれそうもないし、逃げられそうもない……。

……と、言うより、オレが求めている。

誠さんとの、真っ向勝負を！

願わくば、オレを完全KOしてくれ。

真っ白い灰になるまで、燃やし尽くしてくれねえか？

頼むぜ、誠さん。

第220話 VS 霊能者ふたたび

常識的に考えて、死んだらどうなるか・・・、そんなの簡単だ。

無だ。

皆、土に還^{かえ}る。

それ以外の考えは、どこか浅墓だ。

キチンとした理屈が通らない。

輪廻だ？ 霊界だ？ 天国だ地獄だ？ 極楽だ？

どれも科学で証明されてないし、所詮、精神論でしかない。

宗教が絡む。

竜崎じゃないが、オレも押し付けは嫌いだ。

でも、誠さんは言い切る。

死んだら、あの世に行く。

つまり、死んだら無ではないと・・・。

「誠さん、教えて下さい。テルは、オレにあげるギターを守るように死んだんです。あの日、学園祭に来て言ったのはオレなんです。テルが死んだのは、オレのせいなんじゃないかって、たまに思うんです。・・・いや、常に。そもそも、アイツが楽器をやり出したのは、オレとの出会いがきっかけでした。オレに会わなきゃ、アイツは死ぬ事はなかったんじゃないかって、何もかもが、オレのせいだって、思うんです。それだけじゃなく、オレは、アイツの葬式に出るのが面倒だって、本気で思ってたんです。葬式で、アイツに包む金が勿体無いつて、本気で思ってたんです。オレは、嫌らしい、穢れたヤツですよ。・・・。そんなオレは、裁かれますか？ テルは、苦しんで死んだんじゃないんですか？ だとしたら、今は苦しみから解放されてますか？ まだ、この世に未練とかあって、実は自縛霊とかになって、その辺を彷徨ったりしてませんか？」

オレらしくない質問の数々に、自分でもウンザリする。

よっぽど溜まってたに違いない。

まったく、溜息が出るぜ。

・・・が、悔いは残したくねえんだ。

答えがあるなら、聞いてみてえんだ。

「まず最初に、テル君は、最後まで生きようとしたって事ですよね。誰かの為に、生きようとしたって事ですよね。ジオン君にあげるギ

ターを守って死んだのが事実なら、なんて深い愛を懐^{いだ}いていた方でしょうか」

「……アイツは、本当の愛ってヤツを、本当に理解してたんですよね、きっと」

「もちろんです」

それを聞いて安心したぜ……。

テルは、真実の愛ってのが何なのか、やっぱり知ってたんだ。

嘘偽りなく、アイツは大事なモンを持ってたんだ。

「彼はジオン君のせいで死んだのではありません。その証拠に彼は、ジオン君以外でも同じ事をして亡くなったはずです」

「確かに、そうかもしれない……。それがたとえ、オツキーにあげるギターだったとしても、仮に、テルの知らない竜崎や宮さんにあげるギターだったとしても、アイツなら同じ事をして、思う……。」

「良い人ほど、早く亡くなってしまってもなんですよね」

良い人ほど、早く亡くなる？

なぜだ？ どうしてだ？ そんなの、あまりにも惨^{みじ}めじゃないか？！

『ありがとう』ってコップの水に言うと、結晶が綺麗に整って、美味しい水になるんだ。

それ故に、人から『ありがとう』って言われ続けている、俗に言う良い人は、体の中（体内のほとんどは水で出来ている）から健康になるんじゃないのか？ つまりは、長生き＝良い人の証なんじゃないのか？ この世の幸せは、健康で金持ちで、何不自由なく暮らす事なんじゃないのか？ それを追い求めるのが、生きる意味なんじゃないのか？！

そうじゃないってんなら、この世は、憎まれっ子世に憚る^{はばか}・・・って言葉が正論って事になるぞ？

「次に、ジオン君は、テル君が死んだのは自分のせいなんじゃないかって思ってるようですが、それは単なる自己嫌悪、被害妄想だと思えますよ。厳しい言い方をすれば、自己中心的な考えです。あの日あの時あの場所など、考えた所で仕方がないですよ。色々な事象が重なって、結果があるのです」

オレのせいって思う事自体、利己主義だったか？

逆に、自分を犠牲にしても他人の利益を図ったテルは、利他主義だ。

テルは博愛主義で利他主義。

オレは我欲主義で利己主義？

「そして、テル君の葬式に出るのが面倒だったと言っていました、それは大袈裟でしょう。葬式に出るのが面倒だったのではなく、疲れてたのです。現実を受け入れるのが恐かったんですよ。お金を包むのが勿体無いつてのは、それは無いでしょう。それこそ、現実を受け入れるのが恐くて、一時的に感情が先走ってしまったのだと思いますよ。どうしてオレより先に逝ってしまったヤツなんかにお金なんか包まなきゃならないんだ？ってね」

「そうです、そうです、その通りです。コイツ、現に5万も包んだんですよ、5万も。有り得ないですよ、友人の葬式に5万ですから」

「るせえ〜オツキー、黙れ！」

「神様は人を裁きませんよ。人を裁くのは、人間です」

「………裁くのは、人間」

「それと、テル君は、自縛霊などになってませんよ。こんな愛すべき素敵な方々に看取られて、自縛霊など有り得ないですよ。どんな死人だつて、自分の葬式を目の当たりにしたら、自分が死んだ事に気がつきますよ。それに、死んだら肉体の苦痛から解消されますから、今でもテル君が苦しんでるなんて事は有り得ないのでご安心を。テル君はお迎えの方々に連れられ、ちゃんと天国に行きましたから」

天国？ 何を根拠に……？！

博愛主義で利他主義のテルは天国？ じゃあ、我欲主義で利己主義

のオレは地獄つてか？

お迎え？ 高い所から天使とか飛んできたの？ ありえねえ〜だろ・
・・・！！

じゃあ何か？ テルには天使が来たんだったらオレには悪魔が来る
のか？ 土の下から・・・。

「天国なんて、あるわけないじゃないですか！ 単なる気休めは止
めてくれ！！ この世で立派に生きたヤツは、死んだら天国に行け
る？ じゃあ悪いヤツは、地獄へ落ちるってワケか？」

「どうしたジオン、いきなり・・・」

オツキーがアタフタとオレを止める。

止めてくれるな、オツキー、オレの好きにさせてくれ。

これは演技だ。

半分本音でもあるが、オレなりの演技なんだ。

上手く説明できないが、何か掴めそうなんだ。

オレの気が済むまで、誠さんとガチでやらせてくれ……………。

「言い方が悪かったかな？ あの世とか、天国とか、曖昧あいまいな言い方はやめましょう。これからは、死後の世界を霊界と言い切りましょう」

出たよ、霊界。

誠さん、言い切ったよ、コレ。

つまりアンタは霊能者だ。

アンタのやってる事は、霊視だ。

これでオレも正々堂々と言える。

V S 霊能者・・・ってね。

「霊界ですか。つまり、自分は霊能者ではないと言っていましたか、認めたワケですね？ 本当は、俗に言う霊能者だって」

「日本は海外とは違い、魂や霊的な話を毛嫌いする所がありますからね・・・」

「オレは構わないですよ。イギリスやアメリカは、日本と違って靈魂こゝろの存在を認めますからね。ただ、科学で証明されたワケじゃないんで、オレは肯定こうていは出来ないっただけで、別に完全否定してるワケじゃないですよ」

・・・とか何とか言っつて、結構オカルト好きだったりするオレ。

信仰深い所があったり、見えない世界を意外と信じてたりするオレ。

「この世は何の為に存在するんですか？」

さあ、どう答える？ 修行か？ やっぱり修行の場か？ それとも、この世は刑務所みたいな所なのか？！

欲望とか煩惱とか消す修行の為に、オレたちは、物質を与えられて試されてんのか？

確か前は、オレたちがこの世に生きる意味は、大目的の達成の為だとか言ってたな？

さあ、どう出る、誠さん！

そこら辺の宗教や自称霊能者のように、自分らの都合のいいようにあ〜言えばこ〜言うで、何でもかんでも理由を何かにこじつけるのだけは止めてくれ！！

「ジオン君の、大目的の達成の為、かな？ その質問には、そうとしか答えられない」

「オレだけの世界って事ですか？」

「そうではないよね。私からしたらこの世界はもちろん私の世界でもあるし、沖田君からしたらこの世界は沖田君の世界でもある、皆の世界だよ。たくさんの世界が重なり合って、一つの世界を構成し

てるんだ。皆、どこかで繋がって、支え合って生きてるんだよ」

皆の世界でもあるし、オレの世界でもある……。

その時、『命は義に縁^よりて軽し』の掛け軸が視界に入った。

「その掛け軸の言葉を履き違えてはなりません。その掛け軸が言ってるのは、そのような覚悟を持って生きよ……、という意味ですからね」

何も言っていないのに、誠さんがオレの心の声を抜き取った。

掛け軸の意味を履き違えるなって事は、どんなに恥^{ひん}を晒しても、どんなに理不尽な状況下に置かされても、生き抜かなきゃならないって事か？

どうしてだ？

オレの世界が終わるからか？

こんな世界、終わらせたいって思ったら、終わらせちゃダメなのか？！

道義を貫く為に腹を切る事はいけない事なのか？ 辛く苦しい状況や、恥や老いや病から逃げ出す事は、どうしていけない事なんだ？

その時、考えるより先に、オレは訊いていた。

「なぜ、自殺はいけないんですか？」

第221話 慈愛

答えを求めるから、回答が現れる。

真実は人の数だけあるとは言うものの、目に見えるもの全ては、それが現実であり、真実のはずだ。

地球の外を気にしたから宇宙が現れたのではなく、元々そこにあつた事に気付いただけ。

生まれてから死ぬまで家から出ないで情報が閉ざされてれば、山も川も風も木も海も鳥も何も知らず、外の存在に気が付かないで死んでいく。

あるいは現に、自分の住んでる村や町しか知らないで死んでく人たちも、沢山いるはずだ。

あるいは外国を知らず、自分の国しか知らない人。

地球しか知らず、外の星の存在を知らずして死んだ人たち。

でも、外には何があるんだ？ と、疑問に思った人は、その答えを求め、手に入れたかもしれない。

そもそも歴史は、そうして作られてきた。

今の科学は、そうした探究心が生んだんだ。

今現在、科学で証明されてない事が、真実かどうかはいずれ分かる時が来る！

しかし、オレは、今知りたい。

本当の答えを・・・！

「誠さん、もう一度問います！ なぜ、自殺はいけないんですか？！」

「ジオン、そんなの聞くまでもないだろ？！ 悲しむ人がいるからだろ〜が」

「天涯孤独で人との関係性を絶ったヤツが自殺を望んだら？」

「そ・・・、それは・・・」

オツキーは言葉を失った。

さあ、誠さん、答えてくれ！

「不慮の事故、震災などで、突然家族を失い、突然天涯孤独になる人もいますが、それは一時的なものでしかありません。この世に生きていく限り、人との関係性を絶つ事は不可能です。ですから、た

とえ天涯孤独だと思えても、それは一時の不安でしかありません。人は、どんな時も、独りではない。例外的に、例えば無人島などに漂流し、人との関係性を失った人は、孤独という試練を天から与えられたワケです。それとは別に、自分から人との関係性を絶った人が自殺を望んだら、それは浅墓あさはかで愚かで誤った思考です」

「あくまで、自殺はいけないと言い切るわけですね」

「もちろん」

「ネズミは、自分たちの数が増えると人口調整の為に集団自殺をするって知ってますか？ 人間も地球に増えすぎた為、何らかの意志、例えば集合思念体みたいな宇宙意志に、『自殺』という指令を出され、無意識でその道を選んではるって事は考えられないでしょうか？」

「集団で海に飛び込むレミングの逸話ですか？ それなら、誤認識なさってますよ。それは事故です。人間以外の生物の自殺は私の知る限り、無いと思いますよ。それに、ジオン君がおっしゃる宇宙意志ですか？ 私の言葉で、ブラフマンと呼ばせていただきませんが、もしブラフマンが、自殺をも意図して人間を地球に誕生させたとしたら、あらゆる面で矛盾が生じると思うのです。私は自殺を望む人に逆に聞きたい。自殺に苦痛が生じるのはなぜ？ 自殺を望んで生まれてくる子供はいるの？ 悔しくないの？ 貴方を100パーセント助けてくれる人がいたら、自殺を止める？ ……」

「100パーセント助けてくれる？ 例えば、1兆円ちゆう貰えるとか、不治の病を完治してもらえとか、若返りを促してもらえとか、自分を苦しめているあらゆるものを排除してくれる・・・とか？」

「願いを100パーセント満たしてもらえたら、また、生きる希望が

生じるだろうか？

「この世に苦勞をしてない人はいません。必ず、何らかの試練を与えられ、誰もがそれを解いて生きています。一時の不安や苦勞から逃げてしまつては、今までの苦勞が水の泡。せつかく苦勞したのなら、その苦勞が報われる日が来るまで耐えるべきです。必ず報われる日が来ますよ。たとえ死んでしまいたい衝動に駆られても、それが良き思い出になる日が来るのです」

「苦勞して苦勞して、報われずに死んでいく人もいますよ」

「稀まれにね」

「言い逃のがれですか？」

何かだんだんオレ、悪いヤツになってね〜か？　こんなキャラじゃねえ〜んだけどな、ホントは……。

ま、たまには、い〜か。

「我々は魂の存在で、死後の世界、すなわち靈界が本当の世界で、この世は魂を磨く為の修行の場。この世での修行が足りず、魂のレベルの低い人は、厳しい試練に耐えられません。ですから、試練をクリアする度に、その都度、ご褒美が欲しいのです。そうじゃなきゃ投げ出しますから。しかし魂のレベルの高い人やチャレンジャーは、連続で試練を入れたり、死ぬほど苦しんだり、そのまま最後まで苦しんで死んだりします。しかし、それもまた、自らが選んだ試練なのです。大なり小なり試練を自分に課し、それを乗り越える

のが、この世に生きる理ことわりであると、私は定義しています」

「オレも、全然苦勞しないで生きてる人がいるように見えるのは、表面しか見てないからだと思いますよ。でも、あまりに人との差があり過ぎませんか？ どうして自分ばっか、こんな苦勞して……つて、常に思ってしまう。もっと上手く、苦難から擦り抜けて生きてく方法があるんじゃないかって思ったり、自分は間違った生き方してんのかなって、たまに思います」

「苦しい人生を歩む、恵まれない境遇の人ほど、魂のレベルを上げようと努力している崇高な人であり、そんな境遇を哀れむ事は、逆に盲目的な考えだと私は思います。もちろん、因果律なども視野に入れ、正しい生き方をしているにもかかわらず、苦しい試練を強いられる人の話ですがね……」

「つまり、特別悪い事してるワケじゃないのに、大きな苦勞ばっかしてるオレは、それだけ崇高な人間ってワケですか？」

「……つつくオレは、テルとは違って我欲主義で利己主義なワルだけだね。」

「ジオン君は、テル君と同じ、愛を知る優しい人間です。胸を張って生きて下さい」

また、心の中を読まれた？

「……はあ」

返す言葉がねえ〜や。

「人は皆、見えない所で自らに試練を与えるのです。ちなみに、見えない所つてのは、生まれる前の世界だったり、寝てる時に行く世界の事」

寝てる時に行く世界？ 夢の世界？

例えば眠りについた時、肉体から靈魂が離れて、別次元に移動する
とでも言うのか？！

随分とシユールな話だな。

・・・嫌いじゃないけど。

「試練ですか・・・」

「中でも、愛する者との惜別の苦しみは過酷な試練です。それだけ大きな試練を自らに課したワケですから、よほどの覚悟を持って挑んだワケですよ。ジオン君のような、波乱万丈で壮絶な人生を送る人もいれば、単純明朗で、何不自由なく平々凡々とした人生を送る人もいます。でも、それにも個人個人、それなりの意味があり、それなりの人生のドラマがあるのです。皆、それなりに苦勞をして生きています・・・」

「あまりにも、人との差があり過ぎます。やっぱり、どうしてオレはっかって思ってしまう」

「それは、ジオン君、貴方が努力家だからです・・・」

オレが努力家だった？

フン、嬉しい事を言ってくれるねえ。

見えない所で試練を自分に課してらっ？

誠さんは、奥さんとの死別を、自らの意志で選んだってワケか。

見えない所で……。

「本当は、そう自分に言い聞かせてるだけなんじゃないんですか？
本当は、死んだら何もかもがそこで終わり、この世が全たって思
ってるんじゃないんですか？ 上手く金儲けして、人を押し退けて
生きていく方が賢い生き方じゃないかって思ったりしないんで
すか？ 苦しいのなら、自殺もアリなんじゃないかって、思わない
んですか？ ぶっちゃけ思わないんですか？ 正直に答えて下さい
！」

「思いませんよ」

「微塵みじんもですか?!」

「微塵も思いませんよ」

「なぜです？ 奥さんを、愛してたんですよ?! 偽りだったん
ですか？」

「ジオン、止めるよ。もう、それ以上、誠さんを……」

オツキーがオレと誠さんの間に割って入ってきた。

「構わないよ、沖田君」

「あつ、すみません、つい……」

オツキーは後ろに下がった。

「もう、この世にはいないけど、私は今でも妻を愛しているよ。だからこそ、ボクは、彼女に恥じ入る生き方はしたくないと思っっているよ。もし、ボクが、妻との別れを理由に、他愛ない^{たわい}生き方をしてしまっっては、死んでから、あの世で顔向けできないよね。精神論ではないけど、ジオン君の質問にはそうとしか答えられないよね」

「じゃあ、正しく生きてればいつか金持ちになれて、何不自由なく暮らせるようになるんですか？ 正しく生きてれば、絶対幸せになれるんですよ？ さつき誠さん言いましたよ、絶対報われる日が来るって！ 実際そうじゃなきゃ、あまりに世の中不公平過ぎる！ 正しい人が、立派な人が、誠さんのような人が……、報われないのはオカシイ……！」

「ジオン君、自分のものさしで人の心を測るのは、金輪際止めたまえ。君に私の何が分かると言うのです？ 例え、人一倍どんなに働いても報われず一生貧乏でも、たくさん不自由があっても、私は人として正しい生き方を貫き、それが幸せなのだと言い切ります。人

と比べる事ほど虚しい事はないのです。楽な人生、酷な人生、人によって差があるのは当たり前。過去に誇りを持ち、未来に責任を持つよう、現在に自信を持って私は生きている。そんな私の境遇を哀れむのなら、大きなお世話だと私は言いたい」

ゾツとするほど誠さんの瞳の奥に、強烈な鋭さを感じた。

この人は、よほどの覚悟を持って真実のみ語り、そして、今を生きている。

「すみませんでした」

最後に謝るくらいなら、最初っから突っ掛かるなよって自分にツッコミを入れたい気分だ。

これ以上誠さんを怒らせないようにしよう。

情けない話だが、誠さんの気迫で小便が少々チビツた。

「謝るのはボクの方だよ。ジオン君がワザとボクに噓けしかけてるのを知つてて、キツイ事を言ってしまったんだからね。まんまと乗せられたって言い訳したい所だけど、年上として、叱しかるべき所は弁わかまへないよね」

「……………ですよね」

恐れ入りました。

そして、申し訳ない。

「死んだら、オレも、テルに会えますか？」

やっとオレも、素直になれた。

「ジオン君が死んだら、テル君に必ず会えるよ。ボクが保証する。ボクが信用できなければ、他にも保証してくれる人たちは、未来永劫、この地球上に、計り知れないほどいる。これだけは揺るがない事実だよ」

「……………ありがとうございます」

誠さん、その言葉で、オレはどれほど救われる事か……………

「科学で証明できない事を、頑なに否定する人もいるよね。否定する事は容易いけど、肯定するのは勇気がいるんだ。だから、みんなあの世の話になると、口を閉ざすのさ。でも、案外、みんな心の隅では信じてたりするもんさ、見えない世界をね」

「お……い、おい、おい」

オレの後ろでオツキーが泣き崩れている。

オレも、涙が止まらない。

温かい、嬉しい涙が、止まらない。

今までの苦しみが、流されていくようだ。

ありがたい。

第222話 諸行無常の響きあり

やがて、竜崎と宮さん、そしてユイも現れ、夕食の運びとなった。

焼き秋刀魚さんま、さばの味噌煮、きのこの天ぷら、ゼンマイの田舎煮、栗ごはん、大学イモ、たけのこの土佐煮、松茸まつたけどびん蒸し……。相変わらずのユイの手料理の旨さに舌鼓したオレたちは、食事後、縁側で月を眺めながら談話に浸った。

「いや、今回もまた凄かったね、ユイちゃんの料理」

食事中、終始酒が飲みたそうな顔をしていた宮さんが、涎よだれを拭った。

「マジ旨かったっス」

竜崎も終始絶賛だったが、ここにきてさらにユイを褒める。

「どづいたしまして」

仲秋ちゅうしゅうの宵よひ、月明かりに照らされたユイの髪が、いつも以上に煌きらいた。

「ところで、そっちはどうなの？ 特訓はかどは捗はかどってる？」

宮さんが痛い所を突いてきた。

「それがね、ぜんっぜんやる気ないのでよ」

ユイが呆れ顔でオレを卑しめる。

「ば、か、オツキーに聞いてみる、オレは徹夜で日夜、筋トレに励んでたんだ」

「あと1週間しかないんだぜ、ジオン。筋トレだけでタカノブに勝てんのかよ？ 噂では、タカノブは百戦錬磨、マジでケン力強いらしいぞ」

オツキーがオレを脅し始めた。

「おつ竜神拳でしたっけ？ とっくに習得してると思ってたっス」

竜崎がワケの分からぬ事をぬかしている。

「はあ？ 竜神拳だと？ オマエと一緒にすんな！ オレはまともな人間だ！」

「いやいや、オレもまともな方だと思っんすけど・・・」

「い、いや、まともじゃない。竜神拳って何だ竜神拳って。どっからそのキーワードが出てくんだよ。アレか？ オレは雲に乗った仙人様とかに特訓受けて、必殺奥義とか授かっちゃってると思っただの？ まともな脳みそじゃ、そんな幻想的な発想は出てこねえぞ」

「ッ」

「アレ？ 神の竜古武術かみりゅうでしたよね、確か。違った？ あ、神の竜虎りゅうこ、武術かな？ 誠さんの下で、てつきり修行してると思ってたんで……」

竜崎が眉毛を八の字にした。

「明日の早朝、誠さんが稽古けいこしてくれるってさ」

ユイがすまし顔で言った。

「誠さんに頼んでくれたのか？ サ、サンキューな」

「1週間スイーツおごった甲斐あったね、亀ちゃん」

げっ、宮さん、それ言っちゃダメだよ。

「あ~~~~っ、おごってもらったの忘れてたあ~~~~っ！ あ、明日っから約束通りおごりなさいよ~~~~っ！」

ほらっ、思い出させちまったじゃんよ〜。

「オツキー、ヨロシクな」

「甘えるな、ジオン！」

「随分と涼しくなってきたね。夏はあんなに猛暑が続いたから、秋が来ないんじゃないかって心配したけど・・・」

寝巻きに着替えた誠さんが庭先に現れ、秀麗な紅葉が水面に映る池の鯉に餌を撒いた。

「秋は、何となく淋しいですよ。木枯らしとか、秋風とかに吹かれると、ちよっぴり切ない気持ちになるっていうか・・・」

「ジオン君は、見かけによらずロマンチストですよ」

「ははは、案外醒めてますよ・・・、なぐんでカツコつけても誠さんにはバレバレですよ。こう見えて、意外と考え深い人間なんですよ、オレは」

「ジオン君の、死生観が聞きたいな。ジオン君は、死んだらどうなると思うっ？」

誠さんは、クールに鋭い事を聞いてきた。

「へー、面白そうな話してるじゃん。アタシにもまかせてよ」

ユイがキラキラと目を輝かせる。

「オレも」

宮さんが手をあげた。

B型はノリがいいよな。

それに比べてO型は客観的に、冷静に考える。

竜崎は自分の考えをまとめて、タイミングを見計らってまぎってくるに違いない。

A型は協調性に富む。

オツキーは自分に意見をふられた時に考えを述べるんだろうな。

さて、オレの死生観……か……。

「季節は移り変わるじゃないですか。春から夏へ秋から冬へ、そしてまた春へと繰り返す。木に美しく咲いた花びらも、やがては散り行き、草も実も朽ち果て地に落ちるけど、また春になると木は芽を出すじゃないですか。植物も、昆虫も、魚も、動物も皆同じ。でも、それが思念も同じかどうかは分かりません。このオレが、このオレの心が、ずっとずっと永遠に残るって言い切れない。だって、生まれる前の記憶がないから……」

誠さんはオレの考えを、微笑みながら聞いている。

「どうして生まれる前の記憶が無いんですか？」

唐突に質問してみた。

「消されるからですよ。記憶があったら修行にならないじゃないで

すか」

「ご尤^もですが、確証が無いだけに、俄^{にわ}かに信じがたい・・・」

「またかよジオン、もう、いい加減にしるよ」

オツキーがしゃしゃり出てきた。

「分かつてる。分かつてんだよ。失礼だよな、誠さんに。でもさ、オレだって真剣なんだよ」

「ボクは構わないよ、全然。むしろ、そうやって突っ込んでくれた方が、こっちもありがたい」

誠さんが笑みをのぞかせた。

「何、どうしたの？ 揉め事？」

宮さんが心配そうに身を乗り出した。

「いや、ジオンがね、やけに誠さんに突っ掛かるもんで・・・」

オツキー、引っ込んでろよ。

・・・たく。

「信じたいんです。本当はオレも信じたいんですよ。誠さんみたいに、自信満々に言ってみたいですよ、死んだらあの世に行けるって！でも、オレには見えないんですよ！幽霊も、魂も、霊界も、な〜んにも見えない。だから、証拠が無いから、信じようにも信じがたくて……」

「電気は目に見えない。でも、実在しますよね。空気もそうですよね。そんなモンだと思いますよ。目で見るとはなく、感じるんです」

「死んだテルが、目に見えないカタチで存在するなら、どうしてオレの前に現れてくれないんですか？」

「おそらくジオン君は、毎日夢の中でテル君にお会いしていますよ。でも、残念な事に、目覚める瞬間に記憶を消されてしまうのです。なぜなら、覚えていたら、そっちの世界に行きたくなってしまっからです」

「夢の中で……、会ってる……」

「だから言ったでしょ？ 質問するから回答があるって。真実なんて人の数だけあるのよ？ 誠さんを困らせないで」

「ははは、いいんだよユイ君」

「でも……」

「確かにユイ君の言う通り、真実は人の数だけある。ボクにはボクの真実。ユイ君にはユイ君の真実があり、ジオン君にはジオン君の

真実がある。だからこそ、他人を認める事は大事なんだ。決して自分の意見を人に押し付けたり、縛り付けたりしてはいけない。宗教の悪い所は、自分色に染める為に、あらゆる事を規制する所だよな」

質問するから回答がある……。

オレが誠さんに聞いたから、誠さんが自分の考えを答えた……、だけの事。

誠さんの答えが正しいか間違ってるかは、誰が決める？

何を取捨選択するかは、自分次第ってか。

そりゃそ〜だよな。

これは、オレの人生だモンな。

何か掴めそうだ。

「ありがとう、誠さん、ユイ、オッキー！　ありがとう、竜崎、宮さん！！　オレ、何か、吹っ切れたわ」

マジ、顔が綻はなびぜ。

……だよな？　オレの自由だよな？　何を信じようが、何を崇あがめようが、オレの勝手だよな！

死んだらテルに会えるんなら、別に寂しくなんかねえや。

アイツがどっかでオレを見守ってくれてんなら、何も恐がる事はねえや。

テルに恥じねえ生き方をする！！

それがオレが出来る、テルへの最高の饞。はなむけ

第223話 ソクラテスの暗号

動植物、人間、地球、そして、宇宙……、なぜ、存在するのだろうか？

そんな存在論を追及すること、すなわち哲学。

今宵こよひオレたちは、石庭いしにわの白砂はくしゃ、水面みなもに映る月、紅くれないの落ち葉、空天くうてんの天あまの川がわなど情緒溢れる秋の景色を眺めながら、そんな哲学の話で盛り上がっていた。

些細ちさいな事にはこだわらない、豪傑こうけつ豪快ごうかいな宮さんが、珍めづしくも己おのの死生観を語り出した。

「生きてるヤツは誰も死んだ事ねえから死後の世界がどんなモンかってのは分かるワケねえし、死んだヤツが生き返った前例もねえから結局誰にも伝わんねえ。そもそも答えのない問題なんだよな、これって。想像でしかないワケじゃん、答えは」

その通りでさ、ダンナ。

それが哲学ってヤツなんでヤンス。

「オレは魂つてのが残ると思うんだよ、死んだら。火の玉みてえなヤツ。そいつが死後、49日を過ぎたら極楽ごくらくに飛んでくんだよ」

極楽ねえ。

「根拠は？」

おっ？ 竜崎が宮さんにツッコんだぞ。

「じつちゃんが言ってた」

返す言葉ねえな……。

「オレは……」

おっ、竜崎の死生観。

どれどれ……？

「オレは誠さんに会うまで死んだらどうなるかなんて考えた事もなかったっす。前に一度、誰か忘れたっすけど、大人に聞いた事あったんすよ、死んだらどうなるのかって。納得いく答えはもらえなかつたっす。簡単に言えば、そんな事を考えるより、今を生きる……みたいな？ こっちは死んだらどうなるのか聞いてるのに、質問の答えが別方向に逸れるのが常っていうか……」

そうなんだよな、分かるぞ、その気持ち。

分かんねえから上手くはぐらかすんだよな、大人は。

「誠さんの話を聞いて、オレなりにこんななのかな・・・って思ったのが、誠さんの言う霊界ってヤツっスか？ オレも、そんなカンジの世界を想像してます。この世は、前世からの繋つながりのある試練の場。オレに足りない部分があったら、それを補うために用意された世界がこの世。たとえばオレは嫉妬心が強いとしたら、その心を改善するまで試練が続き、それを改善できたら今度は新たな欲望の火を消す為にまた次なる試練が訪れ、それが達成されるまで生まれ変わり続ける・・・みたいなカンジっスかね？」

欲望の火。

仏教で言えば煩惱ぼんのうみたいなモンかな？

ちなみに煩惱ぼんのうって、108あるんだよね？ 四苦八苦しじはく、 $4 \times 9 = 36$ 、 $8 \times 9 = 72$ 、 $36 + 72 = 108$ ？ それは単なる語呂合わせか。

そいつを断ち切ったら生まれ変わり無し・・・と。

「宮君の死生観は、死んだら誰もが極楽へ行けると解釈していいのかな？」

誠さんが宮さんに聞いた。

「そうですね。金持ちも貧乏も、悪人も善人も、みんな一緒。死んだら極楽」

宮さんの答えに笑顔で大きく頷うなづいた誠さんが、今度は竜崎に聞いた。

「竜崎君の死生観は、死んだら生まれ変わり、修行が済んだらやつとあの世で安住できる……。そんなカンジかな？」

「そうっすね」

「沖田君はどんな死生観を持つてるのかな？」

おっ、とうとうオツキーの出番だ。

「死んだらどうなるか……。ですか？ オレはずっと死んだら何も無いって思ってたんです。死後の世界は、睡眠時みたいに真っ暗な世界だっと思ってました。でも、皆の話を聞いてて少し考えは変わってきましたね。今はこれだっって断言できるものは無いですけど、何も無いって思うより、何かあるって思った方が、生きてて面白いかなって思います」

何だよつまんねえの。

それじゃ〜オレと一緒にじゃねえ〜か。

「そっだよね。たとえば死んだらそれで終わり、無って思っちゃったら、悪い事して上手く儲けてズル賢く生きた方が得だし、目障りな人間は殺してしまえば楽だし、奴隷にしちやえば上手く稼げる。でも、本当はそうじゃない。ボクらは魂を持つ人間。死んだら終わりではなく、云わばこの世は魂を鍛える修行の場。生きる目的は、大目的を達成させる為にあるワケだから、死、つまり自分のラストを常に意識して、日々、ベストを尽くして生きるべきだよね」

オオ〜、確かにそっだよな〜。

「光陰は矢よりも速く、身命は露よりも脆い。正しく生きる事は、たった一日であれ、無駄に百年生きる事より遙かに尊いものです」

め、名言だ！ 氣宇壮大な誠さんの、名言だあ〜〜！！

「ウフフ、みんな似たり寄ったりでつまないなあ〜。もっと奇抜なのが出てくるの期待したんだけどなあ〜」

ユイが、さも全てを見通したような目線でオレたちを見る。

「だったらオマエはどんな死生観持ってたよ」

「少なくとも、ジオンよりは面白いわ」

「大した自信だな。何だよ、言ってみろよ」

「アンタが先に話なさいよ」

「はあ？ 何焦らしてたよ」

「誤魔化さないですよ。アンタが自分の死生観をはぐらかして語ってない事くらい知ってるのよ。何恥ずかしがってるのよ、言いなさいよ」

「べ、別に恥ずかしくねえ〜よ・・・」

「大丈夫よ、人の考えは変化するもの。アンタが将来、今言った事と考え方が変わったとしても、別にそれは恥ずかしい事でも何でも

ないわ。むしろ当たり前前の事。それに、アンタの話なんて、その頃誰も覚えちゃいないから安心して」

「……コイツめ、オレを踏み台にして高くジャンプする気だな？」

ちつきしよく、こうなったら、オレの究極の死生観をぶつつけてやる！！

「あらゆる物質と一緒に、オレが死んだらオレの体は完全に滅びる。……と、同時にオレの思考も滅びる。……と、言いたい所だが、滅びと再生は同じものだとオレは思う。表裏一体。つまり、目には見えないだけで、物質は量子的に見て最終的に光になる、イコール、オレは死んだら体は光になり……って言うか、生まれる前の状態に戻る。そして、何も無いように見える光の世界に、まるで幻想のようなこの世界を築き上げたのは何を隠そう、オレという思念。……と言っても、決してオレは個体ではない。オレは全体なんだ。全体ってのは、光の集合体、宇宙。それが神、つまりオレが神、それが大宇宙、すべてオレ。今オレが生きている世界は、物質という制限だらけのマトリックス（仮想空間）。何不自由なく無制限に自由な幻想の世界から、退屈しのぎで飛び出した神の子（分身）が、そんなマトリックスで、ハラハラドキドキの体験をゲームの如く愉しんでいる。大目的の達成、それは、ゲームをクリアする事」

「どうだ！面白いだろ？！」

宇宙意志は、想像したものを瞬時に現実化する幻想の世界に生きる思念体。

そんな思念体が具現化した想像の世界が、三次元である物質世界、

この地球だ。

この地球でもがき苦しむオレは、ゲームのキャラクターであり、主人公であり、操作するのは神であるが故に、神の分身でもある。

「ふ〜〜ん、まあ〜まあ〜面白いわね」

フン、何だよ偉そうに。

「オレの死生観は伝えたぞ。さ〜、今度はユイ、オマエの番だ」

第224話 山の如し

「死んだらどうなるかは、人それぞれ違うのよ。自分が死んだらど
の世界に行くかは、死んでからの楽しみ違ってワケ」

死んでからの楽しみ？

「たとえば、死んだら霊界に行く人もいれば極楽に行く人もいるし、
無になる人もいるの。無になつたかと思つたら、キリストに生き返
らされて裁かれ、天国か地獄に選別される人もいるわ。生まれ変わ
る人もいるし、来世は別の生物に生まれ変わる人もいる。それが地
球とも限らないわ。どこかの星の宇宙人かもしれないし、宇宙空間
を漂う未知の生物に生まれ変わるかもしれない。アンタが言うよう
に、宇宙と一体化する人もいるの。つまり、行き先は誰にも分から
ないワケ・・・」

はあ？ 何でもアリだな。

「それって、死んだら自分の思考によって行き先が変わるって事が
？ 信仰する宗教によって変わったり、死んだら無って思ってる人
は、ホントに無になるって事？」

「違うの。それは死んでみるまで分からないの」

「え？ じゃあ、オレは死んだら宇宙意志になれると思つても、
実は無になるかもしれないワケ？」

「そう。アタシが思うに、ジオンは死んだらイカになると思うわ。海に生息するイカじゃなくって、宇宙空間を漂うイカ」

「……………そ、そうか。スゲエ！発想だな」

「ユイ君も言う通り、真実は人の数だけあるよね。どれが正しいってのではないとボクも思う。だからこそ、自分を信じ、見るもの聞くものを取捨選択して、自分が正しいと思つた道をしっかりと歩いて行く事が大事だと思つんだ」

誠さんが締め括^くつてる！ ユイの死生観には触れもせず！！

……………ま、答えはいずれ分かる時が来る。

死後の世界がどんな所かなんて、人間は生きてりゃ必ず死ぬんだから、今から考えたり思い悩んだりする必要はない。

未来が決まってないのと一緒に、もしかしたらユイの言うように、死後の行き先はまだ決まってるかもしれないのかもしれない。

光陰矢の如し、身命は露よりも脆し……………なら、尚更今を生きなきや……………って思う。

あれこれ悩んでる暇があるなら歩こうか……………。

自分の信じる道を……………。

チュン チュン チュン

小鳥の囁りで目を覚ます。

冷えた廊下を歩き、オレは道場へと歩を進めた。

すでに道着に着替えたユイと誠さんが、熱心に稽古に励んでいた。

「すみません、ちょっと寝坊しました……」

「ジオン君、神野流古武術は、真善美、つまり、認識上の真と、倫理上の善、審美上の美を追求することにあります。手厳しいことを言うようですが、一夜づけでは決して学べるものではありません」

ゲツ、怒られてるのか？ 朝っぱらから怒られてんのか？ 遠回しに、寝坊、遅刻した事を責められてんのか、オレ？！

ユイが冷たい目でオレを睨む。

跨ぐなってか？ 帰れってか？ 2度と来るなってか？！

くそお、上から目線のユイがムカツク！ それに、誠さんがおつかない。

逃げるが勝ちか？

・・・いや、待て。

・・・・・・・・・・・・・・・・

確かに、歴史ある神野流古武術に対して、目やにを付けた男が土足で足を踏み入れるのは大変失礼極まりない無礼講ぶれいこうな行為だと思うよ。

だけど・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・
タカノブ戦を前にして、こんな所で尻込みしちまっては、何の為にここに来たのか分かんねえ。

せつかくのチャンスを逃しては、オレは一生後悔する！！

「一夜づけでも付け焼刃でも何でも構かまいません。どんな稽古でも構かまいません。一瞬でも構かまいません。教えて下さい。オレは、そこから真髓しんすいを引き出しますから」

「・・・分かりました」

誠さんは、ニツコリ笑いながら背中を向けた。

「ユイ君、準備が出来るまで、ボクは茶室にいるね」

アレ？ 稽古は？！

「ジオン、これに着替えて」

ユイが道着をくれた。

「サンキュ……」

「アンタふざけてんの？ それは死人、こつよ、こつよ……！」

道着の着方から……ってか？

その後オレは、正座の仕方や立ち方、歩き方など何度もダメ出しされ、それだけでヘトヘトになった。

「誠さん、お願いします」

ユイの一言で、誠さんが姿を現した。

目の前に対峙する誠さん。

……な、何たるオーラだ。

や、やべえ〜、こ、殺される……。

オレは一瞬で怯んだ。

目の前の誠さんが、あまりにも大きく見える。

「じゃ、まず、正座しましょう」

ふう、助かった。

あのまま立ってたら、向かい合ってるだけで危うく後ろに倒れる所だった。

「ユイ君から軽く聞きましたが、来週、格闘技の大会に出場なさるとか・・・」

「ハ、ハイ」

口が裂けても高校生の喧嘩の大会だなんて言えねえよな。

「なぜ戦うのですか？」

「揉め事を解決する為です」

「避けられない戦いなのですね？」

「そうです」

「勝負にこだわるのですか？」

「はい。もし負けたとしても、戦う事に意味があると思うんで、後

悔はしないと思います。・・・でも、戦う前から負ける事は考えたくありません。オレは勝ちにいきます」

「なるほど、勝ちにこだわるわけですね？ 武士道の本質、それは死ぬ覚悟ではなく、生きる覚悟。つまり、勝つこと・・・」

「.....」

「いいでしょう、稽古というより、手合わせいたしましょう。本気で来て下さい。ボクも本気でいきます」

かかって来いと？ いきなりかかって来いと？！

ハツタリですか？ それとも、本気で言ってるんですか？！

オレ、こう見えてもド素人なんですけど〜。

格闘技の大会に出る選手って思ってるみたいですけど、オレ、ホントはペ〜ペ〜なんですけどお〜〜。

そこんトコ靈視して見抜いて欲しいんですけどお〜〜。

「大丈夫よジオン。誠さんはちゃんと手を抜いてくれるから、本気でかかっていきな」

ユイが耳元で囁いた。

「ヨ、ヨロシクお願いしますっ!!」

オレが立ち上がると、誠さんも同時に立ち上がった。

相変わらず山のように大きく見える。

オーラか？ 誠さんのオーラがそう見せるのか?!

「うおりゃ~~~~!!」

先手必勝!

オレは誠さんを掴つかみにかかった。

……が!!

第225話 五輪の書

何度挑んでも結果は同じだった。

微動だにしない誠さんが目の前にいる。

そんなスキだらけの誠さんを掴みにかかるオレ。

・・・でも、あとちょっとで掴めると思った瞬間、目の前から誠さんが消えるんだ。

一瞬で、視界からたちまち消え失せるんだ。

次の瞬間、オレは宙を舞い、いつしか天を仰ぐ。

・・・有り得ない。

こんな事、有り得ない。

力の差があるとしたら、これが天と地の差ってヤツか？ 何かが違う？ 次元が違うのか？！

・・・分からない。

分からないけど、分かった事がある。

それは、どんなに自信があってもどんなに意気込んでも、たとえ命を懸けたとしても、勝てない相手もいるって事。

オレは、そんな事を学んだ。

「あ、ありがとう……、ございまして」

声を振り絞るだけで精一杯だった。

肺の方から血の味もする。

受け身のとり過ぎで体中ボロボロになったオレは、ヨロヨロと道場を後にした。

「ジオン、ホントに大丈夫？」

ユイがタオルでオレの汗を拭ってくれた。

「よ、余裕だ」

……とは言うものの、途中からあんまり意識がなかったもんで、自分が何発投げられたのかとか覚えちゃいない。

ただ、無意識で誠さんにしつこく挑んでたのは間違いない。

悔しいってのもあったし、一度でも誠さんの道着を掴みたいって気

持ちもあった。

もしかしたら、道着と言うより、真髓、それこそ誠さんが言っていた、真善美のようなものを掴み取ったのかもしれない。

ぶっちゃけ、正直言って真髓は掴めなかったし、触れる事も出来なかった。

……ちきしょく、頭に来るぜ。

ヨロヨロと歩くオレを見た竜崎、宮さん、オツキーに不思議顔をされたが、含み笑いを浮かべて誤魔化した。

朝食後、誠さんに屈託くつたく無い笑顔で感謝を述べ、オレは爽さわやかに琵琶神社を後にした。

家に着き、部屋のベッドにうつ伏せに寝そべった瞬間、溢あふれるほどの涙こぼが零れた。

痛いよー！ 悔しいよー！ ムカツクよー！

とにかく、悔しい。

でも、怒りの矛先は決して誠さんにはない。

自分に……だ。

何も出来なかった歯痒さ……。

もし、これが誠さんじゃなくて、相手がタカノブだったとしたら……
……、想像しただけでゾツとする。

第226話 揺ぎなき守護者（前書き）

第226話 揺ぎなき守護者

見事に仕上げた今日のヘアースタイルは、威圧感溢れるツンツンヘアー。

まさに今のオレの心境を形象化けいしょうかしたかのような、炎を身に纏まとった不動明王がモチーフだ。

今日のセットに使った整髪料は、上京直前にテルがオレにくれたものだ。

その時一緒にもらった黒の皮ジャンを身に着け、形見のギターを背負った。

準備完了。

ピンポーン

「ジオンく、白鳥ユイちゃんがいらしたわよ」

母かあちゃんの声の下から聞こえる。

予定通り、ユイが迎えに来てくれたようだ。

「よし」

階段の下には、母親と玄関で立ち話をするユイがいた。

ユイは、今日のオレの試合のセコンドを務めてくれるワケだが、ミケコ戦の時と全く同じ服装なのは、何か意図があるのだろうか？

「あら、2人で仲良くお出掛け？　もしかしてアナタ達、付き合ってるの？」

しよゝもねえゝボケをかますな、母ちゃん。

「ジオンは面食いですから、アタシなんかより全然カワイイ娘が好みかと思えますよゝ」

「ユイちゃんみたいな家庭的な人と結婚してくれると助かるのになあゝ」

「ハイハイ、幼馴染みと母親の、お約束的な社交辞令はその辺にして、さっさと行くぞ」

「お邪魔しましたあゝ」

10月14日、日曜日、空は雲ひとつない日本晴れ。

決戦の地、野牛港第3倉庫、特設ステージに向かうべく、オレとユイは石田駅へと歩を進めた。

「何がお邪魔しましたあゝだ。どっからそんな黄色い声が出るんだ

？いつものハスキー声は何処いった？」

「うるさいわね〜。アンタさ〜、楽器なんか背負ってどこいくつもり？ そんなカツコウで戦うつもりなの？」

「まさか。これは入場時のコスチュームだ。それよりオマエの服はどうなんだよ。この間のミケコ戦の時と一緒にじゃね？」

「そうなの？ 知らなかった。しかしアンタ、よく覚えてるわね〜そりゃ〜そんだけ可愛く見えれば、男なら目に焼きつくのは当たり前だろ・・・なんて口が裂けても言えねえ〜・・・って言うか、言いたくねえ〜。」

「・・・つつ〜かさ、随分薄着じゃね？ 昼間はいいけど、夜は冷えね？」

「そしたらアンタの皮ジャン着るから」

「はあ？」

・・・と、その時！

「お〜〜い、置いてくなよオマエら〜」

後ろからオツキーが追いついた。

「忘れてた、ゴメンオツキー」

「嘘つくなジオン。オマエら絶対わざとだろ？ オレを置いてったのは絶対、故意だろ？」

いや、マジでオツキーもオレん家ちに来るって事、すっかり忘れてた。

「ま〜ま〜、そんな事よりさ〜、生ドーナツはどこでおごってもらえるの？ もちろん駅前だよな？ 野牛町行っちゃったらさ〜、絶対そんな店ないよね？」

ユイには公約通り、1週間連続でスイーツをご馳走ちゆうしている。

もちろんオツキーにおごらせているのは言つまでもないが。

「そうだな、石田駅周辺なら、どっかにはあるだろ」

「時間大丈夫なのかよ、ジオン？ 夜の8時30分から始まるから、1時間前には到着してないと・・・」

「まだお昼だぜ、オツキー。それに、オレの試合の開始時間はど〜せ9時は過ぎるだろ〜し、ギリギリでい〜よ、ギリギリで」

「・・・ったく、相変わらずO型は時間にルーズだな」

コイツに、オツキーにだけは、オレの専売特許である血液型蘊蓄うんちくを語られたくなかった・・・。

石田駅前に到着し、さっそくケータイで検索した生ドーナツが買える店に向かった。

到着すると、案の定、日曜の昼という事もあり、ケーキ屋の前は長蛇の列だ。

「オツキー、並べ」

ユイが並ぶのが妥当だが、金を出すのはオツキーだ。

みんなでも並んでも効率が悪いから、ここは代表でオツキーが並ぶのがベターだとオレは瞬時に判断した。

「ふざけんな、ジオン。オマエが並べよ」

「オレはギター背負ってるし、キャラが違うだろ、キャラが」

「何がキャラだよ。オマエはどうあがいたって3枚目だ、ジオン」

「そういうテーマも3枚目だよ、オツキー」

「……ったく、子供の喧嘩はやめなさいよ、みつともないし恥ずかしい。アタシが並ぶから、アンタらはそのレコード屋にでも入ってなよ」

……と言って、ユイは長蛇の列に並び出した。

「オマエが並ぶのは当たり前前だろ?! 最初っから黙って大人しく並びやがれっつてんだ」……と、心の中でツツコミながら行列を後にした。

しばらくすると、ポケットのケータイが震え出した。

『宮さんと石田駅に到着しました。ジオンさんたちは今どこですか？』

竜崎からメールだ。

ユイが生ドーナツをGETするのと、竜崎、宮さんが合流するのは、ほぼ同時だった。

「見て見て、コレが噂の生ドーナツよ。今日は特別アタシのおごりね。どれがいい？ 抹茶とチョコと、イチゴとオレンジとカスタードクリーム」

へ、ユイのヤツ、ちゃんと竜崎と宮さんの分も買ったんだ・・・。

「・・・つつかさあ、フツ、フルーツはなくねえ？」

「アンタ何も知らないのね。生ドーナツって言ったらフルーツなのよ」

そんなモンなのか？

「じゃあ、チョコ」

それがまた、激ウマだった。

・・・なんて楽しい一時は長くは続かなかった。

オレたちは、ガチユルの法則通り、ユルを実行していたつもりだが、徐々に宮さんの表情から笑顔が消えた。

もちろん、オレからも……。

第227話 B型女性のフィーリング

牛タンの店なんぞに入り、1500円もするランチを食べ、オレたちは時間を潰した。

・・・つもりだったが、それでもまだ15時。

20時30分までまだまだある。

「待ち合わせすんの早過ぎたよな」

オレの率直な意見に対し、誰一人として反論がないのも寂しいな。

「こんな時間に野牛駅とか港とか行ってもなあ、何にもする事ねえしなあ」

宮さんが鼻からタバコの煙を出しながら、退屈気に言った。

「走り込みでもするっスか？」

竜崎が宮さんに声を掛けた。

「マジで？ 別にいいけど」

「冗談っス。散々休めって言うてんのに、この人ちつとも休憩しないんよ。トレーニングしてない宮さん見るの、1週間ぶりっス」

アレじゃね？ 宮さん余裕かまして遊んでばっか……とかって竜崎に言われて、B型特有の偏屈へんくつが出たんだろ？ B型は天邪鬼あまのじゃくだから。

「コイツも1週間、ほとんど筋トレしてましたよ」

オッキーがオレのことを指差した。

「筋肉は休ませなきゃダメだって言ったじゃん。……ったく」

ユイが呆れ顔で溜息をついた。

「怪我しないようにね」

宮さんがオレの右手を見て言った。

明らかに前回のオレの骨折を回想してるよね、宮さん。

「こんなに時間が余るなら、せつかく皆揃ってんだし、楽器の練習でもすればよかったか？ なんてね……、ハハハ」

オッキーが皆の顔色を気にしながら表情を緩めた。

「それもアリだったか？ 秋のライブ近いしなあ。最近みんな德音合わせしてねえし」

宮さんが納得の表情を見せる。

「ガチユルの法則ってヤツっスか？ でも、試合当日にバンドの練習って、どうなんスか？」

へ？ 竜崎オレを見つめてっけど、オレにふってんの？

「ま、ユイもいる事だし、それもアリじゃね？」

何となくユイにふってみた。

「何？ アタシにヴォーカルやれって?!」

ユイがシラケ顔で、コップの氷を退屈そくに突き出した。

「誠さんの社内のバイトってさ、前にやってたバイトと違って、キツカリ時間を拘束されてるワケじゃねえくんだろ？ 前は遊ぶ時間も作らずビッシリ働いてたみたいだが、今はちよっぴりゆとりがあるんだろ？」

I k a r U のギターを買い終わった今となっては金を稼ぐ意味がない・・・なんてね。

「まあ・・・、ね」

「退屈するのは、B型のオマエにとっては最大の敵だろ？ 常に何か楽しい事がねえくかって探求すんのがB型女性、違うか？」

ユイ個人に限定せず、B型という不特定多数を兼ね合いに出すのがミソ。

「だから何よ」

ちよっぴりムキになるのは乗ってきた証拠だ。

「ヴォーカルやんねえ〜？ 暇潰しに」

ヒマつぶし……。

我ながら素晴らしい言葉が出たモンだ。

B型のフィーリングにピッタリな響きのはず。

「え〜〜〜」

完全否定しないのは、心の中では満更ではない証拠。

……って、オレ、いつの間にかユイへの説得始まってない？

元々は、テルとオレとオツキーでバンドを組み、秋のライブでオリジナル曲を披露する予定だったんだ。

それがテルの死により、夢は完全に絶たれた。

でも、オレの、夢を何とか叶えたいという熱烈な思いに共感してくれた竜崎と宮さんが、楽器を手にとってくれたんだ。

かくして、ギター、オレ……、ベース、竜崎……、ドラム、宮さん……、総合マネージャー、オツキーという、とんでもないミラクルバンドが誕生したワケだ。

存在感が半端ないこのバンドだが、一番大事な肝心の何かが足りないのだ。

そう、ヴォーカルだ。

ユイに要請してはみたが、答えはNO。

仕方なく諦めてた矢先、修学旅行の最終日、『お願い、ジオン君たちのバンドにさく、ユイを入れてあげてよ』と、佐倉からのまさかの懇望。^{こんぼう}

愛しの佐倉からの願いとあっては、叶えてやるのがオレの務め。

……っていうか、オレに任せろ的に佐倉と約束したのは言うまでもない。

そんな流れがあったのは全然覚えていたが、まさかここにきて、無意識でユイを説得し始めるとは思ってもしなかった。

……と言うのも、B型は詰め寄られれば寄られるほど退く^{ひっこ}生き物。

ここまでしつこいと、ムキになってユイも引くはずだ。

だからこそ、それを知ってるからこそ今まで行動を起こさなかったんだ。

ユイを説得するには、それなりの計画が必要で、タイミングを計らなければならぬ。

佐倉からの要請もある為、絶対にミスを犯せないからだ。

それが何？ この状況、始まっちゃってるよね？ 何か、自然に説得に入っちゃってるよね？

・・・って事は、今現在のこの流れで、もし失敗したら、もうそれっきりって事だよな？

もう、今まで散々押してるから、ユイはかなり引いてる状態だ。

それが、ここにきてさらに押し捲まくってるオレ。

・・・完全に引いてるよね？ 取り返しがつかないくらい・・・

B型は、コレだから困るんだ!!!

・・・って、待てよ、待てよ、待てよ???

アレ？

ユイ、満更でもない「え〜〜」だったよね？ もしかして、イケル?!

・・・と、その時!!

「オレさ〜、今日の入場テーマ曲、『オッチーズOcchyz』の『Sing
” Love · · for Me ! !』にしてくれって大橋に
頼んだんだよ。そしたらさ、曲持って来いって言うから探したんだ
よね。でもさ、結局見付からなくてね〜。ムキになって探してたら
さ、インディーズバンドだってクラスのヤツに聞いてさ、なかなか
見付からないワケが分かったよ。一応CDはタワレコとかで入手出
来るらしいんだけどさ、間に合わなくてね〜。KHJもそんな位用意
しろってな」

宮さんがユイに言った。

「へ〜、宮さんも『Occhyz』ファンなの？」

ユイが目を丸くして宮さんに尋ねる。

「いや、学園祭でさ〜、ユイちゃんの歌声に痺れちゃってね。ホン
トはあの時の音源あればそれで入場したいんだけどさ〜」

オツ、宮さん嬉しい事言ってくれるねえ〜。

褒められるとどこまでも昇り続けるB型、ユイ。

「へ〜」

口元がかなり綻ほころんでるゾ。

これは……、チャンスか？！

「ユイさんに、ヴォーカルやって欲しいっス」

竜崎が！ 竜崎がユイに直訴している！！

「頼むよ、ユイちゃん」

宮さんまで！！

「ユイ、オレからも頼む。ユイの美声が欲しいんだ」

オツキーが、ユイにトドメをさした？！

ユイは下を向いて考えている。

最後の一押しか？

オレの一声に全てがかかっているのか？！

暗黙の了解なのか、今まさに、この静寂せいてつやくの中、時が止まったような静けさの中、竜崎、宮さん、オツキーの心の声が聞こえる。

『決定打を頼む！！』

そんな皆の心の声を聞いて、オレは迷わずこう言った。

第228話 ユイの歌

「ヴォーカルならオレがやる！」

そんなオレの言葉に、誰も反応する気配がない。

呆^{あき}れてるのか？ それとも、ツッコむタイミングが掴めないのか？

そりゃそくだよな、ここでそのセリフは無いよな。

フツフは完全に断たれるよね、希望が。

でも、相手はホラ、天邪鬼^{あまのじやく}だから……。

「アンタなんか任せられるワケないでしょ?! せつかくのバンドが勿体無い! しょくがないからアタシが歌ってあげるわ」

なに?! マジでか??!!

竜崎も宮さんもオツキーも、瞬^{まはた}きせずに固まったままだ。

「今、何て言った?」

「アタシがやるって言ったのよ。しょくがないからヴォーカルやってあげるわよ」

ユイが言い切った。

やったあ~~~~~!!!

勝った！ 勝ったぞ~~~~~!!! 血液型マニュアル男の勝利だあ~~~~~!!

これで佐倉にも面目を保てた。

「マジっスか？ そりゃ〜凄い。俄然、面白くなってきたっスね」

竜崎がニンマリした。

「ガツハツハツハ。ユイちゃんがヴォーカルやるなら天下無敵の強力無双だな。向かう所敵なしだ」

高笑いする宮さん。

「最高だぜ、ジオン。天国のテルも笑ってらう。あっはっはっはっは」

オツキーも哄笑した。

「ねえ〜ねえ〜、そんならさあ〜、アタシこんなの作ってみたんだ

けどさあ〜」

ユイがどこからともなくメモ書きのようなモノを取り出し、テープルに広げた。

A4サイズのレポート用紙に、走り書きされた文字。

「何それ？」

「テル君が作った曲あつたでしょ？ アレにさ、歌詞を付けてみたの。初めてあのフレーズを聴いた時にさ、フツと思ひ浮かんだのよね」

「はあ？ 何だよそれ、だったら早く言えよ……って言ってやりたかったが堪えた。」

「……つっくか作詞してる時点でき、まざりたかつたのバレバレだよね？ 表面メツチャ嫌がつてたくせに、ホントは内心ヴォーカルやる気あつたよね？ その証拠に、作詞した用紙、いつでも出せるように持ち歩いてたよね？」

「この歌詞凄くね？ スケール、メツチャデカイ！」

オツキーの鼻の穴が大きく膨らんだ。

「ほっ」

竜崎は腕を組んで感心している。

「これは・・・」

宮さんは言葉もなく感服状態だ。

何？ そんなに凄いの？ ……どれどね。

『What of the horizontal do you
see in the other side for a
long time?』

(水平線のずっと向こうには 何が見えるのかな)

It is my unexpectedly back and
the imagination swells .

(案外自分の背中だったりして 想像は膨らんでゆく)

Though you laugh that you are
not possible . . . so . . . the thin
g

(そんな事有り得ないよと 君は笑うけど・・・)

There is no certain dream of a
street and an empty person who
passes every day it one anyway

here .

(日々 過ぎてゆく街並みや 空 人の夢 確かなものなんて
どこにもないよ)

I want to feel now more than
tomorrow that has not come yet
in passed yesterday .

(過ぎた昨日まだ来ない明日よりも 今を感じていたい) 『

「へ」

率直な感想としては、「ふ〜ん」くらいだったが、サビの部分
を繰り返し読む度、深い何かを感じた。

「な〜ユイ、コレ全英語詞なのは何か意味があんの？」

「いや、別に」

「だったら日本語でいいだろ？ オレら別にカッコつけたいわけじ
ゃねえ〜しさ、元々日本人だし」

「まあ〜ね。別にアタシもこだわりがあるわけじゃないけど。ただ、
何となくね」

単なる照れ隠しだろ？ せっかく良い詞を書いてもさ、それが聞く
人に伝わんなきゃ勿体無い。

いくらグローバルたつて国内じゃ、所詮英語が分かるのは一握り。だつたら広く沢山の人に直接メッセージを伝えるべきだ。

日本語でね……。

「コレいいよ」

オツキーが絶賛だ。

「でしょ？ そんでね、色々と加えたい所があつてね、例えばこの『君は笑うけど』の後なんだけどさ……」

「いいねえ〜それ、『NO、NO、NO……』か。だつたら、『ノノノ、ノン、ノン』なんてど〜かな？」

「いいね、それ。あつ、それいいかも」

オツキーとユイが盛り上がっている。

へ〜、本格的にユイのバンド入りが決定した上、ヴォーカルに作詞かあ〜。

ユイの奴、あつと言う間に主役だな。

・
・
・
・
何か悔しい。

第229話 パワフルパワフル、パワフル全開

19時30分、野牛駅に到着。

いつの間にか背後には、前回同様、沢山の武蔵の生徒が付いて歩いてきた。

もちろんほとんどが1年。

「先輩、頑張ってくださいね」

朝露さんだ。

「アレ？ ずっと姿が見えなかったからさ、てっきり今回は来ないのかと思ってたよ」

・・・つつくか、来てほしくなかったなあ。

緊張するじゃん。

また長山とか来んのかな？

芒とかはタカノブのセコンドに付くんだろなあ。

・・・っていつか、貴船も来るんだろし、もしかすると、中学の時の・・・。。。

ああ、今更だけど、超後悔。

タカノブ戦なんか、断わりや良かった。

負けるのもイヤだけど、勝ったら勝ったで大変じゃね？

次、貴船・・・とか、その次、中学の時の誰々・・・とか、いや、その前に芒が再戦要求を・・・、いや、その前にギヤラクシーが出てきてフクロにされるかも？

ぐわあ、頭が混乱してきた。

ムチャムチャする！

どおしてこう、次から次へと試練ばっか、修羅場ばっか訪れるんだ？！ ホント、ふつぎけんなつつんだ、まったく！！

がぁぁぁ、憂鬱ゆううつだ！！

思えば2年になってからロクな事ねえな。

避けて通るつもりが、メツチャ、ヤンキーロードを駆け巡ってるし。

とうとうギヤラクシーの一員で、ウチの学校の2年のトップと恐れられる男と、秘密裏の、闇の大会でタイムマン張んなきゃなんねえし。

何でいつもオレばっか、こうもツイてないんだろ〜か……………。

20時、大会開始30分前に会場入りを果たした。

すでに何人かの観客が、パラパラと席に着いていて、オレたちの姿を見るやザワザワと騒ぎ立てている。

そりゃ〜今日のメインを張る男が現れたんだもんな。

武蔵の生徒たちは、我先にと良席を確保しだした。

オレたちは、控え室に向かう前に、リングの感触を確かめた。

このリング……………、この間のリングと同じだ。

またここで、大観衆の前で戦うのか……………。

「あ〜、一緒に写真いいですか？」

武蔵の1年の女子生徒が、ユイと写真を撮りたがっている。

「え？ アタシ?!」

すっかりスターだな。

「じゃ、写真いいですかあ〜?」

「へ？ オレ？」

何と、今度は竜崎が写真を強請^{ねだ}られている。

この2人組、見覚えがある。

確か、以前メイドカフェで揉めた時にいた、吉岡の女子生徒だ。

上木の仲間。

・・・そうだよな、この間の野牛との全面戦争後は、もうすっかり遺恨も雪解けしたんだっけな。

「写真はヤダな」

竜崎がクールに断った。

「せっかく声掛けてくれたんだから、写真くらい一緒に写ってやれよ」

オレは意地悪く竜崎に言っただけだ。

「イヤッス。写真嫌いですモン」

「明治時代の人じゃねえ〜んだからさ、別に魂抜かれたりしねえ〜って」

「絶対イヤッス」

頑固だねえ。

ホラ、何か涙ぐんでるぜ？ 女の子泣かしちゃダメだろ？！ かわいそうに。

「どうしたらいいんすか？」

なぜオレに訊く、竜崎？！

「代わりにサインとか？」

「なるほど、サインならいいっすよ、サインなら」

「あ、ありがとう。じゃ、このTシャツにサインしてもらっていい？」

「ここでいいっすか？」

あ~~~~あ、すっかりスター気取りだな・・・、コイツら。

「ユイはすっかり捕まったな。あれじゃ、しばらく抜けられないぜ」

女子生徒に取り囲まれたユイを見て、オツキーが笑った。

竜崎へも吉岡の女子生徒を皮切りに、次々と女子生徒が詰め寄りだした。

・・・一方その頃宮さんは？ さぞ、嫉妬心でござ立腹・・・？

さすがに強面の総番長、みんな近づきたくても近づけないよ・・・
な？

あ、あれ〜?!

武蔵の1年の女子生徒、男子生徒たちが宮さんを囲んでいて・・・、
宮さんを真ん中にして集合写真を撮ったり・・・、あ、握手もして
もらってる。

すっかり宮さんもスターだあ〜〜〜!!

しかも男女を問わない分、ユイや竜崎よりカリスマ性、上!

・・・オレは？ オレへは?! オレの人気は？ コレ、何？ こ
の虚しさ、何？

第230話 入場曲は命

「ジオン、そうガツカリすんなって」

オツキーが慰めなぐさの言葉を吐いた。

オツキー、てんめえくA型なら、A型らしく気いゝ遣いやがれ！
気いゝ遣って、そつとしといてくれ！！

「なあゝジオン、リングの前でさ、記念撮影しねえくか？」

何それ？ 何の慰めなぐさ？ それに、ケータイ持って、自分で撮影すんの？ それだとアップになるよね。

しかも、オツキー、自分の顔ばつか斜めにアップで入ってさ、ホラ、オレの顔半分しか入ってないよね、別にいいけど。

そうこうしているうちに、いつの間にか会場は、沢山の人で埋め尽くされていた。

「余裕そつだなあゝ、宮あゝ」

本日レフェリーを務める、大橋剛太の登場だ。

「よお、大橋い〜」

相変わらず同キャラ同士がむさ苦しく肩を叩きあう。

「今日は控え室用意してあつから。今日はそつから入場頼む」

「今回はリングアナがコールしてくれんだろ？ なあ〜大橋、例の曲なんだけど、結局見付からねえ〜からアレで頼むわ」

「いや、オレは元からソレをかけるつもりだったけどな・・・」

宮さんと大橋の会話中だが、間に入らずにはいられない。

「話の最中悪いんですけど、もしかして、今回つて入場する時音楽かかるんですか？」

「そうだよ？ アレ？ ジオン君に言つてなかったっけ??」

聞いてねえ〜よ大橋！！

「音響システムは元からあるんだけど、曲をかけて入場してさまになるほどスター性のあるヤツが今までいなかっただ。だけど、この間の大会でさ、宮とかスター選手が誕生しただろ？」

何、宮とか・・・って？ オレは完全に含まれてないよね？ スター選手にオレは含まれてないよね、その言い方だと・・・。

「今回から入場時、その選手のイメージに合った曲をかける事になったんだよ。ちなみに宮は自分から曲を選出してくれたんで、こっちは曲を選ぶ手間が省けたけどね・・・」

手間って何？ 手間って……！

そんな手間、こっちにくれよ！ 自分の入場テーマ曲くらい、こっち
ちに選ばせてくれよ……！

「大橋さん、ちなみにオレの入場曲って何ですか?!」

……他人に勝手に選ばれてる時点で、オレが納得出来る曲は有り
得ねえ〜が、一応聞いてやる。

「ジオン君のイメージに合わせて、ブル・スリー、『死亡演戯』
の『ACTING OF DEATH』にしたんだけど、ダメだっ
たかな?」

え、えええ〜〜?! ブル・スリー? 死亡演戯? ACTI
NG OF DEATHだつてえ〜〜?!

ちなみに今は亡きブル・スリーは、オレが幼少の頃から崇拜する、
カリスマ香港俳優だ。

何もオレが大、大、大好きな曲を選ばんでも……。

「ちょっと待って下さい……!」

ブル・スリーは有難いが、その曲で入場するのは、あまりにもお
こがましい。

オレ如きがそう簡単に使用できる代物しものじゃねえ〜。

せめて世界王者クラスの實力や、それ相当の箔はくが無いと……。

「オレに曲、選ばせて下さいよ!!」

……って言っても、手元にCDとかねえし。

「何だっていいじゃない、入場曲なんて……」

ユイが呆れ顔で言った。

「あのなあ、入場曲は命だぞ！ 闘う男にとって、入場曲は命だぞ！」

マジ過言ではない。

「命ねえ」

「じゃ、もしオマエが入場する時、おもちゃのチャチャチャとか流れてきたらどうなんだ？ せつかくのシチュエーション、台無しじゃね？」

「ま、もしもそんなのが流れてきたら、それは確かに恥ずかしいけど……」

「だろ？ ちなみにユイだったら、どんな曲で入場したい？」

「何でもいいわ」

「じゃ、おもちゃのチャチャチャに決定な」

「・・・勝手にどうぞ」

「大橋さん、何か、サンプルないんですか？ サンプル」

「・・・必死ね」

ユイが眉を八の字にした。

「当たり前だ！ ここはこだわりたい！！」

「確かあつちのミキシング室に、何枚かCDあったと思うぞ」

「行きましょう」

オレは大橋を引き連れ、ミキサー室で自分に見合った曲を探した。

「ジオン、そんなのどれでもいいだろ？ そろそろ第一試合が始まるぞ！ 見るのか？ 見ないなら控え室で落ち着こうぜ」

「黙れオツキー！ オレは今、人生の大きな大きな舞台に立つ直前なんだ！！ 結婚式の入場曲探しとはワケが違うんだ、ワケが！！！！」

「何ワケの分かんねえ事言ってるんだよ。みんなも行ったしき、オレも先に控え室行ってるからな」

「ああ」

……オレに見合った曲。

入場曲。

……オレのテーマ曲。

亀鶴ジオンの一世一代の大一番。
いつせいちだい

……これだ!!

オレが手に取ったのは、『コンドルは飛んでいく』。

アンデス民謡、古楽器のせつないメロディー。

……の、傍そばにあった、『We Three Kings』。

我らはきたりぬ、賛美歌だ。

この曲は、中学時代、辛くて辛くて堪たまらない時に、何気に聞いてた
悲しみの曲だ。

あ・え・て……オレはこの曲を選んだ。

人は時として、数え切れない悲しみ苦しみ、数々の苦難を乗り越えてきた己の人生を背負い、リングに向かわなければならぬ時がある。

人生と言う名の、闘いのリングへ……………。

第231話 O型女性は褒め上手

会場のスタッフらしき人にオレの入場時の曲を、聖歌『We Th
ree Kings』にするよう依頼し、ミキサー室を出た・・・
瞬間、割れんばかりの大歓声と白熱した熱気を体感した。

ビリ　ビリ

肌にちよっとした電気による痺れのようなビリビリとしたものを感じた。

会場の興奮が伝わってくる。

高校生同士の喧嘩を生で観戦するっていう所業に熱狂してるコイツらのほぼ全員が、これから先のオレの試合を^{もく}目する。

緊張しないワケがない・・・。

会場は前回の武蔵VS野牛の全面戦争時と同じくらいの超満員札止め状態。

観戦高校は、宝蔵学院、塚原学園、上泉学園、笹城商業、吉岡工業、野牛農業、そして武蔵。

ほぼ同じくらいの人数ずつ、7校の生徒が^{ひし}犇めき合っている。

ふと、リングサイドに目をやる。

前はKHJの威いかついで面々が陣取っていたが、今日はホスト連中の姿が見えない。

それはそれで物騒な連中が減って良い事だとは思うが、アイツらは居たら居たで、リング上で揉め事とか起きた時に、何気に騒乱を鎮しずめる役を担になっていた。

現に前回のユイVSミケコ戦で、セコンド同士の小競り合いが収拾つかなくなった際、KHJの連中が仲裁に入った経歴がある。

もし前回のような乱闘が生じたら、一体誰がとりまとめるのだろうか？

・・・と、その時！！

『王者VS挑戦者、第一試合を開始します！ 上泉学園内紛争！
青コーナーより、挑戦者、坂本一樹入場！！』

リング上で、黒服でサングラスをしたリングアナと思われる男がコールすると、会場に音楽が流れ出した。

軽快なミュージックに合わせて、茶髪のリーゼント男が姿を現す。

会場の声援を一斉に浴びた坂本一樹は、上泉学園の校旗を背中に被かぶせて入場し、一際注目を浴びている。

『続きまして、赤コーナーより、王者、霧島義行入場！！』

今度は勇ましい音楽に乗り、背の高い痩せ型の男が現れた。

霧島義行と一緒に歩いてくるセコンドの男が、上泉学園の校旗を担いでいる。

先ほどの坂本といい、今度の霧島といい、一体どんな因縁があるのか？ お互いに学校を背負ってるってのをアピールしてんのか、それとも上泉学園の売名行為、単なるCMなのか・・・？

ま、どうでもいいが、入場時に曲が流れるだけで、こんなにもスペクタクルになるとは驚きだ。

特に客の注目度も無いような試合でも、入場シーンが加わっただけで、格闘技の大会的な要素が加わり、客の興奮を煽る事に成功している。

こりゃある意味メインの宮さんの試合は、入場時がハイライトかもな。

試合結果は誰もが予想できるし・・・。

オレの試合も入場時がハイライト・・・なんて事にならないようにしなきゃ・・・な。

リング上では、大橋の合図でついに第一試合が始まった。

喧嘩と言うより、キックボクシングのような試合だ。

感情の剥き出しもなく、単調な試合運びに会場は少々退屈そうだ。

入場だけが立派でも、試合がコレでは・・・みたいに皆思ってるに
違いない。

あえてオレはそこにはそれ以上触れずにしよう・・・。

オレも人の事言えないかもしれないし・・・。

「ジオンさん、今日、ジオンさんのセコンドに付いてもいいですか
？」

朝露さんだ。

さらに、朝露さんの友達も数名いる。

「え？ それは嬉しいけど、いいの？」

「もちろんです」

すっかり朝露さん、普通の女の子になっちゃったな・・・。

アニメの声優さんみたいな可愛い喋り方、結構気に入ってたんだけ
どな・・・、なんてね。

朝露さんたちを引き連れ、控え室に入ると、すでにユイとオッキー、

竜崎と宮さんが寛いでいた。

さらに驚くべきことに、宝蔵学院と塚原学園の生徒も一緒だった。

王者組は同じ控え室らしい。

「ユイ先輩、やっぱり息ピッタリですね」

「・・・だね」

朝露さんとユイは、前回の大会で着た、お揃いのジャージに身を包んでいる。

ユイは虎の刺繍、朝露さんは龍の刺繍だ。

「朝露さん、もしかして最初からユイと一緒にオレのセコンドに付こうと決めてたのか？」

「そのつもりですよ。私はいつでもジオン先輩や宮先輩の味方ですから」

有難いね。

それがO型女性特有のリップサービスだとしても、素直に嬉しいよね。

「おっ、ど〜やら第一試合が終わったらしいっす」

竜崎が控え室のドアから会場の様子を窺った。

ふと、宝蔵学院の生徒に目をやると……。

「お……えつ。お……えつ。おえ……つ」

かなりの緊張状態だと見える。

お気の毒に……。

宝蔵学院の王者と思われるその男は、サムライの格好をして、腰に模造刀をさしている。

そいつの入場時用の派手なコスチュームを見て、人の振り見て我が振り直せという言葉が脳裏に浮かんだ。

「アンタさ、ホントにそのギター担いで入場すんの？」

ユイも同じ事を考えていたらしく、オレに聞いてきた。

「そのつもりだけど……」

やめようかな……。

セコンドに肩を抱かれ、上泉の王者、霧島義行が帰ってきた。

どつやら挑戦者の坂本一樹に敗北を喫したようだ。

霧島が控え室に戻ると同時に、リング上から新たなコールが聞こえ、宝蔵学院の挑戦者の入場曲が流れ出した。

第二試合、青コーナーの松田光太がリングインしたと同時に、今度は宝蔵学院の王者、東条アキラがコールされ、セコンドたちと一緒に控え室を出て行った。

……あつと言つ間にオレの番がくる。

ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど。

第232話 緊張の解し方

塚原学園つかはらの西田栄作にしだえいさくという生徒と、竜崎、宮さんが意気投合し、和わ気藹々き（あいあい）と場を和ませる中、オレは試合前の緊張に苛さいなまれている。

息が詰まるような感覚と共に、定期的に吐き気がし、タカノブに完敗する光景が頭を過よぎる。

その度、稲妻のような頭痛がした。

「大丈夫か？ ジオン」

オッキーが気遣うが、野郎からの声掛けなど今のオレの緊張緩かん和わには全く効果がない。

「先輩、緊張を解ほくす良い方法ありますよ」

朝露さんが友達と共に、オレの傍にやってきた。

出来ればそっとしておいてほしいのだが……。

「ちょっとだけ、腕、いいですか？」

メガネの女の子が、オレの腕を掴んだ。

な、何する気？

「あいててて」

唐突に人の腕を抓りやがった。

「アハハ、ゴメンなさい。こうする事によってですね、気分が少しだけ変わるんですよ。あとですね、こうして私とお話する事ですね、意識がこっちに移るから、多少は緊張が解れるかと・・・」

メガネのコが照れながら言った。

確かに、ここに来てからずっと無口だったかも・・・。

「あとですね、ジツとしてるより、体を動かした方が緊張を解せますよ」

小柄なキツネ目のコが言った。

「そう？ オイ、オッキー、鉄アレイくれ」

「試合直前にパンプアップしてどくすんだよ！ 筋肉張らして試合に挑んだら怪我するって何度言ったら分かるんだよ、ジオン」

オッキーが目をつりあがらせて怒る。

「じよ、冗談だよ・・・」

「ジオン先輩つて、血液型に詳しいんですね？ 私の血液型当てて下さい」

大きなリボンを付けたコが、楽しそうにリクエスト。

こんな時に、なぜに血液型を当てねばならない？ ……つつか、どうしてオレが血液型詳しいって知ってるの？ ま、犯人は朝露さんだろうけど…。

「君は彼氏いるの？」

「いませ〜ん。ジオン先輩もお付き合いしてる人いないんですか？」

「…まあ〜ね」

「お互い頑張りましょ〜ね」

オレの質問をクールに捌き、その後すかさずオレの内情を聞き出し、最後は笑顔でシメた。

クールさと優しさを兼ね備えてる辺り、さしあたりAB型って考えるのが無難かな？ でも、最初に初対面のオレに、『私の血液型当てて下さい』と声を掛けてくる辺り、社交的なA型とも言える。

真っ赤で大きなリボン、ポニーテール、ヘアースタイルは流行に乗ってるが、洋服は独特のお姫様系ファッション…、外見とは裏腹に、社交辞令はお手のもの。

それでいて彼氏がいるわけでもなく、周りの友達も別段オシャレなわけでもないのに独自の路線を突き進む辺り、個性的なA B型っぽい。

A B型女性は比較的、ロマンチックなお姫様系を好む。

が、母親がA B型で、娘に着飾らせるってパターンも考えられる。

「今日の洋服は、自分のチョイス？」

「実は、お母さんです」

なるほど、予感的中だ。

母親のチョイスだったら、娘はA型の確率が高い。

押し付けに対し、O型、A B型、B型は反発するが、A型だけは素直に聞くパターンが多いからだ。

「君はA型。ちなみに、お母さんはA B型」

「・・・マ、マジ？ ヤダ・・・、当たてるんですけど」

メッチャ引いてるし・・・。

「・・・あつ、取り乱してゴメンナサイ。ホントはジオン先輩に笑ってほしかったんです。ホラ、作り笑いでもいいから口元を歪ませると、脳がリラックスしてるって勘違いして、結果的に緊張を解してくれるって良く言うじゃないですか」

「いや、良く言わねえ〜なあ〜」

「ゴメンナサイ。余計な事しちやったかな？」

「いや、良い事聞いた。作り笑いしてりゃ〜、自然にリラックス出来るんだろ？ 理に適ってんじやん」

そう、オレはポジティブ男の中のポジティブ男！ ミスターポジティブ！ 転んでも、ただでは起きん！

「オレの今日の相手はタカノブって言って、喧嘩が強くて有名な強敵なんだ。散々負けるシュミレーションはした。だから今度は、絶対勝つっていうシュミレーションで書き換えたいんだ。オレの思考を完全に書き換えたい」

「ジオン先輩、私に前、ことだま言霊を教えてくださいましたじゃありませんか。大丈夫、余裕って何度も言い聞かせれば、ネガティブが相殺されて、最後にはポジティブが勝つって」

朝露さんが言った。

「絶対勝つ、オレは絶対勝つ……。ユイ、オツキー、朝露さんとみんな……。オレはタカノブに絶対勝つ。だから、みんなもオレを信じて、応援してくれよな」

「何当たり前の事言ってるのよ今更」

いつにも増して呆れるユイ。

「ジオン、オレはいつでも信じてるぜ、オマエは大丈夫だよ」

常にマイナス思考のオツキーが、珍しくオレにエールをくれた。

いつもは「大丈夫か？」って質問しかしないくせに……。

「大丈夫か？」って聞かれて「大丈夫だ」って言っても、「ホントか？ 顔色悪いぞ？」なんて言われたら、こっちだって不安になる。

それより今みたいに、たとえ顔色が悪くても、「オマエは大丈夫だよ」とか、嘘でも「顔色良いね」って言われた方が、俄然がぜん元気が出る。

「先輩は私たちが付いてます。それに、前回あんなに強かった芒みちるって人をやっつけたんですから、今回だって大丈夫です。また、悪を成敗せいばいして下さい」

「朝露さん……」

何て嬉しいエールだろう。

確かに、あんなに強敵だった芒を、オレは現に倒した。

そして、タカノブを悪と言い切ってくれた。

タカノブは自分を正義だと主張してるし、従えてる柴なんかを利用して、とつくに1年勢を自分色に染め上げてるのかと思ってたが、どうやらオレの思い過あやまりだったみたいだ。

「そうですね。鬼を退治しちゃって下さいね。」「応援してますから」「先輩は絶対勝ちます」

みんな……。

たとえオレが自分を否定して、「オレは負ける」と言っても、誰かがオレを肯定し、「ジオンは勝つ」と言ったら、否定と肯定が相殺されゼロになる。

そこへ、「ジオンは勝つ」と、さらに誰かの肯定が後押しされた場合、確実に肯定が勝る。

言霊の原理を肯定するなら、今の時点でオレは「勝つ」という運命を手中に収めた。

後は己を信じるのみ。

そうこうしているうちに、宝蔵学院の王者、東条アキラがセコンドに担がれて控え室に帰ってきた。

どうやら挑戦者の松田光太にKO負けを喫したらしい。

これで王者が2連敗している。

「栄ちゃん、流れ変えてね」

「頑張つて下さいっス」

宮さんと竜崎にエールを送られ、塚原学園の西田栄作が、気迫を全身からほとばしらせた。

「うおっしゃあ~~~~っ!!」

凄まじい掛け声を上げた西田栄作は、演歌の曲に乗って、柳タケシの待ち受けるリングに歩いて行った。

いよいよ次だ。

ジェットコースターは走り出した。

もう逃げられない。

もう、どこにでもなれ!!

第233話 亀鶴ジオン、入場

控え室に、見覚えのある2人の男がやってきた。

野牛のナンバー2、バイソンソルジャーこと、仲村シン。

そして、朝露さん救出作戦こと野牛殴り込みの際、オレたちをサポートしてくれた野牛2年のトップ、橋弘至^{はしこうじ}。

2人は、宮さんのもとへ真っ直ぐ歩み寄り、竜崎も交えて談笑を始めた。

オレも挨拶くらいしとくか・・・？

でも、取り立てて言うほどアイツらと 面識あるわけじゃねえしな。

フツ、あつちから来るよな？・・・んな事ねえかな？

「ジオン、あれ、野牛のバイソンソルジャーじゃねえ？ 挨拶しとかなくていいかな？」

オツキーが仲村を気にかける。

・・・と、その時！

塚原学園の西田栄作が、セコンドたちに肩を抱かれて控え室に帰ってきた。

どうやらあっけなく秒殺されたらしい。

苦杯をなめた西田に対し、宮さんも竜崎もかける言葉を失った。

これで王者側が3連敗だ。

さて、次の試合こそは王者側が面目を保たないと。

・・・って、次、オレだし！

『続きまして、セミファイナル、武蔵高等学校校内紛争、青コーナーより、高城伸之^{たかぎのぶゆき}の登場！！』

ジャ ジャ ジャ ジャー—————ン

ジャ ジャ ジャ ジャー—————ン

こゝこの曲は・・・！！

「ベートーベン、交響曲第5番『運命』第1楽章。随分と渋い曲を選択したわね」

ユイがリングの方向を、遠目で見つめながら言った。

オレはテルの皮ジャンを羽織り、ギターを背負った。

「いよいよだな、ジオン。準備はいいか？」

オツキーが控え室のドアに手をやった。

「亀ちゃん！ 頑張つて！！！」

宮さんがナイスガイな笑みをくれた。

竜崎は黙って頷く。

仲村と橋は、心配そうな面持ちで見送ってくれている。

控え室のドアの前、タカノブの入場曲が止み、静寂の時が訪れる。

『赤コーナーより、亀鶴ジオン入場！！』

ついにオレの名がコールされた！

「ジオン、オレの肩に手をやれ！」

オツキーが力強く叫ぶ。

「なぜ？」

どくしてこんな大事な時に、オツキーの肩に手を置かなきゃなんねえくんだ？

「ジオントレインだ!!！」

「はあ?」

「心は一つ!!！」

「.....」

仕方なくオツキーの肩に手をやると、オレの肩にユイが手を乗せた。

ユイの後ろには朝露さん、その後ろに朝露さんの友達が続く。

総勢7人のジオントレインなるものが完成。

「ププッ」

橋が一瞬吹き出した。

「笑った？」

「いや、別に笑ってないぜ」

すぐに真顔になる橋。

笑ったよね？ 絶対、今、笑ったよね？ オレたちのトレイン見て笑ったよね？！

大方、マリオに出てくるハナちゃんみたいなイモムシとでも思ってるんだろ？

笑え笑え、ど〜せオツキーのチープな思いつきだ。

古楽器の笛の音が、せつなく流れ出した。

「これ、何？」

ユイが聞いてきた。

「We Three Kings、我らはきたりぬ、賛美歌だ。ギターとかでよく弾くんた。この曲を聞くと、妙に落ち着くんた・・・」

「クリスマス・キャロルよね」

「そうなのか？ 良く分かんねえ〜けど・・・」

「小学校の時、アタシこの曲が入ったクリスマス用のCD持ってたわ」

小学校？ クリスマス？？

そういえば・・・、小学校の時、オレン家で同級生を数人集めてクリスマスパーティーやった時、クリスマス用のCD流したっけ・・・。

思い出した。

そのCD、ユイに借りたんだっけ・・・。

返すの忘れてた。

「いくぞ、ジオン」

オツキーが控え室のドアを開けた。

「ワアアアアアアアアアア」

大歓声だ。

リングへの花道、興奮の坩堝かまと化した会場の中央へと歩を進める。

沢山の観客が見つめる中、オツキー、オレ、ユイ、朝露さん、そして朝露さんの友達3名、計7人のジオントレインが、真っ直ぐリングへと歩を進めた。

これ、いいかも。

足元だけ見て歩けばいいから、余計なもの見なくて済む。

観客の中にはオレにブーイングかましてるヤツとかもいるだろうし。

リングに辿り着くと、朝露さんたちはリングサイドに陣取り、オツキーとユイの2人はリング上までついて来た。

すでにタカノブはマウスピースの装着を終え、オープンフィンガーグローブの装着に取り掛かっている。

・・・と、その時、タカノブのコブシに光る何かを見つけた。

シルバーリングだ！！

タカノブのヤツ、シルバーリングを装着したままグローブをはめる気か？！

そいつで殴られたら、たまったもんじゃないが、てめえも怪我するぞー！！

何考えてんだ、あのヤロオ〜？！

大橋に忠告しとくべきか？ いや、ここはヤツの自爆を誘うチャンスでもある。

一度手を傷めたら、試合中は手が使い物にならなくなるのは必至^{ひつじ}。

自業自得だ、タカノブ。

「ジオン君、マウスピースだ」

大橋が笑顔で迎えてくれた。

この人がレフェリーってだけで、どんだけオレは救われることか……。

ふとリングサイドの席に目をやった。

やはりKHJのホスト軍団の姿はない。

グルッと会場に目をやった。

相変わらず凄い人で、凄い熱気だ。

タカノブのセコンドは、マジメそうでひ弱そうな男が1人。

1組の生徒と思われるが、面識はない。

オレの想像に反して、すさまじ芒やきびがね貴船の姿はなかった。

この広い会場のどこかにいるのか、いないのか……。

中学時代のアイツらは、ここにいるのか、いないのか……。

どっちにしろ、今日、目の前の男を敵にした時点で、オレは覚悟は決めている。

死ぬ覚悟……ではなく、生き抜く覚悟だ。

すなわち、オレは勝つ!!

絶対に、勝あ~~~~つ!!!!

第234話 ジオンVSタカノブ

周りを見渡したが、やはり芒や貴船の姿もなけりやく、暴走族の姿も見えない。

てつきりギャラクシーを引っ下げて、ヤバイ奴らがジャンジャン現れるのかと思っていたが、タカノブにとってオレは、それ相応な男ではなかったってワケか……。

……って事は、これからか？

オレがタカノブをぶちのめした暁あかつきには、敵討ちかたきやら挑戦やら、オレにガンガン矛先が向くんたるな。

とにかく今は、目の前の問題をクリアする事だけに集中だ。

今更先の事をクヨクヨ考えたって仕方がない。

やるか、やられるか、どっちかしかないなら、やるしかない。

「ジオン、とにかく相手の動きを良く見ること。分かったわね？」

ユイが真剣な眼差しをオレに向ける。

おそらく五感が研ぎ澄まされてるのだろう、ユイの言葉が体に染み渡るような感触があった。

「・・・分かった」

力強く頷くと、ユイは安堵あんどしたような笑みを浮かべてリングを下りた。

皮ジャンとギターをオツキーに預け、マウスピースとオープンフィンガーグローブを装着し終え、リング中央で大橋のボディチェックを受ける。

目の前のタカノブは、終始目を逸らしている。

コイツの血液型はAB型。

AB型は心の内を読むのが一番難しいタイプで、オレのもっとも苦手とする血液型だ。

長山の時や芒の時と違って、コイツとは頭脳戦になりそうだ。

セコンドに、場違いでひ弱そうなヤツを陣立てする辺り、さっそくトリッキーなさまを見せられた感がある。

・・・ま、こっちはオツキー以外は全員女性。

一見、おちよくって見えるのはオレの方か？

「準備はいいか？ お互い正々堂々、試合後はノーサイドだ」

大橋がオレとタカノブの顔を交互に見た。

試合後はノーサイド。

そう、オレが今ここでタカノブと対峙してる理由、それは、希望があるからだ。

タカノブとの勝敗の行方に関係なく、もしかしたら試合後に、友情とまではいかないが今までのような因縁は消え、カンパの件も完全に消滅するかもしれない。

そんな風に思うのは、浅短せんたんな考えだろうか？

「レディー、GO!!」

大橋が腕を縦に振り、ついにオレたちの試合が始まった。

相変わらずタカノブは警戒心を抱いてるご様子で、オレの足元の動きしか見ていない。

どっちかっていうと、ガンガン来てもらった方がいいんだが・・・。

神野流古武術を少々かじったくらいで分不相応ぶんふそうおうなのだが、出来れば

相手の攻撃を当て身投げや返し技で払いたいもんだ。

タカノブは、スナップをきかせた右コブシを2回シユツシユと前に出し、シャドーボクシングのような軽妙な動きを見せる。

デモンストレーションかトラップか分からないが、距離がある為こつちも迂闊うかつに近寄れない。

まずはお互い探り合いつてヤツか？

タカノブは百戦錬磨、喧嘩が強いつて噂だが、コイツが誰かと喧嘩したって話は聞いた事がない。

まさか、とんだハツタリヤロ〜？ ……なんてオチはないだろうな。

ちよっぴり期待しちやったりして……。

その後もファイティングポーズをとりつつタカノブと向き合ってたものの、一向にタカノブから攻撃を仕掛けてくる様子がない。

痺れを切らし、オレが突進するのを待つてるのか？ もしかして、オレが攻撃を仕掛けた瞬間、視界から消え………？

イカンイカン……、すっかり誠さん恐怖症だ。

掴みかかろうと突進すると目の前から消え、いつの間にか投げられている……。

あのトラウマが、ある意味今のオレを臆病にさせている。

「ジオン、焦らなくていいからね。相手の動きをじっくり観察して！」

リング下からユイのアドバイスが聞こえた。

いつもだったらセコンドの声などすっかり上の空だが、今はしっかりとユイの声が胸に届いた。

・・・そうか、オレの行動は悪くないんだ。

タカノブに合わせて動かないから、客からブーイングや野次が飛んでるような錯覚に陥ってたが、何も焦ることはないんだ。

オレの敵は客ではなく、目の前のタカノブ。

オレもヤツの間合いが掴めず様子を見ている状態だが、タカノブも一緒なんだ。

ヤツもオレの間合いが掴めず、懸命に作戦を練っているんだ。

きつと、そつだ。

今までだったら闇雲に突入する所だが、今のオレは待つ事を覚えた。

誠さんのお陰だ!!!

・・・と、その時!!

「ジオ〜〜〜ン！」

オツキーが悲鳴にも似た声を上げた。

速いつ！

タカノブが高速で走りこんできた。

・・・と、同時に右ストレートを放つ。

「ジオン、避けてっ！」

ユイの掛け声で瞬時にタカノブのパンチを避けるのに成功した。

「ジオン、チャンスだ!!」

オツキーの叫び声を受け、とっさに手が出た。

バコン

クリーンヒット?!

ズサアーーーーーッ

タカノブが3メートルほど吹っ飛んだ。

マジ？ マジマジマジ？？

「ワアアアアアアアアアアアア」

物凄い大歓声に会場が包まれた。

うっしゅあ~~~~っ!!

第235話 背徳を翳す

ユイとオツキーのお陰もあり、タカノブの奇襲をかわし、反撃に転じる事に成功した。

さらにはオレの攻撃がクリーンヒットし、タカノブが大きく吹き飛んだ小事が、会場の興奮に拍車をかける所産になった。

あまりの吹き飛びように会場の誰もが秒殺を疑ったが、残念な事にタカノブはゆっくり立ち上がる。

しかし、虚ろな目を見せたり頭を振ったり、かなりの大ダメージを受けた様子が窺える。

大橋がタカノブをチェックしたが、タカノブは力強くファイティンポーズをとったので、問題なく試合は続行された。

それほどヒットしたような感触はなかったが、随分吹っ飛んだな・・・
でも、あのタカノブを見る限り、クリーンヒットしたのは間違いない。

タカノブは顔を数回両手で叩き、気合を入れ直した。

こっからスタートってワケだな、望むところだ、タカノブ！

「ワアアアアアアアアアア」

野次なのかエールなのか分からねえ〜が、盛り上がってんなあ〜。

これがオレも見物客の立場だったら、どんなにラクな事だろう。

・・・だが、オレにしか体感できない、貴重な経験をしているのは事実だ。

ハッキリ言って半端なく怖い・・・が、それと同量の快感を感じてるのもまた事実。

先が読めない展開に頭を痛め、未来を想像すると吐き気がする。

・・・が、オレは過去や未来を生きてるワケじゃないんだ！ 理屈じゃない・・・。

今、この瞬間、全身全霊、力の限り、コイツをぶっ潰す事に専念する！ それが今のオレの全てだ！！

ふと、修学旅行時のタカノブの言葉を思い出した。

『芒はさ〜、メンド〜だからジオンには声掛けるなって言ったんだけどね、コイツがうるさくってさ』と言って、貴船を指差したタカノブに対し、『嘘つくニヤイ、タカちゃん』と言ってタカノブに蹴り

真似を放った貴船。

貴船はオレが恐くてその場しのぎで誤魔化したのではなく、本当にタカノブが嘘をついたから空蹴りを放ったと推測するのが妥当。

それが本当だとすると、大袈裟な表現だが、ボケとツツコミに似た関係とも言える。

一見すると、貴船は天然のボケヤロ〜に見えるだろうが、オレの見識でいくと、あのヤロ〜もタカノブも知能犯だ。

ただ、馴れ合いの関係上、ボケとツツコミの関係は自然に生まれる。

だからこそ、血液型の性格がそのまま浮き彫りになるんだ。

オレの血液型分析でいくと、単純にタカノブがボケのA B型なら、貴船がツツコミのA型という図式が成り立つ。

証拠がないから自分の考察をそのまま妄信は出来ないが、参考程度と考えれば十分役に立つ仮説だ。

その後タカノブは、齒に衣着せず、カンパの件を持ち出した。

『みんな払ってんのにさ〜、5組だけ払わないってのは正義に反しねえ〜か？』

「1年や3年も払ってんのかよ？」というオレの問いに対し、『今はまだ、オレたちの力量不足でさ、2年にしか払ってもらってないのね。だからさ、徐々にみんなに協力してもらおうとは思ってるん

だ』とタカノブは答え、その後、『オレらも払ってんだよ』とも言った。

さらに、『この間の、学園祭での事件あったろ？ 総番長のクラス
の屋台が燃えた事件。アレって、彼の自作自演って噂あるんだけど、
信じるか？』と、まるで宮さんの悪評を垂れ込み、オレを買収する
かのような動きを始めたタカノブ。

『ここでオレから提案があるんだ。ジオン君、オレらのチームに入
らないか？』と、オレを勧誘し、『ジオン君なら即、幹部だよ。そ
んでさ、ギャラクシーっていう正義の名の下にさ、オレらで新時代
を築こうよ』と、戯言たわ言をたれた。

そして追い討ちをかけるように、『あの古い頭のさ、昭和のパソコ
ンみてえ々な頭の総番長を排除してさ、今の番長だか何だか分か
んねえ〜けど、そんな旧式の制度じゃなく、新しいルールでさ・・・
』と、宮さんを協力して倒そうよ的な発言。

ここまではタカノブの本音だと仮定しよう。

その後キレたオレに対し、『そう、分かったよ。交渉決裂ってワケ
ね？ オレたちは今日から敵だね、フッフ。てっきりジオン君は、
あの総番長に無理矢理子分にさせられてるのかと思ってたけど、違
ったみたいだね。いいいいよ〜、フッフ』と、不敵な笑みを溢し
たタカノブ。

オレが宮さんに無理矢理子分にさせられてると思ってたって？ な

るほど、じゃあ何か？ タカノブはオレを助ける為にギャラクシーに勧誘したってか？・・・もうちょっとマシな嘘について欲しいもんだ。

そしてあの時、最後の言葉にこそ、真実なるキーワードが散りばめられているような気がしたんだ。

『万が一、総番長とか上のモンがいなくなった時の保険としてさ、ギャラクシー入りを勧めただけだね、残念だったよ。オレとジョン君が、大衆の面前で勝負する時が来るかもね・・・』

あの言葉から分かるのは、ギャラクシーの狙いは総番長を潰す事。

総番長を潰す為に、大胆にも宮さんファミリーのオレを裏で勧誘したが、断られたのでオレとの対決を決めたんだ。

大会名は『王者VS挑戦者』。

その筋書きは、オレを前もって王者にする事から始まっている。

権力者イコール悪という先入観を持つ人は割りと多い。

そんな一般的な心理を利用し、前もって悪に仕立て上げたオレを、大勢の前で成敗して正義を主張する事が狙い。

その後、風評を利用して宮さんをじわじわと追い詰めるつもりだろう。

あるいは、セミファイナルでオレを大衆の面前でぶっ潰し、正義を

掲げたギャラクシーの旗を掲揚^{けいよう}。

メインイベント、絶対王者に輝いた宮さんに、挑戦を表明するタカノブ。

次の大会とかで宮さんに挑戦して勝つ。

もし負けてもギャラクシーの名は売れる……。

まさに売名行為。

目立ちたがりのAB型らしいシナリオだ。

ま、オレの仮説でしかないが、あながち満更でもないだろう。

ならば、オレが何としてでもその野望をぶっ壊してやる！

オレの目の色が黒いうちは、宮さんに辿り着けやしねえぞタカノブ！！

たとえオマエが平伏^{ひつぷ}したとしても、オレの目が黒いうちは、てめえが宮さんを拝むことすら許さねえ……！！

第236話 AB型のアイデンティティ

不意にタカノブが客席に顔を向けた。

距離がある為、オレも自然にタカノブが見てる方向に目が行く。

・・・案の定、畏^{わな}だった。

高速^{ハイジーン}で懐^{なつか}まで走りこんできたタカノブは、飛び膝蹴^{ひざげ}りを放った。

とっさに両腕でガードしたが、その後続いたフックの乱れ撃ちは防ぎようがない。

・・・？・・・ア、アレ？？

こ、こいつ、せつかくのチャンスなのに・・・？！

そう、タカノブの左右のフックは、オレの大胸筋に当たるばかりで、顔面への攻撃はない。

しかも、全然利かないヘナチヨコパンチ。

腰を落として放つ高速パンチは、見るものを魅了する華麗な動きだ。

だが、実際は軽い！ 軽すぎる！！

・・・パンチつてのは、こう放つんだよっ！

オレは腰を落とし、右足を前に出すのと同時に右フックを狙った。

しかし、この一発目はフェイク。

次なる左フックがホンモノさ。

いくぞっ、まず最初にフェイクの右っ！

・・・っ？！

ワザと外したオレの右フックに、まばた瞬き一つしないタカノブ。

・・・一瞬ゾツとした。

が、攻撃を止めるワケにはいかない。

すかさず渾身の左フックをタカノブのこめかみ目掛けて放つ。

パッコーン

またしてもクリーンヒット！

タカノブは先ほどにも増して、大きく吹き飛んだ。

マ、マジかよ………。

「ワアアアアアアアアアアア」

会場は大いに盛り上がる。

「ジオ〜〜〜ン、何してんだあ〜、早くいけ〜〜〜!!」

オツキーが叫んだ。

「ジオン、チャンスよ!」

ユイも急^せかす。

早くいけだと? チャンスだと? ぶつ倒れてるタカノブに、馬乗りでもしろってのか? 関節技にでも移行しろってのか?!

オマエらは分かんねえ〜のか?!

明らかに畏^{わな}だろ? 違うか?!

漠然とだが、倒れてるタカノブに近づくのは危険だと判断した。

……だって、あまりにもオカシイだろ? 確かにオレが放ったパ

ンチは手応えあつたけど、吹き飛び過ぎだろ？！

え、演技だ！　タ、タカノブは・・・、演技してるんだ！！

「ジオン、ホラ、チャンスだぞ！！」

オツキーが尚も叫んだ。

・・・オレの思い違いか？　錯覚か？！　コイツ、マジでホントは弱いのかも？？

オレは恐る恐る仰向けに倒れたタカノブに近づいた。

はあはあと息を荒くしたタカノブは、虚ろな目で天井を仰いでいる。

・・・最初の攻撃が、マジで効いてんのか？！　それとも、畏？！

オレがグラウンドの攻撃に転じるか否か迷っていると、大橋がまるでオレの心を読んだような行動に出た。

タカノブに近寄ろうとしたオレを制止した大橋は、ダウンしたタカノブに対し、カウントを取り始めた。

へ？　今回、ダウンにカウントとるんだ・・・。

いや、前もってのルールには無かったよな、確か。

・・・そうか、オレが迂闊うかつに近づいて、タカノブの餌食えじきにならないように、大橋なりに援助してくれてんのかも。

B型はルール無視だし、生まれ持ったの世話焼きだからなあ。

「ワ〜ン、ツ〜、スリ〜・・・」

テンカウント？・・・だよな、きつと。

さてさて・・・。

オレはマウスピースを外し、赤コーナーのコーナーポスト越し、リング下のオツキーとユイに声を掛けた。

「あっけねえ〜な・・・」

「油断大敵よ」

ユイが忠告をくれた。

「・・・だよな。もちろん警戒してるさ。相手はあのタカノブだ・・・」

「でもよお〜、思ったより大した事ねえ〜ぞ、アイツ。動きはいいけど、攻撃が軽そうだし。何かさ、ギャラクシーっただけで、オレたちビビり過ぎてたんじゃねえ〜か？そこんトコどお〜なんだ、シオン？」

オツキーが聞いてきた。

「そう言われると、言葉に詰まるな・・・」

「ダメよ、最後まで気を緩めちゃ。あとさ、もしアイツ立ってきたら、遠慮なくやつつけちゃいなさいよ」

「オウ」

ユイのおっしやる通りだ。

A B型は優れた戦略家。

油断大敵、オレは最後まで気を緩めるつもりはない。

もちろん、遠慮もする気はない。

もし、アイツが立ってきたら、早々に決着を着けてやる！！

モタモタしてたら、いつ足元をすくわれるか分からないもんな・・・。

「セブーン、エイト、ナイン・・・」

タカノブは、ギリギリでゆっくり立ち上がった。

「オオオオオオオオオオオ」

タカノブの立ち上がる様を見て、会場は一気にヒートアップした。

「タツカノブ、タツカノブ、タツカノブ」

いつの間にもやらタカノブコールまで起きている。

大歓声の中、タカノブは力強くファイティングポーズをし、さらなる喝采かつさいを呼んだ。

ちよい無謀かもしんねえ〜が、賭かけだ！

ここで一発博打ひっぱを打つ。

オレから突進してみて、ヤツからカウンターでも何でも食らえばオレも俄然やる気が出るってモンだ。

避けられてもいい。

アイツがちょっとでもやる気を見せれば、オレも救われる。

だが、ヤツが無防備だったら、マジで判断に迷う。

・・・が、やるしかねえ〜。

アイツが何を考えてるのか、どうにか推察しない事には答えは出ない。

このまま勝つても、スツキリしねえ〜！

アイツがホントに弱え〜のか、それとも何か企んでるのか、少しでも何か掴みてえ〜！！

オレはタカノブの如く、敵の懐目^{ふくろ}掛けて走り込んだ。

「……つてんめえ〜！ ナメやがつてえ〜〜！！」

スキだらけ……だ！！

バキヤアツ

またしてもクリーンヒット！

渾身の右コブシが、タカノブの顔面中央を打ちのめした。

血しぶきと共に吹き飛ぶタカノブ。

その時オレは、とんでもないものを見てしまった。

そいつがオレの精神を……、狂わせ始める……。

第237話 演劇

「シックス、セブーン、エイト……」

大橋がカウントを取る。

タカノブのセコンドの男は素知らぬ顔で倒れたタカノブを見つめる。

タオルを投入する気配はない。

それどころか、タオルすら持っていない。

「タカノブ」 「タツカノブ、タツカノブ、タツカノブ」 「タカノブ」

会場からは幾つものタカノブへのエール、そして声援。

リング下のオツキーやユイも、カウントを取る大橋も、誰も異変に気付いていない……。

そう、オレは見てしまった。

タカノブが、リングを蹴って、勢いをつけて後ろに跳ねたのを……

。

それは、決してオレの攻撃のダメージを弱める為の手段ではない。

実際、オレの渾身の一撃はまともに食らった。

問題はその後だ。

オレの攻撃を食らった後、一瞬だが間まがあった。

微かすかだが、間あいたを置いてからタカノブは後ろに飛び跳ねたんだ。

もちろんそんな一瞬、誰もが見逃して当たり前だ。

だが、オレはそいつを目撃した事により、証拠を掴んだんだ。

タカノブは演技をしているっていう、証拠を！！

オレの一撃を食らって、踏ん張る気になれば踏ん張れたんだ。

オレ以外のヤツらは、みんなオレの攻撃がクリーンヒットして、オレの攻撃の威力や勢いで大きく吹き飛んだと思ってるだろう。

さぞ、オレの攻撃が重いんだって、みんな思っただろうな。

だが、本当はそれは間違いだ！

タカノブは、オレの攻撃を食らってダメージを受けてから、ワザと大袈裟に吹き飛んでいる！

作戦なのか？ オレの油断を突いて、反撃に転じる腹積もりなのか？ それとも、他に何か考えがあるのか・・・?!

タカノブのセコンドは、タカノブがホントにピンチじゃないって事を知ってるんだ。

だから焦る様子もないんだ。

何を企んでるんだ、タカノブ!!

「ナイ〜ン・・・」

先ほど同様、タカノブはギリギリで立ち上がった。

「ワアアアアアアアアアアア」

タカノブが立ち上がった姿を見て、会場はさらに沸いた。

倒れても倒れても、何度も立ち上がる勇姿を見て盛り上がってるよ
うだが、それは演技だ!

ボロボロのフリをしているが、ホントはヤツはピンピンしてるんだ!!

「大橋・・・さんっ! まだ異変に気付かないんですか? コイツ、オカシイですって! ワ、ワザと倒れてるんですよ!!」

「・・・？」

大橋は全くオレの話を聞かず、タカノブを気遣う。

「グルか？ まさか・・・、大橋もコイツの仲間なのか？！」

タカノブはまたしても力強くファイティングポーズを取る。

客の深層心理を突くような、生真面目に頑張る男の澄んだ目、固く結んだ唇、熱い表情。

それはまさに、会場の気を惹くような、立ち上がる姿だった。

「コイツの目的は、客の気を惹く事だったのか？！」

その時、タカノブの言葉が脳裏に浮かんだ。

『ギャラクシーっていう正義の名の下にさ・・・』

正義・・・？ どこが正義だ！ 偽善者め！！

竜崎の言葉も脳裏に浮かぶ。

『ケジメをつける意味でもジオンさんとタイマンで戦いたいと・・・で、勝っても負けてもお互い、いがみ合いはなく、それでスッキリさせたい・・・と。タカノブさんは野牛と全面戦争した時のよう

な大きい大会での勝負を望んでるみたいっす。向こうはただのケ
ン力ではなく、リングの上で、ルールのある勝負を勧めてきたっす。
その点では、こう言ったら何ですけど、宮さんたちのような野蛮な
考えではなく、紳士的にも思えるし、勝ち負けに関係なく戦う事で
平和的解決を望んでるんす」

タカノブに対し何の警戒心もない竜崎にオレは、「紳士なら、どう
して戦わないで解決できないんだろくな？」と訊きいた。

「周りの目があるからでしょ？ タカノブさんは2年で誰が一番強
いか決めるため、トーナメントを作り、それで勝ち上がった。トッ
プに立ちたい人たちが皆に平等に権利を与えたんす。そこから筋
を通してっすよ、あの人。タカノブさんはトーナメントで優勝し
た実績を引っさげ、今まで2年のトップに君臨していたジオンさん
に挑戦するんすよ。常に挑戦者に狙われるのはチャンピオンの宿命
ですが、たとえジオンさんがタカノブさんの挑戦を拒んでも、オレ
は何も言うつもりはないっすよ。受けるのも拒否するのも、それは
ジオンさんの自由っすから」

竜崎はタカノブを疑う所か、称賛すらしていた。

しかし実際はタカノブはトーナメントを勝ち上がってはいない。

最初から優勝の座に就いていたんだ。

さらに、ユイの言葉も思い出した。

「アタシは断ったけど、アンタと戦いたかったわ。表面で
しかないけど、正々堂々とした印象を受けたわ。澄んだ瞳めをしてる

人よね。学校も含めて、世の中を良くしていきたいって言ってたわ。興味がなかったからすぐに追い払ったけど』

竜崎に続き、ユイにまで……………。

そして、あの時……………。

「はあ？ 1年の時はテルが大将だ！ 2年になってからは……………、まだ決まってるねえ〜だろ！」と言うオレの叫びに対し、今と同じリング、この場所で、芒が吠えた。

『バカかオメエーは。1年の最初っからタカノブが大将だろ〜が……………。テルだあ〜？……………んなザコ、大将にした覚えはねえっつ〜の』

「……………」

『なあ、タカノブ〜、テルって知ってる？』

芒の問いに、『テル？ 何だ、それ』と、首を傾げたタカノブ。

『あつ、思い出したぞ。アレじゃね？ 何か、カンパをスゲーエー拒否ってたから、じゃ〜オメエーのクラス皆殺しにするぞってオレが言ったら、妙に素直になったヤツ。あまりにカワイソ〜だから、タカノブがトップの称号譲ってやるって言った事あつたら』と言う芒に対しタカノブは、『あ〜、そんな事もあつたかもな』と、ぶつきら棒に語った。

つまりタカノブにとって、トップの称号などそれほど価値はなく、そんなものにホントは興味がないんだ。

それがなぜ、出来合いのレースやらで偽ってまで、トップにこだわったんだ？！

今、まさにこの勝負こそ、2年のトップを決める大会。

なのになぜ、トップにこだわってたくせに、ここに来てそんな事をする？！

どうして顔を腫らしてまで、演技してまでオレにやられまくるんだ！

やられてやられてやられまくって、でも、ギリギリ最後に反撃をして、カッコ良くキメるつもりか？！

ふざけるなっ！！

第238話 傳き望み寂寥を生む

ヨロヨロと近づくとカノブめがけ、ハンマーを振り下ろすかのよう
にコブシを叩き込んだ。

ゴン

鈍い音と共に、うつ伏せに倒れるタカノブ。

コイツ……、やっぱりやる気がない。

一発逆転なんて、これっぽっちも思っていない。

思ってるなら、もし最後に反撃して勝利を飾りたいなんて思ってる
なら、こんなに無防備なはずがない。

「ワーン、ツ……」

大橋がまたしてもカウントを取り始めた。

「大橋さん、いい加減にしてください。コイツ、オカシイですって！
何で分からないんですか！！」

「……スリッ」

大橋は困った顔をしながらカウントを続ける。

ちきしょう……。

「ユイ、オツキー！ タカノブは、ワザと倒れてるんだ！ これは、アイツの演技なんだ！！」

「だとしたらチャンスじゃない。ワザと倒れてるんでしょ？ だったら容赦なくやっちゃいなさいよ」

そうなんだ、まさに、ユイの言う通りなんだ。

分かってる、分かってるんだ。

分かってるんだけど、何かが変なんだ。

「ジオン、どうした？ オマエ、さっきから何か変だぞ！ これだけの観客の前だし、想像してた以上にタカノブ弱えし、ジオンが動揺する気持ちは分かるよ。だけど、アイツも本気でやってんだから、ジオンも本気でやれよ。ジワジワ痛めつけたい気持ちは分かるけどさ、万が一って事もあるだろ？ やれるうちにやっちゃえよ」

オツキーがもつともな事を言う。

確かにその通りだろうよ。

一見すると・・・、な。

だが、実際は違うんだ。

あのヤロー、まったく本気なんか出しちゃいねえ。

むしろやる気ゼロだ。

最初から、試合前から・・・。

その証拠に、アイツはシルバーリングを外さなかった。

喧嘩慣れしてるヤツなら、シルバーリングを着けたまま人を殴つたらどうなるか、自分の手がどうなるか、相手の傷痕きずあとがどうなるか、当然分かってるはず。

傷害事件になった時、傷痕から足が付くし、リングを装着してた指を痛める。

それより何より、オープンフィンガーグローブを着けてる時点でリスクは、ほぼタカノブにしかない。

タカノブは最初からオレを殴る気は無かったんだ・・・！

「エイト、ナイン・・・」

またしてもナインで立ち上がるタカノブ。

「こうなりや、完全にトドメをさしてやる！」

「ちつきしょ〜〜!!」

オレはタカノブに猛アタックした。

仰向けに倒れるタカノブに馬乗りになり、渾身の力を込めてコブシを叩き込んだ。

「うおりゃあああああ!!」

ドカドカドカドカドカドカドカ

左右の乱れ撃ちがタカノブの顔面を捉えた。

無抵抗のタカノブ。

「来いよコラ！ タカノブ！ 来いよコラ〜！！ 頼むからよお〜」

ドカドカドカドカドカドカ ドカッ

全く抵抗する気配はない。

・・・が、KOするまでは至っていない。

ムダにタフなヤツだ！

「大橋・・・さんっ、止める！ 試合、止めてくれっ!! コイツ、全くの無抵抗だ」

そんなオレの叫びを聞いたタカノブが、おもむろに両腕でガードの体勢に入った。

今更？！

呆れたオレはタカノブから離れると、赤コーナーに戻った。

「どうしたジオン、やつちやえよ。何恐がってんだよ」

オツキーが眉間にシワを寄せて怒鳴る。

「タオルだ。タオルを投げてくれ。オレの負けでいい……」

「はあ？ 何考えてんだジオン！ しっかりしろ！！」

ははは、オレも分かんねえくんだよ。

気が狂いそうだ。

芒戦の時のように、ガンガン戦えると思ったんだ。

試合後に、何か生まれるかも……って、ちよっぴりだけど、期待もしてた。

でも、実際は何も生まれなかった。

やればやるだけ、熱くなればなるだけ、虚むなしくなるだけなんだ。

コイツがワザとそうしてるのか、それともホントに弱いのか、分からない。

知る術がない。

・・・もう、疲れた。

血液型分析で戦う気力も失せた。

完全にオレの精神は崩壊の一途を辿っている。

オレが推察した通り、仮にタカノブが演技だったとしても、あれだけの攻撃を食らっては、よっぽどじゃない限り逆転は有り得ない。

100パーセント、このままオレは勝つだろう。

だが、それは偽りの勝利。

大衆はオレの勝利を疑わないだろうが、当のオレは、勝利を認めない。

きっと、この虚しさは、深い傷になるだろう・・・。

こんな気分を味わうなら、いっそ、大衆の面前でぶちのめされた方がまだマシだって、な。

「さあ、立ち上がって来いよ。立ち上がって、オレに向かっ
て来いよ。ガンガンやり合おうぜ、タカノブ。テルの仇を討かたきたせてくれよ。
そんな無抵抗なヤツを倒しても、オレが辛いだけだ。頼むぜ、タカ
ノブ。本気でさ、ガチでさ、理屈とか戦略とか抜きでさ、ガンガン
やり合おうぜ」

そんなオレの声は、ぶっ倒れたままのタカノブには届かなかった。

「シックス、セブーン、エイ・・・・」

残酷にも、大橋はカウントをすすめていた。

「何カウントとってんだよ！ 止める！！」

オレは大橋の腕を掴んでカウントを阻止した。

「放せ！ ジオン君、オカシイのはアンタだぞ！ 試合を止めると
言ったり、今度は試合を止めるのを止めるだど？」

目が吊り上った大橋の顔を見て、オレは我に返った。

「ス、スミマセン・・・」

「エイイト、ナイン・・・」

大橋のカウントが、無残にも会場に鳴り響いた。

会場からは沢山のタカノブコールと、悲鳴にも似た声があがった。

・・・が、もう一度タカノブが立ち上がる事はなかった。

「テン」

人の世は、常に無常の流れ去る。

あんなに恐かった大会も、終わってみれば矢の如しだ。

オレは何を期待してたんだろう・・・。

少なくとも、勝利の栄冠を手にしたオレだったが、その他に手に入れたものは何一つなく、逆に何か大きなものを失った感が強い。

それが何なのかは分からない。

分かるのは、とてつもない喪失感だけだった・・・・・・・・・・・・・・・・。

第239話 カタストロフィー

「やったあ~~~~!」

オツキーが満面の笑みでリングに上がり、勢い良く抱きついてきた。

同時に朝露さんたちもオレを取り囲む。

「先輩、おめでとございます」

朝露さんが嬉し涙を零した。

「ジオン先輩、素敵でした」「強かったです」「カッコ良かったですよ」

朝露さんの友達も、笑顔で^{おほ}労いの言葉をくれた。

オレは表情を変える事なく、険しい面持ちでタカノブの動向を見守った。

タカノブは、セコンドの男に肩を抱かれてリングを下りると、そのまま静かに引き下がった。

オレが期待した光景は、そこには^{みじん}微塵もなかった。

微^{かす}かだが、タカノブと握手までとはいかなくても、軽い慰^{いさづ}勞の言葉
くらいかけ合いたかった。

「ジオン……」

何かを察してくれたのだろう、ユイが心配そうにオレを見る。

「ああ、オレは大丈夫だ。さっきは少々取り乱しちまったけど……」

強がってみた。

「そう。……なら、いいけど」

相変わらずユイは、オレを甘やかしてくれない。

オレの方から甘えないと、救いの手はないようだ。

でも、大丈夫。

オレは自分で這^はい上がれるから……。

これしきの虚^{むな}しさが何だっただ。

オレは今まで、数々の修羅場を潜って来たんだ。

これくらいの悔^くしさが、何だっただ。

何度でも立ち上がってやるよ。

倒れても倒れても、何度でも……。

オレたちはリングから下りると、そのままリングサイドに陣取った。

これから宮さんの試合、メインイベントが始まる。

そつだ！ 宮さんがいる！ オレにはまだ、希望があるじゃないか
！！

宮さんがやってくれる！ 完膚かんぷなきまでに、やっつけてくれる！
宮さんが、スカツと豪快に終わらせてくれる！！

宮さんの半端ない強さが引き立てば、さすがのギャラクシーも手も
足も出ないはずだ。

タカノブだって、宮さんに一目置くはず。

……それを考えると、もしかしたらタカノブは、試合前に怖気おじけづ
いてたのかもしれない。

そう考えると全て辻褄つじつみが合つし、納得がいく。

宮さんや大橋、長須の存在に怖気おじけづき、オレに勝利するのは得策で

はないって判断したんだ。

だから皆にバレないように、巧妙にアイツは負けたんだ。

・・・ま、残念ながら、オレにはバレバレだったけど。

な〜んだ、そう考えたらラクになってきたぞ。

俄然、元気が出てきたよ。

これで心置きなく宮さんの応援に専念できるぜ。

リング上の大橋には緊張した様子はない。

一時は大橋はタカノブとグルなんじゃないか？なんて疑ったりもしたが、やっぱりそれは有り得ない。

ペットボトルの水を口に含み、うがいをしたと思ったら、それを飲み込んだ大橋。

これから登場する宮さんの勝利は揺るぎの無いものだという心情を、態度で醸し出しているように見える。

逆に、たった今リング上に足を踏み入れたリングアナは、緊張を吐き出すかのような大きな溜息をついた。

リングに立つだけで、会場の視線を浴びるだけで、そりゃ〜極限の

緊張状態になるぞ。

それを考えると、あの大橋ってヤツはホント、肝きもが据すわってるよ。

そして・・・。

『本日のメインイベント・・・』

とうとうこの時が訪れた。

パチッ

突然会場の電気が消えた。

「オオオオオオオオ」

ドタ ドタ ドタ ドタ

会場はどよめきとストンピングの嵐。

演出の凄さに、さすがにオレも鳥肌が立つ。

『武蔵高等学校VS笹城商業高等学校、王者、
宮大地VS挑戦者、
織川宏次朗』

「ワアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

会場のボルテージは一気に最高潮に達した。

……ん？ 何かおかしくね？？

『まずは、挑戦者、織川宏次朗……、入場！！』

「あれ？ 宮さんの相手って、浦上^{うらつかみ}って人じゃなかったっけ？」

いち早く疑問を口に出したのはユイだった。

「そうだよな、どうしてカード変更になってんだ？」

オッキーも困惑の表情だ。

リング上では、大橋も異変に気付いたらしく、リングアナに詰め寄っている。

「あの、私、チケット買う時対戦カード見ましたけど、宮先輩の対戦相手は織川さんで間違いありませんでしたよ」

朝露さんが衝撃発言。

へ？ 当の本人、宮さんは、対戦相手が変わりになったって知ってん

のか？

少なくともオレが控え室にいた時までには、相手は浦上だと思ってたぞ、宮さん。

朝露さんの話を聞く限り、カード変更はだいぶ前にされてたみたいだ。

あるいは、最初っから宮さんの相手は織川だったってか？

大橋と宮さんは、KHJ側に騙たまされてた・・・？！

・・・って事は、その事実を知らなかったのは、オレ、ユイ、オツキー、竜崎、大橋・・・、そして、宮さんだけ？！

どーいうこった？ 一体全体、何だってたんだ？！

会場には、名前は知らないが、聞き覚えのある曲が流れ出した。

「何だっけ、この曲。このオーケストラ・・・」

「ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト。『死者のためのミサ曲』の中の、モーツァルトの遺作品。レクイエム『二短調 K. 626 怒りの日』(Dies irae)『よデイエスイレイレ』よ」

ユイが解説してくれた。

「そうそう、レクイエム・・・」

……っ!!

何と、先頭をきつて花道を入場してきたのは、あのリチャードのセ
コンドにもついた、宮さんと因縁深い野牛退学組の2人。

その後ろから、とてつもなく恐ろしいオーラを纏まとった男たち4人が
現れた。

……マジかよ?!

アキガこと、吉岡の秋鹿準あきがじゆん、武蔵の柴義経はしばよしつね、そして、顔を腫らした
タカノブ。

そんな強烈な3人が、すっかり風貌ふうぼうが変わった織川を先頭にして、
後ろから黙ってついて来る。

眉毛を剃り落とし、イカれた顔をした織川を先頭に……

第240話 武蔵の宮VS笹城の宏次朗

真つ暗い会場の花道を歩く、禍々（まがまが）しいオーラを放つ先頭の2人に、ブルーのライトが当たる。

見覚えのあるその男たちは、セミロングの男と丸刈りの男、野牛退学組の2人だ。

最初の出会いはBARカションでの竜崎によるテーブル投げ事件の時。

その後、竜崎とリチャードの試合の時、2人はリチャードのセコンドに付いていた。

かつて宮さんを襲撃目的で武蔵に乗り込んだ際、2人はリッキーに通報され、自主退学させられた経緯があり、それから宮さんを執拗（しつよう）に恨んでいると思われる。

前回の大会後、何の音沙汰もなかったから、とつくにフェードアウトしてたと思っただが、ここにきてまたしても絡んでくるとは……

そしてさらに、野牛退学組の後ろには、それ以上の禍々しさを醸（かも）し出す4人が歩いてくる。

まず最初に驚いたのが、あのアキガがいるって事だ。

秋鹿^{あきがしゅん}準、A B型。

アキガは、オレが長山とカラオケ裏でやり合った際、長山の女友達、
上木^{かみき}マヤが呼び出した刺客^{しかく}。

喧嘩でバタフライナイフを使ったり、アンパンをやっていたり、かなりアブナイ奴だ。

元々アキガと宮さんは中学時代の同級生でもあり、友人でもあった。
やがてアキガは吉岡でトップを狙うが、天下を取り損ねる。

自分がトップになれなかった腹癒せに、何も知らない入学したての
1年ヤンキーをかき集め、武蔵の総番長、宮大地を襲わせたのだ。

その際、秋鹿は、武蔵の教師たちに襲撃の予告をするのを怠らなかつた。

そうする事によって、総番長、宮大地を永久追放でき、尚且つ吉岡
の1年も捨て駒として処分できる。

全ての企てを実行したのを吉岡の番長、大橋剛太にする事で、大橋
のメンツをズタズタに引き裂く事もできる。

しかし、その野望もあえなく宮さんに撃沈される。

アキガが宮さんと大橋に許しを請う^こことで、全てが解決したはずだった。

そんなアキガが、なぜ、ここに……？！

モーツアルトの遺作品、レクイエム『二短調 K・626 怒りの日（Dies irae）』の合唱とオーケストラの競艶が全身に響く。

ユイ曰く、鎮魂歌ではなく、死後の魂の罰を和らげ、永遠の光がその魂に降り注ぐように祈るといふ曲らしい。

背中が寒くなるほどスケールのデカイ曲に合わせ、野牛退学組の2人を先頭に、不気味な4人が後ろから続く。

その一人、柴義経、A B型。

オレが長山とカラオケ裏でやり合った際、長山が呼び出した刺客だ。

トップの座を狙い、竜崎と互角の勝負を繰り広げたが、無残にも破れる。

その後は竜崎に友好的に付き纏い、仕舞いには前回の大会で、竜崎のセコンドにも付いた。

タカノブとも親交があり、オレの中では要注意人物の一人だが、妙に親しげに慕ってくるので扱いに困っていたのは確かだ。

しかし、ここにきて明らかになった。

アイツは敵陣にいる……。

さらにもう一人、まさかのタカノブ。

タカノブこと、高城伸之、A B型。

さっきの試合から大して時間もたっていないのに、先ほどのダメー
ジすら感じさせない佇まい^{たたず}。

表情はオレと対峙してた時とは一変し、鋭い鷹のような目をしてい
る。

タカノブがいるって事は、他のヤツらもギャラクシー絡みなのだろ
うか？

物凄くキナ臭い、嫌な予感がするのは気のせいだろうか……。

そして、アキガ、柴、タカノブの先頭を歩くのは、宮さんの対戦相
手。

織川宏次郎^{おがわ こうじろう}、B型。

かつて中学時代、いじめられっ子だった織川を庇^{かば}う意味で、宮さん
は織川を自分の舎弟にした。

時が流れ、いつしかアマチュアボクシングのジュニア、ライトフラ
イ級で、地区の選手権では無敗を飾るほどの実力を身に付け、事実
上、笹城のトップにまで君臨するほどになった織川。

外見は物凄く真面目で弱そうないイメージが強く、オレの第一印象は、シャバくて気の毒なパシリだった。

前回の大会では宮さんのセコンドを務め、礼儀正しい彼の言動や優しい気遣いなどは、オレ的にも敬愛に値した。

・・・が、そんなかつての織川からは想像もつかないほどの変貌ぶりには、恐怖すら覚える。

眉毛を剃り落とし、イカれた顔をしている。

まるで麻薬まやくをやってるかのような表情だ。

ギョロリと見開いた目の下には真っ黒いクマがあり、涎よだわを垂らしそうなほどニタニタと不敵な笑みを溢している。

何より、目がイっちゃってる。

「何、あの織川って人、アブくない？」

さすがにユイも、織川の変貌ぶりに困惑の表情を見せる。

「ユイ先輩・・・」

朝露さんは、あまりの恐さにユイに寄り添った。

「ジ、ジオン・・・、アレ、ホントに織川か？ あの織川か?!」

オッキーが驚嘆きょうたんの声をあげた。

「ヤベエ〜な・・・」

漠然とだが、とてつもなく危険な香りがする。

このままだと、何か大変な事が起こるような、そんな気配を感じる。
あまりにアイツらが禍々しいせいで、それでオレがビビッてるだけ
だろうか・・・？ 単なる気のせいだろうか・・・？

しかし、異変を感じたのはオレたちだけじゃなかった。

会場も無音状態だし、リング上の大橋も慌^{あわただ}しい。

何より、対戦相手が浦上ってヤツからなぜ織川に変わった？

「ジオン君！」

大橋がロープ越しのリング上から身を乗り出し、声を掛けてきた。

「どうしたんですか？ 何で宮さんの相手が・・・」

「それなんだが、浦上^{うらかみかずなり}和也ってヤツは、元々宮の対戦相手じゃなかつたみたいなんだ」

「じゃあやっぱり知らなかったのはオレたちだけ・・・？」

「そうなんだ。何か、嫌な予感がする・・・」

大橋もオレと一緒に、嫌な予感がするようだ。

「大丈夫ですか？ 宮さん・・・」

「ま、宮が負ける事はない。問題はアイツら、ギャラクシーのヤツらだ。アイツらがリングに乱入してきたら、ちと厄介だな」

そう言つて大橋は、オレの目を見ながら口元をキュツと上に上げた。

それつて、遠回しに何かあつたら協力しろつてこと？ その表情、口には出してないけど、「何かあつたら頼むね」つて、オレに言つてるよね？ 自分一人じゃ捌さばけないからつて、何気に協力要請してるよね？

野牛退学組の2人は左右に分かれてロープに腰掛け、織川をリングに招き入れた。

織川がリングインしたのを見守ると、野牛退学組2人と、アキガ、柴、タカノブの5人は、そのままリングサイドに陣取つた。

丁度リングを挟んで反対側に、禍々しい織川のセコンドたちが立ち並ぶ。

『続きまして、赤コーナーより、絶対王者、武蔵の総番長、宮大地・・・、入場！！』

いよいよ皆さんがコールされた。

……ん？

じ、じの曲は……！

第241話 宮大地、入場

静まり返った会場に、聞き覚えのある曲が流れ出した。

会場の客たちはみんな、もの言いたげな顔だ。

それもそのはず、『オッチーズ Occhyz』はインディーズバンドで、それほど世に知られていない。

でも、これなら武蔵のヤツらなら……。

ふと、牛タン屋での宮さんとユイの会話を思い出した。

『オレさ、今日の入場テーマ曲、『オッチーズ Occhyz』の『Sing
” Love for Me ! 』にしてくれて大橋に
頼んだんだよ。そしたらさ、曲持って来いって言うから探したんだ
よね。でもさ、結局見付からなくてね。ムキになって探してたら
さ、インディーズバンドだってクラスのヤツに聞いてさ、なかなか
見付からないワケが分かったよ。一応CDはタワレコとかで入手出
来るらしいんだけどさ、間に合わなくてね。KHJもそんな位用意
しろってな』

『へ、宮さんも『Occhyz』ファンなの？』と尋ねたユイに、
宮さんは、『いや、学園祭でさ、ユイちゃんの歌声に痺れちゃっ
てね。ホントはあの時の音源あればそれで入場したいんだけどさ』

と、答えた。

宮さんが言ってる『あの時の音源』ってのは、この間の武蔵学園祭ライブでユイが披露した、『O c c h y z』をカバーした時の音源。

その後、会場で宮さんが、『なあ〜大橋、例の曲なんだけど、結局見付からねえ〜からアレで頼むわ』と言ったのに対し大橋は、『いや、オレは元からソレをかけるつもりだったけどな・・・』と言った。

宮さんの『アレ』と、大橋の『ソレ』は、今会場で流れてる、コレだったのか・・・！！

「何よ！ 宮さん『Sing Love for Me！』、無いって言ってたじゃん！ しかも、どうしてアタシの歌なのよ！！」

ユイがアタフタと慌てながら言った。

「面白いじゃねえ〜か。へ〜、宮さんらしいな。『O c c h y z』のCDや、この間の学園祭ライブの音源は見付からなかったけど、去年の学園祭ライブの音源は入手してたワケね。それを事前に大橋に渡してたワケだ」

「アンタはのん気でいいわよ。所詮他人事しょうじんじでしょ？」

「いいじゃねえ〜か。むしろ光栄だろ」

「恥ずかしいじゃない」

何だよ、恥ずかしいからイヤがつてんのかよ……。

// // // // // // // // // // // // // // // // // // //

『 Sing & amp; Music : K . S k y ! ! 』 L y

S o n g (c o v e r) b y : D o t h e b y (V o c a l : Y u i)

553

「何も求めないよ」 そう言ったけど本当は

そんなに強くは無い やさしさだけ欲しかった

届かない小さな声 届く日は来るのかな？

まずはそっと1歩ずつ ディスタンス 距離を縮めていこう

裸足で歩き出した私に やさしく

大げさじゃなくていいですから 聴かせてよ愛の歌を

Sing " LOVE " for me いつまでも聴かせてよ
そつと優しく

Sing " LOVE " for me 飾らないで 本音の
our love-song ! !

// // // // // // // // // // // // // // //
// // // // // // // // // // // // // // //

スポットライトに照らされ、宮さんがたった一人で花道を歩く。

アレ？ 竜崎は？！

・・・と、その時、隣に竜崎が出現した。

「うおっ、ビックリ！ どうしてオマエがここに？！」

「花道を入場すんの恥ずかしいっす。目立つし見世物みたいで絶対
イヤっす。だから客席の方からこっそり来たっす」

恥ずかしい・・・・・・・・・・？ セコンドなのに？・・・・・・竜崎らし
いや。

入場してくる宮さんの表情は、いつになく険しい。

「なあ竜崎、対戦相手が織川に変更になったって、宮さん知ってたのか?!」

「まさか！ 知ってたら、織川さん対策してるっす。織川さんはアマチュアですけど、ボクシングのジュニアライトフライ級で負け無しっすよ」

「・・・だよな」

「元々宮さんは柔道やってたから、相手の懐に忍び込んで投げるとパターンが染み込んできると思うんす。柔道は相手を掴まない事は始まらないじゃないっすか。でも相手はボクサーっすよ。ボクシングは相手と距離を置いて、自分の間合いで近づく相手を叩くワケじゃないっすか。いわばこの勝負は水と油。ジャンケンで言ったらチヨキVSグー」

「チヨキVSグーは言い過ぎだろ。宮さんがもし掴めたら、もうこっちのモンだろ。ボクサーだったら投げに慣れてないだろ〜し」

「掴めれば・・・っすよ？ 相手はプロを目指してる、百戦錬磨の無敗のボクサーっす。突進してくる相手はカウンターを狙うには力モの餌っす」

カモのエサ・・・。

カウンター攻撃が得手な竜崎の論考だけに、全く返す言葉ねえや・・・。

宮さんがリングインすると同時に、会場に明るさが戻った。

場内の歓声は一段と増す。

リングに上がった宮さんに、すぐに大橋が駆け寄ったが、宮さんは澄まし顔だ。

それはある意味、周りが騒ぎ立ると、どんどん冷静になれるB型の強みでもあるかな。

相手に合わせて興奮してしまっただけ、向こうの思う壺だ。

それじゃなくても宮さんを興奮させる要素は十二分にある。

青コーナー側のリングサイドに陣取る、野牛退学組、アキガ、柴、タカノブ、そして目の前で挑発を繰り返す変わり果てた織川。

一体織川の身に何があったと言っただけ？ どうしてそこまで？ イメチェンするにも程があるぞ。

プロレスラーでも、ベビーフェイスからいきなり悪役には転向しねえぞぞ？！ それに、高校デビューじゃねえぞぞだから・・・。

あそこまで紳士的だった織川が、そこまでやるか？

「宮一、てめーの存在を今日限り煉り消してやっから、覚悟しとけよタコー」

甲高い声で叫ぶ織川。

言葉使いも変わってる。

そんな挑発をする織川に対し宮さんは、素知らぬ顔で見向きもしない。

むしろ、苛立ちいらだたによる怒りの矛先を大橋に向けてるようだ。

大橋から手渡されたヘッドギアを、力任せにリング下に投げつける宮さん。

さらに、「宮、マウスピースは付けとけ！」と忠告する大橋に対し、「うるせえ、こんなモン付けてられっか！」と言ってマウスピースを放り捨てる始末。

八つ当たりってヤツだ。

一方織川は、ヘッドギアは付ける様子は見られないが、マウスピースは着用している。

「ボクサー相手にマウスピースもヘッドギアも付けないのは自殺行為っス」

竜崎が呆れながら溜息をつく。

竜崎の言う事はもっともな意見だが、宮さんの気持ちも分からないでもない。

これは、織川自らの意志なのか……。

それとも、誰かに唆そされたのか、何かに操あやられてるのか……。

仮にそうだとしても、織川をあそこまで変え、宮さんの刺客として送り込んだ敵は、今の所まだハッキリしない。

織川のセコンドとして陣取るヤツらがヒントだとすると、吉岡が絡んでるのか、野牛が絡んでるのか、それとも武蔵内で何らかの動きがあるのか、タカノブ絡みでギャラクシーなのか、もっと別の組織なのか……、分からない。

今はまだ、様子を見るしかない。

第242話 織川の挑発

時間は待つてはくれない。

刻一刻と秒針が進み、心の準備も無いまま、『王者VS挑戦者』のメインイベントが幕を開けた。

大橋が緊張の面持ちで両手を縦に振り、ついに、『宮大地VS織川宏次朗』、『武蔵VS笹城』の頂上決戦の火蓋が切って落とされた。

さっそく牽制けんせいのジャブを繰り出す織川。

織川の攻撃が、的確に宮さんの頬を叩いた。

「ちゃんとガードして!」

竜崎の叫びも聞かず、宮さんはノーガードで織川にパンチを繰り出す。

まるで、前回のメインイベント、長須戦の時の宮さんを、そっくりそのままこの場に召喚したみたいな気迫と重圧を感じる。

重量級のメガトンパンチが空振りする度、リングサイドのオレにまで空を切る音が聞こえる。

ブン ブン

「ダメだ、相手が悪い！ 宮さん、落ち着いてっ！！」

竜崎が声を掛けるが宮さんには届かない。

超高速のステップで宮さんの懐に潜り込んだ織川は、ニタリと笑みを溢した。

次の瞬間！

ガスッ

アッパーブローが宮さんの顎あごにヒットした。

あまりに一瞬の出来事だったので、流石の宮さんも対処しきれなかったのだらう。

掴むか、ガードするか、どっちの選択の余地もなかった。

バランスを崩し、よろめく宮さん。

「あ、足に来たっ」

オッキーが叫んだ。

・・・さらに！

ドスッ

重たいボディブローが宮さんのお腹を直撃する。

・・・そして！

パソコン

宮さんのテンプルに、織川の右フックが強烈にぶち当たった。

それでも踏ん張る宮さんは、負けじとパンチを繰り出すが、それらは全て見切られた。

「宮さん、付き合っちゃダメっス」

相変わらず竜崎の叫びは届かない。

宮さんの繰り出すパンチを全て巧みにかわした織川は、手をブラブラさせて余裕の表情を見せる。

ノーガードの織川に向かってパンチを出すか、宮さんの攻撃は一つも当たらない。

徐々にムキになってきた宮さんを、さらに怒らせるような挑発を繰

り返す織川。

腕をグルグル回してストレートを放ったり、ジャンピングしてパンチを放ったり、かなり宮さんをおちよくっている。

そんなふざけた攻撃が、全部ピンポイントにヒットするもんだから、たまったモンではない。

会場からは失笑が漏れ、宮さんを労ねぎう声も飛び交う。

「ガンバレ総バンチョー」「王者の意地を見せてみる」「そんなチビやつちゃえよ大地」

傍観者たちの呆れた声を掻き消すように、宮さんは必死になって織川に攻撃を繰り返すが、どれもこれもかわされるばかりで、宮さんが動けば動くほど窮きつ状じょうに追いやられているようだ。

泣く子も黙る総番長に対し、暴言や野次が飛ぶなど、今の今まで全く信じられない事柄だった。

いくら遠く離れた客席からとはいえ、一つでも野次を飛ばそうもんなら命の保証はない。

今までそんなジnkスが確かにあった。

それが今となつては、国民が総出で戒律を破るような勢いで、次々と宮さんに対して暴言を吐いている。

「はっはっはっは、見てみるよアレ！ アレが総番長だってよ！
笑っちまうねー！」 「宮つて、弱くね？」 「あんなチビにやられて
やんの」

「アレならオレでも勝てんじゃね？」 「今まで散々威張りくさつて
よ、いい気味だぜ」 「やつちやえ織川~~~~~！！」

会場からはいくつもの罵声が飛んだ。

「ちつきしょ、一人一人、口を塞いでやる！」

「ジオン、気持ちは分かるが今は耐える。宮さんを信じる。宮さん
なら必ずやつてくれるつて。それに、あいつら、野次を飛ばしてる
ヤツらは皆知らねえ〜んだ、織川がボクサーだって事」

オツキーが言った。

「だからこそ、そいつらに分からせるんだよ。宮さんが今戦ってる
相手は素人じゃねえ〜んだつてな」

「あいつらを分からせるつて？ たとえ織川がボクサーだって事を
一人一人に語つたとしても、だから何？ つてしか言われねえ〜ぞ」
「どうしてだよ」

「あいつらからしたら、総番長つてだけで、宮大地つてだけで最強
なんだよ。それが今、目の前で、覇者が、総大将が、支配者がボコ
ボコにされてんだ。相手が誰であれ、あいつらには関係ねえ〜んだ
よ。今まで王者に君臨してたヤツが落ちてく姿しか、そこにしか今

のあいつらの快樂はねえ〜んだよ。あいつらは皆、宮さんが落ちるのを願ってんだよ」

オツキーがいつになく熱く語った。

「うるせえ〜黙れ！ じゃあ何か？ オツキー、てめえ〜は心の中じゃ、宮さんが落ちればいいって思ってたってか？」

「だから、オレの言ってるあいつらってのは、会場の野次飛ばしてるヤツって言ってるんだろ！ オレが宮さんをそんな風に思ってたんなら、宮さんのセコンドなんかには付くはずねえ〜だろ！ オレだって命懸けなんだ！ この帰りにあいつらに刺される覚悟で来てんだよ
！！」

「・・・くそつ、じゃ〜あいつらは皆、いつか宮さんが落ちればい
いって思ってたってか？」

「宮さんはカリスマ性が強かった。それに、本当に最強だった。だから、誰も宮さんが落ちる姿なんか想像できなかったんだ。それが、信じられない光景が目の前に起きた瞬間、誰もが宮さんの敗北を想像した。今、会場の誰もが、現在起きてる状況を呑み込めてないんだ。誰もが経験したことのない光景に頭が対処できてないんだ。誰もが宮さんの事を支持してたワケじゃない。中には、面白くなかったヤツもいる。そいつらが暴言や野次を飛ばしてんだよ」

「・・・つきしょ〜！ があああああ！！ どお〜すりゃい〜んだ
！！」

想定外の展開に、オレの頭はショート寸前だ。

「どくしよもねえから、今は宮さんを信じるしかねえって言
ってんだろ、ジオン！ 落ち着け！！」

「オツキー、おめえが落ち着け」

「オレは落ち着いてるって！ いいか？ 会場にいる観客は、宮さ
んの敗北を願ってるヤツらばかりじゃねえだろ？！ ちゃんと宮
さんがどんな人か知ってるヤツらもいっぱいいるんだ。竜崎がいつ
も言ってるだろ、宮さんは必要悪を演じてるんだって。宮さんを、
英雄、正義の味方、憎まれ役のヒーローだって、ちゃんと分かつて
るヤツらだってちゃんといるんだ。今はそいつらと共に、宮さんを
応援する事しかオレらは出来ねえだろ」

オツキーが言い切った。

「……」

悔しいが、返す言葉が見付からない。

……と、その時、竜崎が信じられない事を口にした。

「宮さんは、ずっと……、誰かに倒されるのを望んでたんよ……
……」

第243話 竜崎への疑念

「竜崎……、今何て言った？ 宮さんが、ずっと、誰かに倒されるのを望んでたって……？」

「そうっす。宮さんは、総番長に君臨した時から、いつか自分を倒してくれるヤツが現れるのを、ずっと待ってたっす」

「マジかよ……」

信じられない。

あの宮さんが、自分が倒されるのを望んでたって？

「子供の頃、オレはいじめられっ子の宮さんを、いつも助けてたっす。2つも年下のオレに助けられるんだから、子供ながらに悔しかったと思うんす。ある時宮さんは、ついにいじめっ子に反撃したんすよ。その時、やれば出来るって事を宮さんは知ったんすね。それから先は、説明はいらないっすね。オレの出番はなかったっす。中学時代宮さんは、柔道で国体優勝候補と謳うたわれてたんすが、腰を痛めて挫折し、そっからグレ始めたんす」

宮さんの過去を淡々と語り出す竜崎は、さらに話を続けた。

「野牛と吉岡、武蔵の3つの学校は、当時戦争が絶えなかったんす。

そんなムダな戦争時代を終わらせる為に、1年の宮さんは、武蔵の2年と3年を力づくで黙らせ番長になったんす。やがて、誰もが知ってる通り、宮さんは総番長に君臨。そんな宮さんも3年になり、自分の進退を考えるようになったんす。そんな時思いついたのが、自分の後釜……」

後釜……。

そういえばオレと竜崎は、宮さんの後釜候補だったっけ……。

「宮さんの期待を裏切り、自分の後釜は見付からず仕舞い。だから宮さんは、番長時代は自分たちの世代で終わらせようと考えたんす」

「今回の大会後、宮さんは総番長の引退と終焉しゆうえんを宣言する予定なんだよな、確か……」

「そうっす」

「竜崎、さっきオマエ、宮さんは総番長に君臨した時から、いつか自分を倒してくれるヤツが現れるのを、ずっと待ってたって言ったな。それは一体、ど〜という意味なんだ？」

「話はこれからっす。宮さんは、さっきオツキーさんが言った通り、必要悪をずっと演じてきたっす。昔のような戦争を繰り返さない為、自分が悪という頂点に君臨し、平和を守ったんす。それは、中学時代、いじめられっ子だった織川さんを自分の舎弟にし、織川さんはいじめから守った頃の行為の延長であり、拡大とも言えるんす」

「確かに……」

「でも、それは力で押さえ付ける行為であり、反乱分子も中には生まれるっス。それでも宮さんは、そんな反乱分子をも力で押さえ付けてきたワケっス。でも、宮さんの信念は、人の下に人を作らず・なんスよ。あの人、ちゃんと自分の立場わきま弁えてるんス」

「なかなかいねえよ、宮さんみてえな人。子分なんか一人もいねえし、オレらとつるむ前は、ずっと一匹狼だったんだよな。あの人は凄えよ、マジで・・・」

「外見からは想像できないでしょうが、宮さんはホントはそんなに強くないんス。もちろんメンタル面の事っスよ？ 宮さんは、常に心の中で、罪の意識と戦ってたんス。だから、誰でもいい、オレをぶっ倒してくれって、常に思ってたんス。でも、それが自分にとつてふさわしくない相手だったら、宮さんは容赦なくそいつを潰すっス。でも、それがもし、自分が望むような相手だったら・・・」

「オレを倒してくれ、この悪を、ぶっ倒してくれってか・・・？」

「そうっス。それが、その望む相手が、今まさに目の前に現れたんス」

「それが、織川だったのか・・・？」

「はい。宮さんは、織川さんを舎弟にし、いじめから守ってきました。宮さん本人も昔いじめられてたから、織川さんの気持ちは良く分かるんス。そんな織川さんが、今では笹城のトップに立つほどまでに成長した。宮さんは、自分の事のように喜んだはずっス」

「だろっな・・・」

「そんな織川さんが、自分を倒しに現れたんよ・・・」

もし、相手が浦上ってヤツだったら、試合前に言ってたように、手も足も出させなかったかもしれない・・・。

でも、実際出て来た相手は、自分が可愛がってきたかつての舎弟、織川・・・。

宮さんは、倒されるのを願ってるのか？ ホントに、織川に倒されるのを望んでるのか？！

竜崎の言ってる意味は良く分かる。

・・・が、それは織川が正々堂々と紳士的に、過ぐる日の姿で現れた場合だろ？

今の織川はどうだ？ この間までの織川からは推し測れない程に変わった。
貌した。

そんな織川と対峙した宮さんは、ホントに彼に倒される事なんかを望んでるのだろうか？

それより何より、織川のセコンドに付いてるアイツらを見て、宮さんは織川を一体どう見てるのかを推察すべきだ。

宮さんは試合前、イラついていた。

でも、怒りの矛先は織川ではなく、なぜか大橋に向けられたんだ。
オレと同じ、やり場の無いもどかさ。

怒りの根源が、未だ何なのかハッキリと分からない。

吉岡かもしれないし、野牛かもしれないし、武蔵内部の何かかもしれないし、ギャラクシーかもしれないし、もっと上の存在かもしれない。

少なくとも宮さんの怒りの矛先は織川ではなかった。

それは、織川が誰かに踊らされていると判断したからだ。

オレと一緒に、宮さんは織川の後ろに何かを感じてるんだ。

見えない何か、そう、織川の後ろの何かに対して宮さんが怒ってるのだと判断するのが賢明だ。^{けんめい}

じゃあ、なぜ竜崎は、そんな単純な事に気付かないんだ？

……っ！

その時オレは、とんでもない疑念を竜崎に抱いてしまった。

……コイツ、もしか……、スパイなのでは？！

思えば竜崎は、柴、タカノブとも親交がある。

野牛の仲村、橋とも交流がある。

宮さんに対し、「甘やかしちゃダメっス」などという発言や、厳しい態度。

竜崎は、もしかしたら、オレたちの敵なんじゃないのか………
………?

第244話 あの人だけに、辛い思いさせると思ってたの?!

竜崎はホントは全てを知ってて、ワザと知らないフリをしているの
では？

織川、野牛退学組、アキガ、柴、タカノブ・・・、アイツらと竜崎
は元々グルで・・・。

「アンタたち、ちょっと静かにしなさいよ。試合に集中出来ないじ
ゃない!」

竜崎への疑念を抱いていたオレを、ユイが一蹴した。

「そうっすね。今は宮さんへのアドバイスに専念するべきっすよね。
宮さ～～～ん、ちゃんと相手の動き見て! 無闇にパンチ出さない
っ!」

竜崎が宮さんへ声を掛ける。

やっぱり、竜崎は竜崎だよな。

オレは何を考えてんだ・・・。

仲間をスパイだなんて。

・・・そうだよな、竜崎が敵だったら、とっくに気付いてる。

オレを誰だと思ってんだ、オレ。

オレは亀鶴ジオンだぞ、オレ。

しっかりしろ、オレ。

リング上の宮さんは、右目が潰され、血の涙を流していた。

さらに、唇が切れ、口の中は真っ赤だ。

鼻血も出ている。

相変わらず宮さんの攻撃は空振りするばかり。

逆に織川の攻撃は、イヤというほどの確に宮さんを襲った。

何度も倒れそうになるが、決して倒れない不沈艦。

レフェリーの大橋は、涙を堪えながらレフェリングに専念している。

おそらく、目の前で苦しむ宮さんを見て、一番悔しいのは大橋だろう。

あんな間近で見てるのだから・・・。

大橋は、決して試合を止めようとはしない。

それはオレと同じで、宮さんが試合を勝手に中断されるのは死ぬより辛いつて事を知ってるからだろうし、何より宮さんの起死回生に懸けてるからに他ならない。

「鼻がだいぶ腫れてきたわ。折れてるかもね、鼻。右目は切れたのが瞼だから大丈夫だろうけど、あれじゃ〜視界がかなり遮られるわまぶた。それに、マウスピース付けてないから、多分数本やられてると思うの、歯が。そろそろ危険ね」

ユイが宮さんの現状を分析した。

「止めるっスか、そろそろ・・・」

竜崎が呟いた。

止めるだと？ 宮さんの試合を止めるだと？ それは何を意味するのか分かってるのか？！

「もう見てらんねえ〜」

涙目のオツキーが下を向いた。

「光一君、止めてっ！ これ以上戦ったら、宮先輩死んじゃうよ〜」

朝露さんが泣き叫ぶ。

「竜崎、いいんじゃない？ もう、十分戦ったわ。これ以上やっても結果は見えてるんだし、あの人、絶対ギブアップしないでしょ？ それに、絶対倒れないし……」

ユイがタオル投入を竜崎に指示した。

「オイ、待てよ！ ……ざけんなよ！ そんな事したら、宮さん死にじまう！！ 最後まで戦わせるよ、頼むから」

「ジオン、アంతアの気持ちは良く分かるわ。確かに宮さんにとってタオル投入はキツイと思う。自分の意志じゃないから、ホント辛いと思うわ。でも、このまま戦わせるのはもっと辛いと思うの。アタシたちも辛いけど、もっと辛いのはリング上の宮さんよ。惨^{みじ}めで、情けなくて、ど〜しよ〜もないくらい悔しくて……。でも、しょうがないじゃない。今回負けても、宮さんだったらまた復活してリベンジするわよ」

そう言つてユイは、下唇を強く噛んだ。

「簡単に言っけどな、もし今負けたら、かなり傷は深いぞ。宮さんは、一発も織川に攻撃を当ててないんだ」

「アタシが責任持つわよ。竜崎、いいからタオル投げな」

ユイはまたしても竜崎にタオル投入を指示。

「待てって！ だから宮さんは、試合を止められんのは死ぬより辛

「いんだって!!」

「分かってるわよそんな事! だからアタシたちが止めるのよ! アタシたち全員で、宮さんの悔しさを共有すればいいじゃない!!」

あの人だけに、辛い思いさせると思ってるの?!」

「.....」

ガツーンと来た。

ユイの言葉に、二の句がつけない。

「分かったよ。竜崎、オレからも.....、頼むよ.....」

悔しいが、それしか方法がない。

竜崎はついに、持ってるタオルをリングに投げ入れた。

第245話 地獄絵図

時が止まった。

会場の大歓声は一気に止み、静寂が訪れた。

やがて、ゆっくりとタオルが宙を舞い、音もなくリングに舞い落ちる。

竜崎が投げ入れたタオルがマットに落ちた瞬間、不沈艦は静かに倒れて落ちた。

宮さんは、マットに手痛い口付けをした。

一瞬大橋は、目の前の現状を把握しきれない様子だったが、倒れた宮さんと、マットに落ちたタオルを見て我に返った。

大きく両手を何度もクロスさせ、ついに大橋が試合終了を告げた。

『王者VS挑戦者、メインイベント、王者、宮大地VS挑戦者、織川宏次朗の一戦は、挑戦者、織川宏次朗の勝利です!!』

リングアナがマイクで叫んだ。

「ワアアアアアアアアアアアアアア」

場内は大歓声に包まれた。

宮さんを介抱かいほうしようとしてリングに駆け上がろうとした矢先、ロープを掴つかんだ手を何者かに蹴られた。

「な、何すんだよ！」

オレの手を蹴り払ったのは、いち早くリング上に駆け上がった野牛退学組の丸刈りだ。

オッキーも同じように、野牛退学組のセミロングの男に蹴り払われた。

竜崎はリング上の状況を冷静に注視し、同時にリングサイドの朝露さんらに気を配っている。

アキガに蹴られてリング下に落とされた大橋は、頭を地面に強打した。

リングアナはマイクを柴に奪われた上、大橋と一緒にリング下に放り出された。

あっと言う間にリング上を、織川、アキガ、柴、タカノブ、野牛退学組の6人が占拠した。

まるで地獄絵図を見てるかのような凄惨せいさんなありさまに、オレは血の気が一気に引いた。

織川は、うつ伏せで気絶している宮さんの頭を右足で踏みつけ、二タニタと会場を見渡す。

野牛退学組の2人は、どこからともなく出してきたバッグから、何かを取り出した。

そいつを織川の肩の上に被せる。

・・・と、特攻服？ 何のマネだっ？！

それと同時にリング上のタカノブたちも、特攻服を次々に着出きたした。

織川、アキガ、柴、タカノブ、野牛退学組の6人は、特攻服を身に付け、リング上の四方八方に陣取る。

『ア・ハッピー・ニュー・イヤーーー！』

マイクを握った柴が叫ぶ。

何なんだ、一体！ な、何が起こってるんだ？！

ア・ハッピー・ニュー・イヤーだと？ 新しい時代の幕開けだとも言うのか？！

何のマネだ！ そんなマイクパフォーマンスに付き合ってたれつか
！！

リング上の宮さんを救助すべく、オッキーと共にロープを掴むが、
またしても野牛退学組の2人に阻止された。

『宝蔵、塚原、上泉、笹城、吉岡、野牛、武蔵のみなさ〜〜ん、
お待ちせしましたっ！ オレたちギャラクシーが、やっと、悪を退
治しましたっ！！』

柴が叫んだ。

はあ？ オレたちギャラクシーだと？ てめえ〜、まさか・・・?!

『これからは、オレたちギャラクシーが、正義の名の下に、みなさ
んの平和をお約束いたしますっ！ 是非みなさんにはっ、誤解がな
いように言っておきます！ オレたちギャラクシーは、みなさんが
知っての通り、まだ出来立てのホヤホヤの独立系のゾッキーです！
世間からは暴走族っただけで恐がられてますが、ホントはシャバ
僧の集まりで〜〜す。でも〜、オレたちは全員気合入ってますヨ。
もちろんっ、みなさんの平和をお守りする為の気合ですっ』

柴はニッコリ笑い、観客の安心を引き付けている。

さらに・・・！

『今までホント、ゴメンナサイ！ こんなムサイ男をいつまでもの

さばらせてしまい、ホント、申し訳ありませんでしたっ!』

柴のマイクパフォーマンスで、会場はドツと沸いた。

そして・・・!

『このムサイ男、ホモなんですよ、実は! ……あっ、言っちゃった。……言っちゃダメでした?』

柴は口を押さえるジェスチャーをした。

それに対しタカノブが、「シート!」って言って、柴を黙らせる手振りをした。

それには会場大ウケで、いつしか大爆笑に包まれた。

さらに、会場からは、柴のホモ発言に対して共感の声も飛んだ。

「相手、誰?」「竜崎じゃね?」「そ〜いえば竜崎って、スゲ〜モテるのに彼女いね〜よな」

そんな声が、観客席の武蔵サイドから飛んだ。

それを背中越しに耳にした竜崎は、黙って腕を組んで静観の構えをとっている。

さすがブルードラゴン、どんな時でも冷静だ。

『せつかくなんで、ぶっちゃけちゃっていいですか？』

そんな柴の言葉に対し、アキガヤタカノブが、首を縦に振った。

「言っちゃって下さい」「大丈夫だよ、オレたちが付いてる！遠慮せずにぶっちゃけちゃえー！！」「言っちゃえ言っちゃえ」

会場からも、柴を後押しするような声がいくつか飛んだ。

すっかり観客たちは、柴の話術とギャラクシーの面々の、コントのようなやりとりに翻弄ほんろうされている。

『みんな、この間の武蔵VS野牛の全面戦争知ってるよねっ？アレ、全部、八百長。宮もインチキヤロ〜だし、長須もイカサマ師。全部最初から仕組まれた大会だったんだヨ、アレ。とんだ茶番劇さ』

そんな柴の言葉に、会場中ざわめき出した。

武蔵VS野牛の全面戦争が八百長だった？！

宮さんと長須の頂上対決が、茶番劇だった？！

「あ、あのヤロ〜〜〜！！」

「だから言ったじゃないっすか、ジオンさん。オレはもう、誰も信

じないっス……」

竜崎が腕を組みながら言った。

誰も信じない??

誰も信じない……???

りゅ、竜崎は……、宮さんを疑うのか？ 同時にオレをも疑うのか?!

オマエは、柴の意見に同調するってのか?!

もう、いい!

てめえ〜がその気なら、オレだって同じだ!

いつまでも、敵か味方が分かんねえ〜、てめえ〜なんかにつき合っ
てられねえ〜!!

「竜崎！ オレもおめえ〜を信じねえ〜!!」

第246話 ダメなモンはダメ

仲間割れしてる場合じゃないってのは十分承知だが、許せるモンと許せないモンがある。

『みんな、この間の武蔵VS野牛の全面戦争知ってるよねっ？アレ、全部、八百長。宮もインチキヤロ〜だし、長須もイカサマ師。全部最初から仕組まれた大会だったんだヨ、アレ。とんだ茶番劇さ』という、とんでもない柴のマイクパフォーマンスに対し竜崎は、『だから言ったじゃないっスか、ジオンさん。オレはもう、誰も信じないっス』と言った。

その時点でアウト、ダメなモンはダメだ。

竜崎が宮さんを疑い、柴の意見に同調した時点で、もう、オレも竜崎を信じない。

ダメなモンはダメだ。

竜崎は仲間だから、オカシイと思った事もある程度我慢してきたが、オレの我慢も限界。

堪忍袋の緒は切れた。

今までは竜崎に対してどんなに疑いを持ってても、内偵ないていは禁物だった。なぜなら、竜崎が柴やタカノブ、つまり、ギャラクシーと精通した場合、オレの情報が筒抜けだからだ。

それを懸念し、今までオレは、竜崎にタカノブとの関係について探りは入れなかった……。

これからも、そうあるべき、だ。

柴もギャラクシーだと本人が認めているし、目の前の光景を見る限り、それを疑う余地はない。

柴が「オレたちギャラクシー……」と言ってる時点で、特攻服を身に纏まとってる時点で、織川もタカノブもアキガも野牛退学組も、アイツら全員ギャラクシーだと思って間違いない。

タカノブの当初の思惑では、オレ、竜崎、ユイをギャラクシーに勧誘し、宮さんを孤立させ、この場で一気に大橋、長須らと共に宮さんを叩き落とし、一気に新勢力を旗揚げする予定だったのだろう。

だが、思惑通りにはいかず、オレもユイも断った。

竜崎もタカノブからの勧誘を断ったと言っていたが、一つ引っ掛かるふしがある。

『宮さんには内緒つスよ、くれぐれも……』という言葉だ。

なぜ、「タカノブから勧誘されちゃったつス。断ったつスけどね」

と、宮さんに堂々と言えなかったのか？

『総番長には今の話内緒ね』ってタカノブに言われたからって、素直に聞くか？ フツ。

あの時は竜崎に『宮さんには内緒っすよ、くれぐれも・・・』なんて言われたお陰で、『見縊^{みくび}るな。オレはメツチャ口堅いし、ここだけの話を洩^もらすような野暮はしねえよ』なんて勢いで言っちゃまって、オレと宮さんとの間に隔^{へた}たりが出来るところだったんだぞ！

あと一つ、竜崎はセコンドとして、致命的な過失を犯している！

宮さんがマウスピースやヘッドギアを投げ捨てた時点で、無理矢理にでも装着させるべきだった。

それをせず、知らん顔してやがった・・・。

あの時ちゃんと着けさせていれば、こんなに酷い結果にはならなかったかもしれない・・・。

色々な角度から竜崎を推察しても、オレが竜崎を信じる意義はない。

悔しくて辛いけど、ダメなモンはダメだ。

皮肉にも、何よりも裏切りが大嫌いな竜崎が、目の前のオレを結果的に裏切ったんだ。

そんな竜崎をオレは、今日限り見限る！！

オレに、「竜崎！ オレもおめえを信じねえ〜！！！」と言われた竜崎は、目を丸くしてこっちを見ている。

『・・・オレはもう、誰も信じないっス』と言ったはいいが、今になって取り消したいってか？

フン、残念だが竜崎、吐いた唾は呑めねえ〜からな！

・・・って、そんな事はど〜でもいい。

それより、リング上だ！！

『全て仕組まれてたんだよ！ シナリオ通りさ、コイツらのね！！』

そう言っつて、柴はオレたちの方を見てニッコリ笑った。

その後ろで、三日月のような目で微笑むタカノブ。

・・・分かったぞ！

セミファイナル、そして、今の試合の謎が解けたぞ！

第247話 絶体絶命

『王者VS挑戦者』。

この大会に秘められた全ての謎は解けた！

まず『ジオンVSタカノブ』で、劣勢なタカノブは何度も立ち上がるが、結局やられる事により、観客の同情を惹く。

観客はタカノブの勇姿に惚れ、セミファイナルは好試合として印象に残る。

その余韻に浸る観客に待ってるのは、メインの『宮VS織川』。

オレたちは宮さん絡みで織川を知っていたが、笹城も織川も知名度が低いのが実情。

誰もが宮さんの勝利は疑わない。

・・・が、そんな観客に待っているのは世紀の番狂わせ。

誰もが勝利を疑わない絶対王者の宮さんを、無名の選手が倒すことにより、観客は愉悦を感じる。

そんな織川も、セミのタカノブも、実はギャラクシーだと明言し、

ギャラクシーは正義だと主張。

オレや宮さん、大橋や長須を悪に仕立て上げ、一気に正義のギャラクシーが、名実共にトップに立つシナリオだったんだ！！

「学園祭のあの事件とかもさ、アイツらの自作自演だったんじゃないの？」「なるほど」、きつとそうだが、間違いない」「アイツらは、とんだペテン師だ」

そんな声が、観客席の武蔵サイドから飛び交った。

「……つちつきしよ」

「ジオン、キレたら柴たちの思う壺だぞ。どうせ柴の言う事なんか、誰も信じちゃいないって！」

オツキーが言った。

「会場の観客は、誰も柴の言う事なんか信じてないってか？ フン、客たちは、オレらと違って目に見える現実が全てだ！」

「……」

オツキーは返す言葉もなく、黙り込んだ。

『それとく、その白鳥ユイ！ コイツと茶番劇を繰り広げたミケコっているだろく？ 言っちゃっていいかなあく？ あの女さあく、あの野牛のイノシシと・・・』

柴の度重なるマイクパフォーマンスを、下唇を噛んで黙って見てたユイだったが、ミケコの名を聞いた途端プチキレた。

「いい加減にしろよテメエーらあー！ー！ー！ー！」

ここまでキレたユイを見たのは初めてだ。

とてつもないオーラを放ち、鬼の形相でエプロンまで駆け上がったが、すぐさま野牛退学組、アキガ、タカノブが立ち塞がった。

「おっ、宮の入場曲に続き、さらなる売名行為?!」「ふざけんな、ペテン女あゝ!!」「引つ込めシラトリ」

何と、ユイ目掛けてペットボトルが飛んできた。

とうとうエスカレートした客が、オレたちを敵と見なしたんだ!

オレたちにもう、逃げ場はない!!

リング下に戻ったユイの前に大橋が護るように仁王立ちし、リング上のアキガと睨み合う。

先ほど転落した時に昂じたと思われる血が、大橋のこめかみの古傷から滴り落ちた。

不敵な笑みで見下すアキガ。

不気味な笑みをこぼすタカノブ。

門衛のように立ち塞がる野牛退学組の2人。

調子に乗って、事実無根のガセネタを吠えまくる柴。

うつ伏せで気を失っている宮さんの頭を踏み躪る織川。

そして、オレたちに蔑んだ視線を送る観衆。

絶体絶命だ!!

ちつきしよ~~~~!!

どくすりゃい~~~~んだあ~~~~!!

.....と、その時!

ヴォン ヴォン ヴォン ヴォン

場内にバイクの爆音が鳴り響く。

音は、会場の入り口側だ。

夜の港の海を背に、特攻服を身に纏まとったレディースの姿があった。

バイクのヘッドライトが一つ、シックに光り輝いた。

・・・あ、あれはっ！

ひ、日丸ひまるミケコだっ！！

第248話 捨てる神あれば拾う神あり

なぜここに、日丸^{ひまる}ミケコが？！

・・・と、その時、吉岡サイドでミケコに手を振る、ある女性の姿が目に入った。

あ、あれは・・・？！

か、上木^{かみき}マヤ！！

上木は片手にケータイを持っている。

そ、そうか！ 上木がミケコを呼んだんだ！

意外な人物の思わぬ助勢^{じよせい}が、劣勢の流れを一気に変えた。

たった一人のレディースが、数百人もの観衆の中を平然と走り抜ける。

言葉すら失った会場の、列の空いた通路を走り、ミケコがリングサイドに颯爽^{さつそう}と現れた。

「ユイ、乗りなっ!!」

ミケコが痛快なセリフを吐く。

まさか、あのミケコがオレたちのピンチに駆け付け、正義の味方になるうとは……。

ユイは、ミケコのバイクに躊躇ためらわず跨またった。

突然のミケコの登場に、会場中は一瞬、凍り固まった。

……が、柴は冷静に状況を見ていた。

したたかなAB型は、ホントに厄介極まりない……。

『みなさんっ、見ましたっ?! それが証拠ですよ、証拠っ! 白鳥ユイと日丸ミケコは元々徒党を組んでたワケです。つまり、前回の2人の戦いは、元々八百長試合だったんだーっ!』

得意のでっち上げが始まった。

そんな折、ギャラクシーの面々の後ろに忍び寄る影があった。

……長須だっ!!

どこからともなく突如現れた長須が、リングに雪崩れ込み、リング上のギャラクシーをたった一人で蹴散らし始めた。

今がチャンスだ!!

みんなもそう思ったのだろう、気がつくどリング上にはオレの他に、大橋、オツキー、朝露さん、朝露さんの友達が上がっていた。

宮さんの介抱を、オツキーと朝露さんたちに任せ、オレはギャラクシーを蹴散らす長須の下へ駆け寄った。

「長須さん!!」

「許せねえ〜! コイツら、許せねえ〜! 全員ぶつ殺してやる!!」

長須は般若のような形相で叫んでいる。

ダメだ、長須のヤツ、怒りがMAXを超えている! 話にならない。

大橋も加わり、あっという間にギャラクシーの面々はリング下に追いやられた。

最初はざわめきだった会場が、やがて大歓声に包まれ、ギャラクシーが蹴散らされたのを見た観客は、意外にも拍手喝采だ。

「調子いいな、アイツら・・・」

オツキーが呟く。

「そんなモンだろ。どっせアイツら傍観者は、楽しけりゃ何でもい〜んだよ。オレら当事者の事なんか、これっぽっちも思っちゃいねえ〜のさ」

「あつ、アレ見るジオン！」

オツキーが会場の入り口を指差した。

何と、会場の外に、無数のバイクやヤバそうな車が待機している。

ヴォン ヴォン ヴォン ヴォン ヴォン ヴォン

パ・ラ・リ パ〜ラ・リ・ラ パ・ラ〜リ〜ラ・ラ〜

ラッパ音も聞こえる。

「オイ、ジオン、アイツらつてもしかして・・・」

「武蔵に殴り込んだときの、野牛のヤツらだな・・・」

「・・・って事は、ミケコの仲間、長須の仲間、つまり、今はオレらの味方でもあるよな?!」

オツキーが不安そうに聞いてきた。

「単純にそうなるよな・・・」

「・・・ふう〜」

オツキーは大きな溜息をついた。

確かに、あんなヤツらがもし敵で、外に待機されてたら、オレら生きて帰れねえよ。

ヴァヴァヴァン ヴァヴァヴァン ヴァヴァヴァヴァン ヴァヴァヴァン ヴァヴァヴァン

ユイに乗せたミケコのバイクは、ギャラクシーの面々を威嚇いかくしながら会場の入り口までゆっくり走り、アクセル音を高らかに鳴り響かせた。

逆に逃げ場を失ったギャラクシーの面々に、長須が襲い掛かろうとした瞬間、リング上に新たな影が雪崩れ込んできた。

第249話 どっちもメルセデス

リング上に雪崩れ込んできたのは、仲村シン、橋弘至の2人と、竜崎だ!!

橋と竜崎は、荒れ狂う長須と興奮する大橋を抑える役を担った。

リング下のギャラクシーと、リング上のオレたちの間に立った仲村が、マイクを握った。

『もうすぐ警察が来る！ パクられたくないヤツは、今のうち逃げた方がいいぜ』

仲村は、興奮する観衆に向け、クールに言い放つ。

場内はザワつき、次第にそそくさと席を立つ輩やからが増え、ついには一斉に散り出した。

会場の入り口にいた、長須の仲間と思われるバイクや車の面々も、仲村の声を聞いた矢先、我先われさきにと姿を消した。

ユイに乗せたミケコのバイクも、同時に会場から姿を消した。

「ホラ、オマエらも今のうち逃げた方がいいぜ」

仲村は、リング下の織川たちに表情を変えず言った。

竜崎と橋に制止される長須と大橋を睨みながら、ギャラクシーの面々は、用心しながら後退りした。

やがて織川やタカノブも含め、ギャラクシーの面々は、慌てて逃げる観客たちに紛れるように場外へ消え去った。

「長須！ 念の為、オマエもさつさと、とんずらしとけよ！ 橋、竜崎、そろそろオレらもエスケープだ！！」

仲村シンは、そう言って橋、竜崎を招く。

竜崎は宮さんを背負い、橋がそれをサポートした。

「ジオンさん、宮さんは、オレに任せて下さい・・・」

竜崎が宮さんをおぶさりながら言った。

「はあ？ 宮さんをどこに連れて行く気だ？！」

「どこ行って、病院つスよ。仲村さんが、知り合いの病院に連れて行くからって・・・」

「病院なら、オレらが連れてく！！」

オマエらを信用できるワケねえくだろ。

「ジオン、ここは竜崎に任せよう。オレら、宮さんを預かっても逆に困るぞ？ この辺、夜間病院とかあるか？！ それに、もし病院連れてくとしたら、石田町まで戻らねえくと・・・」

オツキーが言った。

・・・ぐう。

・・・ならば！

「大橋さん、宮さんを、本当に仲村って人に任せて大丈夫なんですか？！」

「仲村なら大丈夫だ。とりあえずここは仲村に任せて、オレらもすぐに退散しよう」

大橋が言うなら・・・。

宮さんを背負った竜崎と橋、そして仲村は、港の駐車場に停めてあった、仲村のものと思われる車に乗って野牛駅方面に走り去った。

同時に朝露さんたちも、運良く会場の前に停まっていたタクシーに乗り込み、会場を後にした。

「ちつきしょく！ ギャラクシーめ！ 今度遭あつたら八つ裂きにしてやる」

長須が港の駐車場で吠えた。

「オレらも早く逃げないと、パクられるぞジオン」

オツキーは焦りを見せる。

「マツポは来ねえ。オレらとギャラクシーを一旦引き離す為の仲村流のはったりだ」

そう言いながらタバコに火をつける長須。

はったり？ 仲村流の芝居か……。

何となくそんな気はした。

宮さんを介抱し、ギャラクシーを散らしたり、興奮する長須や大橋を抑えるにはそれしか方法がないもんな。

もし仮に、あの場に仲村がいなかったら、事態は收拾がついただろうか……？

……と、その時！！

ヴォ ヴォ ヴォ ヴォ ヴォーヴォヴォヴォユ~~~~ン

黒より黒そうな真つ黒いベンツと、その後ろから白より白そうな真つ白いベンツが野牛方面から現れた。

2台のベンツは、オレたちのいる駐車場に入ってきた。

左右に2本ずつ、全部で4本マフラーがあり、そこから大迫力のエンジン音が排気ガスと共に吹き出している。

「な~~~~んかヤバくね？　な~~~~、ジオン、あの車あ~~~~、な~~~~んかヤバくね？」

オツキーが声を震わせる。

「.....だね」

直感でオレもそう思う。

アレは、ヤバイ。

「KHJのお出ました」

ポケットに手を入れた大橋が、溜息まじりで言った。

KHJ?!　主催者様のご登場ってワケか。

仲村の、『念の為、オマエもさつさと、とんずらしとけよ』の、『念の為』の意味が分かった気がする。

KHJのヤツら、大方会場で揉め事が起こつてるといふ情報を聞きつけ、事態を收拾つける為に釜桐町辺りから飛んで来たんだろつが、残念な事にここにはもうオレたちしかいない……。

が、もし、目的がオレたちだとしたら……？

ヴオヴオヴオヴオヴオヴオ　　ヴオヴユ~~~~ン　　ヴオン

ヴオヴユ~~~~ン　　ヴオン

オレたちの目の前に、黒と白の2台のベンツが止まった。

オツキーは眉をハの字にして、今にも倒れそうなくらい蒼白中だ。

長須もバツが悪そうな表情で、吸ってたタバコを足で踏み潰した。

大橋は、とぼけた顔で星空を眺めた。

バタン

ベンツから、^い敵つい、あの男たちが姿を現した。

ゴージャスなスーツに身を包んだ、釜桐町のホスト連中、KHJの面々だ。

1台目の黒いベンツから4人、そして、2台目の白いベンツから2

人、計6人の男が下り立った。

2台目の後部座席から現れた男こそ、KHJのボスと思しきあの男・
。。。

長須、大橋、オツキー、そしてオレの前に勢揃いしたのは、KHJ
のヤバそうな人たち、6人。

。。。修羅場だ。

またしても修羅場だ。

。。。しかも、今までの修羅場の中でもトップクラスの修羅場だ。

やっぱし、逆らったら海に沈められるのかなあ、オレたち。

大人しくしてたら、生きて帰れる??

第250話 総長

秋風吹きすさぶ夜の港、2台のベンツのエンジン音が消えた今となつては、波の音しか聞こえない。

長須、大橋、オッキー、そしてオレ、4人の前に立ち並ぶ、いか厳つい面々はKHJ。

オレは目の前で対峙する、とんでもなく危険なニオイのする6人の中の、一際ひとまわ異彩を放つその男だけが気になってしょうがない。

背が高く、や痩せ型で短髪。

高そうなサングラス、スーツ、ネクタイ、アクセサリ、腕に光るダイヤ入りのロレックス。

妙に気になるポロポロで傷だらけのコブシ。

額から顎あごにかけて顔の右端に彫ほられている、鉄条網イバラの顔面タトゥー。

阿修羅のようなオーラを放つその男は、KHJのボスだ。

「揉めてるって言うから飛んできたのに、終わったのか？」

KHJの一人が、会場の中を覗き見しながら言った。

「客がちよつと興奮しちまっただけで、それほど大きな騒ぎはなかった」

大橋が、誰にでもなく、いいわけするように言った。

「本当か？ サツが来たってガセぶっこいたヤツはどいつだ？！」

KHJの一人が、オレたちを睨みつける。

「客が勝手に騒ぎ出したんですよ」

大橋が無愛想に言った。

「何があつたの？」

KHJの一人が、大橋に聞く。

「ギャラクシーが暴れただけだ」

大橋は言い切った。

「タカノブ？」

KHJの一人が、オレたちの誰とも言わず聞いた。

「・・・たち、だ」

大橋は、意を決したように言い切る。

「タカノブはオレの大事な後輩で、ギャラクシーの大事な跡継ぎなんだよ。初代総長の前田さんが手塩にかけた、2代目総長候補だか
んね？ そこんとこ、忘れんなよ？」

KHJの一人が、大橋に忠告するように言った。

タカノブが2代目総長候補？

「フフツ、オレはとっくに引退したよ。・・・ま、今のギャラクシ
ーがヨソからナメられるのは、オレが抜けて総長不在ってのが原因
かもしんねえ〜が、タカノブたちが役不足だとも思っ
てないよ。みんな好きにやればいいのさ」

KHJのボスが小さな声で言った。

初代総長が、このKHJのボス？

「大橋君、そして長須君、何か言いたげな顔だけど、文句があるな
ら一応聞くよ」

KHJの一人が言った。

え？ 大橋と長須が文句ありげな顔してる？

・・・巻き込むなよなあ〜。

「そいつらにはいつもお世話になってんだよ」

KHJのボスが、大橋と長須を庇^{かば}うような素振りを見せた。

「前田さんは優し過ぎるんですよ。コイツら、ギャラクシーの事もナメてるし、オレたちの事もナメてますかね、絶対」

KHJの一人が言った。

「オレも同感だな。コイツら、ここらで一度、分かせた方がいいですよ」

さらに、KHJの一人が言った。

「どう、落とし前つけさせます？ 何ならオレがヤキ入れときますよ」

KHJの一人が、笑みを浮かべながら言った。

・・・ヤバイ、ヤバイよコレ、この流れ、ヤバイよ。

「フフッ、許してやれよ・・・」

KHJのボスが、優しい声を出した。

「……………え？ 助かったの？ KHJのボスの心の広さに、感謝かな……………?!」

「前田さん……………」

やれやれの声で、KHJの一人が言った。

……………と、その時！

「……………ウオレが言ってんだからそうしろってんだよこのクソギヤギヤーツ！ テメエーら全員海に沈めてやっがコノヤロオー!!」

KHJのボスがぶちキレた！

半端ない迫力に、その場の全員が一斉に緊迫状態に入る。

「前田さんを怒らせんなよバカ」

KHJの一人が囁いた。

KHJのヤツらも、ボスの恐さは百も承知と見て、みんな大人しくなった。

そんな中、沈黙を破り、長須が声を出した。

「織川ってヤツを送り込んだのは誰？」

・・・え？ 何その口ぶり。

まるで、場合によってはアレだよ、オレたち黙ってねえよ、KH
」なんてやっちゃうよ？ 的なその口ぶり。

長須うゝ、自害すんのは勝手だけど、オレを巻き込まないでくれえ
ゝゝゝ！

第251話 偽りの人生ほど辛いものはない

「織川？ 何のことだ・・・？」

KHJのボスが言った。

確か、前回の『宮さんVS長須』終了後、コイツと織川は握手をしてなかったっけ・・・？

「そうですか、分かりました。KHJさんは、全く今回の騒乱にはノータッチと判断していいって事ですね？」

長須がKHJのボスに聞いた。

「フフツ、そ〜いう事になるな」

KHJのボスが含み笑いをした。

「オレたちは、今回の大会について、何もとやかく言うつもりはないですよ。ギャラクシーとも、今後も揉めるつもりはないんで、そこんとこ、KHJさんからも言っついて下さい。オレたちも手を出さないから、そっちも手を出してくるな・・・と・・・」

大橋がKHJのボスに言った。

何か悔しい気もするが、この場から一先ず逃げたいし、KHJなんかと揉めるのは専らまじご免だ。

長須も大橋も内心ムカついてるんだろが、グツと堪こえてるのだから。

長いものには巻かれろって良く言うが、今はそれが得策だ。

ここは一先ずKHJから逃れる為に、オレも自分を偽いつわって……。

……と、その時！

「自分で言えタコオ」

KHJの一人が目を見開いて言った。

……瞬間！

「だあーギヤラ、クオイツらにはウォルエが世話になってっからって言ってんギヤロギヤーっ！」

KHJのボスが怒鳴る。

目を見開いてた男は、目をつむってしかめた表情をした。

「オラテメエーら行くぞ！ もう用事は済んだ！ 車を出せ！！」

KHJのボスの一声で、ベントツに全員乗り込んだ。

去り際……。

「長須君、さっきの事、ちゃんとオレからギャラクシーには伝えるよ。長須君とここにも、大橋君とここにも、もちろん宮君のここにも迷惑掛けないよう、ギャラクシーにはオレからキツク言っとくよ。・・・フフツ、じゃっ、そ〜いう事で・・・。」

ヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォ

ヴォヴォ~~~~ン

黒のベントツと白のベントツが、大迫力のエンジン音を鳴り響かせながら走り去った。

・・・い、いきなり・・・、あ、嵐が去った。

へナへナとその場に腰を下すオツキー。

オレも同時にその場に尻をつき、タバコに火を着けた。

色々あり過ぎて、疲れた。

大橋と長須も、その場に座り込む。

・・・と、その時、どこからともなくバイクや車が駐車場にやってきた。

一難去つて、また一難?!

「またかよ・・・」

「良く見てみるジオン、仲間だ」

仲間? あゝ、ミケコたちだ。

アイツら、すっかりオツキーの中では仲間らしい。

ま、ユイがミケコのバイクに乗ってる時点でそんなモンか。

「大丈夫だった?」

バイクから降りたユイがこっちに向かって歩いてきた。

「何だよ、陰から見てたのか? だったら助けに来いよな」

「来れるワケないじゃない!」

何だよ、やっぱり陰から覗いてたのかよ。

港の駐車場に集まったバイクや車は、長須やミケコの手下たちを含め、かつて武蔵に殴り込みに来た野牛のヤツらや吉岡のヤンキーたちだった。

そいつらとこうして肩を並べて同じ場所に集うなど、数ヶ月前には想像もつかない光景だ。

KHJのボスが、長須や大橋にお世話になってると言って一目置いていた。

それが何なのかまでは分からないが、KHJ側も、長須や大橋と揉めるのは、色々な面で得策ではないと判断したのだろう。

ボス以外のヤツらは感情で今までの関係を壊そうとしたが、あのボスは冷静に身を引いて、長須たちとの関係を保った。

よほどの理由があるのかもしれない。

前回の大会時もそうだが、今回のチケットが武蔵の1年ばかりに回った理由が今になって分かる。

ばら撒いた、つまり、チケットを売ったのは、主に柴だったからだ。

確かに前回、長山たちにチケットが回っても、他の2年や3年のヤンキーたちにチケットが回らないのはオカシイと思った。

それが柴経由だったとしたら、やはり納得がいく事実だ。

では、なぜ柴がチケットを売っていたか？

柴はギャラクシーの一員なので、チケットが手に入る。

じゃあなぜギャラクシーがチケットを売ってるのか。

それは、大会自体をKHJが統括しているからに他ならない。

忘れてならないのは、KHJのボスは元、ギャラクシーの初代総長・
。。。

要するに柴は、KHJのボスの命令でチケットを売っていた事になる。

それとは別に、大橋や長須は独自のルートでチケットを捌さばいている。

つまり、KHJの命令ではなく、友好関係を保つ為の義理。

長須ら野牛、そして、大橋ら吉岡は、このままKHJとの関係を保ち、ギャラクシーには手を出さず静観する意向でほぼまとまった。

オレたちもそれには異論はない。

・・・が、それは個人的に考えた場合だ。

宮さんの事を思うと、そのまま領けうけないのが本音だ。

ただ、色々ひっくるめて、今はまだ答えは出せない。

このまま引き下がれないとも思うし、このまま引き下がった方が、こっちとしても得策だとも思うし、今はまだ答えは出ない。

宮さんの今後の動向も含め、今はまだ、オレも静観するしかない。

ユイとオツキーも、とりあえず宮さんの回復を待つてから、今後の対策を練るべきだと判断した。

ただオレたちは、ギャラクシー、タカノブや柴に対して一歩も引くつもりはない。

向こうが牙をむくようなら、こっちも黙っちゃいない・・・。

「じゃ〜な、ユイ。またな」

「ウン。じゃ〜ね」

ミケコとユイがガツチリ握手。

信じられねえ〜コンビの誕生だ。

長須、大橋らとも別れ、オレたちも野牛港を後にした。

「オレさっきさ、野牛のヤツらとタメ口きいたぞ。なあ、オレたちってさ、凄くね？」

帰りのタクシーの中、オッキーが興奮しながら言った。

ギヤラクシーとの確執も生まれたが、オレたちには野牛、吉岡、そして宮さんがついている。

新時代がどうとか、いくらアイツらがほざこうが、オレらの目が黒い内はアイツらの思い通りにはさせないぜ！！

第252話 殴られもせずに一人前になったヤツがどこにいるものか

翌日、腹痛という理由で学校を休んだが、本音は現実逃避。

ぶつちやけ誰にも会いたくない。

不甲斐ない姿を佐倉にも見せたくないし、ユイやオツキーにも見せたくない。

一番のネツクは、タカノブや柴に会いたくないって事だ。

会った瞬間、オレはどんな行動に出るか自分でも予測出来ない。

今は面も見たくないってのが正直な所だが、実際ヤツらを目の前にしたら、はたしてそんな柔やわな事を言っつてられるかどうか。

タカノブの面を見て、あの悔しさが再燃されないだろうか？

柴の面を見た時、激いきしく憤おりを感じないだろうか？

その日はそんな事を考え巡めぐらせながら、ほとんどベッドの中で過すごした。

次の日、学校に着くなり思わぬ事態に見舞われた。

運悪く、正門付近でタカノブたちに出くわしたのだ。

柴が漕ぐ自転車の荷台に跨またがったタカノブと、その隣で立ち漕ぎする貴船きぶね。

そんな3人がオレを追い抜いていった。

今この世で一番会いたくないヤツらトップ3に遭遇しただけあつて、鼓動の早さも血の気が引く早さも通常の3倍だ。

駐輪場に自転車を置いた貴船が、オレを発見してすぐ声を出した。

「タカちゃん、ジオンちゃんがいるよい」

タカノブは自転車から降りると、オレから目を逸らさずに、貴船に「いいから行くぞ」的な素振りを見せた。

その間タカノブの目は、鷹の目のような鋭い目つきで、瞬きもせずオレを睨んでいた。

「タカちゃんも柴ちゃんもアイツに手えく出せないんだっちゃ？ だつたらボクちゃんが頼んでやるピョン」

貴船がオレを指差した。

はあ？ タカノブも柴もオレに手を出せないって？

それは、KHJのボスの命令で、ギャラクシーとしても今は迂闊うかつに動けないって事だろう。

一昨日KHJのボスは、『長須君とここにも、大橋君とここにも、もちろん宮君のここにも迷惑掛けないよう、ギャラクシーにはオレからキツく言っとくよ』と言ってたから、すでにタカノブと柴はボスから指示を受けてるんだろうな。

タカノブも柴も、そういう理由でオレに手が出せないんだったら、貴船が変わりに頼んでやるって？ 誰に頼むんだよ？ アア？！

尚もタカノブは、貴船に「いいからさっさと行くぞ」的な素振りを見せた。

すでに柴は校舎に向かって歩いてる。

「ジオンちゃん知ってるよね？ ボクちん怒ると怖いこと……。あんまりボクちん怒らせないでね？」

まるで子供を叱るような口調で貴船が言った。

はあ？ 貴船が怒ると怖いって？ 知らねえよ、そんな事！！

「オレはオメエを怒らせた覚えはねえよ」

むしろオメエ〜らがオレを怒らせてんじやねえ〜かよ！

タカノブにしろ、ふざけた試合しやがって！ 何企んでやがる・・・！！

「えええ〜〜？ そんな口いきちやっていいのお〜〜？ じゃ〜さあ〜、ボクちゃんがど〜して怒ってるのか最後に教えてやるよ。あのねえ〜、ボクちゃんはねえ〜・・・」

貴船独特の、ゆったりと、いつもの人をおちよくった口調から・・・。

「友達イジメられんのが大っ嫌いなんだよ！！」

急にドスのきいた声で迫り、不意にオレの襟首えりくびを掴む貴船。

フン、とうとう本性を現したな、貴船。

当の昔に、オレはテメエ〜とやる覚悟は出来てんだよ、タコが！

バスッ

容赦なく貴船の顔面にチョーパンを見舞ってやった。

尻餅をついた貴船は、鼻を押さえながら驚くように目を見開いた。

「ち、血……？ や、やりやがったな……？ お、お、親にも殴られた事ないのに……」

貴船は鼻からドクドクと血を流している。

はあ？ 親にも殴られた事ないだと？ ホラ吹くにも限度あるぞ？ どの世界にその年で、親にも殴られた事ねえ〜ヤロオ〜がいるんだよ？！

……ま、仮にいたとしよう。

過保護に育つたり、環境的に殴られなかったヤツがいてもいいよ、別に。

でもさ、オレらのいた石田中ってさ、ヤンキーの巣窟そくくつみてえ〜なトコだったし、それにオマエ石田のトップだったじゃん。

物理的にムリっしょ？ せめて1発くらいあるっしょ？ パンチ避けて通るの、うちの中学じゃ、物理的にムリっしょ……？！

「く、くちおしや……。こ。の。う。ら。み……。は。ら。さ。で。お。く。べ。き。か……」

鼻を両手で押さえ、手を血だらけにした貴船が嘆なげいた。

え？ 笑う所？ まるで小学低学年の捨てゼリフじゃねえ〜か？

オレは夢でも見てんのか？ それとも、オレはコイツを買い被りかぶしてきたのだろうか？！

いや、これは畏わなで、コイツはオレを精神的に狂わそうとしているのかもしれない・・・？

そんなオレと貴船のひともんちやく一悶着を黙って見つめてたタカノブだったが、途中からいつの間にもやら姿を消した。

「・・・たく、どいつもこいつもよお~~~~っ!!」

地面に唾を吐き、ポケットに手を入れたオレは、尻餅をついたままの貴船を威嚇しながらその場を後にした。

オレが去ったと同時に女子生徒たちに介抱され、貴船は保健室に向かった。

その女子たちは、貴船と同じ1組の女子と思われ、どうやら近くで様子を見ていたようだ。

朝からムカつく・・・。

第253話 傷害

オツキーによると、昨日は竜崎や宮さんだけじゃなく、柴やタカノブも休みだったようで、校内でもまだ特に変わった様子はないという。

つまり、あの大会後、オレもタカノブも初登校だったワケだ。

ただ、今朝の貴船の『タカちゃんも柴ちゃんもアイツに手えく出せないんだっちゃ？』という言葉からも読み取れる通り、KHJのボスからの命令で、ギャラクシーはまだ迂闊うっかつに動けないと見た。

こっちとしても、とりあえず宮さんが戻ってくるまで迂闊には動けない。

さてさて、どうしたものか……。

昼休み、悪夢は突然訪れた。

副担任の代田しろたが教室に来るなりとんでもない事をぬかす。

リックイーが校長室で待ってるから今すぐ来いと言っつのだ。

「ジオン、まさか……」

オツキーが固唾かたずを呑んだ。

「ジオン……」

ユイも言葉を失っている。

「ジオン君……」

佐倉も心配そうにオレを見る。

何だっつてんだ、ちきしょく。

タカノブ戦や今朝の貴船との出来事も頭の中で整理できてねえっつづのに、また何かあるっつてのか？

これが天が下したオレへの試練だとしたら、ふざけんなって言いにくい。

試練連発し過ぎだろ?! いい加減にしろっつて!!

「大丈夫だ。どくせ宮さんがどくとか、野牛とどくだとか、何かちよつと耳にして、校長辺りが気になったんでオレに事情徴収でもするんだろ? オレの話術とこの頭脳で、巧みにかわしてくっから心配すんなって」

……と、強がってみたが、内心心臓バクバクだったりする。

代田に連れられ、校長室にやってきた。

・・・そこには、オレの想像を絶する光景があった。

貴船がいる！

しかも、両親らしき人物と一緒にだ。

「コイツが亀鶴詩音です」

リックイーが校長に耳打ちした。

「あゝ、あゝ、シオン君、そこに座りなされ」

ジジイ、もとい、校長がオレにソファへ座れと指示を出す。

向かい合ってテーブルの向こうに、貴船が両親に挟まれて座っている。

鼻の付け根部分に絆創膏ばんそうこうが貼られ、手当ての跡が見える。

貴船は下を向いていて、表情は分からない。

「君が、本校の不良であることは私も存じております。確か君は、こちらの理事長の息子さんであられる将隆君まさたかと同じ中学校出身

でしたね？ 君が中学時代イジメっ子だったと、以前私は誰かから耳にした事があります。ま、昔の事を兼ね合いに出すつもりはないですけどね」

はあ？ オレが中学時代イジメっ子だったと？

オレはイジメられっ子だぞ！

・・・つつくか、周りにはそう悟られないようにしてたから、オレがイジメっ子だったと思つてたヤツらがいてもおかしくはねえ〜けど。

それより、貴船が理事長の息子？ 理事長つて、武蔵の理事長つてこと？ 校長より偉いの？ 貴船の親が・・・？！

何だそりゃ・・・。

「本来なら〜、え〜、今回の不祥事ふしうじは、本校としても即退学処分としたい所ではありますが、こちらの理事長ご夫妻も含め、将隆君の温情で、今回は1週間の停学処分という事で・・・」

「はあ？ て、停学？！」

思わず声が出た。

停学つて何？ 停学つて??

「黙れ亀鶴！ キサマ、自分の立場が分かってないのか?! 本来

なら傷害事件は即、警察だぞ！ それを、たった1週間の停学にしてやるって言ってんだ！ 頭くらい下げた礼を言え！！ これだから、コイツら不良は……」

リックキーが怒鳴り散らす。

……と、その時！

ボタン

凄いい勢いで校長室のドアが開いた。

……お、オヤジ?! 親父がなぜ、ここに?!?!!

「ジオン、このヤロオーっ!!」

バキッ

突然、目の前が真っ暗になり、幾つもの星が飛び散る。

はて? ここはどこ? 私は誰?

「てめえは親のみならず、人様にまで迷惑ひんま掛けるようになったのか?!」

はれ? オレ、親父に殴られたのか……?

痛ててて……、何だつてんだ、いきなり……。

「コイツにはオレから十分言い聞かしますから、勘弁してやっても
らえますか？」

親父が貴船一家と校長たちに頭を下げている。

な、何だつてんだ……、いきなり……。

「まゝ、まゝ、そう興奮なさらずに。シオン君もさぞ反省してる事
でしょうし……。」

校長が言った。

「お父さん、所詮子供同士の喧嘩です。私も、息子が高校生になつ
てまで親が出てくるのはどうかと思っただんですが、岡村先生が警察
に通報するとおっしゃるので、それだけは……と思い、こうして
学校に出向いたワケなんです」

理事長こと、貴船の父親が言った。

「そ、そうですか。ホントに、何てお礼を言ったらいいか。オイ、
ジオン、てめえもオラ、頭下げろ！！」

親父に無理矢理頭を押さえられ、オレは貴船に頭を垂れた。

「オイ亀鶴！　今回は停学で済んだが、今度喧嘩したり騒ぎを起したら、今度こそ即退学だからな！！」

リックキーがオレに、今度問題を起こしたら即退学宣告をした。

何それ？　・・・即退学って何？　宮さんじゃねえくんだから・・・。

「ホント、申し訳ありませんでした・・・」

何度も頭を下げる親父。

「それではシオン君、停学明けからは、将隆君と仲良くして下さいね」

校長がぬかした。

小学生への御託宣ごたくせん？　バカにすんじゃねえよ！！

席を立つ瞬間、チラリとこちらを見た貴船と目が合った。

・・・貴船の薄ら笑いが目に焼きつく。

・・・あ、あのヤロオ~~~~！

第254話 ライオンハート

代田にカバンなどの手荷物を渡され、オレは教室に戻れないまま学校を追い出された。

いきなり、ユイやオツキーに会えず仕舞い。

・・・マジ、ワケ分からん。

貴船に襟首を掴まれ、頭にきて頭突きを鼻っ柱に叩き込んだら1週間の停学と来たもんだ。

本人曰く、親にも殴られた事がないらしいが、理事長の両親を呼んでまでオレを停学にさせたのは、自分が攻撃されたことへの報復だろうか？ それとも、友達がイジメられた事への復讐リベンジだろうか？

・・・どっちでもええわ。

帰り道、親父はしょぼくれたラーメン屋に立ち寄った。

勝手に人の分まで注文し、さらにはビールまで注文。

「オラ、飲め」

瓶ビールを傾け、親父はオレのコップにビールを注いだ。

「お母さんには内緒な・・・」

「あ・・・、う、うん」

やがて、脂ギツシユなラーメンの他に、ギョーザや野菜炒めなどが、油ギトギトなテーブルに並んだ。

「オレも昔はやんちゃしたよ。オレは高2で学校を辞めた。オマエと同じ理由だ。傷害やっちまって、退学だ・・・」

焦げたギョーザをしかめ面で頬張りながら、親父が語る。

親父が高2で学校を辞めたって話は、母親の昔話で聞いてたけど、傷害が原因ってのは初耳だ。

「理由がどうあれ、男にはやらなきゃならない時がある」

「・・・」

「・・・怒らねえのか？ 親父、もう、オレの事怒らねえのか？

理由、聞かねえのかよ、理由。

「ライオンは、腹が減った時や家族にメシ食わす時だけしか獲物を狩らない。あとはどんなに自分より弱い動物が近くにこようと、

絶対に手は出さない。上手く言えねえけど、男って、そんなモンなんじゃねえのかなんて、オレは思う。ジオンも、それなりの理由があったんだろうから、オレもとやかく言うつもりはない。1週間、家から出れないのは辛いだろうが、オマケの夏休みだと思ってのんびり休んでれ」

・・・オレを、信じるってか？

理由も聞かず、信じるってか？

・・・まったく、不味いラーメン食わすんじゃねえよ！ あまりの不味さに額から汗が流れて、そいつが目に入るんだよ！ 今、目を擦こすったら、まるで泣いてるみてえに見えるじゃねえよかよバカヤ口オく！！

その後、オレたちは一言も喋らず家路についた。

母親と詩乃舞はオレの停学の話聞いて笑った。

・・・何て家族だ。

停学の辛い所は、ペナルティーとしてケータイを学校に1週間預けなければならぬ事だ。

これではオツキーとも連絡取れないし、全く学校や宮さんたちの情

報が入らない。

こんな大変な時期に、一体オレは何をやってるんだ………

結局、無気力のまま、ムダに1週間が過ぎ去った。

『1週間家から出れないのは辛いだろが、オマケの夏休みだと思つてのんびり』……って何度も思つたさ。

でも、思っただけじゃダメみたいだ。

行動が伴ともなわないと。

どうやらオレには『のんびり』っていう部分の行動が欠けてたのかもしれない。

忙しく考えを駆け巡らせてたもんな……、頭の中だけ。

俗に『休むなら、心も体も』って言うけれど、頭の中が乱れてると、心も体も休まらないみたいだ。

結局グダグダと1週間が経ち、晴れて停学明けの登校日。

いつもの登校時間、いつもの登校ルートなのだが、何か変だ。

やけにオレの周りに人がいない。

学校も近いし、いつもだったらもっと賑やかなはずなのに、まるでオレを避けるかのように、武蔵の生徒たちがオレからやけに離れて歩いている。

その異変に本格的に気付いたのが、校門を通り過ぎた頃だった。

校舎前で、1年の女子のうち一人が、オレを見るなり小さな悲鳴をあげたのだ。

その女子は、そのまま振り返らず校舎の中へ走り去ってしまった。

さらに下駄箱周辺でも、男子女子問わず、オレを見て距離を置いた。廊下を歩くと、廊下の窓際にいた生徒は教室に逃げ去り、前から歩いてきた生徒はオレの顔を見るなり方向転換する始末。

・・・ふざけんな!!

教室に入ると、ザワついていた室内は一気に静寂に包まれた。

どいつもこいつも、何だっつてんだ、ちきしょ〜!!

・・・と、キレかかった時、オレを見つけたオツキーが駆け寄ってきた。

「ジオンジオン、お帰りジオン！！ 大変だったな、1週間の停学」

「お、元気だったか、オツキー」

「大変だったぞ、色々ある！ 何から話せばいい？」

オツキーが興奮を抑えられずにいる。

ふと教室を見渡すと、いつの間にかいつもの騒がしいクラスに戻っていた。

何だよ、みんなに避けられてる気がしたが、単なるオレの気のせい
か……？

席に着き、窓から3年の校舎を眺めながら、オツキーの話を聞いた。

「宮さんなんだが……」

ほう、いきなりきたか。

で、宮さんがどうしたって……？

「あれからずっと休んでる」

「休んでる？」

「別にジオンみたいに停学になったとかじゃないんだ」

「じゃあやつぱり相当重症なのか？ 入院とか・・・？」

「いや、竜崎の話によると、1日だけ仲村の知り合いの病院に入院して、その後は自宅静養に入ったらしい。鼻骨骨折もそうだけど、歯は3本くらいやられたらしいんだ。でも、本人は元気だったさ」

「そうか、大事に至らなかったんであれば幸いだな」

あれだけやられて入院1日だけって、凄いな。

歯が3本って・・・、フツ、それだけで重症だけどな。

結局宮さんは、あれから学校には1度も顔を出さず、竜崎も宮さんの意図してる所は分からないそうだ。

おそらく宮さん自身も、まだ心と体の傷を回復させるのに精一杯で、今後の事まで頭が回らないのだろう。

できれば、そのままジツとしてもらいたいもんだ。

今宮さんに暴れられたら、ホント收拾がつかなくなるからな。

第255話 飛び交う諸説

「アンタの停学明けって今日だったの？　へへ、生きてたんだ」
ユイが席に着いた。

「おはようジオン君、大変だったね」

佐倉が笑顔で迎えてくれた。

「ジオン君、1組の貴船って人と揉めたんでしょ？　その後、大丈夫？！」

佐倉がいきなり貴船との事を聞いてきた。

「まあ、どおって事ねえよ・・・」

高2にもなつて親出してくるようなシャバ憎を相手にしてるほど、オレも暇じゃねえし。

「ジオン君、今度誰かと喧嘩しちゃったら、即退学なんですよ？　タバコとか見付つてもダメかもしれないよ。気を付けないと・・・」

佐倉がもの思わしげな様子でオレを見た。

「学校とかで、何か変わった様子あったか？」

オレは、一番気になってた事を、オツキー、ユイ、佐倉の3人に聞いた。

「宮さんもジョンもいなかった1週間だったけど、特に大きな問題はなかった。タカノブも柴も大人しくしてるよ。ただ・・・」

オツキーが口を閉ざした。

「ただ、何だよ」

「風評っていうの？ ハツキリ言って、酷いわ。ウチのクラスは丸ごと嫌われてるカンジ？ ただ、みんなもアタシとアンタが元凶だって最近気付いてきたみたいだから、アタシたちが爪弾きにされるのも時間の問題かもね・・・」

ユイが呆れ顔で溜息をついた。

「そういうワケだ。オレら、この学校で居場所ねえぞ。宮さんがいなくなっただけから、まるで気が抜けたみたいにみんな羽広げて、水を得た魚みたいに生き活きしてるよ。今までみんな、宮さんを武蔵を守る英雄みたいに支持してたくせに、いざ宮さんがいなくなったら今まで君臨してた支配者がいなくなっただけで口を揃えて言いやがる。それもこれも、ギャラクシーの虚偽宣伝だ。みんなデマに惑わされてんだ。オレらがいくら弁解しても、みんな聞いちゃくれねえよ」

オツキーが悔しそうに語った。

「でも、人の噂も75日って言うじゃない。そのうちほとぼり冷めるわよ。それに、ユイも沖田君も被害妄想だよ。総番長を倒したのはギヤラクシーって噂もあるじゃない。みんな怖がってるのよ、本当は。宮さんがいなくなつて、不安になつてるだけよ」

佐倉が気遣う。

佐倉はあの大会自体知らねえもんな。

でも、そんな佐倉が言ってる事は、まさに至言しげんだと思っけど……。

「噂って、どんな噂が流れてんだよ……?」

「結局、今まで支配者だった宮さんの、一番の側近だったジオンが、次の番長候補だつていう噂だよ。オレらは悪の限りを尽くす番長一味ってワケだ」

そう言つてオツキーは、ユイと佐倉の顔を見た。

「アタシはいいけど、佐倉は関係ないんだから、アタシたちに今は近づかない方がいいって言ってるんだけどね」。佐倉がさあ……。

「だって、私はユイも沖田君もジオン君も宮さんも、みんな被害者だつて知ってるモン。知つて皆に合わせて避けるのって、悪に加勢するって事じゃない? そんなの私には出来ないよ。クラスの中

に一人だけイジメられてるコがいて、そのコがクラス中から避けられてるとしても、私はきつとそのコに積極的に話しかけると思う。みんなに嫌われようが、そのコがどうしてイジメられているのか知りたいし、助けたいって思うから……」

佐倉があどけない笑顔を見せる。

何て愛おしいだろうか。

その言葉、その姿勢、その心……、何て美しいのだろうか。

オレは、佐倉が好きな自分を誇りに思う。

マジで……、いや、マジで。

「ジオンがタカノブに喧嘩で勝ったって話は、もうほとんどのヤツが知ってるよ。ただ、あの大会で勝負したってのは皆知らないけどな」

オッキーがオレの耳元で囁いた。

「正義の味方タカノブが、悪の番長亀鶴ジオンに挑んだが無残にも破れ、その悪の番長は正義の味方の仲間である、理事長の息子、貴船将隆に被害をもたらし大暴れ……ってワケか？」

「その通りだよ、ジオン。そんでみんなは、ジオンを排除したがってるよ。もちろん先公共も。だから、これからは細心の注意を払わねえと、また誰かに陥れられかねないだろ？ そしたらホントに

退学になっちまうよ」

オッキーは、学園祭での事件を想起していると思われる。

フン、退学か……。

やってみろってんだ、クソが……。

新時代だか何だか分かんねえ〜が、真正面から来ねえ〜で側面とか背後とか陰からコソコソと来やがって……。

今に見てろよ!!」

「ところで、竜崎はどんな風に動いてるんだ？」

「竜崎か……。実は、オレが聞いても何も答えてくれないんだ」

「はあ？ どうして」

「分からない。ただ、今は言えないっス……。の一点張り。オレも、あんまり深く聞くのはどうかと思ったから、それ以上追求しなかったけど……。」

A型はこれだ。

自分が根掘り葉掘り聞かれるの嫌いだから、人にも気を遣って深く聞かない。

だから肝心な事を見逃すんだ。

「いいよ、後でオレが聞く」

・・・とは言ったものの、竜崎と顔を合わせづらいな。

そんな事言ってる状況じゃないんだが・・・。

「実は、その竜崎なんだが・・・」

佐倉とユイが別の話で盛り上がり出した頃、オツキーが小声で語り出した。

オレは、オツキーの口から信じられない怪情報を耳にする。

話を整理するところだ。

大会後、オレが停学になった後の空白の1週間、総番長不在の校内を仕切った者はなく、代わりに次期番長候補がオレだっていうデマだけが流れた。

おそらく、オレを上げられるだけ高く担ぎ上げ、脂がのった所で一気にオレを叩き落す腹積もりだろう・・・。

ま、そんな事はど〜でもい〜が、噂を気にしなければそれなりに平和な1週間だったという。

・・・ただ、それも昨日までの事だった。

実は陰で、ある人物が学校を仕切っているという噂を、オツキーが耳にしたからだ。

その人物というのが、竜崎なのである。

織川を宮さんと戦わせるよう仕向けた張本人で、宮さんを陰で操作してるといふのだ。

いわば竜崎は裏番長？

さらに、竜崎がカンパの件に携わっていたと言つのだ。

火のない所に煙は立たないとはよく言うが、根も葉もない噂、デマに流されてはいけない。

仮に噂を信じると、『オレにとってのラスボスが、実はこんなにそばにいたなんて・・・』とか、『竜崎・・・、アイツが絡んでたとは・・・、御見逸れした』とか、『このオレを出し抜くとは、大したモンだ』と、言わずにはいられない。

『今後は、これで心置きなく竜崎を敵として見れる』、『ただ、今も尚、宮さんとオレとの間にいる以上、そして、タカノブラとオレらとの間にいる以上、色んな意味で難しい敵でもある』、『とにかく、アイツは要注意だ』つてのが、その噂を信じた時のオレの心情だろうか・・・。

ただ、その噂の出所が分からないって所が引つ掛かる。

オレの予想では、99パーセント柴では、ある。

とにかく信用できないのは柴、タカノブ、ギャラクシーだ。

・・・でも、そんなギャラクシーと竜崎が、陰で繋がってるとしたら？

・・・くそ〜、振り出しに戻る。

どう考えても、結局は竜崎は要注意人物だ・・・、としか言えない。

それらを踏まえて、今後の対策を練る必要がある。

一体オレたちは、これからどうすればいいのか・・・。

要注意人物は学内に3人。

タカノブ、柴、そして竜崎。

オレが最初にやらなければならない事は、一体何なのか・・・。

停学中もさんざん悩んだ。

色々考えた。

だが、答えは出なかった。

でも、今なら少しは分かる。

オレの、このモヤモヤの原因が。

時折フラッシュバックする、『竜崎！ オレもおめえを信じねえ
~~~~！』という、オレの言葉。

・・・そう、悩みの原因、オレの悩みの根源は、竜崎。

アイツとの関係を、ハッキリさせなきゃならない。

アイツは敵なのか味方なのか、ハッキリさせてから、そっから始まりだ・・・。

オレは、逃げも隠れもしない。

男として、やらなきゃならない時がある。

時は来た！！

昼休みを告げるチャイムが鳴る中、オレは迷わず竜崎の下へ向かっていた。

## 第256話 引いてるO型相手にキレたら負け

1年の生徒を捕まえ、竜崎への言伝ことづてを依頼し、写真部の部室で竜崎を待った。

・・・遅い。

結局来ないつもりか？ 逃げるのか、竜崎・・・。

昼休みの休憩終了5分前、部室の扉が開いた。

「遅くなったっす。ゴメンナサイ・・・」

竜崎が現れた。

「来ないのかと思ったぜ」

皮肉っぽく言ってやった。

でも、5分もねえぞ？ 作戦か？ オレとは長い時間、話なんかしたくねえっつてか？！

「追試やって遅くなったっす。続きは放課後っすわ・・・」

追試？　そこは疑っても仕方ねえか……。

「そうか。じゃ、手短に……」

「ジオンさんが良ければ、次の時間フケてもいいっすよ？」

授業をフケるなんて、竜崎にしては珍しいな。

「分かった。じゃ、オレもフケるわ」

オレはタバコに火をつけた。

「ジオンさん、1週間大変でしたね。こっちもあれから色々あったっすわ」

竜崎もタバコに火をつけた。

「オツキーからだいたい聞いたよ」

「そうっすか……」

竜崎もオレと同じO型。

O型とO型はタッグを組めば最強だが、ライバル関係だったり関係がこじれたりすると最悪になる。

お互いに自己主張が強く、決して相手に媚<sub>こ</sub>びない為、どっちかが呆れて身を引くパターンが多い。

オレがガチンコ勝負を挑んでも、竜崎が引いたら終わりだ。

ここは、冷静に挑む必要がある。

「なあ、竜崎……」

「ハイ？ 何スか?!」

「カンパの事なんだが……」

一種の鎌かけだ。

仲村たちと、どんな風に動いてる？ タカノブとの関係は？ 柴との関係は？ ギャラクシーとの関係は？ 織川との関係は？ 宮さんに織川を差し向けたのはオマエなのか？ 実は裏番長だったって本当なのか？

などなど、聞きたい事は山ほどあったのだが、オレはとっさにカンパの件について聞いていた。

ただ単にオレは竜崎の口から、『はあ？ 何スか、それ？』とか、『携たすわってないツス』って一言聞ければいいだけだ。

オレは自分の事を言うつもりはねえし。

「タカノブさんが集めてる金の事っスか？」



……し、知ってやがる！

頭のとっぺんから血の気が引いていくのを感じる。

口の中も乾き、軽く胃の痛みも感じた。

「そ、そうだ……」

「アレは誰にも迷惑掛けてないっスよ？ 不良だけが払わせられるんス。マジメなヤツはチクるんで、結局善にはカンパは回ってこないじゃないっスか。逆に不良、つまり、悪にだけカンパが回ってるんス。要するに、社会は上手く出来ていて、その部分に関して言えば、ある意味ギョラクシーは正義の味方なワケなんス。あと、ここだけの話っスけど、カンパで集めた金は、KHJが慈善事業の一環として寄付してるって話っス」

……ふざけるなっ！！

KHJのボスが、長須や大橋にお世話になつてると言つて一目置いてたり、野牛、吉岡、武蔵をはじめ、他の高校もみんなKHJに何らかの支援をしてるって前に聞いたが、全ての謎が今解けた。

繋がった！

今までの、オレが巻き込まれてきたカンパの謎が、点と点が繋がって、やっと線になった！！

キレイ言をぬかしているが、やってる事は悪でしかない。

ギヤラクシーがカンパの金を集めてたんだ。

KHJの為に!!

慈善事業？ 寄付？ 聞いて呆れるぜ。

・・・今に見てろ！ 全貌を暴いてやる!!  
ぜんぼう

そして、竜崎!!

オレはオマエを少しでも信じようと努力した。

ずっと、仲間だと思ってたし、親友だと思ってたから、どんなに疑っても、信じようと努力した。

でも、ダメなモンはダメだ!!

善にはカンパは回ってこないって？

悪にだけカンパが回ってくるって？

ギヤラクシーは正義の味方だと？

……ふざけるっ!!

「竜崎、宮さんのアパート、教えてくれ……」

「いっすよ。じゃ、紙に書きますね」

竜崎は、A4紙に、ボールペンで地図を書き始めた。

O型は、最初冷静で、ある一線を越えるとキレるのだが、怒りもM  
AXを越えると虚無的になるようだ。

これが俗に言う、喧嘩でO型に引かれると終わりってヤツか？

竜崎に引かれて逃げられないように怒りを堪えてたら、逆にオレが  
引いてしまったようだ。

「サンキュー、竜崎。……じゃな」

竜崎から宮さん家の地図をもらい受けるとすぐ、オレは部屋を後に  
した。

おそらく、今の『じゃな』は、最後の『じゃな』になるだろう。  
……。

オレが竜崎に話し掛ける事はもうないし、竜崎から話し掛けられても耳を傾ける事はない。

また一人、親友を失った……。

## 第257話 単騎は西で待て

竜崎と別れた後オレは、教室には戻らず、そのまま学校をフケた。

とある住宅地の路地の片隅にある、洒落たアパートの2階に宮さんは住んでいた。

とりあえずケータイに電話をしてみると、『お掛けになった電話は、現在使われていないか、電源が入っておりません』というアナウンス。

まただ・・・。

インターホンを2、3回押してみる。

留守かな？

・・・と、その時！

「誰だ！ 大地か?!」

ドカン

いきなり宮さんの部屋のドアが開いた。

「あ痛たた・・・」

ドアに頭をぶつけた。

「何だ、大地じゃないのか。その制服は、武蔵の生徒か？ 大地の知り合いかい?!」

少し身長が高めで、アゴヒゲが良く似合う、一見ヤクザ・・・・・・・・・・  
? いや、好青年? 顔立ちがいいが、格好や身かまこなましなど風貌ふうぼうはヤクザだ。

「あ、あの・・・・・・・・、み、宮・・・・・・・・、宮大地さんのお宅ですよ?」

「そうだよ。あつ、オレ? オレは大地のアニキだよ」

へ? ア、アニキ? 宮さんのアニキ?!

・・・・・・・・に、似てない。

「大地さんは・・・・・・・・?」

「さあ、どこ行つたんだか・・・・・・・・」

宮さんのアニキは首を傾げた。

そうか、アニキも知らないか・・・・・・・・。

しよ〜がない、帰るか・・・。

「・・・じゃ、失礼します」

「せっかくだから上がってけば？　すぐ戻るんじゃないかな？  
オレ明日仕事なの分かってっからそんなに長くは使ってねえ〜と思  
うけどな」

「使う？」

「あ〜、車な。前に事故られてっから多少不安はあるけどな、アイ  
ツなかなか器用だし、大丈夫だあ〜。はっはっはっは」

宮さんのアニキはそう言っただけで笑った。

「事故つてもしかして、左後部座席のドア・・・？」

「修理費に30万掛かんだよ。任意保険使っても良かったんだけど、  
等級3つも下がるっつ〜からそのまんま乗ってんだよね。まあ〜、  
オレとび鷹やっつ〜からさ、仕事は仲間が迎えに来てくれっ〜から別に  
いんだけど、休みは使うだろ？　女の子乗せる時さ、恥ずいよな」

「は、恥ずいですね。ははは」

「だろ？　・・・ったくあのヤロオ〜、早く免許取れっ〜な。はっ  
はっはっはっは」

何なんだこの人？ 高校生の弟に車貸してって言われたら、断らずに貸すか？ フツ。

一度ぶつけられてんのに……。

「じゃー、大地さんは、すぐ帰って来るワケですよね？」

「どうだろね？」

さっきはすぐ帰ってくるって言ったじゃん。

「一緒に暮らしてんですか？」

「まさか、オレは実家に住んでるよ」

「なぜここに？」

「たまたま近くに来たから寄ったんだよ。そしたらあのヤロォー、行き先も告げずに人の車奪いやがってよォー。困ったヤツだよね、はっはっはっは」

宮さんのアニキはそう言って大きく笑った。

はあ？ う、奪われた？？ 奪われたのに、平気なの？！

それに、むしろ楽しそうだ。



何て言うか、しょくがねえく弟だぜ的？ 肝きもが据すわってるっていうか、動じない性格っていうか……。

「血液型、Bですか？」

いきなり聞いてみた。

「え？ 血液型？ オレの？ 飲み屋の姉ちゃんみてえくな事聞くなよ。オレの血液型はガタガタだよ。はっはっはっは」

……B型、だな。

「じゃ、大地さん帰って来たら電話くれるように言っといて下さい。オレ、亀鶴ジオンって言います。ジオンで通じると思っんで。オレ、今までケータイ使えなかつたんで、多分出ないから心配してたと思っんですよ」

「かめつるじおん君ね。珍しい名前だね」

「良く言われます。……じゃ、そろそろ……」

「もし大地に会ったら言っついてよ。オレもそんなに暇じゃねえくっつて」

宮さんのアパートを後にした。

さてさて、どうしたもんかな。

こりゃ〜大変な事になってきたぞ。

宮さんが車を奪ってまで行きたかった所……………。

織川か？ それとも…………。

笹城はこっから遠いし、万が一宮さんがいなかったらリスクが大き過ぎる。

まずは吉岡の大橋か、野牛の長須に協力を要請すべきだよな？

駅が近いから、行くなら野牛が近いけど、どうする？ 野牛、一人じゃ恐いぞ。

…………って、情けない事言ってる場合じゃねえよな。

急がなきゃ…………！

駅に着くと、運良く電車が来る所だった。

急いで乗り込み、野牛駅を目指した。

野牛駅に辿り着くと、オレは野牛まで走った。

初めて見る野牛農業高等学校は、生徒の半数がヤンキーってだけあって、不気味で恐ろしく、第一印象は随分と荒れた高校ってカンジだ。

まさかオレの人生において、たった一人で他校に乗り込む事があるうとは……。

しかも、野牛！！

ハッキリ言って、ほぼ勢いだ。

宮さんを急いで探さなきゃっていう思いが強く、足が勝手に動いてるんだ。

……じゃなきゃ、来ない。

こんなトコ、来るはずない。

命を懸けてまで来るはずない。

もしかしたら、野牛のヤツらにフクロにされるかもしれない。

あるいは、野牛の先公に捕まって、即退学になるかもしれない。

なんたって、今日は停学明けの初日だから。

そんなリスクを無視してまでオレがここに来た理由は一つ。

宮さんを助ける為だ！！

今、宮さんは傷ついてる！ 心がぶっ壊れそうなはずだ！！

オレが助けなきゃ、今、助けなきゃ、あの人、ダメになっちまう・・・。

そんなオレの思いが、震える足に踏み出す力をくれた。

門を潜り、ついに敷居を跨またぐ。

野牛の生徒がオレの存在に気付くのは、ホント早かった。

「亀鶴ジオン？ 何しに来たの?!」

クルクルパーマのリーゼントの男が挑発気味に近づいてきた。

「一人？ 度胸あるなあ〜コイツ。たった一人でウチに乗り込んでくるなんて、前代未聞だぞ。多分、野牛始まって以来の出来事じゃねえ〜か？」

学ランのボタンを全開にした、スキンヘッドの男が言った。

丁度下校の時間だったらしく、あっという間に正門付近で野牛の生徒に囲まれた。

「長須に会いに来た。誰でもいい、長須を呼んで欲しいんだ」

「いいよ。じゃ〜呼んでくっから待ってるや」

オレの気持ちを通じたのか、野牛の生徒の一人がすぐに長須を呼びに行ってくれた。

ふと校舎を見ると、野牛の女子生徒が数人、3階の教室の窓からオレを見下して談笑している。

その中の一人が、オレに向かって小さく手を振った。

見覚えのある顔だ。

確か、ミケコの手下の一人だな……。

間もなく、さつき長須を呼びに行ってくれたヤツが帰って来た。

「長須は今日、休みだぞ〜」

何てこった……。

せっかくここまで来たのに。

・・・と、その時！

落胆する暇もなく、最近すっかり慣れてきた、修羅場ってヤツがまたしても到来。

沢山のヤンキーたちを後ろに従え、銜くわえタバコあの男がこっちに向かって歩いてきた。

芒すすきみちるだ。

第258話 略してK・H・J

最悪だ。

こんな時に、芒に会うとは……。

「よお〜亀鶴う〜、久しぶりだなあ〜」

確か、『武蔵VS野牛』の全面戦争の時以来だ。

「たった一人でウチに乗り込んで来たヤツがいるって聞いたから急いで来てみたら、何だよオメエ〜かよ。この間、タカノブとやり合っただって？」

観てねえ〜のかよ？

「……だったら何だって言うんだよ」

「超面白え〜喧嘩してたな、オマエら……」

何だよ観たのかよ？

「オマエが見た通りだよ」

「他のヤツらは騙せても、オレの目は欺けねえぞ、ヒヤハハハハ」  
随分と含みのある笑いだな、オイ。

「もう終わった事だ・・・」

「悔しくねえのかよ」

いつになく真顔になる芒。

「悔しいに決まってんだろ」

芒の問いに、本音で答えてやった。

・・・すると。

「だったらオレが仇を討ってやるつか？」

そう言っつて芒は視線で縛るようにジッとオレの目を見つめた。

仇だと？ ふざけやがって・・・。

寝言は寝てから言えってんだ！！



「うるせ〜、ふざけんな」

「長須に会いに来たんだってな？ 生憎あいにく長須は今日、休みだぞ」

「さっき聞いたよ」

「クツクツク、相変わらず面白え〜ヤロオ〜だな、オメエ〜は。．．  
．で、長須に何の用なんだ？」

「教えるワケねえ〜だろ！」

「何でもねえ〜よ」

「何でもねえ〜ワケねえ〜だろ?! だいたい想像はつくぜ。総番長に頼まれたんだろ? 野牛の番長と吉岡の番長連れて来いって! クツクツク．．．、倒しに行くのか? 織川だっけ? アイツつて、薬ヤクやってんだろ? 結局よオ〜、バックにやKHJがついてんだから、やるだけムダだつての。命が幾つあっても足りねっつの」

．．．織川が薬?

織川バックがKHJ?

．．．喋り過ぎたみてえ〜だな、芒。

お陰で何かを掴めた気がするぜ。

ど〜せ知らねえ〜だろ〜けど、聞くだけ聞いてみるか、KHJの事。

「芒、KHJの本部って、どこにあるんだ？」

「釜桐のニコニコだろ？」

釜桐町の、風俗店やホストクラブが建ち並ぶニコニコ通りの事か？

「そうそう、ニコニコだよな。どこだっけ、ニコニコの・・・」

・・・って鎌かけてみた。

「知らねえ〜よ。『J』って店探しゃ分かるだろ。釜桐ホストクラブ『J』・・・」

・・・まんまと引っ掛かった。

釜桐、ホストクラブ、『J』・・・、略してK・H・J・・・?!

「サンキュ〜!!」

マジ、有難い情報だぜ。

「オイ、亀！まさかテメエ〜、KHJ敵に回そうとしてるんじゃないねえ〜だろ〜な？」

「・・・んなワケねえ〜だろ〜!!」

「ヒヤハハハハ、そりゃそ〜だよな！ K H Jを敵に回すって事はオメエ〜、ヤクザを敵に回すって事だからな。オレのアニキですら K H Jには一目置いてるくらいだ。悪い事は言わねえ〜、K H Jにだけは関わるなよ」

タカノブと親交がある芒の口からそんなセリフが出るとは思わなかったぜ。

芒のアニキがナンボのモンかは知らねえ〜が、ハナからオレはK H Jを敵に回すつもりはねえ〜よ。

ただ、織川の後ろに見える影を、宮さんが追い掛けてる姿が思い浮かぶだけだ。

オレの予感が正しければ、宮さんは釜桐町にいる！！

オレは野牛町を後にし、迷わず釜桐町に向かった。

途中、電車の中で、オツキーから電話が来た。

『どこにいるんだよ、ジオン？ 心配したんだぞ！』

「宮さんが行方不明なんだよ。だいたい手掛かりは掴めてきてはいらぬ。確証はねえ〜けど」

『宮さんが行方不明？ マジでか？ オレも今から行く！ ど、ど

「ここに行けばいい?!」

「じゃ〜、釜桐駅で待ち合わせしよ〜ぜ」

「オツケ〜、釜桐駅だな。竜崎にも知らせた方がいいよな?」

「あつ、それは大丈夫だ」

「分かった、すぐ行くから!」

人探しするなら一人でも多い方がいいに決まってるが、竜崎に話すのは危険だ。

もしKHJに密告されたら、たまったモンじゃねえ〜。

釜桐駅に着いた頃には、すっかり街はオレンジ色に染まっていた。

すぐにオツキーと合流し、今までの成り行きを説明。

夕陽に照らされたビル群をかき分けるように、オレたちは宮さんを手分けして捜し始めた。

オツキーにはホストクラブ『J』を探すよう指示し、オレは宮さんのアニキの車を探した。

ホストクラブ『J』は、芒の情報がガセでない限り、発見は時間の問題だ。

だが、闇雲に店に入るのは危険極まりない。

それに店を探つて万が一気付かれた場合のリスクとして、オレとオツキーとを比較した場合、オツキーの顔の方が覚えられてる可能性が低いという事も念頭に置き、オツキーを『J』側にした次第だ。

そして、宮さんが本当にここにいるとは限らない。

宮さんがここにいるかもしれないというのは、単なるオレの憶測にすぎない。

なので、宮さん一人をここで闇雲に捜すのは、至難の業だし無謀でもある。

・・・が、オレには秘策がある！

この街で車を止めれる場所は限られる。

そう、有料駐車場だ。

そして、オレは宮さんのアニキの車を知っている！

宮さんのアニキの車と同じ車種は沢山あるだろうが、アレだけは他と異なるに違いない。

今でもハッキリ覚えてる。

そう、あのキズだ・・・！！

第259話 練習曲作品10第3番

あれは、宮さんと初めて会った日だった。

宮さんがアニキの車を無免許で走らせたが、車の左後部座席側のタイヤを側溝にハマてしまい、抜け出せなくなっていた。

それを助けるのにオレも一躍買ったのだが、その際宮さんは電柱に側面を擦らせ、車の左後部座席のドアをボロボロにしまったのだ。

さつき宮さんのアニキは車を修理していないと言っていた。

B型は、比較的車のキズにはこだわらないのが功を成したワケだ。

街灯がチラホラ点きはじめ、ネオンもつば競り合いを演じ始めた。

・・・と、その時！

左後部座席のドアがボロけてる、見覚えのある黒い車を発見。

・・・と、同時に、オツキーから電話がきた。

『あつ、ジオンか？ 見付けたぞ、釜桐ホストクラブ』だ！』

「こっちも見付けた。宮さんのアニキの車だ!！」

『分かった、そっち行く。どこら辺に行けば……って、オ……イ、ジオ……ン!』

目の前でオツキーが手を振っている。

「何だよ、お互いこんな近くにいたのか……ってオイ、オツキー! でっけえ〜声出すんじゃねえ〜よ。もしKHJに気付かれたらヤバイって!！」

「ゴメン、つい……」

「あっ、もしかして……」

「ど〜した、ジオン」

「こっちだ」

オレは走った。

後ろから着いてくるオツキー。

「ど〜したんだよ、ジオン」

「こっちだ!！」



「BAR・・・、カシオン？」

「そう、BARカシオンだ!!」

『BARカシオン』、エンゼルビルの2階にあるアメリカな空気が漂うナイスな店だ。

あのユイがバイトをしていた店でもあるが、竜崎のテーブル投げ事件や、『Do the by(ドウザバイ)』のヴォーカル『Ikar U』<sup>イカル</sup>なんてキーワードも、記憶に新しい。

宮さんがこの辺に車を停めて行くとしたら、『J』か『カシオン』、どっちかしかない。

まずは『カシオン』に行ってみて、いなかったら車に戻るまで張ってみるのが得策だろう。

ただ、万が一の事も考え、いつまでも張り込みは出来ない。

意を決して、『J』に乗り込むって選択を迫られる状況も十分ありうる・・・。

オレとオツキーは、カバンと制服を近くのコインロッカーにぶち込み、BARカシオンの扉を開けた。

ホールにはまだ客はいなかったが、カウンター席に一人、背中に哀

愁を漂わせる男が佇たたずんでいる。

……いたぞっ！

宮さん、いたっ！！

この広い地球で、行方不明になった宮さんを探索するなど容易ではないと思っていたが、まさかこんなに簡単に見付かるとは思わなかった。

さすがB型、行動がストレートで自然体！

「宮さあ~~~~ん！！」

「アレ？ 亀ちゃん、オツキー、どうしたの？」

カウンター席でマティーニを飲んだ宮さんは、ほろ酔い顔でニッコリ微笑んだ。

欠けた歯が痛々しくもあり、滑稽こっけいでもある。

店内には、ピアニストが奏でる『ショパン』の切ないメロディーが流れている。

オレたちは丸テーブルに席を移し、宮さんと向かい合った。

大会終了から空白の1週間、宮さんが何を思って、何をしてきたの

か、やっと全てを聞く事が出来た。

オレにだから全てを話せる、そう言って宮さんは、赤裸々な過去や現在の心境を語ってくれた。

中学時代、体育館で焚き火をしてPTA会長に放火魔扱いされた事や、全校生徒を校内から避難させるほど、教師たちと揉めた事、喧嘩でパトカーを5台も学校に來させた事や、かつてイジメられた子供だった事……。

そんな過去をひっくりくるめても、今の状況は宮さんにとって最強の修羅場だろう……。

それもそのはず、誰もが認める絶対王者が大勢の前で落ちるトコマで落ちたんだ。

織川にコテンパンに殴られ、十分傷ついた体。

そして……、心。

織川のバツクに潜む見えない敵への恨み、つらみ、復讐心、極度の虚しさからくる自殺願望、さらには悟りの境地を思わせるほどの虚無感、それら全てが宮さんを苦しめた。

オレ自身もタカノブとの戦いで、言葉にならないほどの無力感に苛さいなまれたが、オレがこうして平常心を保てるのは、ある意味宮さんがいたからだ。

自分の人生を人と比べること自体おこがましいのだが、オレは宮さんの境遇よりマシだと思つ事で、今の辛さから逃れられていた……。

時として人は、自分より辛く苦しい境遇の人を見て安堵する。

どうしてなのだろうか……？

今のオレにはまだ、難し過ぎて解けそうにない。

そんな宮さんは、笑顔でこう言った。

「今の心境？ 全然余裕だよ、こんなモン。あれより酷い仕打ち、いっぱいされてきたから……」

B型特有の強がりなのか、それとも本当にそうなのか分からない。

でも宮さんは、昔イジメられっ子だったって話だ。

オレと一緒に、人に言えない辛い経験を沢山してきたのだろう……。

でも、心が痛く苦しいのは過去じゃない……、今、現在だ。

それらもひっくるめて、オシなう宮さんの辛さが少しは分かる気がする。

## 第260話 宮さんの境地

仲村の知り合いの病院の先生は、1週間ほどの入院を勧めたそうだ。

しかし宮さんは、たった1日で病院を抜け出した。

結局その後、自宅で1週間寝込んだらしい。

だったら病院でメシ食ってれば良かったのになって思うのだが、自由を奪われたり、人に迷惑掛けるのが大嫌いなB型だけに、致し方ない気もする。

宮さんは1週間、天井を見つめながら考えに考え抜き、沈黙考ちんもくこうした結果、織川、アカギ、タカノブ、柴、野牛退学組ら、ギャラクシIの背後にKHJを見た。

だが、たった一人でKHJへ殴り込むのは、あまりに無謀過ぎる。

だからと言って、長須や大橋を巻き込みたくない。

自分のケツは、自分で拭きたい。

やはり、一人で行くべきだ。

でも、オレが死んだら今度はKHJに狙われるのは仲間たちだ。

残った亀ちゃんや竜ちゃん、他の皆に迷惑掛ける。

そう思うと、また振り出しに戻る。

宮さんの苦悩は続いた。

・・・そんな折、辿り着いた答えは、織川へのリベンジだった。

宮さんは、織川を倒す事が全ての解決の糸口になると判断し、KHJのアジトを探すべく案を模索中、偶然にもその道に詳しい自分の兄貴がアパートに訪れた。

案の定、宮さんのアニキはKHJの本部、釜桐ホストクラブ『J』を知っていた。

アジトを知った宮さんは、激しい憎悪の感情と嫌悪を伴った敵意に覆われ、自分の行動を制御できないままアニキのキーを奪い、車を走らせた。

『J』に辿り着いた宮さんは、襲い来る怒りを抑え、KHJのボスに織川戦を直訴。

宮さんの決意と覚悟を感受したKHJのボスは、その場で宮さんのリベンジマッチを受諾。

かくして、『11・11 宮大地VS織川宏次郎』の再戦が決定したのだった。

・・・あれから、たった1ヶ月。

しかも、その日は丁度、秋のライヴの日でもある。

「オレが出来るのは、それしかねえ〜って思ったんだ。KHJは、あまりにデカイ組織だ。ギャラクシーを傘下にしてるし、兵隊集める気になりゃ、いくらでも集まる。今のオレには残念ながら、KHJに対抗できる勢力がねえ〜。何より、オレ自身がそれを望んでねえ〜んだ。織川を送り込んだヤツが直接オレの前に現れてくれりゃ〜ラクなんだが、そいつが何だか分かんねえ〜。だったら、織川をぶっ潰しや〜、黒幕が姿を現すんじゃねえ〜かって、この足りねえ〜頭で考えたってワケよ。ゴメンな、語り過ぎた。ガツハツハツハ」

宮さんは、マティーニを豪快に飲み干し、またもやマティーニを注文した。

なぜにジンベース？ かつてのオレへの当て付けか？ ……なんちゃって。

「宮さんの頭は全然足りなくないですよ。むしろ賢い選択だと思います。何て言うか、素晴らしい!」

オレはそう言って拍手した。

「オレも同感です。宮さんの立場だったらって思うと、悔しくてやりきれなくて……。オレも毎日悔しくて泣いてました。それが、あれからたった1週間で織川へのリベンジってとこまで考えが辿り



着くなんて、ホント宮さんは凄い人だなあ〜って思います」

オツキーがメガネを外し、ハンカチで目元を拭いながら言った。

「いや〜、そう言ってもらえると嬉しいよ。さっ、遠慮せずにガンガン飲んで。亀ちゃんはまたビール？ オツキーは？」

宮さんがオレたちの分をさらに注文しようとしている。

「いや、ここ高いし、オレらそろそろ帰るんで。それから宮さんのアニキ、心配して待ってますよ。早く帰らなきゃ！」

マジでアニキかわいそうでしょうよ。

「ゴメンよ。そうだね、アニキ待ってるもんね。ルーレットピザ食いたかったけど、そろそろ帰るか・・・」

食わんでい〜！！

「宮さん、明日から学校来るんですか？」

ムリには言わないが、単位とかもあるだろうし。

「ゴメンよ。織川戦に向けて特訓したいから、しばらく休むわ・・・」

テーブルに届きたてのマティーニを一気に飲み干す宮さん。

マティーニ 〃 ジンベースのカクテル。

分かった、それって竜崎への当て付けだ!? . . . なんちゃって。

「大橋さんと長須さんも、KHJのボスと直接話しつけましたし、現にあれから1週間、武蔵は平和でしたし、多分これからも大丈夫だと思います。ジオンや竜崎もいるし . . . 」

オツキーが笑みを溢す。

オレや、竜崎がいるから大丈夫 . . . か。

あの大会の時のタカノブとの一戦や、次の日の校長室での出来事、傷害による1週間の停学、竜崎との喧嘩別れ . . . 、宮さんに話したいが、とてもムリだ。

今は自分の事だけに専念してもらいたい。

余計な心配はさせたくない。

「宮さん、11月11日の大会当日なんですけど . . . 」

オツキーがバツが悪そうに宮さんに尋ねる。

「秋のライブか . . . 。残念だが、今は織川戦のことしか考えられない . . . 」

目を細めた宮さんが、遠くを見つめながら言った。

「そ、そうですね。はっはっは」

何動揺してんだよ、オツキー。

秋のライブがダメなら……。

「次のクリスマスライブがあるじゃないか！」

どうだ？ 名案だろ？！

「クリスマス？！ そ、そうか！ さすがジオン、そうだよ、クリスマスライブに出りゃ〜いいんだよな？！」

「ゴメンな、オレのせいで……」

いやいや、宮さんだけじゃないんだ。

オレと竜崎との確執もあるし……。

そう、これから先色々な意味で、竜崎との問題だけは避けて通れない。

……と、その時、凄い良案が思い浮かんだ。

オレも男だ。

男にゃやらなきゃならない時がある。

「宮さん、何も訊か<sup>き</sup>ず、聴<sup>き</sup>いてもらえますか？」

「・・・オ、オウ」

オレの真剣な瞳を見た宮さんは、黙<sup>もく</sup>って頷<sup>うなづ</sup>いた。

「11月11日、オレと竜崎の試合を組んで下さい」

第261話 行けば分かるぞ(前書き)

## 第261話 行けば分かるさ

亀鶴ジオンVS竜崎光一！！

やるしかない！ それしか、オレたちの仲を戻す方法はない。

我ながら、何てアイディアなんだ？ 流石、オレ、天才じゃね？

「分かった。理由は分からないが、大橋に頼んでおこう。オレの試合の前にも、そのカードを組んでくれと・・・」

宮さんが許諾してくれた。

「オ、オイ、マジかよジオン！ 何だよそのカード、聞いてねえぞオレは」

オツキーが困惑の表情を見せる。

「当たり前ええだ。今決めたんだから」

「あのなあ、オマエがいくらやりたがっても、当の本人はやりたがねえぞぞ?!」

「そんなの組んでみなきゃ分かんねえだろ。それに、アイツは絶

対それを望んでる」

「はあ？ 宮さん不在だからって、下克上でもすると思ってるのか？ オマエ、タカノブを倒して2年のトップになったからってのぼせ上がってるのか？！ 1年のトップを倒して自分の力をそれとなく示唆ししようだなんて、何て汚ねえヤツなんだ。支配者にもなる気か？！ オレはそんなオマエに絶対ついていかねえかな！」

オツキーがぶちまけた。

・・・たく、言いたい事ズカズカと言いやがって。

「あのなあ、オツキー、おめえは知らねえかもしんねえが、オレと竜崎にはちょっとした溝があるんだよ。人間、誰もあるよな？ オレはそれを埋めてえんだ。クリスマスライブを成功させる為にも、オレたちが3年になった時の為にも、今アイツとの溝を埋めとかねえと、オレは先に進めねえんだ」

それがオレの全てだ。

アイツとの戦いを終わらせねえ事には、タカノブや柴、ギャラクシーとか貴船とか、その辺も含めて何にも先が見えて来ねえんだ。

「溝？ 溝って何だ、溝って？！ 言ってみるよ」

オツキーが唇を尖とがらせた。

自分が根掘り葉掘り聞かれるのが嫌いだから、いつもは人にも気を遣って深く聞かないクセに、筋を通さないヤツには厳しいのな、A型って。

「だから……」

オレが言葉を詰まらせていると……。

「亀ちゃん、皆まで言うな。それにオツキー、亀ちゃんの心を読んでやれ。今まで亀ちゃんが間違ったこと、した事あるか？ 道を踏み外したこと、あるか？ 本当に仲間だと思うなら、その仲間を信じてやれ」

み、宮さん、それ、オレを買い被り<sup>かぶ</sup>すぎでは……？

ホラ、オツキーのヤツ、とても何か言いたげ。

でも、宮さんに『信じてやれ』と言われて堪<sup>こた</sup>えてる。

オツキーにもそうだが宮さんにも、オレと竜崎の確執について語る気になれば語れるが、話せばかなり長くなる。

一体どっから話せばいいんだ？ ……ってなほどだ。

それに、オレ自身もそんなに深く、竜崎との確執について整理出来てない。



だから、それらも全部ひっくるめて、戦って解決すんのが一番手っ取り早いんだ。

『最後は結局暴力で解決っすか？』的な竜崎の声が聞こえてきそうだが、『やれば分かるさ』と、言っただけでやらない。

理屈じゃないんだ。

そこで、勝負の行方に関係なく、戦い終わってスッキリしたら、それから宮さんやオツキーに事情を全て話してジャッジしてもらえばいい。

オレが正しいのか、竜崎が正しいのか、どっちが悪で、どっちが善か。

判断してもらえばいい。

気がつけばオレたちは、閉店時間までBARカシオンにいた。

宮さんが散々車を運転して帰ると言っただけで騒いでいたが、オレとオツキーで代行に無理矢理押し込み、また会う約束をして宮さんを帰らせた。

「なあ〜ジオン、さっきの竜崎との溝って話だけど、それって別に、怨恨えんこんとかあるわけじゃねえ〜よな？」

帰り道、街路灯に照らされた歩道を歩きながらオツキーが聞いてき

た。

怨恨？ 出たよ、A型お得意の心配性。

「仲を深める為のスキンシップだ」

A型は納得するまで引き下がらず、とてつもなくしつこいので、とりあえず追求をかわしといた。

「良かった。そんならオレも応援するぜ。ガンバレよ、ジオン。ま、オマエらの試合だったら安心して見てられるよ。どっちが勝っても負けても遺恨がないなら関係ねえしな」

納得したの？ 早っ！！

こうして、新たな道が出来上がってきた。

全く先の見えなかった、オレと宮さんの真つ暗闇の未来に、少しだけ光明がさしてきた。

オレは、また一つ学んだ。

苦難から抜け出すチャンスは、己で作るんだ！！



## 第262話 宿命の戦い 対戦カード発表

オレと竜崎とのカードを、宮さんが大橋に頼んでから約1週間後、早くも対戦カードが発表された。

オッキー、ユイと共に、いつもの第3公園で大橋と待ち合わせる。

カードを持ってきたのはもちろん大橋。

今回は前回ののように、突然カード変更などないようKHJにしっかりと要請したという。

吉岡や野牛としては、前回ののようにギャラクシーに暴れられないよう、しっかりと宮さんへのサポートを強化する方針らしい。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／  
 ／／／／／

宿命の戦い

時 11月11日(日) 夜 8時30分

場所 野牛港 第3倉庫 特設ステージ

主催 株式会社 KHJ

協力 釜桐町ホストクラブ連盟

野牛シユートボクシング協会

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

大会名は、『宿命の戦い』か・・・。

ベタだな。

試合は前回同様、野牛港の第3倉庫の特設ステージだ。

主催者は相変わらずKHJ。

オレは、対戦カードを見て絶句した・・・。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

宿命の戦い 対戦カード

第1試合 野牛農業 VS 武蔵高等学校

長須光雄（野牛3年） VS 柴義経（武蔵1年）

第2試合 野牛農業 VS 武蔵高等学校

芒みちる（野牛2年） VS 高城伸之（武蔵2年）

第3試合 吉岡工業 内 紛争

大橋剛太（吉岡3年） VS 秋鹿準（吉岡3年）

第4試合 武蔵高等学校 内 最強決定戦

亀鶴ジオン（武蔵2年） VS 竜崎光一（武蔵1年）

第5試合 最後のリベンジマッチ

宮大地（武蔵3年） VS 織川宏次朗（笹城3年）

宮大地、雪辱に失敗した場合、ペナルティーとして2度と再戦は  
不可。

レフェリー 西田栄作にしだえいさく（塚原2年）

// // // // // // // // // // // // // // // //

『宿命の戦い』だと？

『番長軍 VS ギャラクシー』でいいじゃねえか！ なんなら  
『悪 VS 正義』でもいいぞ！ もちろんオレたちは悪で結構。

「凄いな」

「凄いわね」

オツキーとユイも、『凄い』しか言葉が出ない。

確かに凄いもんな、今回のカード。

これでもかってくらい、凄い。

// // // // // // // // // // // // // // // //

第1試合 野牛農業 VS 武蔵高等学校

長須光雄（野牛3年） VS 柴義経（武蔵1年）

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

第1試合からして半端ねえな。

これがメインでも全然イケるんじゃねえの？

しかも対抗戦だよ、コレ。

「長須が望んだカードだ。オレたちに対してあれだけ愚弄ぐろうしてくれ  
たんだ。第1試合からキツチリ落とし前をつけねえとな。この力  
ードを持ち込んだ時、最初柴はかなり弱腰だったようだな。でも、  
長須がKHJのボスに直訴して、ほぼゴリ押しで決定したカードだ」  
大橋が興奮気味で語った。

「逃げ腰にもなるわね。酷かったもんね、アイツのマイクパフォーマンス」

ユイは前回の大会の光景を思い出し、唇を尖らせた。

「ま、ユイちゃんさんやジオン君たちには迷惑掛けねえからさ、  
オレら。あくまで個人戦。長須もオレも、もちろん宮も、ギャラク  
シーとの抗争は考えてねえから」

大橋が言い訳がましく語る。



「信じられる？ 今回の大会って、あからさまにVSギヤラクシーって図式じゃん。こっちが全勝した場合、はたしてKHJが黙ってるのかしら……？ 何か企みがあるからKHJのボスもOKしたんじゃないかって……？」

ユイが鋭い所をツッコむ。

「はっはっはっは、さすがユイちゃんさん、痛いところ突いてくるねえ、はっはっはっは……」

大橋が笑って誤魔化している。

大変だな、こりゃ。

長須は柴をコテンパンにするだろうし、そうなたらギヤラクシー側も黙ってないだろうし……。

でも、もしも、万が一長須が負けるような事があつたら……？

……想像しただけで悪夢だ。

宮さんVS織川の再来になる……。

そう考えると、このカードは危険だ。

危険すぎる。

とにかく、第1試合から目が離せないな。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

第2試合 野牛農業 VS 武蔵高等学校

芒みちる(野牛2年) VS 高城伸之(武蔵2年)

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「どうしてこの2人が戦うのよ！ これこそとんだ茶番じゃない？  
！」

ユイが第2試合を指差して言った。

「これも長須が出してきたカードなんだよ。第1試合と同じく、長須がKHJのボスに直訴して決定したカードなんだ。ユイちゃんさんが驚いたように、オレも当初驚いた。武蔵VS野牛の全面戦争時、芒のセコンドに高城がついてたし、この2人が武蔵でつるんだのはオレも知ってたからな。でも、長須が自信を持って送り出す兵隊だ。この芒ってヤツは、今回のオレたちの意中は十分理解してるとオレは思う。だから、今この状況でこのリングに上がるってのがどんな事なのかも十分承知してるはずだ。オレはコイツの覚悟を買っし、長須を信じるよ」

大橋が芒を高く評価している。

長須を信じる……か。

長須はO型で、芒はB型。

O型はB型の天邪鬼あまのじゃくな心情を理解できるし、我が儘まな行動を上手にあしらひ、B型を手玉にとれる。

それがO型先輩B型後輩の間柄なら、芒から見ても長須は理解者であり良き先輩、長須から見ても芒は生意気だけど扱い易い後輩だろうと思われる。

1度は傷害で武蔵を退学になった芒が、野牛という新しい環境で長須という男に出会い、何を感じ、何を考え、野牛で高校生活を送ってるのかは分からない。

長須との出会いもそうだが、オレとの戦いで何かを感じてくれたなら、それだけでオレも命を懸けた甲斐があったってものだ。

「確かに、そう言われれば、そうですね。この大会で、このカードの中で八百長するのは自殺行為ですよ。この間の柴のマイクパフォーマンスで客の目はシビアになってるだろ〜し、アイツらがわざわざ観衆の前で茶番劇をする意味がない。芒は、前のジオンとの戦いで、何かに気付いて目覚めたんじゃないかな」

オツキーが腕を組みながら言った。

芒が……、何かに目覚めた？

その時オレは、この間野牛に一人で乗り込んだ時に会った、芒の言葉  
を思い出した。

『超面白え〜喧嘩してたな、オマエら……。他のヤツらは騙せて  
も、オレの目は欺けねえ〜ぞ、ヒヤハハハ』と言って笑う芒はそ  
の後、『悔しくねえ〜のかよ』と、いつになく真顔で言った。

『悔しいに決まってるんだろ』というオレの言葉に対し、『だったら  
オレが仇を討ってやろうか？』と、オレの目を見据えながら言った  
芒。

B型は、とにかく天邪鬼。

時として、自分の心と裏腹の行動を起こすし、本音と逆の事を言う。

だが、自分に正直なのもまた、B型。

時として、バカがつくほどバカ正直に、ストレートに行動を起こす  
事がある。

芒がオレの味方だと？ 前回のオレの試合の仇討ちだと？！

もし、それが本当だとしたら、涙が出るほど嬉しいじゃねえか、  
バカヤロオー……!!

だが、オレは今まで散々人に騙だまされてきたから、そう簡単に信じね  
えぞ。

……って、それじゃー芒と一緒にか？

………ったく、しゃらくせえー!

第263話 この世に絶対はない

// // // // // // // // // // // // // // // // //  
// // // // // // // // // // // // // // // // //  
// // // //

第3試合 吉岡工業 内 紛争

大橋剛太（吉岡3年） VS 秋鹿準（吉岡3年）

// // // // // // // // // // // // // // // // //  
// // // // // // // // // // // // // // // // //  
// // // // //

「大橋さん、やっぱりもう、我慢の限界を超えたって事ですか？」

聞くまでもないが、大橋に訊いてみた。

「いや、別にそんな事はねえけどな」

大橋はすまし顔だ。

出たよB型、典型的なへそ曲がりな〜。

「アキガって、前に宮さんと喧嘩した人でしょ？ 気を付けてね、

あの人が何するか分からないから」

ユイが心配そうに言った。

「ヤツの危険度はオレが一番理解しているつもりだ。大丈夫。負ける喧嘩はしねえ〜から」

大橋が自信たっぷりな豪語した。

大橋B型に対し、アキガはAB型。

B型はAB型の考えを理解する事が出来るし、何と、手玉にもとれる。

これが血液型の面白い所だ。

まるでジャンケンのように、お互い強い弱いを併せ持つのだ。

たとえば、A型はO型を手玉に、O型はB型を手玉に、B型はAB型を手玉に、AB型はA型を手玉に取れる。

つまり、O型はA型の、B型はO型の、AB型はB型の、A型はAB型の気持ちは理解しにくいワケだ。

一例として、例えばO型とA型が結婚した場合、A型はO型を手玉に取ってるので、自分が思い描くような人生を送れる。

その代わり人生の主導権を握ったりリスクとして、人生の心配事や責任などを背負う事になるワケだ。

逆にO型は、主導権を握られるので、自分の思い描くような人生は送れない。

でも、メリットとして、人生の心配事や責任などは、だいたいA型が背負ってくれるので精神的にラクが出来る人生を送れる。

そして、繋がりのないライン、A型とB型、AB型とO型は、見解の相違がある為、お互いに手玉をとるのは難しいといえる。

・・・と、いう血液型の手玉法則がある。

その法則からして、大橋の『負ける喧嘩はしない』と言ったセリフが、単なる強がりではないと言っ事が分かる。

O型のオレは、AB型の考えや行動を理解したり、相手の出方を読むのはとても困難だ。

だが、B型からすれば余裕なのだ。

・・・と、いう点からも、この勝負は大橋にお任せするしかないし、吉岡同士の争いだし、勝っても負けてもお互い3年だから、遺恨も含めて卒業する時持つてけばいい。



大橋も、それを分かっているからこそ、このカードを組んでもらったんだろし。

オレからは何も言う事はない。

あえて言うなら……。

「レフェリー辞退してまでアキガとやりたかった気持ちは分かりません。だからこそ、言わせて下さい。すかされる事も視野に入れて、大きな視野で戦って下さいね。あらゆる事を想定して……」

「熱くなるなって事だよな？ 分かっているよ。アイツもオレの性格知ってるし、オレもアイツの性格は知っている。直線に行ったら絶対すかされるってのはお互いに経験で学んでるから。大丈夫、想定内だ」

大橋が笑顔を見せた。

そうか、大橋はアキガとやるのは初めてじゃないんだな。

じゃー、大丈夫だ。

たとえばアキガにすかされたとしても、オレがタカノブ戦で受けた精神的ダメージのようなものは大橋にはないのかもしれないな。

アキガがやる気ゼロならそれはそれで、容赦なくコテンパンに打ちのめす大橋に期待したいな。

いや、大橋ならやってくれる気がする。







「アイツらの狙いはオレたちの時代を破壊し、新時代を構築することだ。だが、いざ計画を実行してみたものの、思惑通りにはなかなか進まない。それは、オレたちが積み重ねてきた歴史や築いてきたモンが、ヤツらにとつて、ぶっ壊すにはあまりにもデカくて固いモンだったつて事だ。ギャラクシーとしては、あの大会で宮を再起不能にする手筈てはずだったんだろう。それがこうしてリベンジマッチを要求してきたわけだ。ヤツらからしたら、今度勝ったらそれで終わりにしとかないと、いつまでも先に進めないって思ったんだろうな」

大橋が語った。

大橋も長須も宮さんも、学校を力で統率してきたワケじゃない。

なのに、大会終了後から、まるで今まで支配者だったような風評が渦巻き、一般生徒のみならず、ついにはヤンキーたちまでもが次々と掌てのひらを返しているという。

それも全て、総番長という大黒柱が倒れてしまったからに他ならない。

このままだと、建物は完全に崩壊してしまい、大橋も長須も、もちろんオレたちも居場所を失う。

しかし、そんな大黒柱の代わりに、懸命に支え続ける幾つもの柱がある。

大橋や長須、オレやオツキー、ユイやミケコ、まだまだ沢山いる。

それだけじゃなく、崩壊したと思われた大黒柱が、自ら復活しようと目を光らせているのだ。

ギヤラクシーは、支え続ける柱を全部ぶっ壊し、復活した大黒柱を再起不能にしようと躍起になるに違いない。

・・・が、そうは問屋が卸さない。

「大丈夫。宮さんなら、絶対大丈夫だ！ 必ずリベンジに成功するさ」

「ジオンの言う通りだ。宮さんなら、きっと織川をやっつけてくれるさ。今度の大会で、ギヤラクシーの野望は砕かれるよ絶対」

オッキーがいつになくポジティブなセリフを吐いた。

最後のリベンジマッチ・・・か。

確かにこんなに早い段階で再戦を要求したんだ、織川としてもギヤラクシーとしてもKHJとしてもメリットはないワケだから、それなりのペナルティーを用意されても仕方ない。

ただ、織川がもう一度勝てば、揺ぎない最強の称号を手に入れる事ができるだろう。

逆に宮さんは、もしまた負けるような事があれば、今度こそ間違いなく、どん底に突き落とされる。

それだけは、絶対あってはならない。

宮さんが、負けるような事だけは……………。

// // // // // // // // // // // // // // // // //  
// // // //

レフェリー 西田栄作（塚原2年）

// // // // // // // // // // // // // // // // //  
// // // //

宮さんに、栄ちゃんとか言われて慕<sup>した</sup>われてた人だ。

体が大きめで、顔が四角で、ちよっぴり頭が薄くて……………。

あの人なら、しっかり裁いてくれそうだ。

『王者VS挑戦者』から僅<sup>わずか</sup>か1ヶ月で新たな大会、『宿命の戦い』が行なわれる。

竜崎戦に対して前回のタカノブ戦ほどの不安はないが、自分以外のギヤラクシー戦への不安は募<sup>つ</sup>る。

この世に絶対はない。

それを前回、まざまざと思い知らされた。

それはオレだけじゃなく、大橋もオツキもユイも、他のみんなだ  
って一緒だ。

それぞれが、それぞれの思いを胸に、『宿命の戦い』当日を迎える。  
。。。。。



## 第264話 ガラス越しのギター

のちの日も、ギャラクシーは取り立てて動きは見せなかった。

学校でも、タカノブや柴と擦れ違うこともなく、竜崎とも顔を合わせない。

オレと竜崎との確執を何も知らないオツキーによると、オレとの戦いについては竜崎も言明を避けてるらしい。

その頃宮さんは、龍角山の『山奥寺』というお寺で精神修行に励んでいた。

1週間のカリキュラムだそうで、滝修行や座禅に加え、山での伐採作業なんかもあり、精神的にも肉体的にも鍛えられるそうだ。

かつて宮さんは中学時代、木こりのバイトをしてベースを買ったなんて言ってたが、当時はお金を貰い、今回は逆にお金を払う。

同じ作業でも、価値観によって色々なものが変わるんだなあ〜なんて感心しながら、オレは宮さんに会いに行った。

5分だけしか時間をもらえなかったが、深い話は出来たと思う。

オレは、竜崎の言葉で気になってた事を、宮さんに聞いてみた。

『宮さんは、ずっと……、誰かに倒されるのを望んでたんすよ……』という、竜崎の言葉だ。

それに対し宮さんは……。

「分からねえ〜や。そうかもしんねえ〜し、違うかもしんねえ〜」  
とだけ、言った。

そして……。

「亀ちゃん、オレ、何か掴めそうなんだ。上手く言えねえ〜けど、勝負以上の何かを、オレは織川戦に望んでるのかもしれない。少なくとも、アイツはオレの期待を裏切らないんだ。とにかく、強くてとにかく、恐い相手だ。最強最悪、オレに立ち塞がった、人生で一番のライバルだ。恐くて恐くてたまんねえ〜んだけど、心の底から湧き出てくるモンがあるんだよ。オレは生きてるんだっていう実感つつ〜の？ 凄え〜感じるんだ」

宮さんが、遠くを見つめながら言った。

宮さんは、完全に王者としてのプライドを捨て、完全に挑戦者の目になっていた。

オレは、宮さんの真っ直ぐな瞳を見て、深い何かを感じた。

そして宮さんから、大きな勇気をもたらった気がした。

時として予期せぬ事態は、白雲を黒く染める雷雨のように突然やってくる。

11月のある雨の日、オツキーと駅前の中古ショップの前を通った時だった。

濡れたショーウィンドーのガラス越しに飾られた楽器が目に入った。

見た瞬間、オレとオツキーは言葉を失った。

「・・・な、なあ、ジオン、あ、あれってさあ」

声を震わすオツキー。

間違いない。

F・R・S・・・、フォールリードスミスだ。

『 フォール・リード・スミス カスタム ( F・R・S )

25th Anniversary Hunger Dragon

』

「ネットクにドラゴンの絵。世界限定250本のレアモデル。ブラジリアン・ローズウッド。希少価値の高い木材。芸術的仕上がり、間違いないよジオン・・・」

蛻もぬけの殻になったオツキーが力なく呟いた。

ギターのボディに、白いペンで「Rebecca」(レベッカ)  
「と書いてある。」

それが何よりも決定的な証拠だった。

ユイがコツコツ貯めた金で、レベッカから買ったギター。

それをIkar Uイカルにあげたんだ。

Ikar Uは、そいつを売りやがった……………!

『超お値打ち特価! 198万円』

198万円? ふざけんなつ!!

「買つ!」

無意識でそんな言葉が口から出ていた。

198万円なんて破格な金があるワケないが、買わずにいられない。

どろにかして買ってやる、今すぐに。

……と、その時!

「オレが買う！」

オツキーだ。

「はあ？」

「欲しかったんだよ、ずっと前から。ジオンも知ってるだろ?!」

「バ、バカ、198万もするんだぞ？ ユイは、これを80万で買ったんだぞ」

「知ってるよ。でもさ、オレが買おうとしてた値段より安いし・・・」

そうしてオツキーは、F・R・Sをキャッシュユで一括購入した。

1年以上コツコツと貯めた80万でF・R・Sを買い、Ikaru Uにタダであげたユイ。

ユイからF・R・Sをタダで手に入れ、中古ショップに売って金にしたIkaru U。

中古ショップで売られた198万円のF・R・Sを、キャッシュユで一括払いしたオツキー。

同じ物でも人それぞれ、値段も価値観も違う・・・。

I k a r Uにとって、F・R・Sの価値など気まぐれでしかないのかもしれない。

レアモデルギターの値段など、はした金なのかもしれない。

そんな事はどくでもいい。

オレが許せないのは、I k a r Uがユイの気持ちを踏み躪<sup>にじ</sup>つたつて事だ……。

「オツキー、この事は、ユイには……」

「ああ、黙ってるよ、もちろん。言えっこないだろ」

背負ったギターが濡れないように傘を傾けたオツキーの顔に、横なぐりの雨が容赦なく降りかかる。

雨なのか涙なのか分からないが、オツキーの頬が濡れていた。

言えっこない、ユイには、言えっこないよな……。

オレの目頭からも、熱いものが零れ落ちる。

その日はオレも、傘をささず家に帰った。



## 第265話 勇気ある決断

瞬間間に11月11日、日曜日、秋のライブと『宿命の戦い』当日が訪れた。

武蔵の秋ライブは、学園祭と同様、恒例の学園イベントだ。

特徴としては、私服で登校可能なうえ、学校内へは出入り自由プラス、いつ登校しようがいつ帰宅しようが全部自由って事だ。

今日のライブに、またしてもDo the byが出場するってんで、校内でもちよっとした話題になっていた。

「ジオン君、今日のライブにエントリーしなかったってホント？」

教室で、佐倉がオレに話し掛けてきた。

「色々あってな。でも、クリスマスライブには出るつもりだから」

「そうなんだ……」

心なしか、元気がない佐倉。

。。  
そんなにオレたちのバンドのライブを楽しみにしてくれたのか……



ゴメンよ佐倉。

絶対、絶対、クリスマスライブは成功させるから！

その為には今日の竜崎戦を何としても勝利で飾り、アイツから全てを聞き出してギャラクシーの野望を粉碎し、汚名返上して……。

……と、その時！

「ジオン、ちょっといい？」

ユイだ。

ユイに連れられ、誰もいない階段まで来た。

「何だよ、内緒話か？」

「そう。アタシさ、今日、I k a r Uの気持ち、聞いてみようと思うの」

恥らうワケでもなく、真っ直ぐな瞳を見せるユイ。

はあ？

I k a r Uだとお……？！

その名を聞いて、ショーウィンドーのF・R・Sを思い出さずには

いられない。

「ダメだ！ やめとけ！！」

「はあ？ 何だよ。アンタが言えって言ったんでしょ？！」

ユイが目の色を変えた。

確かに修学旅行中オレは、『ユイ、必ず、ちゃんと自分の気持ち、正直にI k a r Uに言うんだぞ！』と、ユイを説得した。

だが、状況が変わったんだよ今は！！

「何でって？ アレだよ、アレ。I k a r Uはどうせ、オマエの事何とも思ってたねえ〜って・・・」

「そんならそ〜と、自分の気持ちをスッキリさせる意味でも、ハッキリとI k a r Uに聞いてくる！！」

ユイは唇を尖らせ、スタスタと階段を下りていった。

「オ、オイ、待てって！！」

何やってんだオレは。

B型の天邪鬼性を刺激してど〜すんだよ。

こ、このままじゃ〜アイツ、立ち直れなくなるぞ！

・・・つつくか、オレもI k a r Uに何すつか分かんねえ〜！！

「待ってって！ オレの話、聞けよ！！」

「どうしてアンタに指図されなきゃなんないのよ。誰を好きになるうが、誰に告白しようが誰と付き合おうがアタシの勝手でしょ！！」

中庭を通り過ぎ、とうとう体育館まで来た。

すでに秋のライブは始まっていたが、体育館のステージ上では、とあるバンドが演奏こそしているものの、客という客はパラパラとしか見当たらない。

そんな体育館脇に設置された、お金の二オイがブンプンするD o t h e b yのブースに、メイク前のI k a r Uがいた。

アルバムを買った人にサインをする目的で座ってるようだが、客など人っこ一人いないのが現状だ。

「よオ、ユイ。元気か？」

ライブ衣装から見え隠れするハイブリッドな肉体を、惱殺的に光らせるI k a r U。

そんなものには興味のなさそうなユイだったが、自分の気持ちを確認めるべく、勇気のある行動に出た。

「ちよつと来て」

そんなユイを見て、オレは2人に背を向けながら身を隠した。

こうなってしまうては、オレの入るスペースはない。

体育館裏に向かった2人の後をさりげなく追ひ、バレないように壁に隠れながら2人の様子を窺った。

「は、話って何だよ……」

カッコつけるように、I k a r Uが髪をかきあげた。

「アタシの事、どう思ってたんのよ?!」

唐突に聞くユイ。

そして、予想だになかった言葉がI k a r Uの口から飛び出した。



## 第266話 もっとも惨めなフラれ方

「ど〜って、何だよ、ど〜いう事だよ？」

「アタシの事、好きなのか嫌いなのか、聞いてんのよ」

「・・・ス、スキに決まってるだろ？ バ、バカ、オマエ、い、いきなり何言わせんだよ。恥ずかしいだろ？」

I k a r Uは顔を少し赤らめながら、情けない声をあげた。

I k a r Uがユイを好きだと？ 騙すつもりか？！

あのヤロー、ユイを騙すつもりかあ〜〜〜っ?!!

「ぶ〜ん、で・・・？ アタシと、ど〜したいのよ？」

大胆にもユイが言い放つ。

「ど〜って？ そ、そりゃ〜、出来る事なら付き合いいてえ〜よ。でも、今、オレ、付き合ってるヤツいるんだ・・・」

何っ？ 今現在I k a r Uに彼女がいるってか？

「そいつとさ〜、近いうち別れる予定なんだ。そしたらさ、オレと・

・・・」

何い〜？ 今付き合ってる彼女と別れる予定？

ユ、ユイ・・・、まさかオマエ、そんなヤツと・・・？！

「ふ〜ん、アンタの気持ち、よ〜〜〜く分かった。アタシがホント、男を見る目がなかったって事も、よ〜〜〜く分かったわ。これから人を好きになる時は、相手をよくよく確かめてから好きになるって、凄く勉強になったわ。アリガト・・・」

・・・ふはっ？！

「え？ 何、何？ どういう事?!」

突然のユイの変わりように、アタフタと取り乱すI k a r U。

「サヨナラ」

そう言っつてユイは、I k a r Uに背を向けた。

「え？ ちょっと待てよユイ。じゃ〜、ど〜してオレにギターなんかくれたんだよ？ オレを好きなんじゃないのかよ?!」

I k a r Uが女々めめしくひ弱な声をあげた。

「はあ？ ふざけないでよ。アンタがああギターを売った事くらい

知らないでも思ってたんの？ 見たんだからね、アタシ」

・・・ん、何イ~~~~っ?!

ユイのヤツ、あの中古ショップであのギターを見ちゃってたのかあ  
~~~~?!

「アタシは、アンタに彼女がいるって知ってたら、絶対あんなバカ
な事はしなかった。何となくは知ってたけど、まさか付き合ってる
と思わなかったから。今になって自分の浅はかな行動に嫌気がさす
わ」

「ユ、ユイ、ゴメン。ホント、許してくれ。オレ、オマエが好きだ。
誰よりも、オマエが好きなんだ。だから、オレと付き合ってくれ。
や、約束する、絶対、今の彼女とすぐ別れる。だから、ギターの事
は許してくれ。あの時、どうしても金が欲しかったんだ。すぐに金
が必要だったんだ。ギターならまた買えばいい。何なら、ユイが欲
しいモン、何でも買ってやるよ」

そう言っつて、I k a r Uはユイの肩に手をやった。

「汚らわしい、アタシに触らないでっ!」

ユイはI k a r Uの手を払いのけた。

「待てよユイ、オイ、待てったら」

さらにユイを掴んだI k a r Uは、ユイを引き寄せた。

・・・瞬間！！

バッチーーン

思いつきりユイがI k a r Uの頬を引つ叩く。

「・・・つてんめえ」

ヨロけたI k a r Uは、ユイに向かって手を振り上げた。

アイツ、女性に手をあげる気か?! クサレ外道が!!

・・・と、その時、襲い掛かる張り手を寸前で掴んだユイは、その反動を利用して華麗にI k a r Uを投げ飛ばした。

出たっ、神野流古武術!

その場で円を描き、宙に舞ったI k a r Uは、思いつきり地面に叩きつけられた。

「もう2度とアタシの前に姿を現さないで!!」

そう言ってユイは、体育館裏を後にした。

情けない目で、小さくなるユイの背中を見つめるIkaru。
最低なヤローだけに、フラれ方も最低だぜ。

「……きゃっ」

突然ユイがぶつかってきた。

ギョッ！ 隠れて見てたの見付かった！！

「あ、つい……」

言葉に詰まってる……。

「恥ずかしいトコ見られちゃったわね。アンタが見た通りよ、アタシ、フラれちゃった……。でも、スッキリした」

ユイが清々しい笑顔を見せた。

「フラれたって言うより、フツたって言った方が正しいんじゃないかねえのか？ 上手く言えねえけど、カッコ良かったぜ」

「そう？ アンタに見られて正解だったかな？ 何だか、バカなアタシが少しだけ報われた気もするし……」

「オマエは悪くねえよ、悪いのは全部あのヤロオーだ。だからユイ、自信持っていていいと思うぜ！ だから……、負けんなよ!!」

「分かってるよ！ アリガト、ジオン」

そう言ってユイは、コブシを突き出した。

それに応えるようにオレの握りコブシをユイのゲンコツに当てると、ユイは満面の笑みを見せ、その場を去った。

ユイ……、1度や2度フラれたからって、負けんなよ……。

そう思いつつ、オレは、自分の勇気のなさを実感していた。

オレは、人には散々言ってるくせに、自分の事は何一つ出来てない。

もっと勇気を出して、オレも行動しなきゃ……。

佐倉への思い、オレも、いい加減伝えなきゃ……だな。

第267話 勇気が、ない

教室に戻ると、佐倉が待ってたかのように話し掛けてきた。

「みんなどこ行ってたの？ 私一人で淋しかったよあ〜」

そんな甘えた声で話し掛けるなよ〜。

赤面しちまうだろあ〜が。

「ユイはもうすぐ来ると思っけど、オツキーは今日来ないと思っぜ」

「え？ そうなの？ みんなでD o t h e b y見るんじゃないかな？」

佐倉は驚きの表情を見せた。

D o t h e b yのライブをみんなで見るって？ いや、それはないと思っぞ。

「なあ〜、佐倉・・・」

「何？」

可愛らしい笑顔でオレの顔に近づくと佐倉。

色気でオレを惑わす気か??

ゆ、勇気を出せ！ 勇気を出して、言うんだ！！

「きよ、今日、これから空いてるか？」

今日の竜崎戦を佐倉に見せるんだ。

そして、竜崎に勝利した暁に、リング上で佐倉に告白する！

どうだ、オレの大胆で勇気ある告白。

ユイもオツキーも、竜崎も宮さんも、みんなビックリするだろうな。

そして、みんなオレの事を敬うだろうな。

オレに告られた佐倉は、最高の告白シチュエーションに感動の涙・
。。。

ウン、我ながら何たる発想。

後は、これを実行に移すのみ。

勇気を出して……。

「え？ これからって??？」

「あ、だからさ、これからさ、空いてないか？」

「え〜〜、これからDo the boyのライブじゃん」

「いや、そ〜じゃなくなつてさ、これからオレ、ちよつとした大会で命懸けの戦いすつからさ、それを見て欲しいんだ・・・」

「ムリだよ〜」

「じゃあ、ライブ終わってからでいいからさ、オレの試合、見に来てくんね〜？」

「ムリ。今日、用事あるし・・・」

「は、あはは・・・、だ、だよなあ〜。ははは」

何だか頭の中真っ白だし、グダグダになってきた。

その時！

「ジオン、そろそろ時間よ」

「オ、オウ！！」

いい所にユイが現れた。

「ユイ〜、ライブ、行くの〜？」

佐倉がユイに聞いた。

「うっん、ゴメンね。アタシたち、ちょっと野暮用でさ」

「そうなの？ ウウン、大丈夫」

佐倉が答える。

「さっ、早く行くわよ」

「オ、オウ」

ユイに引っ張られ、教室を後にした。

ふう〜、危なかった。

取り乱す所だった。

・・・しかし、ちょっと断られただけでこんなにダメージがデカイとは、これが告白して断られたなんつったら、オレは立ち直れるのか？

それを考えると身が竦む。

だから世の中の男女は自らの告白を拒むのか？

みんな誰しも恐え〜んだ。

でもオレは負けねえ！

必ず、必ず告白してやる！！

テルとの約束でもあるんだ。

佐倉、待ってるよ……。

近いうち、告白すっから、もう少し待ってるよ。

今日の竜崎戦で、佐倉に告白できる勇気を養ってくる。

そしてオレは、竜崎に勝って、佐倉に告白する！！

絶対、する！！！！

第268話 宿命の戦い、はじまる

駅前でオツキーと合流した。

「あれ？ 竜崎と宮さんは?!」

「オレは分からないぞ。てっきりジオンが連絡取り合ってるのかと思ってたから」

「いや、オレはオツキーが連絡取り合ってるのかと……。ホラ、宮さん最近ケータイに出ねえし、竜崎とはオレ、前回の大会から会ってねえし……」

「オレも竜崎とは会ってないし、同じく宮さんとは連絡つかねえから……」

そうだったのか、知らなかった。

オツキーも竜崎に会ってなかったとは……。

「どうせ会場で会うんだし、先に行つてようよ」

ビルの谷に落ちる夕陽を見ながらユイが言った。

夜8時、オレたちはいつもの野牛港第3倉庫に会場入りした。

相変わらず今日もシュートボクシングの後のようで、リングが会場の中央にデンと構えている。

入り口をはじめ会場の壁には、今日の日付でシュートボクシングのポスターがいくつか貼られていて、万が一に備えて警察を欺くフェイクも怠っていない。

『武蔵VS野牛』、『王者VS挑戦者』に引き続き、今回もまた大盛況だ。

会場はすでに超満員で、チケットは2週間前に完売、立ち見客も数多くいる。

控え室前の壁に背をつけ、女の子が一人立っている。

「先輩、光一君との勝負、頑張ってくださいねっ」

朝露さんだ。

オレたちの事、待っていてくれてたみたいだ。

「あ、朝露さん、竜崎って、オレの事何か言ってた？」

普通に気になる事を聞いてみた。

「いえ、特に・・・」

「そうか」

相変わらず、あのクールなブルードラゴンの心境は読めない。

・・・ま、早かれ遅かれ、今日のセミアイナルで顔を合わすんだ。

その時になれば、全てが分かる。

「あのく、ジオン先輩。どうして光一君と戦わなきゃならないんですか？」

朝露さんに聞かれた。

やっぱり傍から見たら、オレたちが戦う理由が分からないってのが正直な所だよな。

「何て言えばいいのかな？ 手っ取り早く言えば、絆を深める・・・？・・・みたいなの？」

「そうですね。応援してますね、頑張ってください」

いや、ぶっちゃけ遺恨解消なんだけどね。

例の風評のせいだろう、オレならともかく、ユイの姿を見ても誰も近づいてくる者はいない。

「嫌われたもんだな、オレたち・・・」

「その方がラクだわ」

面倒くさがりのB型、ユイらしいや・・・。

何気に入った控え室の光景は、オレの想像を遥かに超えていた。

すでに待機していた宮さんだけじゃなく、大橋、長須、それに、第2試合でタカノブと対戦する芒の姿もある。

野牛や吉岡など、大勢のヤンキーが所狭しと控え室に会していた。

てっきり嫌われ者の隠れ家くらいにしか思ってなかったが、意外にもオレたちを支持してくれるヤツらもまだまだいるもんだ。

「やっぱさ、何だかんだ言って勝ったヤツが正義なんだよ。だからさ、今日結果を出せばさ、また宮さんとか大橋、長須に光が射すよ」

オッキーだ。

「アタシはそうは思わないけど。悪は悪、正義は正義よ。アタシはさ、結局みんな傍観者で、会場の観客たちも学校の生徒たちも、いわば流行に乗ってるだけだと思うの。アタシたちが嫌われてるのも一時的なものじゃないかな？ ギャラクシーがホントは悪なんだった事くらい、冷静になって考えりゃすぐに気付きそうなモン

「だけどね」

ユイがぼやいた。

「武蔵は宮がいなかったから大変だったみたいだな」

ユイのぼやきを聞いていた長須が、オレたちに話し掛けてきた。

深々と椅子に腰掛け、不敵な笑みを溢している。

「そうね。たとえ人ごみでも、アタシたちが通れば広い道が出来るカンジ？」

分かり易いたとえだ、ユイ。

「うちも吉岡も、そんなに酷くはないぞ。何でか分かるか？ うちも吉岡もまだトップがいるからだ。逆に武蔵にはトップが欠けてる。要するに、その学校を守るトップが不在だって事だ。この意味が分かるか？」

長須がオレたちに尋ねる。

オレたちが黙っていると、長須が語り出した。

「みんなギャラクシーを恐れてるんだよ。アイツらがいくら正義だヒーローだ、学校を守るだ何だ言ったって、結局特攻服着て刺青いれずみチラつかせてやがるんだ。説得力ねえ〜んだよ。だったら最初っからオレらみてえ〜に不良を堂々とやってる方がまだマシだろ

？ アイツらみてえくなのを偽善者って言うんだよ。結局、そんなの始めっから観客たちだつて分かつてんだ。分かつててギャラクシーを支持してんだ。恐えくから。オレらよりギャラクシーが恐えくから。だつたらオレらがギャラクシー潰して、観客を安心させてやるしかねえくだろ」

そう言つて長須は微笑んだ。

みんなギャラクシーを恐れてる・・・。

だから、ギャラクシーに逆らっているオレたちを避ける・・・。

それはまるで、イジメられっ子を助けると、イジメっ子たちに自分もイジメられるから助けられないもどかしさに似ている・・・。

結局、傍観者なんてのは勇気のない輩に過ぎず、心の中ではイジメられっ子を憐れんでいたりする・・・。

・・・じゃあ、そんなイジメられっ子が、イジメっ子をやっつけちまったらどうなる？！

「亀ちゃん、元気イ〜？」

控え室の一番奥で大勢のヤンキーに囲まれ、泰然自若と椅子に座つて深呼吸する宮さんが、笑顔で挨拶してくれた。

「宮さん、コンディション良さそうですね。そういえば、今日のセコンドって誰が付くんですか?!」

「そういえば、いねえ〜な……。あれ、竜ちゃんは？ あ、亀ちゃんとやるんだっけ？ じゃ〜、あつちの控え室かな？ 思えば、気の毒だよな、竜ちゃん。敵陣の中で試合まで待たなきゃなんねえ〜なんて……。な」

いいんですよアイツは……。

ど〜せアイツは元々ギャラクシーと面識あるんだし、中立気取ってるけど、結局ギャラクシーとは疎通の仲なんだよ。

……。しっかし宮さん、自分のセコンドの存在やオレと竜崎が戦う事を忘れるくらい、よっぽど織川しか見えてないようだな。

「オレが付きますよ。ジオンにはユイが付くから。いいよな？ ジオン」

「オレはいいけど……」

「アタシも別に構わないけど……」

「いいのか、オツキー？ 悪イ〜な……」

宮さんがオツキーにタオルを投げた。

「お安い御用ですつて。ははは・・・」

そう言いつつ宮さんのタオルをキャッチしたオツキーの体は小刻みに震えている。

メインで宮さんのセコンドに付くっただけでも相当なのに、相手があの織川だもんな。

こりゃ、大役に大抜擢されたね、オツキー。

ガンバレよ!!!

第269話 ギャラクシーの伝説

「なあ、宮よ、ここらでオレらの意志合わせしとこつぜ」

長須だ。

「そうだな」

大橋が頷いた。

「オウ」

宮さんが力強く答えると、控え室に集ったヤンキーたちが皆、一斉に長須に注目した。

「ここにいるヤツらは知つての通り、今日の大会はギャラクシーとのドンパチだ。アイツらの目的はオレと宮と大橋の首だ。だからオレらはギャラクシーと刺し違えてでも、アイツらを墓まで連れてくつもりだ。オマエらには絶対迷惑掛けねえ」

長須が雄弁に語った。

「ギャラクシーとの抗争は今日限りで終わらすつもりだが、オマエらこれから先、万が一オレらの身に何かあっても、絶対にギャラクシーには手を出すなよ。これはオレたちの個人戦だ。誰もオレらの

喧嘩の邪魔すんなよ」

大橋が力感あふれる面持ちで語る。

「オレたちは、今日限り番長を引退する。本当は、前回の大会終了後にみんなに発表する予定だったんだが、ちよつくら気を失っちゃまってな。ガツハツハツハ。次の世代にやオレらの遺恨やら何やらを残すつもりはねえ。ギャラクシーに言わせりゃ旧式？ そんな番長制もオレらで終焉だ」

さらに宮さんは、心の内を語り出した。

「オレらは今まで良かれと思ってやってきた。だが結果的にやる事なす事、裏目裏目に出ちまって、結局みんなに迷惑掛けちゃった……。これからは、新しい世代が、新しいやり方で、平和で楽しい学校生活を送ってくれ。オレたちは、心からそいつを願ってる……」

宮さんが語り終わると、『オレらは迷惑だったなんて全く思っただけですよ』、『今までありがとうございました』、『お疲れ様でした』などの声がかかり、控え室は惜しみない拍手に包まれた。

まさに漢たちの、熱い時代が終わろうとしている。

宮さんたちが引退してしまつたら、はたして今までのような平和な学園生活が送れるのだろうか……？

思えば宮さんたちのお陰で、他校との喧嘩や争いなど、ほとんど皆

無だった。

番長なんて、支配者だし単なる悪だ、などと思ってた時もあったが、宮さんたちのお陰で安心して生きてこれたんだなぁと、つくづく思う。

「ギャラクシーって、何人くらいいるんだろ？」

オッキーが聞いてきた。

「100人くらいいるんじゃない？」

そんなオレの適当な答えに……。

「6人だ」

オレたちの会話を聞いていた長須が答えた。

6人？ 野牛退学組の2人、アキガ、タカノブ、柴、織川の6人？

「そんなモンなの？」

思わず言ってしまった。

「元々少数なんだよギャラクシーって。初代の前田が現役の頃、バリバリ名前を売ったんだ」

長須が遠い目をしながら語った。

「みんなギャラクシーの名を聞くとさ、あんまり話したがらないだろ？ だからさ、ちゃんとした情報が回らないんだよな」

大橋だ。

「初代の前田って、KHJのボスですよね？」

一応、長須に聞いてみた。

「そう。アイツ一人の数々の伝説が、ギャラクシーっていう名を一人歩きさせたんだよ。アイツに狙われたら終わりだって言われてる。半殺しじゃ済まねえんだ。一晩監禁は当たり前。金属バットのフルスイングで病院送りにされたヤツは数知れず・・・」

長須が眉間にシワを寄せながら語る。

「アイツが中学時代、ヤンキーでもねえくフツクのヤツを意識不明の重体にさせちまった事があって、その時確か、年少に入ってたよな？」

大橋が長須に聞いた。

「そうそう、その時も確か、金属バットだったはずだ」

長須が答えた。

金属バットのフルスイングって、どんだけアブネエ〜ヤツなんだ？！

そりゃ〜、ギヤラクシーの名は売れるだろ〜よ。

オレの耳にもギヤラクシーはアブネ〜って噂くらい入るワケだ。

そりゃ〜、ギヤラクシーの事聞かれても、誰も話したからねえ〜ワケだ。

まさに番長クラスの会話だぜ。

くわばらくわばら……。

そうこうしているうちに、第1試合のコールが成された。

ついに『宿命の戦い』が始まったのだ。

『第1試合 野牛農業 VS 武蔵高等学校、まずは青コーナーよ
り、柴義経、入場！』

前回より始まったリングアナのコールにより、リズムカルな入場曲が会場に流れ出すと、場内のボルテージは一気に急上昇した。

そんな柴と対戦する長須。

第1試合からこの男とは、一体どれだけビッグな大会なんだよ今回は……。

そんな大会でオレがセミファイナルだなんて、どんだけオレって優遇されてんの?!

「長須、ガンバレよ」

「任せとけ」

宮さんのエールを受け、長須が力強く答えた。

「アレ？ 長須さん、ミケコさんは?!」

控え室の重い空気でテンパってるオツキーが、出陣直前の長須に声を掛けたが、あまりにもバカな質問だ。

・・・たく、余計な事を。

自分のバカな質問にすぐ気付いたオツキーは、訂正するかのように、「やっぱし柴なんて秒殺ですか？ ははは」と、先ほどの質問とは無関係な事を聞いた。

『続きまして、赤コーナーより、長須光雄、入場!!』

リングアナのコールにより、重低音に乗った重々しい長須の入場曲が場内に響き渡る。

「ミケコにはオレの試合見るなって言ってる。男ならオレの気持ち分かるだろ？ それと何だ？ 秒殺かって？ フン、リングから下ろさねえよ」

そう言っただけのオッキーの問いに対し、しっかりと回答した長須は、大勢のヤンキーを引き連れ、気合満々に控え室を飛び出した。

さすがO型、オッキーの心情も汲み取り、情味のある心遣いだ。

『ミケコにはオレの試合見るなって言ってる。男ならオレの気持ち分かるだろ？』・・・か。

そう言われると、何か、恥ずかしいじゃねえよかよ！ オレなんて、佐倉に自分の試合を見せた上、大衆の前で告白までする所だったんだぞ。

いよいよ、『長須VS柴』の、VSギャラクシーの1戦目が始まる。

頼むっ、絶対勝ってくれよ、長須よ！！

第270話 長須光雄VS柴義経

ギャラクシーを敵に回すのも危険だが、長須を敵に回すのも御法度だ。

リング下、長須のセコンドに付いたヤンキーの数、およそ20人。

その他、数多くのヤンキーが、客席から長須を見守る。

一方柴のセコンドには、武蔵の1年と思われる男が2人、不安な様子でビクビクしている。

オレたちは試合が気になり、オレ、ユイ、オツキー、朝露さんの4人で会場の一番後ろに陣取り、立ち見観戦を始めた。

「かなり動揺してるな、アイツ」

オツキーの言う通り、リング上の柴はリング下や会場の空気が気になるらしく、動きや表情に落ち着きがない。

ギャラクシーの斬り込み隊長、柴義経。

残念ながら、会場の雰囲気と対戦相手に呑まれたな……。

対峙した長須は、豪気に構えていて、威容を誇っている。

睨み合いの間合いにすら柴は入れない。

まさに、格が違う。

300人以上の観衆が見入る中、『宮VS長須』の頭領対決を『茶番劇』と言い放った柴に対して、早くも制裁が加えられようとしている。

レフェリーの西田栄作が大きく腕を振り落とし、ついに第1試合の火蓋が切って落とされた。

試合開始と同時に柴を掴んだ長須は、力いっぱい柴を持ち上げた。

あまりに急な出来事に会場は一瞬静まり返ったが、すぐに大歓声に包まれた。

長須はそのまま柴をマットに力強く叩きつける。

プロレス技、パワーボムだ。

「凄え〜」

さすがに長須のインパクトの大きさには恐れ入る。

「豪快な人ねえ〜」

隣で観戦してるユイも感心している。

「言葉もねえな、ははは」

その隣で観戦しているオツキーは妙に楽しそうだ。

マットに叩きつけられながらも長須の腕を掴んで放さなかった柴は、そのまま腕ひしぎの体勢に入った。

・・・が、長須はまたしても強引に柴を担ぎ上げ、2度目のパワーボムを炸裂させた。

バツタリ大の字に倒れる柴。

西田がカウントをとろうとしたが、長須が西田を振り払う。

倒れた柴を無理矢理立たせると、大きく振り被った右コブシを柴の脳天に叩き込んだ。

あまりのド迫力な破壊力に、会場で、固唾かたずを呑んだ。

勢いで、きりもみ状に回転してしまった柴は、うつ伏せでマットに倒れた。

襟首を掴んで柴を強引に立たせると、長須は柴の腰に腕を回した。

そのまま勢いで後ろに投げる。

「バックドロップだ！」

思わず叫んでしまった。

強烈なバックドロップでマットに叩きつけられる柴。

よろめきながら立ち上がる柴目掛け、ロープの反動を利用して勢いをつけた長須が、リアアットを叩き込んだ。

強烈な一撃で一回転する柴。

ドタ ドタ ドタ ドタ

場内は、観衆の興奮による、ストンピングの嵐。

「イ~~~~ッ、ヤッホオ~~~~ッ」

オッキーも大興奮だ。

仰向けに倒れ、とても立ち上がれない様子の柴に対し、西田が声掛けをしようとしたが、またしても長須が西田を振り払う。

長須の乱暴な振る舞いに対し、柴のセコンド陣も文句ありげだが、向かい側の威圧的な長須軍団の迫力に押され、リングに詰め寄る事すら出来ずにいる。

長須は倒れた柴をまたしても持ち上げると、本日3度目のパワーボムをヒットさせた。

マットに叩きつけられた柴は、ピクリとも動かない。

柴のセコンドがタオルを投入すると、西田がKOを告げたのは、ほぼ同時だった。

「うおおおおおおお！！」

イノシシが高らかに吠える。

「ワアアアアアアアアアアアアアアア」

会場は勝利の大歓声に包まれた。

「さすが長須だ。強え〜」

オツキーが会場のさざめきと一緒に大声で喜ぶ。

「力の差が歴然としてたわね」

ユイの顔もほころんだ。

かつて宮さんが中学時代、仲村と組んで長須に挑んだが、何度やっても倒せなかったという……。

その意味が分かった気がした。

長須、超強え〜。

第271話 芒みちるVS高城伸之

長須の前に柴が何も出来ず沈んだが、ギャラクシーが乱入したり、客が野次を飛ばしたりなど、特に取り立てて言うほどの事はまだ何も起きていないのが、ある意味不気味だ。

『第2試合 野牛農業 VS 武蔵高等学校、青コーナーより、高城伸之、入場!』

ベートーベン、交響曲第5番『運命』第1楽章に乗って、ついにタカノブが姿を現した。

貴船の姿は相変わらず今回もなく、タカノブのセコンドには前回同様、ひ弱そうな男が付いている。

タカノブの目は鋭く、外見を見る分には強い意気込みを感じるが……。

『赤コーナーより、芒みちる、入場!』

センチメンタルなにジャズ・バラードをバックに、芒が姿を現す。

野牛の生徒と思われる男たちを数人引き連れ、不敵な笑みを浮かべながらリングに上がる芒。

「あの2人、どうして戦う必要があるんだ？」

オツキーは理解に苦しんでいる。

「まるでジオンと竜崎みたいね」

ユイもこの試合を疑問視している。

2人の気持ちも分かるが、オレの口からはいちいち説明すんのがメンドクサイ。

・・・つつくか、理屈じゃないんだ。

タカノブの気持ちは全く理解不可能だが、芒の気持ちは何となく分かる。

上手くは言えないが簡単に言うと、長須への人情、そして、オレへの義理、宮さんへの仁義って所だろうか……………。

浪花節のB型、芒。

アイツは言葉も態度も常に反抗的だが、行動は常に裏表のない一本気だったりする。

だからこそ、オレもアイツに敬意を表し、馴れ合いの声掛けはしない。

アイツと同様、視線を合わせず唇を尖らしてやる。

それがオレと芒のベストな関係だ。

会場は、リングの2人に一点集中。

全面戦争時、強烈なインパクトを残したヒール芒と、前回ヒーローを演じたベビーフェイスカノブ。

客観的に見たら普通に楽しめる試合ではあるが、さすがにオレ的にはそうはいかない。

ここは、100パーセント芒の応援に回らせてもらおう。

試合はスローペースで始まった。

2人の対戦は初なのだろうか？ 距離を置きつつ探り合いをしている。

「なあ〜ジオン、さっき会場の関係者が言ってたんだけど、まだ竜崎が姿を現してないらしいぞ。この時間で顔を出さないっておかしくねえ〜か？」

オツキーが困惑の表情を見せる。

「ガチユルの法則じゃねえ〜の？ わざとギリギリを狙ってるのかもな。それにアイツ結構遅刻魔だぜ」

「わざとギリギリってのはあるかも。あゝ、何となく竜崎の気持ち分かるなあゝ。やっぱり一人だけ敵陣の控え室はヤダもんな。かと言ってジオンがいる控え室には入れないし……」

オツキーは自分の言葉で妙に納得している。

敵陣ねえ……。

もしかしたら、竜崎がラスボスかもよ……、オツキー。

リング上では、ついにバトルが始まった。

先に仕掛けたのはタカノブ。

高速ダッシュで芒の懐に忍び込むと、高さのある飛び膝蹴りを芒のアゴ目掛けて放ち、着地と同時にすかさずフックの乱れ打ちに転じた。

芒は両腕でガードしているものの、タカノブの攻撃数発は顔面をとらえている。

力強く、強烈だ。

オレの時と、全然違うね？ タカノブ、全然違うんだけど……。

反撃に転じた芒だったが、巧みにかわしたタカノブは、腰を沈め、右足を前に出すのと同時に右フックを放った。

・・・が、それはフェイク？　すぐさま左フックを放つタカノブ。

・・・それって、オレの技じゃね？　それ、オレがタカノブ戦で繰り出した技だよな？

客に媚こびを売るような態度もなければ、演技している様子も見受けられない。

タカノブは、芒と本気で戦っている・・・。

一方芒も、売られた喧嘩は100パーセント買う男。

真っ向から来るタカノブに対し、真正面からぶつかっている。

芒の荒々しい攻撃もそれとなくヒットし、一進一退の攻防戦が繰り広げられた。

いつしか2人の戦いは、見る者を魅了するような、好試合になっていた。

打撃戦の続く中、流れを変えたのはタカノブだった。

隙を突いたミドルキックを芒のスネに当て、バランスを崩した芒の頭部へハイキックを放つタカノブ。

左足を軸にして、1、2、3発、こめかみ、頬、アゴへとヒットさせた。

「凄えくな、アイツ、何なのあの蹴り……」

オツキーが唸る。

間髪入れず、1、2、3発、胸、ノド、アゴへとトラースキックを炸裂させるタカノブ。

トドメと言わんばかりに、華麗なローリングソバットを芒に決めた。

その見事なまでのソバットはまるで、リチャードVS竜崎戦の、竜崎の後ろ回し蹴りを見ているようだ。

吹き飛んだ芒は、リング中央でバツタリ大の字に倒れた。

芒めがけて飛んできたタカノブは、すぐさま馬乗りになり、超高速でパンチの連打を芒に放った。

あまりの凄惨さに、会場からは悲鳴も聞こえる。

西田栄作は躊躇わずに試合を止めた。

「フアアアアアアアアアアアアアアア」

一斉に場内が沸く。

かくして、第2試合、芒VSタカノブの一戦は、タカノブの完全勝利に終わった。

「ジオン、オマエ、よくあんなヤツに勝てたな・・・」

オツキーが呟いた。

「・・・るせえ」

全くだ。

全くオツキーの言う通りだ。

あのヤロオー、マジで喧嘩強ええ。

タカノブに本気で来られてたら、はたしてオレは、勝てたのだろうか・・・?!

リング上、タカノブに介抱され、芒が立ち上がった。

タカノブと、リング中央ガッチリ握手する芒。

会場からは、精一杯ファイトした2人に対して惜しめない拍手が送

られる。

オレがタカノブ戦で味わいたかった光景が目の前にあった……。

タカノブは、芒の耳元で何やら囁いた。

その時、リング上の芒と偶然にも目が合った。

……瞬間、芒はオレを、蔑むような目で見下した。

……な、何かを吹き込まれたのか？ タカノブから、まことしやかな嘘を吹き込まれたのか？！

控え室に戻る芒と擦れ違う際、もう1度芒と目が合った。

明らかに侮蔑の表情だ。

野牛で会った時や、試合前の芒の表情は、間違いなく穏やかだった。

……それが今ではオレを軽蔑するような目で睨にらんでいる。

フン、なア～なア～の関係で、ヨロシクやればいいさ。

元々芒みちるはタカノブ一派なんだから……。

どうでもいいが、何か胸クソ悪イ。

芒と少しでも分かり合えたなんて思っちまった自分に、ムカつく！！

第272話 大橋剛太VS秋鹿準

『第3試合 吉岡工業 内 紛争、青コーナーより、秋鹿準、入場！』

特攻服に身を包み、地面まで着きそうなほど長いハチマキをしたアキガは、歯抜け面で笑みを浮かべながら、ゆっくりと姿を現した。

吉岡の生徒と思われるセコンドが一人、アキガに寄り添って歩いてくる。

国民的アイドル、ABC84（イー・ビー・シー・エイトフォー）の『会いたくなかった』が陽気に流れる中、悠々と練り歩くアキガ。

大橋をナメてるのか、ただのミーハー野郎なのか……。

どっちでもいいが、呆れるほどのリラックスムードで入場してくるアキガ。

『続きまして、赤コーナーより、大橋剛太、入場！』

入場曲は野沢栄吉の『SOMEBODY・S NOON』、これまた渋い選択だ。

荘重な雰囲気の中姿を現した大橋の目は、いつもの優しい瞳などではなく、狼のような鋭さを持っていた。

そんな大橋の後ろからは、見覚えのある顔触れが歩いてくる。

かつて武蔵に乗り込んで、宮さんにねじ伏せられた吉岡の1年たちだ。

互いのバックグラウンドやプロフィールなどを編集した映像が映し出される大型ビジョンや、大袈裟なほど長い花道などが無くても、十分に2人の意気込みや生き様は、入場シーンだけで感じ取れた。

「ジオン、そろそろ控え室に戻ろうぜ」

オツキーが言う。

「そうね、思えば次よね、ジオンの試合」

ユイが思い出したように言った。

大橋の試合、見たかったが、しょうがない……。

控え室に戻ると、宮さんが目を閉じて精神統一をしていた。

その後ろで、長須や野牛の仲間たちが黙って宮さんを見守る。

芒の姿はない。

どろぢやら帰ったようだ。

変わりに、日丸ミケコと、その手下4人の姿があった。

しかも気合満々、特攻服を着ている。

「ミケコ〜」

「ユイ〜」

ミケコとユイは、仲良く抱き合ったりなんかしている。

朝露さんも、かつての因縁の相手であるピンクの女と和気藹々と語らっている。

いいよな女ってさ、そ〜やってすぐ仲良くなれてさ。

・・・と、その時、長須に肩を揉んでもらって、気持ちよさそうにニッコリ笑う宮さんが視界に入った。

ど〜せオレは、かつてのライバルが仲間になるとか、そ〜いうシチュエーションに恵まれない星の下に生まれましたよ。

「あの西田ってヤツ、大丈夫か？ 秋鹿、いつもナイフ隠し持っているだろ？」

長須が宮さんに聞いた。

「誰がレフェリーやっても見つけれんねえ〜だろ。準はパンツの中に隠してるから」

宮さんが素っ気無く答えた。

マジ？ アキガがどこからともなく出してくるナイフって、パンツの中から取り出してんの？ き、汚ったねえ〜！！

「大橋もそれは十分承知だろ〜し、とっくに想定内だろ〜よ」

宮さんが言った。

「そうだな。むしろ心配なのは秋鹿か。あん時の恨みもあるだろ〜し、大橋は絶対逃がさねえ〜だろ〜しな」

長須が感慨深く言った。

「あの時の恨みって、何なんですか〜、長須さん・・・」

ここぞとばかり長いものに巻かれようとするオツキーが、自分の身分も弁えず、馴れ馴れしい口調で長須に聞いた。

「入学早々、吉岡で天下統一の乱戦を勝ち抜き、大橋と秋鹿が対峙した。その時、大橋の頬とこめかみに大きな傷を付けたのが秋鹿のバタフライナイフだ。結局秋鹿を下し天下を取った大橋だったが、その代償に、一生残っちまうような傷を顔面に作っちまっただってワ

ケだ」

長須が大橋とアキガの昔話を話してくれた。

あるあるある、確かにある、大橋の顔に刃物傷がある。

あの2人には、深い因縁があつたのか……。

……と、その時、会場のスタッフらしき人が控え室に来るなり、オレの傍に歩み寄った。

「亀鶴ジオンさんですよ？ あのですね、対戦相手の竜崎光一さんなんです………」

第273話 亀鶴ジオンVS竜崎光一

「先ほどお電話がありました、体調不良で今日はお休みしたいと申し出がありましたて・・・」

「はあ？」

体調不良？ お休み？ 小学校を休むんじゃないかねえ〜んだから・・・。

「私共もですね、ドタキャンだけは避けたかったです、何分今から強制的に連れて来ようにも、時間が・・・」

もう、ワケ分かんねえ〜！

竜崎がドタキャン？ はあ？！

「ジオン、所詮竜崎と戦おうなんて無理があつたのよ。アンタさ〜、竜崎にちゃんと承諾得たの？ 勝手にカード決められて、あつちだつて困惑してたんじゃないの？」

確かにユイの言う通りだ。

だが、竜崎は、決まったカードを突然ドタキャンするよ〜なヤツじや・・・。

「今からじゃ、待ったってムリだな。諦めろ、ジオン」

オツキーがオレの肩に手を置いた。

「……マジかよ？ 何なんだ、この虚しさ……」

「おつ、大橋さんだ！！」

控え室に帰って来た大橋にオツキーが駆け寄る。

「お疲れ〜！ 余裕？」

無傷な大橋に、宮さんが声を掛けた。

「オレ的には45秒を切りたかつたんだが、2分もかかっちゃったよ。はっはっはっは」

高笑いする大橋。

どうやら大橋がアキガを征したようだ。

『ここで、大変申し訳ありませんが、ご連絡申し上げます。第4試合のセミファイナルで予定されてました、『亀鶴ジオンVS竜崎光

「『の試合ですが、竜崎選手の欠場により、亀鶴ジオン選手の不戦勝という運びになりました。謹んでお詫びを申し上げます・・・』
会場に流れる、オレの不戦勝を告げるアナウンス・・・。

「待てよ、オレは不戦勝なんて御免だ！！頼む、もう少し待たせてくれよ、竜崎なら必ず来るから！アイツはドタキャンするよくなヤツじゃねえーんだ！ただ遅れてるだけなんだって！！」

オレは誰彼構わず頼みまくった。

「ジオン落ち着け！諦めろ！！」

オツキーがオレの動きを遮る。

「放せて！ 竜崎はそんなヤツじゃ・・・」

掴みかかるオツキーを振り払うと、今度はユイが目の前に現れた。

「ジオン、目の前の現実から目を逸らさないで！悔しさはアタシも一緒なの！！時には諦めが肝心よ」

目の前の現実から目を逸らすなだと？ 時には諦めが肝心???

「オレの気持ちなんて誰も分かんねえーって！！」

やり場のない怒りの感情を抑えきれず、オレは大きな声で怒鳴った。

「アンタの気持ちなんてそりゃー誰も分かんないわよ!!」

ユイも同じくらい大きな声で怒鳴り返す。

「まーまー、ジオン君もユイちゃんさんも落ち着いて」

大橋が仲裁に入った。

・・・と、その時、イノシシがノツシノツシとやってきた。

いつになく怖い顔をしている。

オレたちがうるさくしていたから怒ったのだろうか？

「長須、コイツらも試合前で感情が高ぶってたんだよ」

長須の表情を見て、大橋は「まーまー、長須、単なる内輪揉めだから」的に長須に促す。

「ジオン君!!」

長須がオレの名を呼ぶ。

「は、はい……」

思わず大きな声で返事するオレ。

「不戦勝も勝ちだ！ 何も卑屈になることはない！！ ジオン君の闘気が、戦わずして相手を怯ませたのだ」

長須が雄弁に語る。

オオオ？！ オレは長須に慰められてるのか・・・？

闘気？ オレの闘気が竜崎を怯ませたってか？！

ちょっと違う気もするが、顔に似合わず温かい長須の温情だけは買おう。

お陰で怒りの感情が少し治まったような気がする・・・。

その時宮さんは、試合前の精神統一に励んでいた。

黙して語らず・・・。

今はとてもありがたい。

オレも全然心の整理がついてないし、竜崎との事や今の気持ちを、上手く宮さんに話せそうにない・・・。

結婚式の披露宴会場。

沢山の親戚や友人がご祝儀を受付に渡し終え、各々席に着き新郎新婦の入場を待つ中、突然披露宴会場に流れる哀しき中止のアナウンス。

結婚式当日、花嫁に逃げられた哀れな新郎。

まるでピエロじゃん？ オレもまた、そんなピエロに似てねえ〜か？！

せつかく佐倉に告白する勇気をこの試合で養おうと思ってたのに。

こんな事になるなら、竜崎戦なんて望まなきゃ良かった・・・。

あの日、BARカシオンで竜崎戦を決めたんだ。

そもそも、宮さんをあの場所で見付けなければこんな事にはならなかった・・・。

あの時、宮さんが乗ってきた車なんて見つけなきゃ・・・。

・・・そもそも、初めて宮さんに会ったあの日、車を押すのを手伝わなければ・・・。

ぐわあ~~~~~つ、オレは何を考えてるんだ？！

あの日、あの時、あの場所なんて、そんなの掘り起こしてもしよ〜がねえ〜だろ！！

ちつきしょく、頭がおかしくなりそくだ！

メガトン級のストレスを抱えたタカノブ戦に引き続き、貴船のヤロくのせいで1週間の停学、しかも傷害。

狂いそうになるのを何とか誤魔化しながらここまで来たが、ここに
来て竜崎にまで……。

万が一、またしても宮さんが負けたりしたら……、オレは正
気を保てるのか？！

第274話 泣き言

「メインが始まるまで、15分ほどのインターバルを置きます」

会場のスタッフらしき人が伝えてくれた。

オレのせいと・・・？ とか思っていると、

「ジオン君と竜崎君の試合が飛んだから、KHJが到着する予定まで時間が空いたんだよ」

大橋が語った。

な〜んだ、オレのせいかと思ったよ。

KHJも見たいのね、『宮さんVS織川』。

「あつ、ユイ先輩、先に会場に入ってますね」

「早く〜」

ピンクの女と朝露さんは控え室を出て行った。

あの2人、すっかり仲良くなったもんだ。

「ジオン、言いなさいよ仲間なんだから。竜崎と一体何があったのよ」

「ジオン、教えろ」

ユイとオツキーが詰め寄る。

宮さんは目を閉じて腕を組み、椅子に深く腰を下ろして座っている。

少し距離はあるが、今の宮さんにはこちらの会話は余裕で聞き取れるだろう。

これ以上黙すのも不審だ。

観念するか……。

朝露さんもないことだし……。

「オマエまさか、竜崎の変な噂信じてるんじゃないやねえ〜だろ〜な？
アイツが裏番長だの宮さんと織川のカード決めたのアイツだの」

オツキーの言葉に宮さんは薄目を開けた。

オイオイ、今は余計な事言つなよオツキー。

カンパの件とか出すなよな〜。

「そんなんじゃないやねえ〜よ。ムカついたんだよ、竜崎の態度が……」

オレは正直に答えた。

「何を言われた」

オツキーが呆れ顔を見せる。

「野牛との全面戦争が八百長だったっていう柴のマイクパフォーマンスに対して竜崎が、『だから言ったじゃないっスか、ジオンさん。オレはもう、誰も信じないっス』と言ったんだ！！ だからオレは、『竜崎！ オレもおめえを信じねえええええ！！』って言ってやった」

「はあ？ アンタ何か勘違いしてない？」

ユイが言った。

「勘違い？」

「アンタ竜崎が、柴の言葉信じたと思ってるの？」

「竜崎は、『だから言ったじゃないっスか』って……」

「全面戦争が八百長だとか、長須と宮さんの試合が茶番劇だったって知って、竜崎が怒ったとでも？ 竜崎は当事者よ、アンタ何ボケてんの？ 竜崎は、『だから言ったじゃないっスか、ジオンさん。オレはもう、柴の言うことを信じないっス』って言いたかったんだと思うよ。つい興奮して、『誰も信じない』って言っちゃったんじゃない？」

はうあっ！

そ、そうか、だ、だよな。

竜崎はよく、『ジオンさん、柴には気を付けて下さいよ。アイツ、どうも信用できないっス』って言ってたっけ。

オレと柴が仲良いから嫉妬してるのか？ なんて思ってたけど、竜崎は最初っから柴は嘘つきだって、見抜いてたのか……。

その時オレは、「なあ竜崎、オマエが考え過ぎなんだよ。単なる被害妄想ってヤツだ。柴はマジで良いヤツだと思うぞ」なんて言うてたっけ。

ある日、『また柴の味方っスか？ ジオンさん、いい加減アイツの肩持つのやめた方がいいっスよ。ジオンさんはアイツの良い所しか見てないから分からないんス。アイツがどんなヤツなのかを知らないからそんな事が言えるんス』なんて言われた事もあったな。

「感情が入ると冷静な分析は出来ないぜ」ってオレが言つと、『……
・オレは冷静に話してるつもりっス』って答えた竜崎。

今思うと、気の毒だったな、竜崎……。なんて、思わないぞオレは。

オレが怒ってる理由はそれだけじゃないんだ。

「あの時どくして宮さんにヘッドギアもマウスピースも付けさせなかつたんだ、アイツは。その時点でセコンド失格だろよ」

「ジオン、そしたらオマエだって同罪じゃねえか！」

オツキーが力強く豪語。

「うぐぐ……」

「まず宮さんヘッドギア付けねえだろ、最初から。マウスピースだって、持ってたって弾かれたよ、きつと」

宮さんが聞いているのに、オツキーは遠慮なく言う。

「竜崎は内輪揉めしてる暇があるなら対策練ろっつて考えてたんだと思うよ」

ユイが推論を述べた。

「宮、オレたちそろそろ客席に行ってみるわ。リングサイドの特等席に陣取るから、何かあったら飛んでくから安心しろ」

長須はミケコや野牛の生徒たちと控え室を出て行った。

「じゃ、頑張れよ」

大橋も吉岡の生徒らと控え室を出て行った。

とうとう控え室にはオレとユイ、オツキーと宮さんの4人だけになっってしまった。

これで心置きなく言い辛かった事も言えるってもんだ。

ただ、カンパの件は伏せとかなないと、今まで宮さんに隠してきた苦労が水の泡だ。

そもそもオレが竜崎に対してムカついたのは、修学旅行明け、竜崎がギャラクシーに勧誘されたって聞いた時だ。

あの時、竜崎はタカノブを賞賛するような発言をしていた。

この時の、オレが竜崎に抱いた不信感はだいたい20%！

そして、王者VS挑戦者の時。

オレはタカノブ戦で精神的に大ダメージを負っていた。

その直後メインで、ギャラクシーの登場と宮さんの劣勢。

あの時のオレの思考能力は、絶望と希望の狭間はざまでかなり低下してたっけ……。

そんな矢先、竜崎の、『宮さんはずっと、誰かに倒されるのを望ん

でたんスよ」という意味深な発言。

その時オレは、竜崎は実はスパイなのでは？という疑念が生まれたんだ。

竜崎は柴やタカノブと親交があるし、野牛の橋や仲村とも交流がある上、宮さんに対し常に厳しい態度の竜崎 e t c . . . を思い出し、オレの疑いは増した。

この辺りのオレの不信感は60%！

それで試合後に、『オレはもう誰も信じないっス』という、オレに對しての挑発的発言？にキレたオレ。

それから1週間後、停学明け耳にした、学園内に流れる竜崎の噂。

織川と宮さんを戦わせるよう仕向けた張本人、プラス、宮さんを陰で操る裏番長、アンド、カンパの件に携わっていたという噂の数々・
・
・。

火のない所に煙は立たぬ . . . ってな言葉が脳裏をかすめる。

もう、この時点でオレの不信感は80%だ！

ほんで部室で竜崎と直接話した際、衝撃的な事実を知った。

カンパの件 . . . 、竜崎は知っていた。

さらに、カンパを称賛するコメント。

この時オレの不信感は、ついに100%に達したね!!

竜崎がギャラクシーのスパイにしろ、そうじゃないにしろ、テルの仇であるカンパを回す敵ないし、カンパの件を推奨している時点でアウト。

数々の疑念も加わって、ダメなモンはダメに行き着いたんだ。

でも、竜崎は、今まで苦楽を共にしてきた、かけがえのない仲間……。

オレの心の中では常に疑心暗鬼との闘いだった。

さんざん悩んだ挙句、最終的に竜崎との和解を望んだオレは、大会での竜崎戦を所望した。

怒りや憎しみではなく、戦う事によってお互いの誤解を解こうと思つてカードを組んでもらったのに、結果はオレの不戦勝。

どこまで空回りすりゃいいんだ?!

オレはぶっちゃけ自分の矛盾点にも多少は気付いてたんだ。

本音は竜崎の本心を聞きたかっただけなんだ。

『オレはジオンさんの味方っス』って言う一言が欲しかった……

ただ、それだけだったんだ……。

第275話 宮劇場、序幕開演

嘆息気味にオレを見るオツキーとユイに向かってオレは声を荒げた。

「アイツはギャラクシーを正義の味方って言ってたんだ！」

竜崎はカンパの件について、『アレは誰にも迷惑掛けてないっスよ？ 不良だけが払わせられてるんす。マジメなヤツはチクるんで、結局善にはカンパは回ってこないじゃないっスか。逆に不良、つまり、悪にだけカンパが回ってるんす。要するに、社会は上手く出来ていて、その部分に関して言えば、ある意味ギャラクシーは正義の味方なワケなんす。あと、ここだけの話っスけど、カンパで集めた金は、KHJが慈善事業の一環として寄付してるって話っス』って言ってた。

「正義の味方？ 言い切ってたワケ？」

ユイがオレに訊ねる。

いや、言い切ってはいないな。

ある意味……って言った。

ある意味……。。。

「言い切つてはいねえけど、アイツはギャラクシーに肩を持つような言動が多い。だからオレは……」

「もういいよジオン。ガキじゃねえんだからキレるなって」

オツキーが人を見下したような態度で溜息をついた。

「キレてねえよ!!」

「オマエ疲れてたんだよ。色々あつて疲れてたんだ。少し頭冷やして冷静になれば単なるコミュニケーション不足だって気付くぜ。第三者の立場で自分を客観視できれば、あつと言う間に解決するぞ」

エラソくなオツキーがオレに説く。

「うゝゝん、核心部分が抜けてる気がするのよね。それしきの事で、こんな大きな会場でアンタがリングに上がるうとしたわけ？」

流石ユイ、鋭い所を突いてくる。

……確かに、ユイの言う通りかもしれない。

オレが竜崎戦を決意した過程で、一番大きな核心部分が欠けてるのは確かだ。

今まで散々いいわけをかましてきたが、ただ単に自分にも嘘をつい

て核心部分を隠し通してただけなのかもしれない。

気がつかないフリ、忘れたフリ、記憶がないフリをしていただけなのかもしれない。

あまりに大きな衝撃だったから、なかなか受け入れられなくて、その部分に触れるのすら、思い出すのすら拒んでいたのかもしれない。

・・・かもしれないじゃなくて、事実、そうなんだ。

王者VS挑戦者、メイン終了後に起きた悪夢。

あの時の柴のマイクパフォーマンス後が事の始まりだった。

『今までホント、ゴメンナサイ！ こんなムサイ男をいつまでものさばらせてしまい、ホント、申し訳ありませんでしたっ！』

ドツと沸く会場。

そして・・・！

『このムサイ男、ホモなんですよ、実は！』

そんな柴の戯言に対して観客席の武蔵サイドから、

「相手、誰？」「竜崎じゃね？」「そ〜いえば竜崎って、スゲ〜モテるのに彼女いねえ〜よな」

そんな声が飛び交った。

それを背中越しに耳にした竜崎は、黙って腕を組んで静観の構えをとっている。

さすがブルードラゴン、どんな時でも冷静だ。

・・・と、その時！

「ジオン先輩、聞きました？」

オレの隣にチヨコチヨコつと現れた朝露さん。

「え、何？ 柴の戯言？」

「客席の声ですよ。光一君がホモなんじゃないかって」

「あ〜、気にしてねえ〜だろ本人は」

「ですよね。私も別に気にしなきゃいいんですよ・・・」

「へ？ どういう事?!」

朝露さんは何を気にしてるんだ？

別に竜崎がホモ呼ばわりされた所で朝露さんには関係・・・。

・・・ん??

「も、もしかして朝露さん、竜崎の事……………」

オレは小声で朝露さんに訊いてみた。

この後朝露さんの口から、とんでもない衝撃発言がなされる。

それはまるで核爆弾のようなもので、その一言がオレが竜崎にキレるきっかけでもあったのだ。

そう、誰も悪くない。

それは分かっているのだが……。

宿命の戦い、メインを前にした控え室。

試合を前にして緊張しているであろう宮さんが、ニッコリ優しい笑みで、

「亀ちゃん、公約通り上手いかなかったけどさ、言っちゃえば？
好きって」

突然の爆弾発言に控え室には冷たい空気が流れ込む。

へ？ 何をおっしゃいます、その宮さん！！

「え？ 何？ 何の事?!」

「何だよジオン、それ・・・」

ユイとオツキーが目を丸くする。

「今更黙ってたってしょくがない。みんなに言っちゃいなよ亀ちゃん。仲間同士、隠し事はいけないよ。ガッハッハッハ」

オレを慰めてるつもりなのか？ 宮さん！！

「な、何を隠してんだよ、ジオン」

敏感なA型オツキーが突っ掛かってくる。

くっそく、観念するしかねえか・・・。

「竜崎戦に勝ったら、佐倉に告白するって・・・、宮さんと約束したんだ」

「佐倉に告白う~~~~? 抜け駆けすんのかジオン、コノヤロ〜!」

「ゴメン、オツキー。ちゃんと話そうと思ってたんだが・・・」

・・・つてのはいいわけで、ホントはオツキーなんぞ敵とも思ってたんだが。

まさかそこまでムキになるとは、コイツもよっぽど佐倉の事を想ってたんだな・・・。

「オツキーが先に告白しちゃったら？」

目を吊り上げながらブツブツと独り言を呟き始めたオツキーにユイが肩入れを始めた。

一方、宮さんはバツが悪そうな顔をしている。

控え室に不穏な空気が・・・。

その空気の流れを一気に変える驚愕な一言が宮さんの口から飛び出した！

「亀ちゃん、オレも頑張るよ。試合の勝ち負けに関係なく、オレも、素直な気持ちをぶつけてみるよ」

ユイとオツキーは、とっさに宮さんの方を向いた。

マ、マズイぞ、マズイぞ！

宮さんが告白する気だー!!

それはマズイぞ!

オレはとっさに叫んでいた。

「宮さん、それだけはダメですって!」

第276話 サライの空へ

全ての始まりは約半年前。

桜が散った頃まで遡る……。

「几帳面すぎる男は嫌いでしょ？ O型女性は細かい事を気にしないから。あと、カツコつけマンも嫌でしょ？ 例えばさ、言動がキザだったり、髪をかき上げる仕草とか鼻で笑う所とか……」

アイツみたいに……って言おうとしたが寸前で止めといた。

「確かにキザなのは苦手ですう。男の人には常に自然体で居てほしいですねえ」

「O型ってさ、明朗じゃん、いつも。だからさ、隠し事が苦手なんだよね。日頃の愚痴とか人の悪口とかウザイよね」

「そうそう、そっなんですよねえ。逆に明るい話題や、良い噂だったら有難いんですけどねえ」

軽快なリズムで流れるジャズを聴きながら、店内にオブジェとして置かれたアメリカンバイクを眺める朝露さんは、まだ緊張気味に見える。

カウンター席のジェシーと愉しげに会話をするバーテンダーのユイを遠目で見ながら、オレと朝露さんの会話を黙って聞いてる宮さんは、屈託無い笑顔でグラスビールを飲み干した。

オレは目の前のタンブラーグラスの氷をコロコロと転がし、オン・ザ・ロックのウイスキーを、ゆっくりと口に含んだ。

熱い液体が喉を通り、胃袋を刺激する。

先ほどオレのジンをストレートで一気飲みした竜崎は、まだトイレから帰って来ない。

「ところで雫ちゃんは、彼氏とかいるの？」

宮さんが唐突に訊いた。

「いないですう〜。早く、カレシ欲しいですう〜」

ほくほく顔のスマイルを見せる朝露さん。

その笑顔を見て、オレと宮さんも満面の笑みを溢した。

歌の練習を一人でするほどゴールデンウィークのカラオケを楽しみにしていた宮さんだったが、オレン家での飲み会により、宿酔で泣く泣くキャンセル。

その時のリベンジなのか、はたまたB型特有の人情なのか分からないが、朝露さんの家庭の事情を聞いた宮さんは、先頭切つてBARカシオンに向かった。

朝露さんは、母の稼ぎだけではメシを食っていけないという事で、夜のバイトを始めたのだ。

何でも母は家賃と旦那の残した借金を稼ぐのが精一杯なので、代わりに朝露さんが、弟と妹のメシ代を稼いでるんだとか。

宮さんのハートを刺激するのは朝露さんの不幸な境遇だけじゃない。

例のオレン家での飲み会時、ユイと宮さんがサシで飲んでる時、

「どうなのよ？ 宮さんはどんな女の子が好みなのよ？ 宮さんの恋愛観聞かせてよ」

宮さんのグラスにビールを注ぎながらユイが聞いた。

「オレ？ うゝゝん、好きになった人がタイプになるってカンジ？」

「あはは、分かる分かる、アタシも同じ。やっぱりB型同士、気が合うわね」

そんなカンジでノリノリだった2人。

初めて朝露さんを見た時のウツトリした顔もそうだし、トイレから

出るとタオルを持って待ってる朝露さんに感激し、「あのコ、何て良いコなんだろう」と大絶賛していた。

おそらく今の宮さんのタイプの女性は、目の前の朝露さんそのものなだろう。

「O型女性ってさ、男友達を大事にする男が大好きなんでしょ？」

朝露さんに聞いてみた。

この時オレは宮さんに、O型女性を口説くにあたってのアドバイスを遠回しに示していた。

「仲間を大切にする人って事ですかあ〜？ そうですねえ〜、男友達に信頼されてる人とかカツコイイと思いますよ〜」

そんな朝露さんの答えに、案の定宮さんは耳をヒクつかせた。

「宮さんみたいなタイプがモテるんですよ、O型女性に」

オレは宮さんを嬉しがらせてみた。

馬並みに鼻の下が伸びる宮さん。

宮さん、分かり易っ！

「O型女性は主に聞き上手じゃん。やっぱさ〜、話を聞いてもらえ

ると嬉しいよね？ O型女性ってさ、人に何かを教える事に喜びを感じるよね。だからさ、人に教えて下さいって頼られたりしたらさ、嬉しいくない？」

「嬉しいですねえ。でも、自分から私は教え好きです。なんて言えないじゃないですかあ。そんな事言ったら頭弱そうに思われますよなえ。」

「そうそう。だから、O型女性は主に聞き役に回っちゃっじゃん。そんなO型女性の話を聞いてくれたり、頼ってきてくれたりする男性が現れたら理想的だよな。」

「ジオン先輩、凄いです。女の子の気持ち、よく分かってらっしゃいますねえ。ねえ、ねえ、ジオン先輩、もっと詳しく色々教えて下さいよ。」

「オイオイ、何かオレが朝露さんを口説いてるみたいじゃね？」

血液型蒞蓄に興味津々の朝露さん。

そんなオレと朝露さんに、宮さん嫉妬した？

「栗ちゃん、まだ、高校1年生だよな。」

今まで沈黙を続けた宮さんが、オレたちがここに来た理由を語り出した。

「お説教ですか？」

「いや、説教ではないんだ。ただ、ここら辺はさ、見ての通り、色々危険な場所だ……」

竜崎も含めオレと宮さんは、純粹に朝露さんを危険な夜の仕事から遠ざけたいと思っただけだった。

結果的にユイも含め、朝露さんは夜のバイトをクビになったのだが、朝露さんはきつとオレたちの真意は受け取ってくれたと思う。

「お姉ちゃんが働いてる姿を、弟くんたちに見せてあげられるような所で働こうよ」という宮さんの言葉通り、その後すぐ朝露さんは昼のバイトを始めたから。

季節は夏を迎え、ジリジリと太陽が照りつける夏休み中盤、キンキンに冷えたオツキーの部屋で、オレはある雑誌に注目した。

「花火……、100発？ 随分シケてんなあ〜」

「そうっすか？ そんなモンっしょ？」

竜崎がベースを弾き鳴らしながら、ぶつきら棒に言った。

「オマエ田舎モンか？ 普通花火つつたら3000発は上がるだろ〜」

「そうなんスか？ で、どこの花火大会なんスか、そこ」

「稲田……」

「オレと宮さんの故郷っス」

稲田村。

野牛町より緑が豊富な村。

「じゃあ、2人とも稲田出身なの？」

「そうだよ」

宮さんがリズムカルにドラムを叩きながら答える。

「稲中？ 遠いですね〜」

机でノートパソコンと睨めっこしていたオツキーがメガネをずらしながら言った。

「……な、なるほど。」

だから2人はこっちで一人暮らししてんのか。

あっちには中学校こそあるものの、高校ないから……。

・・・って事は、自動的にアキガや仲村、織川なんかも稲中出身か。

「なあ、この、稲田祭りっての、みんなで行かねえ？」

切り出してみた。

竜崎や宮さんの生まれ故郷、見てみたい。

「別にオレは構わないっスよ」

「オレも、問題ねえけど」

「じゃ、決まりって事で。オツキー、さっそく皆に聞いてみてくれ」

「オツケー」

ユイと朝露さんは空いてたようだが、残念ながら佐倉は都合がつかないそうだ。

せつかくの夏休みイベントだったが仕方ない。

ま、佐倉がいたらハメを外せないからな。

・・・稲田祭りか。

どんなちやちい催し物でも、どんな小さなイベントでも、どんなツマラナイ行事でも、とことん楽しむのがオレ様流だ。

よしっ、超ハイテンションで青春満喫するぞぉ~~~~~!!

第277話 蝉時雨 *semi sigure*

稲田祭り当日、石田駅。

「なんだよ、浴衣じゃねえのかよ?!」

ユイと朝露さんはラフな格好で登場した。

せっかく夏祭りっていう最高のシーンなんだから、せめて浴衣くらい着てもらいたかったぜ。

うちの名花（佐倉）が不在なんだからさあゝ・・・。

「亀ちゃん、いなせだねえ」

「いやいやいや、宮さんも甚平じゃないですか。宮さんこそ、いなせですよ」

夏休みだけあって、駅周辺は若者たちで賑わっていた。

流行ファッションもそうだが、独自ファッションに身を包んだ若者が多い。

奇抜な服装が目立つ同年代の少年少女。

中でも一際目立つゴスロリファッションの少女に目がいった。

「オイ、ジオン、アレ見てみるよ。メイドさんがいるぜ」

「いや、あれはゴスロリだろ」

「ゴスロリ？ 何だ、ゴスって」

「オツキー、オマエ、ゴスロリも知らねえのかよ？！ ゴシック
ロリータファッションだよ。略してゴスロリ」

「ゴキブリなら知ってるが、ゴスロリは知らなかったな・・・」

「何と比べてんだよバカ！」

ま、一見メイド服にも見えなくもないが・・・。

メイドと言えば、ユイと朝露さんだ。

BARカシオンでのテーブル投げ事件でバイトをクビになったユイと朝露さんは、2人揃って新たなバイトを始めた。

それがメイドカフェだったのだ。

朝露さんがユイを誘ったカタチだが、素直にメイドに扮したユイには心底驚いた。

何たってユイがメイドなら、癒しのメイドカフェが恐怖のツンデレカフェと化す。

ツンデレならまだいいが、ツンツンだツンツン。

それと比べておっとり系の朝露さんは、まさにメイドが天職だ。

結局テーブル投げ事件の根源である竜崎は当時の記憶が全くないらしいが、その醜態の詳細を竜崎に聞かれても、朝露さんは口を濁したようだ。

竜崎に余計な心配を掛けさせないようにという、朝露さんの優しい心が窺える。

ま、オレとユイと宮さんが竜崎に聞かれても答えなかったのは、ただ単に説明が面倒だったの言うまでもない。

そんなユイと朝露さんが始めたメイドカフェで、またまた事件が起きた。

朝露さんがドジって、ミケコの手下、ピンクの女の鼻っ柱に箒を激突させてしまったのだ。

元々悪いのはミケコたちなので、朝露さんには非はないが、ピンクの女は謝る朝露さんを許さず、髪を引っ張って振り回す暴挙に出た。ミケコたちが去った後、朝露さんを優しく慰める宮さんが印象的だった。

その晩朝露さんが母親に話してしまったのがきっかけで、宮さんは

とんだ濡れ衣を着せられ、リッキーから「野牛と揉めたら即退学」を通達された。

宮さんは、いわば朝露さんのせいで自分が大変な目に遭ってるというのに、朝露さんがさらわれたと聞いた時、激怒してすぐに飛び出した。

その時、「オレに想いを寄せてる雫ちゃんを・・・」などと虚言を吐いていたが、オレは聞き流しといた。

野牛駅では橋に馬乗りになった宮さんが、「朝露雫って女を捜してんだよ!」と叫ぶ始末。

竜崎も、朝露さんのケータイ番号もメールアドレスも知らなかったなので、その日はお手上げだった。

その日の晩、宮さんは『渚のギリギリ人魚』というラブホテルを一人ですつと眺めていた。

誰よりも朝露さんを心配していたのかもしれない。

一方竜崎は釣りをしていた。

その頃朝露さんは、家でグッスリ眠っていたのは言うまでもない。

後日、本人はミケコたちにさらわれた事を頑なに否定してたが、いじめられた経験のあるオレは誤魔化せない。

朝露さんの口元の痣が気になった。

その時屋上にて、「宮さんは大好きな先輩ですう〜」という朝露さんの言葉を聞いてオレは、宮さんが「野牛と揉めたら即退学」になったのは朝露さんのせいじゃないと確信した。

一時は極道の女房などと噂された朝露さんの母親だったが、実は呉服屋さんだった事が判明。

そんな母親が学校に来た際、朝露さんのクラスのヤツらは口々、蝶よ花よと育てられたと謳っていたと竜崎の口から聞いた。

竜崎は朝露さんがさらわれた事件の真相を本人の口から聞くまで、蝶よ花よの意見には賛同していたようだ。

ま、甘ったれたヤツらが嫌いなアイツの考えだけに、アイツらしいっっちゃアイツらしい。

竜崎は、オレとは全く正反対な性格だ。

オレはイジメられた経験があるので、困ってる人を助けたいと思うし、辛い立場、弱い立場にいる人に優しくしてしまう。

が、竜崎は、それが甘い、情け心や同情は人の為にはならないと提唱する。

自分の考えを押し付けるつもりはないが、ちょっと優しさに欠けるんじゃないか？って思った。

その後野牛との抗争は激化し、ついに武蔵の1年勢が決起する。

オレたちを第3公園に呼び出した朝露さんたちだったが、柴に担がれて宮さんを煽ってたという事は、今だからこそ分かる事実だ。

朝露さんも、家庭でのイザコザが重なり、感情的になっていた。

朝露さんなりに戦っていたのだろう。

元々自分のせいで事が大きくなり、野牛との抗争まで発展し、宮さんに多大な迷惑を掛けているのにもかかわらず、朝露さんは1年勢の決起に交ざって宮さんの対応の遅さを非難。

そんな宮さんは、朝露さんの歪な言動なども全て呑み込み、野牛の大将との決戦を決意する。

朝露さんがさらわれた真相すら知らないのに……。

まったく懐が深い男だ。

メイドカフェの店長経由で朝露さんがさらわれた真相を知ったユイは、因縁のミケコ戦を決意。

ミケコ戦を決めたユイと一緒に戦う決意をした朝露さんは、大きなハサミで自分の髪を切り落とし、ユイのセコンドについた。

一方竜崎は、朝露さん本人から、さらわれた真相を聞いてリチャー

ド戦を決意。

あの強情っ張りな竜崎がリングに上がった勇姿は、ある意味痛快だった。

ガタンゴトンと電車に揺られ30分、オレたちは竜崎と宮さんの生まれ育った稲田村に到着した。

電車から降り立った瞬間から、蝉の大合唱が耳を劈く。

辺り一面のどかな田園。

空は青空が広がっていた。

第278 シノギ

「あ~~~~ん、きのこの里食べるの忘れた~~~~。溶けてる~~~~
！」

ユイが炎天下の中ごねる。

「だから、たけのこの山にしとけて言っただろ」

「ジオン、チョコが溶けるのはどっちも同じだから・・・」

クールにツッコむオッキー。

稲田駅正面は見渡す限りの田園風景が広がっている。

あの畦道、一体どこまで続いてるんだ？なんて考えてると、

「こっちっス」

竜崎が指差した方向には、古ぼけた商店街が広がっていた。

店の前には沢山の屋台が並んでいる。

その屋台の数が半端ない。

それに、駅を降りた時から気になってはいたが、凄い人の数だ。

なぜ？

こんな片田舎の夏祭りなのに、凄い賑わいだ。

「オオ、宮アーーっ！ 元気がアーー？」

堅気？

右目に傷を持った強面がたこ焼き屋から顔を出し、宮さんに声を掛ける。

「宮ア、たまには帰ってこいよオ」

任侠に生きる者？

パンチパーマでグラスンを掛けたオッサンがわたあめ屋から顔を出し、宮さんに話し掛ける。

な、何だ？

宮さん、凄い人気だぞ？！

地元でも相変わらず有名なんだな、宮さん……。

沢山ある屋台のほとんどの人たちから声を掛けられてた宮さん。

しかも皆、その筋の人ばかり……。

「オイ宮ア、高校卒業したらウチに来るんだろ？ 待ってつかんなア」

「バカタレ、大地を極道の道に誘うなバカタレ！ 大地は将来横綱になるんだバカタレ」

渡世人？

厳つい顔のオッサンを、持つてる杖でバシバシ叩きながらバカタレを連発する老人。

「昔、小学生の頃、未来の横綱ってタイトルで、相撲やってた宮さんが全国ネットのニュースで特集された事があるんスよ」

竜崎が宮さんの昔話をそつと教えてくれた。

「あれ？ 宮、オメエ柔道だよな？」

厳つい顔のオッサンが宮さんに訊く。

「相撲は小学生の時やってたけど、中学になってからは柔道やったんだよ。……んでも、腰ダメにして柔道やめたけどね」

ちよっぴり寂しそうな笑顔を見せる宮さん。

「そうかア、将来はオリンピックで金メダルって期待してたんだけどなア、残念だったなア。じゃ、ウチに来るんだろ？」

厳つい顔のオッサンは、またもや宮さんを勧誘？している。

「バカタレ、大地を極道の道に誘うなバカタレ！ 大地もそれしきの事で不幸そうな面すんなバカタレ！ 不幸つてのは、他人からよからぬ噂たてられたり嫌われたりしてる与太郎を言うんだバカタレ！ 夢がないヤツとか銭がないヤツは不幸つて言わねえんだバカタレ！ チクシヨってほざいてるヤツらやナニクソ魂があるヤツあ、いつか必ず陽の目を見るんだバカタレ！ それまで大地を這い蹲つてもがき苦しめバカタレ！ 後からもがき苦しんだ日々が幸せだったつて気がつくモンだ。分かつたら幸せそうに笑つてみる、バカタレ」

老人は持つてる杖で隣のオッサンをバシバシ叩きながら深い言葉をついた。

「痛てて、やめろつてケンじい！ ナハハ・・・、オレらは世間の憤りを買ってばっかいつから、いつまでも半端なのかもな」

そんなオッサンの言葉も身に沁みる。

その場を上手くはぐらかした宮さんだったが、それからも極道堅気、老若男女問わず、沢山の人に声を掛けられていた。

巡回中の警察にまで、「宮ア、帰ってくるなら帰つてくるって言えよなア」。警官増やしとくんだったなア」なんて、冗談なんだ

か警めてんだか分からない事を言われてた宮さん。

「竜ちゃんの父ちゃんに見付らないようにしなきゃ……、なんてな。ガツハツハツハ」

「もしかして光一君のお父さんって、警察??」

宮さんの意味深発言に朝露さんが驚きの声をあげる。

「丸暴所轄、竜崎総一郎つつつたらここらじゃ有名な警察官局長だ
よ」

「宮さん、余計な事言わないっ!」

竜崎が宮さんを叱った。

「竜崎の親父さん、警察だったの? しかも、局長?!」

オレは堪らず竜崎に問いただした。

「そうつスよ。あんまり表沙汰にしないで下さいね。色々と厄介な
んで」

確かに……、暴力団関係を担当してる警察の息子って事は、あんまり人に知られたくないよな。

宮さんに対して常に厳しい竜崎だけど、何となくその意味が分かっ

たよつな気がした・・・。

「じゃ、さっきのヤーさんたちと竜崎の親父さんは、もしかして敵対してたりすんのか？」

「ま、ウチのオヤジは丸暴つスけど、さっきの顔ぶれとは友好的な仲っスよ。ここらのヤクザと暴力団はまた別なんス」

「別？」

「侠客つて言うんスカ？ 悪を成敗し、善を助ける、みたいな？ 昔ながらの気質を持つてるヤクザばっかなんス、この辺は。言わば総番長の宮さんみたいな必要悪？ 憎まれっ子を演じてる正義の味方？ 村を上手くまとめるには、政治と警察とヤクザの三角関係が大事なんス」

ふん。

オレの中ではヤクザも暴力団も一緒だけどな。

でも、竜崎の言ってる意味は良く分かるぞ。

オレは自分をヤンキーだと思ってるし、それに誇りを持っている。

オレの中ではヤンキーとは、仲間を大切にする、情に篤い男気溢れるヒーロー。

でも、周りからしたらヤンキー＝非行少年、非行少女、悪事を働く落ちこぼれと思ってるヤツらも多い。

その理由の一つに、喧嘩で武器を使ったり万引きしたりレイプをしたり、リンチを企てたりするような犯罪者や集団でしか行動できないヤツらと混同されてる事が考えられる。

オレからしたら、法に触れる行為をすればその時点で悪なので、世間が思ってる不良ってのは悪だ。

でも、オレは断じて善のつもりだ。

不良、ヤンキーは善であり、正義だ。

・・・って、いくらオレが叫んだ所で世間はオレを悪と見るのだから。

それはまるで、ヤクザと暴力団を分けて考える宮さんや竜崎のそれと似ている。

ヤクザの中にも任侠溢れる善がいるのに、そこら辺のチンピラや犯罪活動に従事する組織などによって、世間から偏見の目で見られるのだから。

・・・結局、任侠的なヤクザも、オレが提唱するヤンキーも、世間から理解されないのは、ある意味宿命みたいなモンなのかもな。

・・・と、その時、屋台通りの前方から、仲良く手を繋いで歩いてくるカップルが目に残った。

「よ、よオー、み、宮あー！ー！！」

繋いでた手をパツと放し、男は手を振りながら宮さんに近寄ってきた。

手を放された女の人は、唇を尖らせてそっぽを向いた。

「い、いつ来たの？ で、電話くれれば迎えに行ったのに」

男は焦った様子で宮さんに話し掛ける。

「宮さんの親友っス」

竜崎が教えてくれた。

「マジかよ？ マジメっぽい人だぞ?!」

オツキーが目を丸くした。

確かに、今まで見てきた宮さんの知り合いとは月とスッポン。

容姿からもマジメさが漂った好青年だった。

「確かあの人・・・、高専っス」

「高専？」

オレの素朴な疑問にユイが、

「5年制の高等専門学校のことよ。簡単に言えば頭が良い人」

軽い語らいの後、宮さんの親友と連れ添いの女性は雑踏に消えた。

「オレの元彼女の旦那だよ」

宮さんの衝撃発言！！

第279話 女郎は浮気に見えて心の賢きが上物

宮さんには、中学時代に付き合っていた彼女がいた。

彼女の名は、みゆき深雪さん。

3年間付き合った彼女と結婚まで考えていた宮さんだったが、中3のある日、彼女の浮気が発覚してしまう。

しかも相手は親友の夏男なつお。

そんな2人を宮さんは応援し、もり立てたという。

簡単に言えば、彼女を親友に寝取られた哀れなピエロ……。

気が狂う事もなく、男を八つ裂きにする事もなく、憤る事もなく……。

宮さんは、バカなのか？

そんなオレの疑問を吹き飛ばすかのように宮さんが言った。

「ミユキがそんだけ好きだったんだ……」

淋しそうに遠くを見つめる宮さん。

「み、宮さん……」

何て、人だ……。

オレを泣かせる気が……？

「オレって、バカだろ？ 笑っちまうよな、ガツハツハツハツ」

昔を思い出したのか、宮さんは少しだけ涙を浮かべていた。

酷な事に、そんな深雪さんとは高校になってからもずっと同じクラスだったそうだ。

が、夏男の子を妊娠し、子供を産むのに専念すると言って学校をやめたそうだ。

宮さんは深雪さんと別れる際、「頼む！ 丈夫で元気な赤ちゃんを産んでくれ」と言っつて、琵琶神社で買った安産祈願のお守りを渡した。

あの時、ユイが桐の箱に入れてくれたお守りだ……。

「ねえ、さっきの人って、ミユキさんって人じゃないよね……？」

ユイが小声で囁く。

「多分、ナツオの浮気相手だろうな……」

オレも小声で返した。

黙して語らない宮さんの背中には、言葉にならない情緒があった。
。。。。

心機一転、オレたちは宮さんオススメの焼きそばやお好み焼きを屋
台で買い、近くにあった神社の階段に座って食べた。

昼食後、ユイと竜崎は金魚掬い対決を始め、オッキーが審判を務め
た。

その間、宮さんは知人との会話に夢中。

ユイたちのテンションに乗り遅れたオレは、屋台通りを一人でブラ
ブラしていた。

アレ？ 朝露さんがいないぞ。。。?!

あ。。。、そ〜いえば、お守りがど〜たら言ってたっけ。

オレの読み通り、神社の境内のお守り売り場で朝露さんを発見した。

「何が欲しいの？」

「あつ、ジオン先輩！」

「もしかして、コレとか？」

オレは洒落のつもりで恋愛成就のお守りを指差した。

「流石です。そうなんです、私、恋がしたくて・・・」

マジかよ?!

「好きな人とかいないの？」

朝露さんは竜崎が好きなんじゃねえのか？

「いないですよ。私なんかより、ジオン先輩はど〜なんですかあ〜？」

ムムムツ、さり気なくオレの事を聞いてくる辺り、有意的だ。

O型女性のそのセリフ的に、朝露さんはオレに気があるのか？ はたまた朝露さんの友人知人がオレに好意を寄せているのか？

残念だが、オレは紳士。

自分で言うのも何だが、オレは男の中の男。

ナツオの軟派っぷりを見せられた後では、流石に硬派に決めないと男が廃る。

「ここだけの話ね。オレさ、好きな人がいるんだ」

朝露さん、ガツカリするかな？ 表情を窺うのが痛いな……。

「知ってますよ。クラスのコでしょ？ 前に初めて会った時、B A Rカシオンで言っていましたよね」

アレ？ 読み違い？ 朝露さん、元々オレに興味なし？ ……つていうか、オレに好きな人がいるって知ってたの？

「は、ははは、言ってたっけね、オレね……」

「あの時、酔っ払ってないとか言ってたくせに、やっぱり酔っ払ってたんですね。男の人はどうせ口ばっかです」

ドキッ

ぐわあ〜っ、胸が痛い。

「……つてのは冗談です。私は、男の人ってみんな浮気とか平気でする生き物だと思ってたんで、ジオン先輩とか宮先輩とか見ると驚きます」

ホッ

何か救われた気分だ。

「まあ、オレも宮さんも竜崎も、浮気とか軟派が嫌いだから」

「光一君は軟派じゃないんですか？ 沢山の女の子と遊びに行っ

ますよ」

「あ……、アイツは何て言うか、女付き合いが下手って言うか、不器用って言うか……」

「ジオン先輩は、どうして浮気しないんですか？ たえば好きな人がいたとしても、付き合う前とかだったら、別な人を好きになるって事はないんですか？」

「アイドルとかだったら心移りはあるけど、今、好きな人に限ってはそれはないな。オレって、単純に一途なんだと思う。目標を決めたら一直線。O型男児だからさ、オレ。後、女が出来たり、結婚したりしたら、絶対浮気はしないよオレは。そこんトコのこだわりは強いよ」

それが、真の男ってヤツだ。

朝露さん、オレの言葉で感動したかな？ さぞ、カッコイイだろうな今のオレ。

「私は一生の内、2、3回の浮気や不倫なら許せますよ」

朝露さんが淡々と語る。

へ？ 2、3回なら、許せるの??

「ど、ど~~~~して?」

「束縛するの嫌いだし、束縛されるのも嫌いだし・・・」

「・・・って事は、朝露さんも浮気や不倫をするって事？」

「私はしません。母が苦勞してるの知ってますから」

「でも・・・」

「あつ、もちろん隠れてしてほしいですよ、私にバレないように」

「バレなきゃいいのかな？！」

「・・・何か、虚しいな。」

自分の考えを人に押し付けるのはおこがましいって思っし、オレが今ここでとやかく言うのも説教くさい。

でも、何か淋しくね？

朝露さん、かわいそ〜じゃね？

男の人つてみんな浮気とか平気でする生き物だと思ってたんだよ、
今まで・・・。

誰かいねえ〜のかよ、朝露さんを包み込んでくれる人。

絶対浮気しねえ〜よ〜な男の中の男、いねえ〜のかよ。

誰か朝露さんを、はち切れんばかりの愛で包んでくれよ！

オレが黙り込んでいると、

「実は……、あ……、誰にも言わないで下さいね？
実はですね……、宮先輩の親友のナツオさんに、ナンパされ
ちゃいました……」

朝露さんが唐突に衝撃発言。

「マジかよ?!」

「絶対宮先輩に言わないで下さいね!」

朝露さんが念を押す。

宮さん怒るからか？ 少しでも場の空気を保ちたいっていう、朝露
さんの優しさが溢れる言葉だ。

詳しく聞くと、正確には夏男の男友達に、「一緒に遊ばない？」と
声を掛けられたらしい。

手を繋いでた女性の姿はなく、夏男の周りには男友達らしき人物が
3人ほどいたそうだ。

朝露さんは頑なに拒否したという。

神社の境内を散歩していた朝露さんに堂々と声を掛けるといふ事は、
夏男は朝露さんが宮さんのツレだとは知らなかったとみえる。

・・・まったく、あのナツオってヤロオ〜は妊娠中の奥さんがいるの
にナンパだなんて、とんでもねえ〜軟派ヤロオ〜だ。

第280話 金魚掬い屋のオッサンの渋いセリフ

屋台通りに戻ると、金魚掬いでみんな盛り上がっていた。

ユイと竜崎だけじゃなく、宮さんとオツキーも腕まくりをして金魚掬いに夢中だ。

「優勝したら何かもらえるんですか？ 私もやってみようかな」

朝露さんもまざり出す。

「・・・なんだってよ、笑っちゃうよなあ」

「あはははっ、アレ？ さっきの女じゃね？」

「何だよ男連れじゃんよ」

「ゲツ、宮だ・・・」

夏男とその仲間の計4人がオレたちの前を通り掛かった。

オレは無意識でそいつらを睨んでいた。

夏男の男友達は、高専の同級生と思われ、みんなIQの高そうな優等生だ。

その中の、メガネのフロントが眉毛と同化している男が、

「ゴメンよ、さっきのコ。まさか彼氏がいたとは思わなかったから
オレの顔を見ないようにしながら、男は目が合って困惑している朝
露さんに語り掛けた。

大方、ぶつとばされる前に謝つとけて魂胆だろ？

フン、オレは自分からは手を出さねえから安心しろ、優等生。

さらに、丸型レンズのロイドメガネを掛けた背の高い男が、

「ナツオ、たまってたんだよ、奥さん妊娠してっから」

夏男をからかうように言った。

夏男という名前を聞いて、宮さんが後ろを振り返った。

「よ、よオ、ま、また会ったな」

相変わらず夏男は動揺している。

宮さんは、さっきの手を繋いでた女はどした？とでも言わんばかりの顔でニヤついた。

「何だよナツオのツレかよ。ビビらせんなよなあ」

メガネの眉毛男が、オレと宮さんを交互に見ながらホッと溜息をついた。

「じゃ〜な」

夏男はあっけなく立ち去った。

「オイ、あの髪の長い女もイイ女だぜ」

終始スマイリーで、骨と皮だけみたいなの細身の男がユイを見て唸る。

・・・と、その時、竜崎が後ろを振り向いた。

「うるせえ〜、行くぞ。アイツ総番長やってんだよ。アイツのツレは多分みんな不良だからアブネ〜って」

金髪の竜崎を見て一瞬すくみ上がった夏男が、細身の男の袖を引いた。

「総番長？ はあ？？」

メガネの眉毛男が眉間に大きなシワを寄せる。

「あだ名だろ、あだ名」

鼻で笑う細身の男。

「何かデケエ〜し番長みてえ〜だモン」

丸型レンズの男が両手の人差し指を宮さんに向けた。

明らかに聞こえてるし、おちよくられてるが、宮さんは完全に無視して金魚掬いを再開している。

ま、喧嘩した事もねえ〜ヤツらに凄んでもな……。

間もなく夏男たちは、増してきた人ごみに消えた。

あの夏男ってヤツの奥さん、深雪さんと宮さんは、ずっと同じクラスだったって話だよな。

かつての自分の彼女。

そして親友。

ずっと長い間、嫉妬とか様々な葛藤とかで苦労したんだろうな、宮さん……。

もしかして学校嫌いだった理由って、それかな？

……と、その時！

「オラオラオラ、どけコラ！」

ロカビリー風のリーゼント男が5人、屋台通りを我が物顔で練り歩く。

かなりイカレたアブナそくなヤツらだ。

真夏なのに黒いライダースーツに身を包んで、脱ぎもせずに祭りに来る所からして、すでにアブナイ。

……つたく、稲田村にはこんなヤツらしかいねえのかよ、なんて思っていると、竜崎が、

「地元のヤツらじゃないっスね」

「竜ちゃん、あんまり見るな」

え？ あの宮さんが竜崎にブレーキをかけている。

珍しいな……。

「普通だったら威嚇するのに、今日は随分と大人しいですね、宮さん」

オレの率直な感想だ。

「ホラさ、地元で揉めるとき、ヘタすりゃ親分たちに迷惑掛けるからね。他所モン相手にする時は慎重にやらないと、万一他所の組の

モンだったら大変でしょ？」

宮さんは、そんな壮大な心持ちだったのかあゝゝゝ！

御見逸れしました！！

しばらくして、先ほどの口カビリー風の男5人と、明らかにフルボッコされたと思われる夏男たち4人が、オレたちの金魚掬いの屋台の前を通り過ぎて行った。

夏男は首根っこをつかまれ、夏男の友人達も足蹴にされて歩かされていた。

その時、今にも宮さんに声を掛けたそうだった夏男だが、喉仏の辺りで声を押し殺していたのが印象的だった。

それを見た宮さんは、俯いたまま黙り込んでいる。

「あれ？ あの入って宮さんの親友の、ナツオって人じゃない？」

ユイが夏男たちを指差して言った。

「何か悪い事したのかな？」

朝露さんが心配そうに夏男たちの背中を見つめる。

「自業自得だぜ」

宮さんが夏男の友人たちにおちよくられてる時、悔しそうな顔をしてたオツキーが小声で呟いた。

「宮さん、行ってやらないんすか？」

竜崎が出し抜けに聞いた。

ダメだ、竜崎、宮さんは天邪鬼なB型だぞ。

行けと言われれば行きにくくなるのがB型。

そ〜いう時はだな・・・。

オレが、本当は人情深い宮さんを奮起させるべく大義名分を考えていると・・・。

「男が仁義を通して生きる以上、義理あるモンの不幸をやブヘビだよと軽んじてはいけん。一度は盃を交わした兄弟分なら尚更や。一度舐められたら、覆水盆に返らずなのがこの俗世間いうもんよ、のう」

一連の流れを黙って見ていた金魚掬い屋のオツサンが、渋いセリフを吐いた。

それを聞いた宮さんの口元が緩む。

第281話 オレの女に手えく出すな

ロカビリー風の男5人に連れられ、ひと気のない民家まで連れてこられた夏男ら4人。

オレたちは、そつと後をつけた。

空き地の真ん中で蹴り倒された夏男らは、4人が4人とも、あわてた様子で土下座を始めた。

どうやら彼らの話を整理すると、夏男が以前ナンパした女が、弄ばれた腹癒せに、夏男を懲らしめるよう男たちに頼んだようだ。

まさに自業自得。

そんな夏男のケツを拭くって事は、ある意味こりゃく、マヌケなピエロだぞ?!

「土下座で許してもらえんと思っただのか、クソガキがく！」

「金持ってんだろ？ 金。とりあえず有り金全部出せよ」

「オレたちや、コメントのモンだ」

ロカビリー風の5人は示威行動に出た。

「宮さん、コメットって何スか？」

竜崎が宮さんに訊く。

「かつてコスモから派生した、独立系の小っちゃなゾッキー。身勝手な行動ばっか起こすからって、コスモからは村八分にされてる族だよ」

ふう〜。

最初、コスモって聞いてビビッちまったけど、コスモから爪弾きにされてる暴走族なら恐くねえ〜や。

でも、今ここで夏男を助けるのはどうかと思うぞ？ 竜崎の言葉じゃねえ〜が、情け心や同情は夏男らのためにはならないんじゃない？

悪いのは夏男なんだし、オレらは関係ねえ〜んだから、面倒に巻き込まれる前に退散、退散！

・・・と、思った矢先！

「謝ってんだから許してやれや、兄ちゃんたち」

宮さんが空き地の真ん中まで躍り出た。

「オイオイオイオイ、聞いてねえぞ、オイオイオイオイ。仲間かよ、はっはっはっは。笑わせるぜコイツら」

「エ、コラ、舐めてっつと叩くぞ?!」

男は片手に持っているフルフェイスを宮さんにチラつかせる。

「ヘッド、アレ、見てみて下さいよ。イイ女が2人もいますよ」

男はユイと朝露さんを見て舌なめずりをした。

「フフフ、コイツらぶっ飛ばしてから、あの女たち、たっぷり可愛がってやるぞ」

ヘッドと呼ばれた男は、鬼畜なセリフを吐いた。

・・・と、その時!!

「イイ女? 雫の事か?」

不敵な笑みを浮かべる宮さんが、

「オレの女に手えく出すなコラ!!」

地面が激震するほどの迫力で吼えた。

夏男たちが朝露さんをナンパしてた事を知ってるであろう宮さんだ

が、夏男に対してではなく、ロカビリー風の男たちに対して言い放った。

かつての元カノの深雪さんの為？ 夏男と深雪さん2人の仲を取り持つ為？ 生まれてくる2人の子供の為？

夏男の浮気や不倫、ナンパのケツ拭きまでするピエロの宮さん？！

全て、かつて愛した深雪さんの為に・・・?!!

「今、宮さん、雫の事、オレの女って言ったよね？」

さすが聞き逃しのないユイ。

「あれは雫を想つてのセリフじゃなく、ヤツらをやっつける為の口実ス」

竜崎がクールに語る。

朝露さんは、黙って宮さんの背中を見つめている。

朝露さんを想つてのセリフじゃなく、ヤツらをやっつける為の口実？

いや、本気だった。

今の宮さんのセリフは、本気だったぞ。

今までは深雪さんの為だったかもしれない。

でも、今は朝露さんの為に……？

立派な大義名分じゃないですか！！

今度浮気をしたらタダじゃおかねえぞというセリフを夏男に吐かず、背中と態度で示す宮さん。

オレや竜崎の出番が来る事もなく、あっけなくロカビリー風の男5人を薙ぎ倒す宮さん。

悶絶する手下たちを見て、ヘッドと呼ばれた男が弱々しい声をあげる。

「も、もしかしてオマエ……あの、総番長……？ み、宮大地か？！」

「そつだ。オレが宮大地だ。よく覚えとけ」

「ス、スイマツセ〜ン！ スイマツセンした〜っ！！」

ロカビリー風の男たち5人は、宮さんの前に平伏した。

夏男たちは、そんな光景を目の当たりにして啞然としている。

「マ、マジだったんだ……」

「すみマセンでした……」

「ゴメンなさい……」

夏男の友人達が宮さんに詫びる。

夏男は終始、無言で下を向いていたのが印象的だった……。

かつて自分の親友と3年間も付き合っていた女を奪い取り、我がものにした夏男。

だが、深雪さんが宮さんを3年間、愛していたのは事実。

その後も同じ高校、同じクラスで縁が続いた宮さんと深雪さん。

そんな2人に対して嫉妬心を抱かないワケはない。

2人の仲に何もないと分かっているにも、過去の2人に嫉妬しないワケがない。

さらに、総番長として名を上げ、手の届かぬ高い所に行ってしまった親友。

いつも全てを見据えるように、深い懐で慈悲を与える親友。

そんな親友、宮さんが恐いはずだ。

いつも黙って自分のケツを拭ってくれる、宮さんが恐いはずだ。

夏男は、恐いはずだ。

でも、宮さんは夏男にとって、かけがえのない親友。

だからこそ、同等でいたいと思うし、負けを認めたくない。

友人達が宮さんに謝る中、終始無言だった夏男を見て、オレはいたたまれなかった……。

後から宮さんに聞いた話によると、夏男はA型だそうだ。

プライドが高くて謝るのが苦手なA型。

A型って知的そうに見えるけど、結構不器用なんだな……、と思
った。

第282話 美女と怪獣

ヒュ~~~~

バアアアアア~~~~~ン

屋台通りを抜け、祭りの広場に到着した時には、すでに辺りは薄暗くなっていた。

誰だ？ 誰だ誰だ？ 100発しか花火が上がらないなんて言ってたヤツは誰だ？！

ここに来るまでに100発は軽く超えてるぞ！ 10000発の間違いなんじゃねえのか？！

「稲田祭りって、凄くね？ 人も凄いし花火も凄いし」

「アンタ知らないで来たの？ よくも今まで稲田祭りをスルーして生きてこれたわね。稲田祭りの花火大会って言ったら全国でも有名な花火大会なのよ。全国の花火職人が技を競い合うんだから」

ユイが教えてくれた。

そうだったのか・・・。

思えばこの時期は子供の頃から母親の実家のばあちゃん家に泊まっていたからなあ。

去年はテルとツーリングしてたっけ……。

花火を見るスポットをゲットしたのち、宮さんがイカポップを買いに行くと言って竜崎と場を離れた。

すぐさま、ユイがもつとも聞きたかった事を朝露さんに尋ねた。

「ねえ、雫、アンタ何気に宮さんと付き合ってたワケ？」

「ま、まさかあ……」

朝露さんが否定する。

「そんならさ、宮さんと付き合っちゃえば？　美女と野獣だけど、ベストカップルだと思うぜ」

オッキーが言った。

美女と野獣？　平たく言うと、美女と怪獣だろ。

ま、B型とO型だから、朝露さんがリード出来れば間違いなくベストカップルになりうる組み合わせではあるな。

「生理的にムリですう。私、男性の暴力が苦手で、ホントにダメ

なんですよぉ。あと、雰囲気とか外見とかも、父親に似てるんです。同じB型だし」

朝露さんがオドオドしながら言った。

「マジ・・・で？・・・じゃ、ムリじゃん」

苦笑いするオツキー。

「栗、アンタそれ、宮さんには黙ってなさいよ。ちょっと可哀想すぎるし、自殺モンよ。拷問じゃないんだから・・・」

ユイの言ってる事はもつともだ。

そんな事を宮さんが聞いたら、どんだけショックを受けるか分からない。

朝露さんが言ってる事も分からないワケではない。

以前、駅前のデパートの屋上で、朝露さんの真相を聞いた。

かつて実の父親に性的暴力を受けていた朝露さんの腕には、無数のリストカットの痕があったし、アニメキャラにしか恋が出来なかったとも言っていた。

そんな父親に、皮肉にも宮さんが似ているなんて・・・。

以前、野牛との全面戦争の大会の前に、宮さんと2人で駅前に飲みに行った事があった。

居酒屋の後、オレたちはBARカシオンに行った。

それがきっかけで、宮さんはそれから一人でちよくちよくカシオンに足を運んでいたようだ。

落ち着いた店内の雰囲気は、弱ったメンタル面を癒してくれる。

「メシもノドを通らない・・・ってのは、もしかして恋わずらいかい？」

宮さんは舌なめずりをしながらニッコリ笑う。

「まあ、簡単に言えばそんなカンジですよ」

アルコールと雰囲気呑まれてたオレは、誰にも話せないで悩んでいた、佐倉の事を無意識で宮さんに切り出していた。

「片想いなのかい？」

「いや、まあ、なんていうか、両想いの一歩手前っていうか・・・」

「好きって言ったの？」

「いや、それが言えれば苦労しないっていうか・・・」

「だよな。中々言えないよな、ホントに好きでも、面と向かって好きって言うって、余程の勇気があるもんなあ」

「ですよねえ。さすが宮さん、分かってますねえ」

「まあ、飲んで飲んで・・・」

宮さんは空になったオレのグラスを見て、ウェイターに向かってパチンと指を鳴らし、駆けつけたウェイターにお代わりのビールを注文してくれた。

「自分の気持ちを伝えなきゃって思うんですけど、ホント勇気が出なくて・・・」

「亀ちゃんが一番望んでる事って、何？ そのこと、どうしたいワケ？」

宮さん、それ、あまりにも唐突過ぎない？ どうしたいって言われても・・・。

「そりゃ、まあ、付き合いたいですよ・・・。ハイ」

それが純粹なるオレの素直な気持ちだ。

決して疚しい気はない！ 決して・・・！！

「だったら、その一言でいいんじゃない？ その口に、付き合いだ
いって、一言だけでいいんじゃない？ その気持ちと言葉に全てが
集約されて、必ず相手にも想いは伝わるはずだよ。人間は誰しも、
そんなに強くない。ならば、振り絞った勇氣に、全てを懸けるべき
なんじゃないかい？」

眩しい！ み、宮さんが、眩しい！ 光輝いている！！

そ、そうか、無理して「好き」って言わなくていいのか！

「好き」って言うより、「オレと付き合ってくれ」の方が言い易い
し、何より「好き」を通り越してより現実的だ。

よしっ、頑張ろう！！

「宮さん、ありがとうございます」

「え？ 何か役に立ったかい？」

宮さんとはばけた顔で、つまみのピーナツを口に放り投げた。

「宮さん、やっぱり、言わないで後悔するより、言った方が全然い
いですよね？ もし言わなかったら、もしかしたら一生後悔するか
もしれませんよね？」

「もちろんそくだろ。でも、それが自分の立場だったらって思うと、中々踏ん切りつかねえくだろおくなあ。何かハッキリしないまま、ぐだぐだとチャンスを逃しそくだ。ガッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハ」

宮さんは顔を赤らめながら、大いに笑った。

・・・と、まあ、あれから数ヶ月経つが、佐倉に告白どころか、そのタイミングさえつかめないでいるのが実状だ。

世の中そんなに甘くない。

一方、宮さんは、自分は朝露さんが好きだなんて一言も口に出さなかったが、オレは宮さんがゾッコンなのは容易に見抜いていた。

が、稲田祭りで朝露さんの本音を知ってしまった以上、宮さんを駆り立てるワケにもいかず・・・。

かと言って、B型の灼熱の恋を諦めさせるのも容易ではない。

オレは、ほとぼりが冷めるまで待つのが賢明だと思った。

なぜなら宮さんは普段、大胆不敵な笑顔を見せるくせに、小心翼翼な面も持ち合わせてるからだ。

たとえば宮さんが朝露さんに、自分から告白する・・・だなんて、有り得ない。

が
・
・
・
・
・
・
・
・
!
!

第283話 無音で崩れゆく友情

……あの時、オレが佐倉への気持ちを宮さんに語った事が、宮さんの心の中の何かを触発したからなのか、それとも自発的なのか分からないが、宮さんがとんでもない事を言い出した。

「亀ちゃん、オレも頑張るよ。試合の勝ち負けに関係なく、オレも、素直な気持ちをぶつけてみるよ」

……と。

稲田祭りの花火大会後、石田駅で解散する時、「宮先輩。もし、宮先輩とお付き合いしたら、どんな特典があるんですか？」と、思わせぶりな発言をした朝露さん。

宮さんは、「何かくれるのかって？ 残念だけど、オレがあげられるモンは命くらいしかねえよ」と、女性なら一度は男に言われてみたい言葉を送った。

そんな宮さんに、満面の笑みで舌を出し、その場を走り去った朝露さん。

あの時は、その場にいた全員が、もしかしたら……？ 的感情を抱いたと思う。

そして今日、控え室で宮さんが、「あれ、竜ちゃんは？ あ、亀ちゃんもやるんだっけ？ じゃ、あつちの控え室かな？ 思えば、気の毒だよな、竜ちゃん。敵陣の中で試合まで待たなきゃなんねえよなんて・・・な」と言った際、せつかく竜崎の名前が出たトコだし・・・と、思い、オレは竜崎戦後の抱負を語った。

「実は、竜崎に勝利した暁に、リング上で佐倉に告白しようと思っ
てたんです」

「映画のボツキーみたいだね」

ちなみにボツキーの映画のハイライトで、リング上で彼女にプロポーズをするシーンがある。

オレも宮さんも、そんなボツキーが大好きだ。

「そうそう、ボツキーみたいで、大胆で勇気のある告白でしょ？
本当はみんなをビックリさせる手筈だったんですけど、肝心の佐倉
が来ないんですよ。でも、必ず竜崎戦は、オレに勇気を与えてく
れると思うんです。アイツはこっちが真っ向から挑んだら、すかさ
ずに正面から受け止めるヤツですから。オレは竜崎戦に絶対勝利し
て、勇気を蓄えて・・・、そして・・・、佐倉に・・・」

そんな言葉に宮さんは黙って頷いた。

まさか……、試合の勝ち負けに関係なくって……、まさか
宮さん、試合後に朝露さんに……、「告白する気では
?!」

「宮さん、それだけはダメですって!」

オレはとっさに叫んだ。

その時、宮さんの方を向いていたユイとオッキーがオレの方を振り
向いた。

「どうしてアンタが宮さんの告白をジャマする筋合いがあるのよ」

ユイが割り込んでくる。

「そっだよ。どうしてジオンが良くて宮さんがダメなんだよ！ オ
レは、宮さんと朝露さんなら絶対上手くいくと思うぞ」

「アタシも応援するわ」

オッキーもユイも、稲田祭りの日のあの時のワンシーンで時間が止
まってるんだ。

宮さんも……。

満面の笑みで舌を出した朝露さんの、あの表情に惑わされてんだ。

王者VS挑戦者、メイン終了後に起きた悪夢。

あの時の、『このムサイ男、ホモなんですよ、実は!』という柴のマイクパフォーマンス後、客席から飛び交った、「相手、誰?」「竜崎じゃね?」「そ〜いえば竜崎って、スゲ〜モテるのに彼女いねえ〜よな」という声。

「ジオン先輩、聞きました?」

客席の野次に敏感に反応した朝露さん。

「え、何? 柴の戯言?」

「客席の声ですよ。光一君がホモなんじゃないかって」

「あゝ、気にしてねえ〜だろ本人は」

「ですよ。私も別に気にしなきゃいいんですよ・・・」

「へ? どういう事?! も、もしかして朝露さん、竜崎の事・・・?」

「あれ? 知らなかったんですか?? 私と光一君が付き合ってたって」

核爆弾が落ちた瞬間だった。

オレと竜崎と宮さんの、友情の絆が、音も無くバラバラに崩れた気

がした。

「い、いつから？」

「夏休みが終わった頃からです。でも、最近別れました。ジオン先輩、光一君から聞いてて知ってるのかと思ってました。」

「いや……、聞いてない……。」

その直後だ。

『だから言ったじゃないっすか、ジオンさん。オレはもう、誰も信じないっす……』と、クールに言い放つ竜崎に、『竜崎！ オレもおめえ〜を信じねえ〜！！』と、怒鳴ってしまったのは……。

竜崎と、朝露さんが付き合ってただと？

夏休みが終わった頃から、付き合ってただと？

修学旅行前、竜崎とタカノブが親しくしてる所を見た頃じゃねえか。

オレが竜崎に不信感を抱き始めた頃と重なるのは単なる偶然か？！

朝露さんが言っていた、好きな人はいないというセリフや、『光一君は軟派じゃないんですか？ 沢山の女の子と遊びに行ってますよ』という言葉にオレは惑わされた。

あれは単なる竜崎に対する嫉妬だったんだ。

テーブル投げ事件の詳細を、朝露さんが竜崎に話さなかったのは、好きだったからだ。

もっとも、ゲタ箱にラブレターを入れてた時点で朝露さんが竜崎を好きだったのは確定的だった。

でも、竜崎にその気はないようだったし、宮さんは朝露さんにゾッコンだったし、朝露さんも宮さんに対して思わせぶりな言動が多かったし……。

稲田祭りの後、宮さんに対する朝露さんの本当の気持ちは知っていたが、オレだけじゃなく、ユイやオツキーも、そんなの超越してしまふ宮さんに期待して、何気の後押しをしたのは事実だ。

まさか竜崎と付き合ってるとは露知らず……。

学園祭時、竜崎のクラスの水槽が倒れてると聞いて、『ジオン先輩！ 私、竜崎君のトコが心配なんで、行ってきます！』と言って、スカートを翻して走っていった朝露さん。

ある程度片付け、瓦礫になってしまった宮さんの屋台の跡地に皆が

揃った時、

『ゴメンね、竜崎君、誤解しないで聞いてね？ あのね、竜崎君のクラスの事件なんだけど、犯人は竜崎君なんじゃないかって言ってる人いたから、それはないってフォロワーしたけど、誤解してるかもいるかも……』

朝露さんが言った。

『誰が言ってた？』と聞く竜崎に、『……柴君』と、素直に答えた朝露さん。

常に竜崎を庇かばい、思えばいつも竜崎の味方だった。

修学旅行明け、タカノブからギャラクシー入りを勧誘された竜崎。

宮さんに、『竜ちゃん、ギャラクシーに勧誘されたって、本当？』と聞かれた竜崎は、『何のことっスか？』と、はぐらかした。

その情報は朝露さんから聞いていて、すでに知ってた宮さん。

あの時朝露さんは、竜崎が心配だったから宮さんにその旨を話したのだろう。

きっと竜崎は、朝露さんは口が軽いと思ったに違いない。

O型女性は全てにおいてオープンな為、隠し事が苦手だった事を竜崎は知らないだろうし……。

第284話 道化師 " ; CLOWN " ;

織川戦のダメージで宮さんが寝込んでた頃、オレは1週間の停学中、さまざまな葛藤と闘った。

一番オレを悩ませたのが竜崎だった。

どうして、どうしてそんな大事な事を隠してたんだよ?!

水くせえ〜! すぐにでも言ってくれば良かったものを・・・!

あらゆる疑念でムカついている自分もいたが、純粹に竜崎と朝露さんを歓迎してやりたい自分もいた。

停学中さんざん悩み、結局竜崎と直接会って話し合うことを決意したが、写真部の部室で最終的に決裂した。

その後BARカシオンで宮さんを発見。

宮さんは織川戦の後遺症で精神的にも肉体的にも限界を越えてボロボロだった。

その日は宮さんに余計な心配を掛けたくないという一心で、竜崎の件は一切宮さんに話さなかった。

隠し事が大変な事態を招くという事を知りながら……。

が、その時とんでもない良案が浮かび、オレの頭上で電球がピカッと光った。

『VS竜崎』、これしかない！

オレたちの遺恨を手っ取り早く解消するには戦って和解するのが一番だ！！

揺ぎ無い気持ちで宮さんにカードを組んでもらうよう頼むと、理由も聞かずに宮さんは承諾をくれた。

オレたちの戦いに言葉はいらない！

アイツは絶対裏切らないから！！

そして宿命の戦い。

控え室前の壁に背をつけて寄り掛かっていた朝露さんが、『あのを、ジオン先輩。どうして光一君と戦わなきゃならないんですか？』と声を掛けてきた。

オレや宮さんに、大事な事を色々と隠している竜崎にオレが不満を抱いて当然だろ？

早めに言ってくれりゃ、傷つかずに済む事だつてあるんだ！

それをアイツに分からせるんだ！！

……って言いたかったがオレは、『何て言えばいいのかな？ 手っ取り早く言えば、絆を深める……？ ……みたいなの？』と言った。

ぶっっちゃけ遺恨解消なのだが……。

しか……し、現実には容赦なく残酷だった。

竜崎は会場に現れず、結果はオレの不戦勝……。

もう……、言葉も無い。

そんな矢先に迎えたメイン。

総番長の引退、そして卒業も控えてる宮さんにとって、泣いても笑っても最後の戦いになる。

宮さんは、もしリベンジに失敗するような事があつたら今度こそどん底に突き落とされてしまう……。

そんな事を考えていると宮さんが……、

『亀ちゃん、オレも頑張るよ。試合の勝ち負けに関係なく、オレも、

素直な気持ちをぶつけてみるよ』

という衝撃発言。

『宮さん、それだけはダメですって!』と、オレは無意識で叫んでいた。

大事な大事な試合前、宮さんには極上のリラックスタイムを送って欲しかった。

なのに、なぜに修羅場?!

「亀ちゃん、これはオレが決めた事なんだ。ずっと前から、いつか言わなきゃって思ってたから。前回織川戦に敗れて寝込んでる辺りかな、雫ちゃんの顔が浮かんでね……。ある意味オレが今こうして立ってられんのは、雫ちゃんへの想いがあるからかもしれない。ガッハツハ、柄でもねえ〜やな」

ガラでもないです! 絶対ダメです、告白は……。! 朝露さんは竜崎と最近まで付き合ってたんですよ!

しかも、朝露さんは未だに未練があるっぽいし、何より宮さんが父親とダブってるから嫌いだって……。!!

告白してもスタボロになるだけだ。

昔みたいにピエロになるだけだ。

親友に彼女をとられた哀れなピエロになるだけだよ、宮さん！！

「どうして宮さんの告白を止めるのよ？ 最高のシチュエーションじゃない、今日は……」

「ジオン、オマエ、アレにこだわってねえか？ 朝露さんが、生理的にムリですう。私、男性の暴力が苦手で、ホントにダメなんですよあ。あと、雰囲気とか外見とかも、父親に似てるんです。同じB型だし』って言ってたこと……って、ゲツ、言っちゃった……」

オッキーは、「しまった」という顔をして宮さんをビクビクと見た。

「誰にも遠慮はいらねえ！ オレにも遠慮はいらねえ！」

宮さんが真っ直ぐな瞳でオレを見据える。

「そうよ。アタシたち仲間なんだから。それに、言っちゃえば大した事なかつたりすんのよ。アンタの竜崎への葛藤みたいにさ、本人だけ懸命に空回りして踊ってるだけって事だって大いにあるんだし」

ユイがオレを迫り立てる。

「朝露さんは、宮さんを生理的にムリだって言ったけど、宮さんが振るう暴力は正当防衛だって知ってるし、同じ血液型とか外見が嫌いな人と似てるからって、チャンスがないなんて、そんなのジオン

が勝手に決めるなよ。そんな偏見で差別をするように見えねえぞ、朝露さんってコは」

オッキーは、さっき素っ破抜いてしまった言葉を、自分で一生懸命弁明している。

そんなオッキーの言葉にはノータッチのユイ。

どうやらユイは、あの時の朝露さんの言葉を思い出して、宮さんが告白するのはやっぱり賢明ではないと思いはじめたようだ。

そうなる黙ってないのはB型のこの人。

「ちゃんと話してくれ。亀ちゃんが思ってる事、知ってる事、包み隠さず」

・・・何度も、何度も頭を過ぎるのは、『隠し事はダメだ』っていうオレの心の叫びだ。

もういい、暴露だ！

どうして今まで隠してた？ どうして知ってたのに言ってくれなかった？ ふざけんなっ！！

・・・って、宮さんに怒鳴られても仕方ない。

その時言ってくれりゃ、告白しようだなんて、そんな思いを抱かずに済んだのに！ ユイちゃんやオッキーの前で恥かかせやがって、

ぶっ殺してやる!!

・・・って、宮さんに八つ裂きにされても仕方ない。

オレは宮さんにぶっ殺される覚悟で語り出した。

「・・・朝露さんと・・・、竜崎が・・・
・・・、付き合っていました」

命懸けのオレの言葉がとりあえず最後まで出た。

それが全てだ。

「っ、付き合ってたって・・・、か、過去形？」

オツキーが声を震わせる。

「夏休み終わりくらいから、最近まで付き合ってたそうさ。みんなに隠して・・・」

・・・と、その時、とんでもない事態が起きた!

ボタン

「そろそろ時間ですよ」

朝露さんが、親切にも知らせに来てくれたのだ。

「アレ？ どうしたんですか、みなさん深刻な顔をして・・・」

そんな朝露さんを見た瞬間、宮さんが・・・！！

「竜ちゃんと付き合ってたって？ 言ってくればいいのに、水くさいなあ、ガハハハハ」

あ・・・、み、宮さん・・・。

「ゴメンなさい。光一君に絶対みんなには内緒ねって言われてたから・・・」

朝露さんは頬を赤く染めて下を向いた。

宮さんの突飛な行動に、オレもユイもオツキーも動きが完全に止まった。

「栗ちゃん・・・」

「はい？」

目の前の宮さんと朝露さんが、妙にスローモーションに見える。

まるでこの空間だけ、この控え室の今の時間だけ、時間を超越して別空間にいるようだ。

ま、まさか……、み、宮さん……？！

「オレの事、どう思ってたんだい？」

宮さんが切り出す。

完全に時が止まった。

朝露さんの次の言葉を、はたしてどれくらい待ったのだろうか……。

ほんの数秒が、何時間にも感じた。

「べ、別に……、何とも……」

朝露さんが痛烈な言葉を宮さんに投げ掛ける。

とっさの判断だが、朝露さんは自分の気持ちを素直に言葉にしたようだった。

またしても時が止まった。

・・・み、宮さんショック大？！

大事な試合前だったのに・・・。

・・・と、その時、宮さんの口から思いがけない一言が！！！！

「オレは好きだから」

第285話 仁義ある同志

腹をくくり、ぶっ殺される覚悟で2人が付き合っていたという事実を伝えた瞬間、見事なまでのタイミングで朝露さんが現れた。

その矢先、間髪入れず朝露さんに、『オレの事、どう思ってたかい？』と下問する宮さん。

答えは皮肉にも、『べ、別に……、何とも……』と速答だった。

常人だったら笑って誤魔化すか、はたまた居た堪れず逃げ出すだろうが、宮さんは思わぬ行動に出た。

『オレは好きだから』

まさかまさかの告白である。

親友が自分に内緒で付き合ってたと知りながら、好きになったコが自分を嫌ってるのと知りながら……。

『オレがあげられるモンは命くらいしかねえよ』っていう壮烈な言葉には、やはり嘘偽りはなかった。

宮さんは、間違いなく男の中の男だ。

尊敬に値するくらい、不器用で真っ直ぐすぎる男だ……。

オレもユイもオツキーもその場で凍り固まる。

控え室には信じられないくらいの静寂が訪れた。

そうなるのが分かってて、あえて傷つきにいったのか、宮さん？

試合前から満身創痍じゃないか！

どうせ散るならとことん無様に、どうせ落とすならどん底まで落とせってか？

だとしたら、あまりにも虚しいじゃないですか？！

それとも朝露さんがあの場で、『いいですよ、付き合いましょ』と、言うだけでも？

竜崎に未だに未練がある上、宮さんは恋愛対象じゃないって言うのに？

目の前で、自分の事何とも思っていないって言われてなのに、ムリだ
って分かってなのに、ほんの少しの希望に懸けたの？！

・・・そうじゃなくって、取り繕うとしてんだろ？

オレと、竜崎と、朝露さんと、ユイと、オッキーと・・・・・・・・、みんなの仲を・・・・・・・・、取り繕うとしてんだろ？

アンタは、何てバカな人なんだっ！！

どこまで滑稽で哀れで間抜けな道化師を演じれば気が済むんだ！！！！

必要悪を演じてみたり、ピエロを演じてみたり、どこまで自分を傷つけりゃ〜気が済むんだアンタは！！

そんな宮さんの告白に対し朝露さんは、尚も畳み掛けるように痛烈な言葉を吐いた。

「ゴメンなさい。宮先輩に、ロマンスの花が開くことはないです。ゴメンなさい」

朝露さんは、俯きながら答えた。

な、何もそこまで・・・。

でも、O型女性らしいキツパリとした態度だ・・・・・・・・。

み、宮さんはその時？！

「分かってるよ。友達でいいかい？ 友達として、これからもみんなと一緒に仲間でいさせてもらっていいかい？」

え、笑顔だ。

宮さんが優しい笑顔で言った。

み、宮さあ~~~~ん！！

「は、はい。よ、喜んで」

朝露さんがアタフタしながら恐縮そうに言った。

・・・と、その時、控え室のドアが開き、スタッフが顔を出した。

「では、ご用意はよろしいでしょうか？ メインの試合が始まります」

「いつでもいいぞ！」

力強く答える宮さん。

その目は澄んでいた。

何の虞おそれもなく、ただ、己の為に戦う男の、真っ直ぐな瞳だっ

た。

迷いの霧が晴れ、失うものがない者のオーラは半端ない。

「栗、せっかくなんだから、アタシたちと一緒に宮さんのセコンドに付こうよ」

「もちろんです、ハイ」

バタン

その時、控え室のドアの向こうから、長須、大橋、ミケコが現れた。

あれ？ リングサイドの特等席で観戦するんじゃないのかなかったの・・・
???

「人の喧嘩、黙って見てるってのは、オレらの性に合わねえから」

大橋がはにかみながら言った。

「ミケコがうるさくってな。宮と一緒に戦いてえくって」

長須が大きな口で、ニンマリと笑みを溢した。

「アンタだって言ってたじゃない。死ぬ時は一緒だって」

ミケコが長須を叩きながら言った。

この人たちも、宮さんの最後の戦いで、一緒に戦い抜くつもりなんだ。

卒業を控えたラストバトル。

この人たちは最初から、命を懸ける腹積もりだったんだ。

でも、途中で控え室を出て行ったのは、オレたちの不穏な空気を読んでのこと……。

オレは、仁義ある人たちに囲まれて……、何て幸せなんだろう……。

……でも、宮さんの最後の戦いだったのに、肝心な男の姿はない。

あのままだったら、竜崎との絆は完全に断たれていた。

朝露さんは当然だが、オレやユイ、オツキーも竜崎と疎遠になる。

宮さんは尚更だ。

もしオレたちの世界が小説やマンガやアニメのいわゆる2次元の世界で、3次元の読者や視聴者がいたら、誰もが復活はムリって言うだろう。

一度こじれた友情を復活させるのはムリだと・・・。

裏切られたも同然なんだし、そこまでフラれたりして惨めな思いしてんのに、一体何を期待してんの？

・・・と。

でも、宮さんは諦めてはいない。

崩れ落ちた絆の欠片を拾い集めてるんだ。

そんな宮さんに、オレはオレ流で追随する。

待つてる竜崎！

必ず引きずり出してやる！！

オマエの本音を聞き出して、オレの本音をぶちまけて、そしてスッキリと完全に遺恨を解消して、また友情を・・・、オレたちの固い友情の絆を復活させてやる。

宮さんだけに辛い思いはさせない。

宮さんは自分が笑い者になることで和ませようとしてるんだ。

だったら竜崎も、宮さんと一緒に笑い者になりゃいい。

みんな揃って笑い者になつちまえばいいじゃねえか。

辛く悲しい友情の崩壊？

男女の友情は有り得ない？

そんな世間の常識、オレらが覆してやるおっせ、オイ！

第286話 コマダレとポン酢

番長と暴走族を比べたら、やっぱり後者の方が危なそうなイメージはある。

それが凶暴な伝説を残すギャラクシーときたもんだ。

宮さんがギャラクシーに敗れたとあつては、オチオチ平和に学校生活を送れるとは思えない。

いくらオレがタカノブに勝つてるとはいえ、そんな学校の皆の不安を煽る材料でしかないのかもしれない。

学校みんなや、会場の観客たちの心の声が聞こえるワケじゃないから、本当の所は分からない。

そりゃ〜中には前回のメイン後に柴が言った虚言を信じてるヤツがいるかもしれない。

だが、長須が言った、『みんな、ギャラクシーがホントは怖いんだ』ってという言葉をおレは信じたい。

だから学校で、みんながおレを避けてるんだ・・・って。

じゃあもし本当にみんな、心の中ではギャラクシーを恐れてたとしたら、どうすればいい？

イジメっ子の仕返しが怖くて誰も助けられず、クラス中から見ぬ振りされてるイジメられっ子が助かるには、どうすればいい？

誰かに助けを求めるか、イジメっ子に立ち向かうしかねえ〜だろ。

オレたちは逃げも隠れもしねえ〜！

長須、大橋が、すでにギャラクシーに2勝している。

あとは、宮さんが織川を下し、前回の汚名を晴らせば……。

『本日のメインイベント、王者、織川宏次朗VS挑戦者、宮大地、宿命の戦いを開始します。まずは挑戦者、赤コーナーより、宮大地、入場！！』

風雲荒れ狂う戦場の中心で、興奮を隠せないリングアナが宮さんを高らかにコールする。

今回の大会名は『宿命の戦い』。

それは、このメインの為にある名であると、今まさに確信した。

皮肉にも、赤コーナーから入場する挑戦者。

総番長が全てを懸けて、今まさに宿命の大地へと歩を進める。

場内に響き渡るロックテイストな楽曲。

こ、これは・・・!!

「無いわけ無いだろ。オレが探したんだぜ」

驚くオレの顔を見て、オツキーが鼻高らかに自慢した。

「・・・たく」

文句を言いたげなユイだったが、半分諦め顔で苦笑いした。

みんなの期待は裏切らないよな、宮さん。

そう、それは、この間の武蔵祭でユイが飛び入りした際、誰かが録音した音源。

『 Sing ” Love ” for Me ! ! 』、全英語詞バージョン。

前は、軽いノリでユイの歌を入場曲に選んだらしい。

宮さん流のシャレみたいなモンなのかな？

でも今回は、自分一人の戦いだという事で、永内つよしの『とんび』で入場する予定だったらしい。

しかし、オツキーからあるエピソードを聞いた宮さんは、入場曲を変えた。

それは前回のメイン終了時のある一コマ。

『待てつて！ だから宮さんは、試合を止められんのは死ぬより辛いんだつて！』というオレの悲痛な叫びに対しユイが、『分かつてるわよそんな事！ だからアタシたちが止めるのよ！ アタシたち全員で、宮さんの悔しさを共有すればいいじゃない！！ あの人だけに、辛い思いさせると思つてんの？！』と言つて、竜崎にタオルを投入させた。

それを聞いた宮さんは、自分の戦いは、決して孤独な戦いじゃなかつたんだと理解したのだ。

つまり、ユイの歌で入場するのは、ある意味宮さん流の恩義なのだろう。

そつとこの曲を差し出したA型オツキーの心遣いっぷりも憎いぜ、コンチクショ〜・・・。

// // // // // // // // // // // // // // // //
// // // // // // // // // // // // // // // //

『 Sing " Love ' for Me ! ! ' Ly
& amp ; Music : K . Sky

Song (cover) by: do the by (V
ocal: Yui) English Ver.

Nothing was requested, and it
wanted such a genuinity alone
not strong in reality though
it said so.

(何も求めないよ そう言ったけど本当は そんなに強くはない
優しさだけ欲しかった)

Do the small voice not carried
and the day when it reaches c
ome? Let's shorten the distanc
e first of all quietly by one
step.

(届かない小さな声 届く日は来るのかな? まずはそつと一歩ず
つ 距離を縮めていこう)

Hear because it is gentle to m
e who began to walk in bare fe
et, and may be not exaggerated,
and the song of love

(裸足で歩き出した私に優しく 大袈裟じゃなくていいですから
聴かせてよ 愛の歌を)

Sing " Love " for me

(私のために 愛を 歌ってください)

It hears indefinitely , and it
is quietly gentle .

(いつまでも聴かせてよ そつと優しく)

Sing " Love " for me

(私のために 愛を 歌ってください)

Love song without decorating i
t of you of real intention .

(飾らないで 本音の ラブソング)

" Always laughingly want In re
ality though it was said along

(「いつも笑っていたいよ そつ言ったけど 本当は)

It was on a sad not strong so
much , day .

(そんなに強くはない 哀しい日だってあったんだ)

To me who began to walk by the
real face for a long time

(素顔で歩き出した私に ずっと)

Spell an obedient word, hear,
and the chanson d'amour

(素直な言葉を綴って 聴かせてよ 愛の歌を)

Sing "Love" for me

(私のために 愛を 歌ってください)

It is likely to become a sad s
ong sometimes.

(時として 哀しい歌になることもあるよね)

Sing "Love" for me

(私のために 愛を 歌ってください)

However, the love song of you
who is after all highest.

(だけどやっぱり 最高な ラブソング)

Sing "Love" for me

(私のために 愛を 歌ってください)

It is likely to become a sad song sometimes .

(時として 悲しい歌になることもあるよね)

Sing "Love" for me

(私のために 愛を 歌ってください)

However , it is after all high
st . your love - song !!

(だけどやっぱり 最高な 貴方の ラブソング)

// // // // // // // // // // // // // // // // //
// // // // // // // // // // // // // // // // //

ついにリングへと続く花道に足を踏み入れた。

先頭の宮さんに続き、オレとオツキーの2人が真後ろにつく。

その後ろに、ユイ、朝露さん、ミケコが続き、その後ろに長須と大橋が続いた。

宮さんの背後、総勢7人のセコンドが共に命を張る。

演出により照明の落とされた会場は割れんばかりの大歓声で、それがエールなのか野次なのか把握は出来ない。

宮さんと同時にリング上まで上がったオレとオツキーは、レフェリーの西田からヘッドギアとマウスピースを受け取った。

「宮さん、コイツはいらないですよね？」

宮さんの承諾を得る前に、オレはヘッドギアをリング下に投げ捨てた。

秩序やルールを無視する事に躊躇いのないB型。

宮さんは前回、マウスピースを装着せず、歯を3本もダメにした。

今回は何としても装着させてやる。

「このマウスピース、最新式のモデルで、定価20万もする優れモノらしいですよ。どうします？」

嘘も方便。

「マジ？ 何が違うんだ??」

試すの大好きB型宮さんは、興味深くマウスピースを装着した。

『続きまして、王者、織川宏次郎、入場!!!』

レクイエム『二短調 K・626 怒りの日(Dies irae)』
が流れ出し、場内に緊張が走る。

前回に引き続き、先に姿を現したのは、野牛退学組の丸刈りとロンゲ。

その後ろから禍々しいオーラを放つ織川が姿を現した。

前回同様、眉毛を剃り落とし、ニタニタと笑みを浮かべ、目を血走らせた織川が楽しそうに花道を練り歩く。

時折大笑いし、時折踊り、時折立ち止まる。

とても常人とは思えない。

噂通り、覚せい剤をやっているのだろうか？

織川の後ろからは、アキガ、タカノブ、柴の3人が強張った表情で歩いてくる。

まさに、総番長組VSギャラクシーの図式だ。

もしこれがリング上じゃなかったらと思うと、マジでゾッとする。

野牛退学組の2人が左右に別れ、前回同様ロープに腰掛け、織川をリング上に招き入れた。

会場に照明の明かりが戻り、場内はさらに歓声が増した。

織川はリングインしたと同時に、レフェリーの西田に詰め寄る。

「なあ、ここからウジムシとかギョウチュウとかミミズとか出てくんだヨ、マジで。凄えくだろ？ フツヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤッ」

そう言って織川は、左腕を西田に見せた。

織川の左腕には、無数の注射痕が・・・・・・・・！！

第287話 精力善用と自他共栄

客席の最前列に動きがあった。

最前列の前に椅子が10脚ほど並び、そこへスーツ姿の厳つい面々が座り出したのだ。

「オイ、ジオン、釜桐町のホスト連中のお出ました。やっぱりアイツらが元凶なのかな・・・？」

声がデカイぞオツキー！。

「今は宮さんを煽るな」

宮さんに聞こえないようにオレは、オツキーの耳元で警鐘を鳴らした。

宮さんは前回同様至って冷静で、オープンフィンガーグローブをハメながら、リング下の長須や大橋の声に耳を傾けている。

一方織川は、相変わらず狂った行動を繰り返している。

レフェリーの西田に詰め寄ったと思いきや、今度は自分のセコンドたちと揉めている。

笑ったり怒ったり、忙しいヤツだ。

「宮さん……」

声を掛けたものの、何て言っているのか分からない。

『相手に付き合っちゃダメですよ』、『ムダにパンチを出しちゃダメですよ』、『相手を良く見て』など、いくらでも言いたい事はある。

でも、そんなの宮さんは百も承知なのだ。

オレも経験者なので、試合直前のファイターの気持ちは良く分かる。神経は研ぎ澄まされ、些細な言葉もムダに脳裏に焼き付くし、客席の声すら耳に入る事がある。

だからこそ、無意味な情報は宮さんの耳に入れたくない。

オレは黙って頷くと、宮さんも頷いた。

男同士、言葉はいらない。

口に出さなくても、全て見通したように分かり合える瞬間がある。

そして、レフェリーの西田が試合開始の合図をし、いよいよ『宮大

地VS織川宏次郎』世紀の一戦、宿命の戦いの最終章が始まった。

「メヤア〜、ダ〜〜イッチー!!」

前回にも増して、織川の症状は重い。

完全にロレッツが回ってない。

織川の腕の注射痕を見る限り、まず覚せい剤を注入してんのは間違いないだろう。

ヤクの出所も、ほぼ限定される。

分からないのは、どうしてあの織川が薬物に手を出したのか……
って所だ。

プロのボクサーを目指してたんじゃないかね〜のか？ だったらヤクや
ってる時点でアウトだろ？ プロだったら即、ライセンス剥奪だろ
〜し、アマチュアならプロテストを受ける資格は失うだろうし……
。

織川の強さを持ってして、無理矢理やられるってのは考えにくい……
。。

……まったくもって、謎だ。

そんな織川が、宮さんをおちよくるように低能な挑発を繰り返す。

宮さんは織川に付き合わず、しっかりと相手の動きを見て、攻撃のチャンスをつかっている。

「相変わらずナメきってるわね」

ユイは織川の挑発を見て呆れ返っている。

「ムツカつくわ〜。何あの態度」

さすがのミケコも立腹の様子である。

「……………」

朝露さんは、黙って宮さんの背中だけを見つめている。

会場からは、挑発を繰り返す織川を後押しするような声援が飛び交い、逆に挑発を無視してジツと構える宮さんに対し批判の声も上がる。

そんな会場の野次などには耳を傾けず、デンと構えた長須と大橋は、まるで飛車角あるいは仁王像のように左右離れて陣取り、2人とも黙ってリング上を見守っている。

オレたちの向かい側の最前列に座って観戦しているKHJ陣は、まるで織川に何かあったらいつでも飛んでくよ的臨戦態勢でリングを食い入るように見つめている。

同じく、タカノブ、アキガ、柴も臨戦態勢だ。

牽制の空振りジャブを無視して、宮さんは織川の足元だけを睨みつける。

不意に織川は左右のステップ後に、ジャンピングしてのパンチを放った。

そのスキを見逃さなかった宮さんは、当たり前かのように挑発染みだダンクシュートをかわし、着地してスキだらけの織川を掴んだ。

「いいぞ宮さん！ ははははは、織川、まんまとハマってら〜！ 前回のようにはいかないぞ織川〜〜！！ はははははは」

前回食らった攻撃を巧みに避けた宮さんを見て、興奮したのか緊張が解れたのか、オツキーが涙をあふれさせながら笑った。

宮さんに掴まれた織川は、デパートでダダをこねるガキのように体を振り乱して宮さんから離れた。

「よっぽど投げられるのが怖いみたいじゃん、アイツ」

織川の怯えっぷりを見て、ミケコの口元も上がる。

「それより、宮さんがどうして手を離しちゃったか、考える必要があるわ」

ユイが呟く。

・・・と、その時、宮さんがとんでもない行動に出た。

第288話 伝説の凶器

落ち着き払った様子で、オープンフィンガーグローブを悠然と外し始める宮さん。

「えええ〜〜？ な、な、何考えてんですかあ〜〜？ み、み、宮さあ〜〜ん！！」

オッキーがアタフタとリングに上る。

会場は宮さんの突飛な行動にザワついた。

「やっぱり凶星ね」

ユイはクスツと笑う。

そうか、柔道の投げって、まずは相手をしっかりと掴む必要がある。

グローブはめてると、滑り易いんだよな・・・。

「宮さん、パンチ出せなくなりますって！ グローブ取っちゃったら、これからパンチを一切出せなくなっちゃいますって！ まだ試合始まったばかりですって」

グローブを外す宮さんを止めようとするが、オッキーは完全に無視されている。

「オッキー、リングから下りろ。宮さんには秘策があるんだよ」

・・・っていうか、むしろ本領発揮だけど。

「秘策？」

オッキーは眉をハの字にして、リング上からアホ面を見せる。

・・・と、その時、反対側のギャラクシーの面々がリングに雪崩込んできた。

・・・と、同時に、長須、大橋がリングに駆け上がる。

「オレらも行くぞ」

オレの合図で、ユイとミケコ、そして朝露さんもリングに上がった。

リング上にはオレたちとギャラクシー勢が押し合いへし合いし、一触即発、大混乱だ。

会場もヒートアップし、総立ちの大騒乱に陥った。

だいたい予想は出来た。

この試合がまともに進むはずがない。

こうなりやギャラクシーをここで一気に粉砕だ！

・・・と、思った矢先、KHJの一人がとんでもない暴挙に出た。

会場入りした時から肩にぶら下げていた細いバツクから、何と、金属バットを取り出したのだ。

いたるところが歪んだ金属バットを片手に、その男はゆっくりとりリング上に姿を現した。

すぐに異変に気付いたオレたちは、ギャラクシーとの間に距離を置く。

「ヨイヨイヨイヨイ、ヨーーーイ！ ナメんじゃねえぞチンカス共がー！ タコ殴りにすっぞコノヤローー！！」

リングの真ん中で、金属バットをマットに何度も叩きつけながら男が甲高い声で叫んだ。

「ギャラクシー、初代総長、前田のバットだ・・・」

大橋が呟いた。

あ、あれが・・・、KHJのボスの、伝説の金属バット？ 確か、アレで病院送りにされたり、中には意識不明の重態になったヤツま
でいるって話だよな？！ お、恐ろしい・・・。

高級品のバットは凹み易いって言うけど、どこにどれだけぶつけた
らあくなるんだ？

KHJが、両者セコンド同士の争いに割って入ったとあっては、さ
すがにギャラクシーもオレたちも、黙って身を引かざるをえない。

セコンド陣が一斉にリング下におりた後、レフェリーの西田栄作が
バツが悪そうに表情を緩めた。

それが気に食わなかったのか、男がバットを振り回して西田を威嚇
し始めた。

「ヨイヨイヨイヨイ、ナメてんじゃねえーぞチンカスがあー
ー！ しっかりレフェリーやれってんだコノヤローー！！」

男は挑発するような緩慢な動作で、西田のつま先付近に何度もバツ
トを振り落とした。

打撃の対象はマットではあるものの、西田は涙を堪えながら何度も
平謝りをしている。

バットの男がリングを下りると同時に、両手のオープンフィンガー

グローブを外した宮さんが、人差し指をクイクイと曲げた。

まるでアルカイツクな笑みを浮かべる竜崎を髣髴させる挑発に、思わず背中がゾツとした。

そして、リング下のギャラクシーの面々、さらにはKHJ陣に対し、不敵な笑みを浮かべる宮さん。

その隙を見逃さなかった織川は、超高速で宮さんの懐に忍び込んだ。どんなにイカれてても、戦いの術は体に染み込んでいるようだ。

やはり、たった1ヶ月であの織川に再挑戦は次期尚早・・・?!

懐に忍び込んだ織川は、右アッパーを宮さんのアゴに炸裂させた。

・・・瞬間！

宮さんの腰に織川が乗ったと思った矢先、織川は速い速度で宙を舞った。

払い腰が見事に決まり、マットに強烈に叩きつけられた織川は、腰を押さえてのた打ち回る。

『オオオオオオオオオオオオ』

瞠目すべき柔術を目の当たりにした会場からはどよめきが沸き起こ

った。

「ヤッターーーーッ!!」

大海で浮き木に出会ったような喜色満面のオツキーが飛び跳ねて喜ぶ。

しかし、夢見心地も束の間、すぐに織川が反撃に出た。

ジャンピングしてのパンチを宮さんに叩き込む。

・・・が、蚊が止まった程度の顰め面のみで、宮さんはまたしても織川を掴まえると、今度は背負い投げに持っていった。

またしても織川は宙を舞い、見事なまでにマットに叩きつけられた。

血相を変えてリングに雪崩れ込む野牛退学組。

宮さん、危ないっ!!

・・・っと、思いきや?!

何と宮さんは、リングに疾風のように乱入してきたロンゲを掴むと、右足でロンゲの左足を思いっきり刈り、見事なまでの大外刈りを決めた。

「この間は、ワザとやらねてただと~~~~?!!」

第289話 鬼の禁止技

前回の大会時は、宮さんはワザと織川にやられてたつてかあ~~~~
？ 仮にそうだとしたら、それはとんでもない事だぞ？
でも、ひよっとしたら、ひよっとする？！

その時オレはふと、竜崎の言葉を思い出した。

『宮さんは、総番長に君臨した時から、いつか自分を倒してくれる
ヤツが現れるのを、ずっと待ってたっス』

しかし、目の前に現れた織川は、過ぐる日の織川などではなく、変
わり果てた織川だった。

さらに、宮さんの言葉も思い出す。

『恨み？ ないよ。浦上なんてザコだ。1発で終わらせる。オレと
戦えるだけで箔が付くって思ってんなら願い下げだ。大勢の前で恥
を掻かせてやる』

その言葉通り、いくら自分を倒してくれるヤツを待ってたとしても、
ふさわしくない者ならば、宮さんは容赦なく叩き潰す。

おそらく前は、突然のカード変更に織川の変貌ぶりも重なり、さすがの宮さんもテンパったんだ。

どう対処していいのか分からないまま攻撃を食らい過ぎ、あえなく惨敗。

だが今回は、代わり映えない織川に愛想を尽かした宮さんは、容赦なく織川を叩き潰す構え……?!

……だとしたら、メツチャテンション上がるんだけど!!

……つつくか、ホントは竜崎への恨みや朝露さんへの憎しみ、無謀な告白をしてしまった自分への怒りのパワーだったりして？

……ってのは、今は抜き!

純粋に宮さんの潜在能力、底力だと認めよう!

腐っても鯛。

宮さんは最初から最強なんだ!!

「ウオオオオオオオ」 「いぞ総バンチョー、シャブ漬けをやっちゃえ!!」 「総番長! 総番長!」

いつの間にもやらの会場は総番長コールに包まれている。

「何だよアイツら、全員口を揃えて今度はこっちの応援か？ さっきまでギャラクシーの味方してたんじゃねえのかよ？ ……っざけんなよ、マジム力つく〜！！」

ミケコがイライラを募らせる。

「そんなモンだろ」

所詮傍観者なんて面白ければそれでい〜んだ。

前回よりちよっぴり大人になったオレ……。

「そんなモンよ」

オレの見解にユイも同感のようだ。

見事なまでにリング下に投げ捨てられた野牛退学組の2人は、いまだに腰を押さえて苦い顔をしている。

打たれ弱いのか？ いや、宮さんの攻撃が重いんだ！

一方、リング上の織川は、頭を振りながらファイティングポーズをとる。

まるで目を覚ました獣のような目で宮さんを睨みつける織川は、左右の牽制ジャブの後、左右のステップから腰を落とした右フックを

炸裂させた。

鮮やかに避けきった宮さんは、織川に密着すると、今度は裏投げで投げきる。

危ない体勢で落ちた織川は、痛めた体を見向きもせず、がむしゃらに宮さんに向かっていった。

まるで飛んで火にいる夏の虫の如く飛び込んだ織川は、今度は捨て身技、巴投げでマットに打ち付けられマットでのたうつ。

今回も織川の勝利は揺るがないものだとはかり思っていたであろう観客たちは、宮さんの攻勢に大興奮だ。

「ヤッホー……」

オッキーもロックフェスティバルで狂乱する若者のようにはしゃぎまくっている。

……が、オレはまだ安心できない。

気を緩めると、いつも足元をすくわれる。

人は大人になる度、臆病になり、弱くなるのかもしれない。

でもそれは、上手に生きる術のような気もする。

どっちがいいのか悪いのか分からないが、今はまだ、静観して様子

を見るべきだ。

ぬか喜びは危険だ……。

さらに、宮さんに掴まれた織川は、切り返して攻めようと必死で攻撃に転じた。

織川も物真似上手なB型だけあって、見様見真似で覚えた宮さんの柔道技で応戦。

そんなにわか仕込みの柔道技は宮さんには全く通じず、逆に内股に足を掛けられ、さらに首に腕を回され、そのまま後方に倒された。

宮さん、完全に潰す気だ！ 織川を潰す気だ！！

きっと、織川のバックがKHJだって事が、宮さんの中で決定的になったんだ！ だから、織川を完膚なきまでに叩きのめして、黒幕を出すつもりなんだ！！

有言実行、さすが宮さんだ！！

「あれは全く受け身がとれなくなる、柔道で言えば横捨て身技の禁止手、河津掛けだ」

大橋が唸る。

「禁止技？ 相手、殺す気？」

ミケコは口を開けたまま固まっている。

「大丈夫よ、宮さんはちゃんと織川の後頭部を守ってたから。それに、しっかり受け身もとらせてるし」

さすがユイ、しっかり観察してやがる。

フラつきながら立ち上がった織川を後ろへ崩し、勢いよく両足を刈る宮さんの表情は、恐ろしいほど冷静に見えた。

大外車で織川を倒した宮さんは、織川の胴を両足で強く絞め、今度は寝技にかかる。

「今度は胴絞じゃねえか?! アレも禁じ手の1つだ!! 宮のヤツ、トドメをさすつもりだ」

大橋が興奮して叫んだ。

「オイ、レフェリー! 早く試合を止めやがれっ! 早く止めねえと、死ぬぞ、そいつ」

長須も叫ぶ。

「何やってんのよ、早く止めなさいよ!」

ユイが身乗り出してレフェリーの西田を煽る。

禁止技のオンパレード？ 宮さん、やっぱり本気で織川を潰す気なんだ。

・・・つつくかユイも長須も大橋も尋常じゃなくビビってる。

マジで、ヤバインじゃね？ 宮さん本気出したら簡単に人殺せるって前言ってた事あったけど、マジ、ヤバくね？！

宮さん殺人者にしちゃダメ~~~~~！！！！

リング上の西田が試合を止める合図をしようとした瞬間、リングに雪崩込んできたアキガが宮さんの顔面を激烈に踏み潰した。

・・・こんにゃるめ~~~~~！！！！

第290話 二度と武器は握れない

宮さんの禁止技『胴絞』により、ほぼ勝利が確実だったが、アキガの乱入妨害により邪魔立てされた。

「ふざけんなよアンパンヤロー！」

大橋もリング上に雪崩れ込み、アキガと揉み合う。

それを見た野牛退学組や柴、タカノブまでリングに上がると、オレたちも黙ってはいられずリングに駆け上る。

またしてもリング上は大混乱、会場の観客たちも大騒乱だ。

そんな中パニックを抑制しようと、またしても金属バットを片手にしたKHJの男がリングに現れた。

「ヨイヨイヨイヨイ、このクソガキ共ー！ まったくオメーらは学習能力つーモンがねーのかヨ、オイオイオイオイ」

肩で風を切りながら、男はバットを振り回す。

ギヤラクシー勢は一斉にリング下に退散し、オレたちも同時にリングを下りる。

万が一あんなのが当たったら、たまったもんじゃない。

「ヨイヨイヨイヨイヨイヨイヨイヨイ！ 何度言ったら分かるんだバツキヤロー！！ ちゃんとレフェリングしろって言ってるんだロ―がチンカスがぁー！！」

またしても責められる西田。

バットでリングをバシバシ叩く男の迫力に押され、西田はエサを求め、鳩の様に頭を何度も上下させた。

・・・と、その時何と宮さんが、男の金属バットを鷲掴みした！

「文句あるなら直接言ってもらえないですかね？ それに、神聖なリングにこんな物騒なモン持ち出さないでほしいですな。せつかくの神聖なリングが穢れますから・・・」

ニヤリと微笑む宮さん。

不穏な空気に会場は一瞬で凍りついた。

「そ、その手を放せ・・・」

先端を掴んで放さなかった宮さんから、男は腕づくでバットを奪い取った。

そして、怒りの矛先をレフェリーの西田に向ける男。

「オメー今度ちゃんとレフェリングしなかつたらマジぶつ殺すかねー！」

そう言つて男は金属バットを振り上げた。

会場からはいくつかの悲鳴が聞こえる。

「……やつ」

朝露さんも顔を背けた。

ブ……ン

何と、男は容赦なく金属バットをスイングした。

威嚇か？ それとも見せしめの為にホントに叩くのか？！

……と、その時！！

カキーーーーーッ

西田に向けられた打撃を、宮さんが右腕でガードした！

マジかよ宮さん？！

あまりに衝撃的すぎるシーンに、会場中はかつてない静寂に包まれた。

「…………危ないですから、そんなモン振り回すの止めましょうよ。男同士、このリングで正々堂々とコブシで勝負してるんですよ。それに、喧嘩でそんなモン使っちゃ男が廃る。喧嘩に武器使う事自体、あまりに軟弱だと思いませんか？ ねえ」

「ふっ、ふざけんなっ」

取り乱した男は、顔を引き攣らせながら震えるバットを振り翳す。

カアーーーーーッ

今度は骨盤の辺りに打撃を食らった宮さんだったが、顔色一つ変える様子はない。

逆に、打ち込んだ方が怯えるほどの恐怖を宮さんに感じているようだ。

それもそのはず、常人だったら立つてはいられない。

衝撃で吹き飛ばか、踏ん張ったとしてもすぐにその場に崩れ落ちることだろう……。

それを、踏ん張る所か顔色一つ変えないのだ。

会場はリング上の光景を固唾を呑んで見ている。

「ちよ、ちよつと・・・、ヤバくない？」

ユイが声を震わせた。

ずっと大の字に倒れてた織川だったが、一連の宮さんと金属バットを持った男との一悶着により、息を吹き返した。

体勢を整える織川に駆け寄ったレフェリーの西田は、さりげなく試合開始の合図を出した。

それを見たバットを持った男は、「フン、ちや、ちやんとレフェリングしろよなっ」と西田に言っつて、唾を吐きながらリングを下りた。

徐々に会場に声がもれ出し、やがてさっきまでの不穏な空気はいずこかへ消え去り、また活気が戻ってきた。

「な、何なんだよアイツ。あんなヤツにウロウロされちゃ〜、まともな試合ができねえ〜じゃねえ〜かよ」

愚痴るオツキー。

「心配すんな、オツキー。アイツはもう、出てこねえ〜よ」

「マジかよジオン」

ああ、マジだ。

宮さんにビビッて、出てこれねえよ。

・・・っつか、もう、あの金属バットは卒業すんじゃないのか？ 周りのヤツらもバットを引き継ぐヤツはいねえだろ・・・。

あそこまでの『男気』を見せられちゃ、一端の男なら、二度と武器は握れねえよ。

二度とな・・・。

第291話 不死身

特筆すべき点は、あの織川の表情が固くなった事だ。

再三投げられ、痛みで目を覚ましたのか、それとも、金属バットの男との一悶着を見て正気に戻ったのか分からないが、明らかにさっきまでの調子付いていた織川とは違う。

真剣に宮さんと対峙する織川に、会場からも「織川コール」が沸き起こる。

前回とは大きく形勢を逆転させた宮さんにも、後押しするような「総番長コール」が沸き起こった。

会場も宮さんと織川の世紀の一戦に興奮し、声援も真つ二つに分かれた。

織川は独特のステップからワン・ツー・ジャブを放ち、さらにストリートやアッパーも織り交ぜ、プロさながらのボクシングファイトを繰り出してきた。

それに付き合う様子のない宮さんは、肉を切らせて骨を断つ、捨て身の戦法に出た。

「織川も弱ってるし、イケるかも！」

オツキーも宮さんの戦法に依存はない。

パンチを幾つか受けながら、織川を掴んだ宮さんは、体重を前にかけて織川の体を浮かし上げ、腰で反動をつけて豪快に投げ倒した。

・・・と、その時、異変が起きた。

カクン

織川を投げきった宮さんだったが、腰から碎けるように体勢を崩し、マットに膝をついたのだ。

「今の浮腰で痛めたのか？」

大橋が眉を顰める。

「だ、大丈夫かな・・・？」

すぐに異変に気付いたオツキーも、心配そうな面持ちでリング上を見つめる。

大丈夫じゃねえ〜かも・・・。

あれって、さっきの金属バットでのダメージから来てんじゃないの？

すぐに立ち上がった宮さんは、倒れた織川にゆっくりと近づいた。どことなく足を引きずってるように見えるのは気のせいだろうか？

一方、織川もすぐに立ち上がり、休まず攻撃を仕掛ける宮さん目掛け、渾身の一撃を放った。

右腕にスクリューを織り込んだ高速パンチだ。

それをカウンターで食らってしまった宮さんが体勢を崩す。

右足を後ろに下げただけで倒れずに踏ん張った宮さんだったが、さすがに今の攻撃は響いたようで、表情はいつになく険しい。

チャンスと見た織川は、畳み掛けるようにパンチのラッシュに出たが、しつかり両腕でガードする宮さん。

しかし、徐々に押し込まれ、とうとうコーナーポストに背をつけた。

「宮さん、そのままガードを解かないで！ 大丈夫、隙について逃げる事を考えてー！」

ユイが大きな声で宮さんに声掛けする。

「宮さーん」

片やオツキーは、情けない悲痛な声をあげた。

血しぶきがリング下のオレたちにまで届く。

容赦ない織川のパンチラッシュに防戦一方の宮さんだが、今は耐えるしかない！ ユイの言うように、今はチャンスを待つしかない！

・・・が、しかし、宮さんは、徐々に崩れ落ちていく。

会場からは「大総番長コール」が沸き起こり、まるで観客のほぼ全員が宮さんの劣勢に加勢してるような空気に包まれた。

「宮さあ~~~~ん!!」

いつしかオレも大きく叫んでいた。

オレたちの声援も虚しく、とうとう宮さんは尻餅をついた。

やがて両腕が力なくマットにつき、ガードは完全に解かれてしまった。

無防備の宮さんに容赦なく叩き込まれる織川の高速パンチの雨霰。

レフェリーの西田が織川を羽交い絞めにし、強引に宮さんから引き離した。

あまりに突然だったので、会場はシーンと静まり返る。

「あつ、忘れてた……」

オッキーが握り締めたタオルを見つめ、呟いた。

そ、そうだよな……、と、止めないとな、死んじゃうよな、宮さん。

でも、西田が止めてくれたから、もう……。

「あ、あああ……」

オッキーが声だけじゃなく、全身を震わせた。

血だらけの宮さんが、不敵な笑みを浮かべながらゆっくりと立ち上がり、力強く握り拳を握り直した。

「そんなモンか、織川……？ もっと本気出してこいよ、織川」

宮さんは織川を招くような挑発をし、ニヤリと笑った。

不死身か……？！

第292話 難攻不落の堅城

瀕死状態にもかかわらず、不死鳥のようによみがえる宮さんを見て、ついに織川がたじろいだ。

「ミ、ミ、ミ・・・、ミ、ミヤ・・・バイって！ モンスターだ！ ヤベ〜よ、モンスターだ！ ヤバイって！ ミ、ミ、ミンナ・・・、逃げなきゃ・・・。」

オロオロと後退する織川。

「織川、オメエ〜、どうしちまったんだ？」

宮さんは、優しい笑みで織川に話し掛けた。

「ウ、ウワア~~~~~ッ！」

今まで怯えた表情だった織川が一変し、今度は牙を向いたライオンのような猛襲を仕掛けてきた。

力強いパンチのラッシュに、またもや宮さんはコーナーポストまで追い詰められ、まるでサンドバックのように殴られ始めた。

それでも宮さんは両腕でしっかりガードをして、何とかダメージを抑えている。

「宮さーーん、逃げてーー!!」

オツキーが涙声で叫ぶ。

いや、ムリだろ、あの土砂降りのようなパンチの乱れ撃ちからどうやって逃げ・・・?!

何と、宮さんは不意にガードを解き、強烈なパンチを浴びながら、それでも前に進み出した。

そして、ガツシリと織川の肩を掴んだ。

「どくしちまつたんだよ織川く？ そんな攻撃じゃく、プロになれねえくだろく？ オレ、オマエがチャンピオンになるの楽しみにしてたんだぞく？ TVでオマエを観るの、楽しみにしてたんだぞく？ どくした織川く、もつと本気出してこいよ。そんなんじゃ、響かねえくぞ」

「ワア~~~~~ッ！ ウワア~~~~~ッ!!」

錯乱した織川は、やけになった子供のようになりふり構わず攻撃を繰り返した。

首元や胸にパンチを食らうが、それでも前に進み出た宮さんは、今度は織川の腕を掴んだ。

注射痕を見て、宮さんが呟く・・・。

「織川・・・、コレやつちや、しめえくだよ。コレだけはやつちやダメだ。誤魔化しながら生きてたつて、面白くもなんともねえくだろ？ ぶざまでも、みじめでも、何度倒れても、這い蹲つて生きてみるよ。織川く、どしちまったんだよ？ 前はもつと、澄んだ目をしてたじゃねえくか。今じゃオメエく、濁つちまつて・・・」

「うわ~~~~~っ」

織川は、悔しそうに涙を堪えながら宮さんの胸を叩いた。

「誰かに強制されたのか？」

「ウワ~~~~~ッ」

織川は大きく首を横に振った。

「自分の意思か？」

「ワア~~~~~ッ」

大きく頷く織川。

「そうか・・・、オマエの人生だ。オマエの背後にどんな辛い事があつたのかはオレは知らねえく。でもよく、オレらは誰だつて、人生に突然降り掛かる試練とか、思い通りにいかねえく歯痒さなんかと常に戦つてるだろ？ 負けそうになつたからつて、逃げんなよ。もし、負けちまつたら、敗北感に苛まれたからつて、現実逃避すんなや。人間、必ず正気に戻る。戻つた時、もつと辛いだろ？ なつ、

臆病でも腰抜けでも、何度倒れても打ちのめされても、起き上がったシラツとしてりやくいいんだよ。そのうち、打たれ強くなって、今まで勝てなかった敵に勝てるようになるかもしれないねえ」

「ウ・・・、ウ、ウ・・・」

いつしか織川は、宮さんの胸に顔を埋めて泣いていた。

・・・と、その時、何と織川が、自分の胸の内をゆっくりと語り出した。

「中学時代、イジメられてて、悔しくて・・・、高校に入って、ボクシングやって、昔オレをイジメてたヤツらを見返してやった・・・でも、何か虚しくて。てっぺんに立っても、強くなっても、全然嬉しくなかった・・・。アマでてっぺんに立っても、同じ。全然、嬉しくない・・・。プロになっても同じだと思った・・・」

途切れ途切れだが、織川が涙ながらに語る。

宮さんは黙って頷いた。

「そしたら、何をやってもつまらなくなつて、もつと、もつと、違った刺激を求めていたんだ・・・。最初は好奇心からだつた・・・でも、どんどんハマつて、逃げられなくなつて・・・。でも、もうオレ、金がなくて・・・、もう、どうしようもなく・・・。どっちにしろ、今日で最後だつたんだ。今日ぶつてきたのが、最後の一本なんだよ・・・」

「そうか。もう、2度とやるなよ」

「ウン、もう、やらないよ、こんなの。宮さん、宮さんもやっちゃダメだよ……」

織川が、以前の織川に戻った……。

「オレは、はなっからやらねえよ。ガハハハハ」

「宮さん、オレ、宮さんみたいになりたかったんだ。ずっと、宮さんに憧れてて……」

「バカ言っちゃいけねえよ。オレなんてどこがいくんだ。人を見る目養えよ」

「……オレも、ぶざまでも、みじめでも、宮さんを見習って、何度でも這い蹲って立ち上がってみるよ」

「オレは起き上がりこぼしみてえくなモンだ、ガハハハハ。それしか取り柄ねえしな、ガッハッハッハッハ」

笑ってる……。

「ジオン、何か、リング上で盛り上がってねえか？」

オッキーが困惑の表情を浮かべる。

会場もリング上で語り合う2人の姿を見て、言葉を失っている。

・・・と、その時！

「オツキー、タオル投げろ！」

突然宮さんが、思いも寄らぬ事を言い出した。

「はい？ な、何ですって〜〜？！」

「オレの負けでいいから、早くタオル投げろって言ってんだよ！」

リング下を見ながら宮さんが言った。

「ム、ムリでしょ。今、この状況でタオル投入はムリでしょ？
何か勝てそうじゃないですか・・・？ あと1、2回投げたら絶対織川立てませんよ。それに、今、メツチャチャンスじゃないですか？！ そいつ掴んでポイって投げればそれで終わりじゃないですか？！」

オツキーがタオル投入を断固として拒否する。

「オレにはもう、人を投げる力は残っちゃいねえ。それに、こっから一步を踏み出す力も残っちゃいねえ。んだよ・・・」

確かに・・・、もうとっくに限界突破はしてたんだよな、宮さん。

コーナーポストを背にしているとはいえ、立っただけで奇跡なのか

もしれない。

「ダメですって！ 最後まで勝負は諦めちゃダメですって！」

オッキーは、掛けたメガネを動かしながら、テキパキと答えた。

「どっちにしろ、オレはもう、何も出来ねえから。起き上がる事しか出来ねえから……」

「ダメですって！ 最後なんですよ？！ もう、リベンジ出来ないんですよ？！ 諦めるんですか？ 途中で試合放棄するんですか？！」

オッキーは尚もタオル投入を拒んでいる。

試合放棄？ 違う。

もし織川がしょくもない男だったら、最後まで見込みがないと思ったら、宮さんは容赦なく潰したはずだ。

それを、こくして潔よく自分の負けを認めたって事は、少なからず織川に何かを見出したはず。

織川の今後に期待して、宮さんは身を引いたに違いない。

つまり、総番長のラストマッチに相応しい相手だったと織川を認めただ……。

今日限り、リングに上がることがない宮さんが、これからずっとリングに上がり続けてくれるだろう織川に引導を渡したんだ。

最強の称号を、譲り渡したんだ。

「亀ちゃん……、頼む」

宮さんがオレに視線を移した。

「……オッキー、投げる。タオルを投げる」

「はあ？ バカかジオン！ もう少しで勝てるんだぞ、宮さん」

「投げる」

「だからもう少しで……」

「投げるって言うてんのが分かんねえのか？！ オマエは今まで何を見てたんだ！ 男と男の勝負を見てたんじゃねえのかよ？！ 死力を尽くした大の男が、全てを懸けて戦い抜いた男が負けを認めたんだけ！ それとも何か？ オマエは宮さんを侮辱すんのか？ だったらオレもオマエを侮辱するぞ。今まで宮さんと一緒に戦い抜いたオマエのそのタオルを奪って、オレがリング上にタオルを投入するぞ」

「ジオン、オレ、どうすりゃいいんだ？ オレにそんな資格はあるのか？ この名勝負を終わらす資格が……」

「鼻で笑ってやるのか？ あのなあ、宮さんがオマエをセコンドに認めた時点で、タオルをオマエに渡した時点で、とくにオマエは認められてんだよ。全ての資格を与えられたんだし、自分の進退を全てオツキーに任せたんだよ宮さんは。命を預けたんだよオツキーに。オマエも一端の男なら、男らしく潔く最後まで戦え」

「宮さんは・・・、オレのせいで負けるんだよな？ オレが肩代わりするって意味だよな？」

「バカヤロ、違う！ 根本的にバカかオマエは！ 宮さんは試合に負けるかもしれないけど、中身では勝ってたんだよ。それは織川だって知ってるし、この勝負をちゃんと見てたヤツなら絶対感じるはずだ」

「宮さんが、勝つ？」

「そうだ。オマエがタオルを投入した時点で宮さんが勝つんだよ！ 勝負を超越した世界にいるんだよオレたちは！！」

「分かった！」

ホントに分かったのかよ？！

オツキーは手を震わせながら、タオルを投入した。

スローモーションでタオルがマットに落ちる中、優しい笑みを浮かべた宮さんが、ゆっくりと座り込んだ姿が印象的だった。

第293話 宮さんとKHJのボス

『宿命の戦い、メインイベント、宮大地VS織川宏次朗の一戦は、織川宏次朗の勝利で幕を閉じました。本日はお忙しい中、誠にありがとうございました。お帰りの際は、お手元の身の回り品のお忘れ物のないよう……』

リングアナは、焦るようにメインを締め括っている。

確かに、場内には不穏な空気が漂う。

男と男の勝負だったのだが、一般人には難しかったかもしれない。

余力を残してそうな宮さんの、反撃を期待していた観客には消化不良の終わりだったようだ。

でも、実際問題、宮さんには反撃する力も残ってなかったのが事実なのだ。

平然な顔をしていたが、KHJの男に金属バットで殴られた時点ですでに救急車モンだったのだ。

会場がザワめく中、ギャラクシーの面々が織川の元に駆け寄り介抱する。

オレたちもリングに上がり、宮さんの下へ駆け寄った。

「お疲れ様です、宮さん」

「ゴメン、運んでくれるかい？」

やっぱり宮さん、かなりムリしてたんだ……。

寿命を削って戦ってたに違いない。

「ジオン、KHJが上がって来たわよ」

黒幕たちの登場に、ユイが溜息をついた。

長須、大橋が立ち塞がって宮さんを守る。

リング下にはミケコの仲間たちも駆け付け、リング上は一気に修羅場と化した。

番長軍団VSギャラクシーの図式から、番長軍団VSKHJの図式に移行するの？ それとも、番長軍団のボスが完敗したって事で、何か条件を突きつけられるの？！

「織川く、だらしねえく試合してんじゃねえくぞコリアく……！」

KHJの一人がまくし立てる。

「どろ落とし前をつけるんだ？　もう後がねえぞ」

もう一人のKHJが、オレたちに脅しかけてくる。

そんな中、ついにKHJのボスもリングに上がった。

どろなっちまうんだ？　オレたちは、コイツらの前で平伏すのか？

いや、一歩も退くつもりはねえが、もし宮さんが屈服するならば状況は一変する。

その時宮さんは・・・？

「とうとう姿を現しやがったな？　やっぱり織川とかギヤラクシーの後ろにやゝ、アイツらが控えてたってワケだ。グフフフ、面白くなってきやがったな」

不敵な笑みを浮かべる宮さんは、ゆっくりと立ち上がった。

おわわわわゝゝ、宮さんヤル気だあゝゝゝ！

KHJと、殺る気満々だあゝゝゝ！

・・・と、その時！！

「前田さん、ここはオレの顔を立ててください。前田さん、お願いし

ます」

何と、織川がKHJのボスに詰め寄り、リング上に席卷するギャラクシーやKHJの面々を下ろすよう直訴している。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

サングラスをかけたボスは、黙って頷き、ギャラクシーとKHJの面々をリング下におろしはじめた。

そして……。

「いい試合だったよ、アリガトウ」

そう言ってKHJのボスは、宮さんの手を握り締めた。

「・・・・・・・・」

宮さんは目を逸らさず、ジッとKHJのボスを黙って見つめる。

KHJのボスは、口元を歪めながら背中を向けた。

「待って下さいよ、ボス」

ドスをきかした宮さんが、KHJのボスに歩み寄る。

え？ そのまま行かせればいいのに……。

どして引き戻すの？ た、戦うの？ やっぱKHJのボスと戦
う気？！

第294話 さよなら総番長

「オレたちは今日、番長を卒業しますが、オレたちはこれからの未来を想像すると、そう易々と卒業できねえよってのが本音ですよ。これから戦争に突入するかもしれねえよってのに、そう易々と引退できないのですよ」

「戦争？」

KHJのボスは眉間にシワを寄せた。

「そう、戦争ですよ。これから、ギャラクシーがウチらを潰しに力チ込んでくるって事は有り得ないですかね？ ヤツら6人で何が出来ますか？ すぐ潰れますよ、アイツら。そしたら、そのバツクのKHJの方々も黙ってられんでしょ？ もし、KHJの方々がいだなすったら、ウチの方も黙ってないモンが出てきちまうワケですよ、次から次と。そしたら、オレたちだけの問題じゃなくなるでしよ？」

首脳会談だ！ トップ同士の話し合いが繰り広げられている！！

もし戦争になったら、いずれヤクザ同士の戦争にまで発展するって言うてるのか？

あまりにもスケールがデカくて、とても入り込めない。

「フッフッフッフ、宮大地君、君は中々賢いね。おっしゃる通りだ。普通だったら感情が先走り、命を無駄にする状況だけど、さすが一国の主だけある。国民第一で考えた結果、オレたちと揉めるのは得策ではないと……。さらに、宮大地君のバツクにも、もっと大きな存在が控えてると……。こつちとしても宮大地君と揉めるのは得策ではない……。というワケだね？ フッフッフ」

「ハツタリではないのはボスならご承知でしょう？」

「もちろんさ。宮大海さんにはオレも昔世話になった」

宮大海……。？ 宮さんのアニキか。

凄え〜影響力だな、宮さんのアニキ。

「アニキは関係ないですが、ね。それに、アニキは堅気ですぜ」

「勘違いしてほしくないが、KHJだって堅気だから」

KHJが堅気？ あの威圧感が凄いホスト連中が、堅気だって？！

ベントとか乗ってるから、てっきり極道なのかと思ってた……。

「それに、宮大海さんの横繋がりにビビッてるワケでも、宮大地君

のバックにビビッてるワケでもない。KHJの真上にや組が連なってるし、真下にや族が連なってる。コスモ使えばいくらでも兵隊は出る」

コスモ？ 出たよ、暴走族。

確かコスモは、暴力団の準構成員が作ったチーム……。

「数じゃないでしょ？」

「じゃ、どうすればいいかな？ オレの所も宮大地君と同じで、オレが黙ってても、オレの周りで黙ってないヤツがいるかもしれないよね？ オレの指示を無視して下のモンが、そっちに手えく出す事だっと思って考えられるワケだ。そしたら、君は黙ってられるかい？ それだけじゃなく、君の所だっつて、宮大地君の命令を無視してウチらに攻撃してくる輩がいるかもしれないよね。そしたら、あつと言つ間に血の雨が降る」

「それをさせないのがトップの役目じゃないんですかね？」

「フッフッフッフ、やっぱり宮大地君には敵わないな。オレの負けだ。フッフッフ、分かったよ、下のモンにはちゃんと言い聞かしくよ」

そう言つてKHJのボスはリングを下りた。

凄え、宮さんが、KHJのボスを退かせた……。

これで一先ずオレたちがギャラクシーやそのバツクの影に怯える事もなくなつたワケだ。

・・・フウ、やっと肩の荷が下りたつて気がするぜ。

「ジオン、もしかしてオレたち、やっと自由の身？」

オツキーが嬉し涙を浮かべた。

オマエは何に拘束されてたんだよ。

「亀ちゃん、オツキー、ユイちゃん、雫ちゃん・・・、みんな、アリガトね」

リングから自力で下りた宮さんが、オレたちに笑顔を見せる。

「宮さん、ありがとうー!!」

オレたちは、宮さんに駆け寄つた。

総番長、お疲れ様でした。

そして、ありがとう宮さん。

総番長よ、永遠に……。

何か宮さんにもう会えねえ〜みてえ〜だな。

まだ卒業までもう少しあるぞ？

こうして『宿命の戦い』の大会は終了した。

星空広がる野牛港、第3倉庫の駐車場で、タクシーを待つ朝露さんが、帰り際に語り出した。

「宮先輩……、これからもお友達としてヨロシクお願いします。今日はお疲れ様でした。それと、今まで総番長っていう大役、ご苦労様でした」

あくまで友達を強調する朝露さん。

宮さんは笑顔で大きく頷くが、心境はかなり複雑だと見える。

何か、宮さんが何度もフラシてるようで居た堪れない……。

宮さんは、精神的にも肉体的にも、前回以上にボロボロに違いない。

早く休ませてあげたい……。

……つつくか、オレも早く床に就きたい。

そう思つのも束の間、またしても休む間もなく嵐の予感がした。

朝露さんがタクシーで会場を後にし、さて、今度はオレたちも……
と思つた矢先である。

駐車場奥の暗闇から現れたのは、柴とアキガの2人。

ギャラクシーの2人が、堂々とオレたちに向かって歩み寄ってくる。

さらには、見覚えのある車が駐車場にやってきた。

確かあれは、仲村シンの車……？

案の定、その車からは、仲村シン、橋弘至、そして……。

りゅ……、竜崎？！

第295話 中立

よ、よくもまあ、今更、ノコノコと姿を現す事ができたモンだ。

コイツは自分がやった事を分かっているのか？！

セミアイナルでのオレとの戦いをシカトし、オレの心を踏み躪つた上、朝露さんの事をみんなに隠したりして仲間を裏切った竜崎が、こうして平然とオレたちの目の前に姿を現すって事は・・・？

コイツは自分が悪い事をしたって、微塵も思っただけなのか？

それとも、やっぱりコイツは敵で、仲間のギャラクシーと一緒にオレたちへ宣戦布告？！

オレは逸る気持ちを抑え、とりあえず周りの出方をうかがった。

ウチらは大会の会場でもある第3倉庫を背にし、宮さんを先頭に、オレ、オツキー、ユイ、ミケコが後ろに並ぶ。

宮さんの両隣には、長須と大橋がすぐについた。

駐車場の右斜め奥から、柴とアキガの2人がこっちに向かって歩いてくる。

他のギャラクシーのメンバーはいない。

タカノブ、野牛退学組、織川、KHJの面々は、すでに会場を後にしている。

さらに正面からは、仲村、橋、竜崎の3人がこっちに向かって歩いてきた。

オレたちの前に現れた柴とアキガに対し、宮さんが口を開いた。

「どうした？ 何の用だ?!」

宮さんと向かい合った柴とアキガは、宮さんの目をしっかり捉えている。

その時、

「お取り込み中だったかな？」

仲村が長須に声を掛けた。

「何の用だ?!」

長須が仲村に聞くと、宮さんも仲村たちの方に目を向けた。

「竜崎……? なぜここに?!」

ユイも竜崎の登場に困惑気味だ。

「バイソンソルジャーは、また仲裁に来たんじゃないのか？ 仲村だけに。隣の橋弘至ってヤツは、オレたちとギャラクシーの橋渡しってヤツ・・・？ 橋・だけに」

オツキー、とりあえず海で泳いでろ。

「どうやら前回みたいな騒ぎにはならなかったみたいだね。前回より早い時間なのに、もう客たちはみんな帰路についたようだし。野牛港にいるのはここにいるヤツらで全部みたいだし、KHJさんも今はいないみたいだね？ なのにどうしてギャラクシーのお2人が？ まさか、落とし前？」

仲村がシラっとした顔で長須に聞いた。

「空気読め。ギャラクシーはたった今オレたちんトコに来た所だ。オマエらと同時期に。オレらもコイツらの目的はまだ分からねえ」

長須がイラつき気味に答える。

「そうなの？ てつきりみんなでギャラクシーをイジメてんのかと」

仲村は笑みを溢した。

「用がねえくなら邪魔だ。どけ！」

長須が仲村を追い払う素振りを見せた。

「相変わらず物騒だな、オイ。オレらは万が一前回みたいな事態になった時の仲裁役を買って出てるだけだ。オレらはオマエらの味方でもあるし、ギャラクシー側の味方でもある」

仲村は言い放つ。

オレたちの味方でもあるし、ギャラクシーの味方でもある・・・だとおゝ？！

何て曖昧なヤツだ！

悪であるギャラクシーの事を味方って言ってる時点で、コイツらはすでに偽善者だ！！

中立を装いやがって、竜崎も仲村と同意見なんだろうな、きっと。

フン、オレは騙されねえぞ・・・、偽善者め！！

「てめえ、コラ！！」

「まあ、落ち着け長須。シンは昔からこゝだろ！！」

憤慨した長須を押さえつける大橋。

「・・・で、試合結果は？」

仲村は興奮する長須を無視し、大橋に聞いた。

「宮の負けだ。試合内容では全然勝ってたけどな。まあ、試合を観たヤツらはみんな、結果は負けても中身で勝ってたって知ってるだろうし、最後に宮が番長終焉を宣言してくれたし、ギャラクシーとの抗争も無いって言うてくれたから、事態は完全に収拾した。……かに見えたけど、ここにきてコイツらの登場ってワケだ」

大橋が事情を仲村に説明した。

……と、その時！

「オレたちは、侘びを入れに来ました」

心なしか震えた声で、宮さんに頭を下げる柴。

さらに、アキガも頭を下げる。

「KHJのボスに言われて来たのか？」

宮さんが柴とアキガに問い詰める。

「これは、オレたちの意思だ。本当は、タカノブらも一緒に頭を下げるべきだったのは分かってる。だけど、立場上、本当はこうして謝りたくても謝れないってのを、くんでくれないか？ オレたちは何でもする。だから、前回の不祥事、許してくれ」

アキガはそう言って、さらに頭を下げた。

ほ、本心なのか？

冗談には思えないけど、どうしてまた？

何もフェードアウトすりゃいいものを。

よっぽどオレらの仕返しが恐かったのか？

「もう言っちゃえよ、アキガ。ぶっちゃけちゃえよ。全部、アイツのせいなんだって……」

仲村が促すが、アキガは黙り込んだ。

「アイツって、何だ？」

宮さんが仲村に訊ねた。

「KHJのボスだよ」

仲村は即答。

一瞬その場に凍りつくような静けさが訪れた。

誰もが心の底で感付いていたが、口に出せなかった事を、こうもハッキリと……。

本当に仲村は中立なのか？

そんな仲村は、衝撃的な事実を淡々と語り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7575r/>

ギリ爆2 - 血液型マニュアル男のヤンキー伝記 -

2011年10月29日03時06分発行